岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第618集

飯岡才川遺跡第17～19次発掘調査報告書

２０１３

盛岡市都市整備部盛岡南整備課
（公財）岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 618 集

飯岡才川（いいおかさいかわ）遺跡第17～19次
発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

２０１３

盛岡市都市整備部盛岡南整備課
（公財）岩手県文化振興事業団

飯岡才川遺跡第17～19次
発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成22、23年度に発掘調査された盛岡市飯岡才川遺跡第17～19次調査の成果をまとめたものです。

今回の調査では、縄文時代の陥し穴、平安時代の村の跡などが発見されています。

特に注目されるのは平安時代の村の跡です。遺跡南東隅の細谷地遺跡との交差点に、９世紀後半～10世紀初頭の大きな村があったことは、これまでの調査でも分かっていましたが、遺跡の中央よりやや東寄りの住居が疎らな地区も意外に侮れないことが分かってきました。今回、庇のある掘立柱建物跡が見つかり、周囲から鉄製品が比較的多く出土しました。以前の第７次調査では今回の調査区に近い場所から全国的にも出土数の少ない「白玉帯」（メノウ製石帯）が発見されており、何らかの関係が窺われます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成25年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　池　田　克　典

例　　言

1　本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田２地割46-1ほかに所在する飯岡才川遺跡第17～19次発掘調査の結果を収録したものである。

2　今回の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。

　調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と盛岡市都市整備部盛岡南整備課の協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はＬＥ16－2291である。

4　発掘調査期間、担当者、調査面積、遺跡略号は次の通りである。

　第17次　平成22年10月４日～10月28日　金子佐知子　4,000㎡（確認のみ）ISW－10－17

　第18、19次　平成23年８月１日～11月16日　金子昭彦・藤本玲子　9,299㎡　ISW－11－18、19

5　調査箇所は二地点に分かれ、西側が第18次（7,903㎡）、東側が第19次調査区（1,396㎡）となる。第18次調査区の一部は、前年度に検出作業まで行われており（第17次調査）、また進行上全域を同時に調査することはできなかったので、便宜的に第17次調査区を西区、その東隣を北区、南側を南区、第19次調査区を東区と呼称した（第８～10図、詳細は第Ⅱ章）。

6　室内整理期間と担当者は、次の通りである。

第17次　平成23年１月１日～平成23年１月31日　金子佐知子

第18、19次　平成23年11月１日～平成24年３月31日　金子昭彦・藤本玲子

7　報告書は、第Ⅳ章を金子佐知子、その他を金子昭彦が執筆した。

8　遺構名は、盛岡市教育委員会の命名方法に準拠した。略号は以下の通り、番号は三桁で付け、第16次調査からの続き番号である。

ＲＡ→竪穴住居跡、ＲＢ→掘立柱建物跡、ＲＣ→柱列、ＲＤ→土坑、ＲＥ→竪穴状遺構、ＲＦ→焼土、ＲＧ→溝跡、ＲＩ→井戸跡、ＲＺ→その他（柱穴群）。

9　遺物の保存処理・鑑定は、次の機関に委託した。

　鉄製品保存処理：岩手県立博物館　石質鑑定：花崗岩研究会

10　報告書作成にあたり、次の方々に御協力・御指導いただいた（敬称略）。

　神原雄一郎・菊地幸裕・今野公顕（盛岡市教育委員会）

11　調査成果はこれまで略報（「平成23年度発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第603集）等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

12　調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

13　遺構等の平面位置は、平面直角座標第Ｘ系を利用している（座標値は第５図参照）。座標値は、日本測地系に基づく。基準杭は、当方の希望の場所に委託者に設置していただいた。

14　土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

15　参考文献は、それぞれの章、節、項の後に記している。

16　遺構内出土遺物も、遺物の章で記載したが、縮尺を落とした集成図も別に示した（第43～46図）。

焼土・黒色処理　　磨面　　羽口溶着滓

Ｐ：土器
Ｓ：石
Ｆ：鉄
（※本文中は小文字）

目　　次

報告書抄録

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　立 地 と 環 境 …… 1

1　位置・地形・調査範囲・現況 …… 1

2　基本層序と検出・出土状況 …… 3

3　これまでの調査と周辺の遺跡 …… 10

Ⅲ　調査・整理の方法 …… 11

1　野　外　調　査 …… 11

2　室内整理と報告書の作成 …… 13

Ⅳ　第17次調査（西区の確認調査） …… 15

1　調 査 の 経 過 …… 15

2　調　査　成　果 …… 15

Ⅴ　遺　　構 …… 16

1　概　　要 …… 16

2　竪 穴 住 居 跡 …… 16

3　（竪穴）住居状遺構 …… 24

4　掘立柱建物跡・柱列・柱穴群 …… 27

5　井戸跡・陥し穴状遺構・土坑 …… 32

6　焼　　土 …… 44

7　溝　　跡 …… 44

Ⅵ　遺　　物 …… 87

Ⅶ　総　　括 …… 103

1　特　　論 …… 103

2　遺物・遺構のまとめ …… 106

3　遺　　跡 …… 106

（1）飯岡才川遺跡の歴史 …… 106

（2）地 域 の 中 で …… 107

表　目　次

第１表　飯岡才川遺跡これまでの調査一覧 …… 7
第２表　新旧遺構名対応表 …… 14

挿図・写真目次

ＲＤ207検出面出土遺物 …… 15

図 版 目 次

第１図　遺跡の位置…… 2
第２図　地形分類図 …… 3
第３図　これまでと今回の調査範囲 …… 4
第４図　これまでに検出された遺構…… 5
第５図　大グリッド…… 6
第６図　周辺の遺跡 …… 8
第７図　遺構配置図 …… 47
第８図　西区遺構配置図 …… 48
第９図　北～南区遺構配置図 …… 49
第10図　東区ほか　遺構配置図 …… 50
第11図　ＲＡ052住居跡（１） …… 51
第12図　ＲＡ052住居跡（２） …… 52
第13図　ＲＡ052住居跡（３） …… 53
第14図　ＲA052住居跡(4)･RA053･054住居跡(1) 54
第15図　ＲＡ053・054住居跡（２）…… 55
第16図　ＲＡ055住居跡（１） …… 56
第17図　ＲＡ055住居跡（２） …… 57
第18図　ＲＥ006・014住居状遺構…… 58
第19図　ＲＥ015住居状遺構 …… 59
第20図　ＲＥ016住居状遺構 …… 60
第21図　ＲＢ021掘立柱建物跡（１） …… 61
第22図　ＲＢ021掘立柱建物跡（２） …… 62
第23図　ＲＢ022掘立柱建物跡（１） …… 63
第24図　ＲＢ022掘立柱建物跡（２） …… 64
第25図　ＲＢ023掘立柱建物跡 …… 65
第26図　ＲＣ006柱列 …… 66
第27図　ＲＩ005井戸跡 …… 67
第28図　ＲＤ191土坑 …… 68
第29図　ＲＤ192・193土坑（１）…… 69
第30図　ＲＤ192･193土坑（２）・ＲＤ194土坑（１） 70
第31図　ＲＤ194土坑（２）・ＲＤ195土坑（１） 71
第32図　ＲＤ195土坑（２）・ＲＤ196土坑…… 72
第33図　ＲＤ197・198土坑…… 73
第34図　ＲＤ199・200土坑…… 74
第35図　ＲＤ201～203土坑（１）…… 75
第36図　ＲＤ201～203土坑（２）…… 76
第37図　ＲＤ204・205土坑…… 77
第38図　ＲＤ206～209土坑…… 78
第39図　ＲＤ210～212土坑…… 79
第40図　ＲＧ039・064溝跡…… 80
第41図　ＲＧ063溝跡 …… 81
第42図　焼土…… 82
第43図　ＲＡ052住居跡出土遺物 …… 83
第44図　ＲＡ053～055住居跡（１）出土遺物…… 84
第45図　ＲＡ055住居跡（２）、ＲＢ021掘立柱建物跡
出土遺物…… 85
第46図　ＲＢ022掘立柱建物跡、柱列、住居状遺構、
土坑、溝跡、柱穴群出土遺物…… 86
第47図　土師器（１）…… 90
第48図　土師器（２）…… 91
第49図　土師器（３）…… 92
第50図　土師器（４）…… 93
第51図　土師器（５）…… 94
第52図　土師器（６）…… 95
第53図　須恵器（１）…… 96
第54図　須恵器（２）…… 97
第55図　陶磁器、土製品…… 98
第56図　石器（１）…… 99

第57図　石器（２）…… 100
第58図　石製品、鉄製品…… 101
第59図　銭貨…… 102
第60図　才川周辺の古代集落遺構配置図…… 108

写真図版目次

第17次調査…… 110
写真図版１　調査区遠景、調査区全景…… 111
写真図版２　西区遺構検出範囲、調査前風景…… 112
写真図版３　西～北区調査前風景…… 113
写真図版４　北～東区調査前風景…… 114
写真図版５　東区調査前風景…… 115
写真図版６　RA052住居跡（１）…… 116
写真図版７　RA052住居跡（２）…… 117
写真図版８　RA052住居跡（３）…… 118
写真図版９　RA052住居跡（４）…… 119
写真図版10　RA052住居跡（５）…… 120
写真図版11　RA052住居跡（６）…… 121
写真図版12　RA052住居跡（７）…… 122
写真図版13　RA053住居跡（１）…… 123
写真図版14　RA053住居跡（２）…… 124
写真図版15　RA054住居跡（１）…… 125
写真図版16　RA054住居跡（２）…… 126
写真図版17　RA055住居跡（１）…… 127
写真図版18　RA055住居跡（２）…… 128
写真図版19　RA055住居跡（３）…… 129
写真図版20　RB021掘立柱建物跡（１）…… 130
写真図版21　RB021掘立柱建物跡（２）…… 131
写真図版22　RB022掘立柱建物跡（１）…… 132
写真図版23　RB022掘立柱建物跡（２）…… 133
写真図版24　RB023掘立柱建物跡…… 134
写真図版25　RC006柱列跡（１）…… 135
写真図版26　RC006柱列跡（２）…… 136
写真図版27　RE006・014住居状遺構（１）…… 137
写真図版28　RE014住居状遺構（２）…… 138
写真図版29　RE015住居状遺構…… 139
写真図版30　RE016住居状遺構…… 140
写真図版31　RG063溝跡（１）…… 141
写真図版32　RG063溝跡（２）…… 142
写真図版33　RG039・064溝跡…… 143
写真図版34　RD191～194土坑…… 144
写真図版35　RD195～198土坑…… 145
写真図版36　RD199～202土坑…… 146
写真図版37　RD203～206土坑…… 147
写真図版38　RD207～210土坑…… 148
写真図版39　RD211・212土坑 RF003・004焼土　149
写真図版40　RI005井戸跡…… 150
写真図版41　RZ035柱穴群、調査西区（１）…… 151
写真図版42　調査西区（２）…… 152
写真図版43　調査西区（３）…… 153
写真図版44　調査東区（１）…… 154
写真図版45　調査東区（２）…… 155
写真図版46　土師器（１）…… 156
写真図版47　土師器（２）…… 157
写真図版48　須恵器（１）…… 158
写真図版49　須恵器（２）、陶器、土製品…… 159
写真図版50　石器（１）…… 160
写真図版51　石器（２）…… 161
写真図版52　石器（３）、石製品、銭貨…… 162
写真図版53　鉄製品…… 163

報告書抄録

ふりがな	いいおかさいかわいせきだいじゅうなな～じゅうくじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	飯岡才川遺跡第17～19次発掘調査報告書
副書名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第618集
編著者名	金子佐知子、金子昭彦
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019－638－9001
発行年月日	西暦2013年３月１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
いいおかさいかわ 飯岡才川遺跡 （第17～19次）	いわてけんもりおかしいいおか 岩手県盛岡市飯岡 しんでん　ちわり 新田２地割46－1 ほか	03201	LE16-2291	39° 40′ 45″	141° 08′ 04″	2010.10.04～ 2010.10.28	4,000㎡ （検出のみ）	盛岡南新都市土地区画整理事業
						2011.08.01～ 2011.11.16	9,299㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯岡才川遺跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構14基	石器製作時の剥片１点	陥し穴状遺構は、主に段丘崖に沿って検出された。
	集落	平安時代	竪穴住居跡４棟 住居状遺構４基 （１基は既調査分の続き） 掘立柱建物跡１棟 土坑８基 溝跡３条 （１条は既調査分の続き）	土器大コンテナ３箱 （土師器・須恵器24,806ｇ） 土製品３点 （羽口１、焼粘土塊２点） 砥石類17点 石製勾玉１点、その石材？1点（両方、奈良時代？） 鉄製品12点 （鏃１、紡錘車１、釘ほか） 鉄滓１点	土師器に、北奥系、出羽系、砂底土器あり。 「×」の刻印のある土師器。 遺跡中央東寄りから東辺に庇を持つ２間×２間の掘立柱建物跡。 その付近には鉄製品の出土多い。 遺跡南東隅にある平安時代の遺構密集地の端が確認された。そこから検出された竪穴住居跡にはカマドが五つある。
		古代～中世	掘立柱建物跡１棟		
		中世末～近世	柱列１基	銭貨（永楽通宝）１	柱穴から銭出土。
	集落	近世 後半以降	掘立柱建物跡１棟 柱穴群 井戸跡１基	銭貨（寛永通宝）３	
		時期不明	焼土２基		平安時代の可能性もある

要約

飯岡才川遺跡は、東流する飯岡才川を南限とし、周囲を湿地、旧河道に囲まれた沖積段丘上に立地する東西に長い遺跡である。

これまでの調査で、主に飯岡才川に沿って縄文時代の陥し穴が掘られ、南東端を中心に平安時代の集落が営まれ、さらに、奈良時代を中心にした時期には、北側に隣接する飯岡沢田遺跡の続きで、遺跡の北端に古墳が作られたことがわかっている。

今回の調査で、遺跡のほぼ全体を調査したことになる（第３図）。概ね、これまでの調査結果を敷衍した成果が得られたが、縄文時代の陥し穴は、飯岡才川に沿ってだけでなく、北端の旧河道に沿っても作られていたことが明瞭になった。

また、平安時代の遺構・遺物が疎らに発見されていた遺跡の中央付近は、今回の庇が付く掘立柱建物跡、第７次調査での石帯の発見などにより、特別な区域として注意する必要があることがわかった。

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成２年９月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成３年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成３年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

飯岡才川遺跡第17次調査については、岩手県教育委員会が協議の結果、平成22年度の事業として確定した。これを受け、平成22年６月１日に盛岡市長との間で、委託契約を締結した。

第18～19次調査については、岩手県教育委員会が協議の結果、平成23年度の事業として確定した。これを受け、平成23年６月１日に盛岡市長との間で、委託契約を締結した。なお、岩手県文化振興事業団は、平成23年４月１日に公益財団となった。また、第18次調査区は、東日本大震災の対応や予算減額等により調査予定面積が紆余曲折を経たが、削平等により検出遺構が少なかったため、最終的には当初予定の7,903㎡全てを調査した。

Ⅱ　立 地 と 環 境

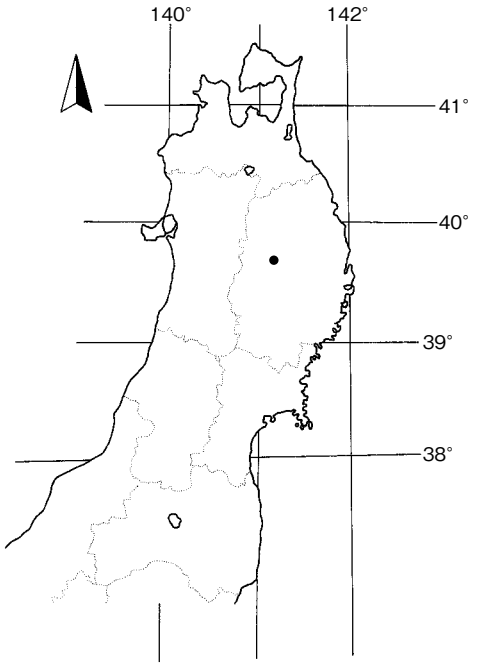
１　位置・地形・調査範囲・現況（第１～10図、写真図版１～５、16下段ほか）

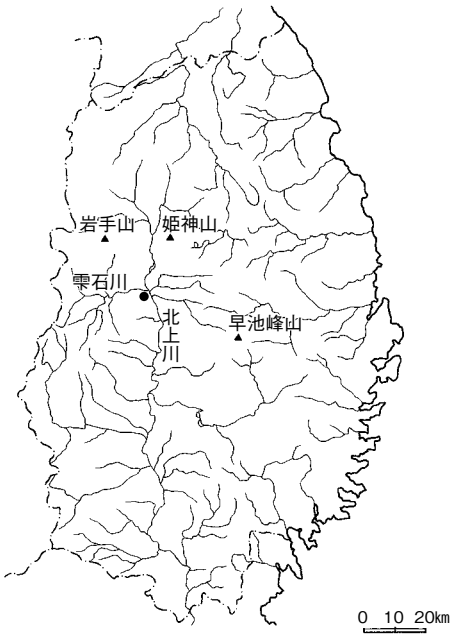
遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約２㎞に位置し（第１図）、雫石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する（第２図）。推定面積は約62,000㎡、標高は120～124ｍである。

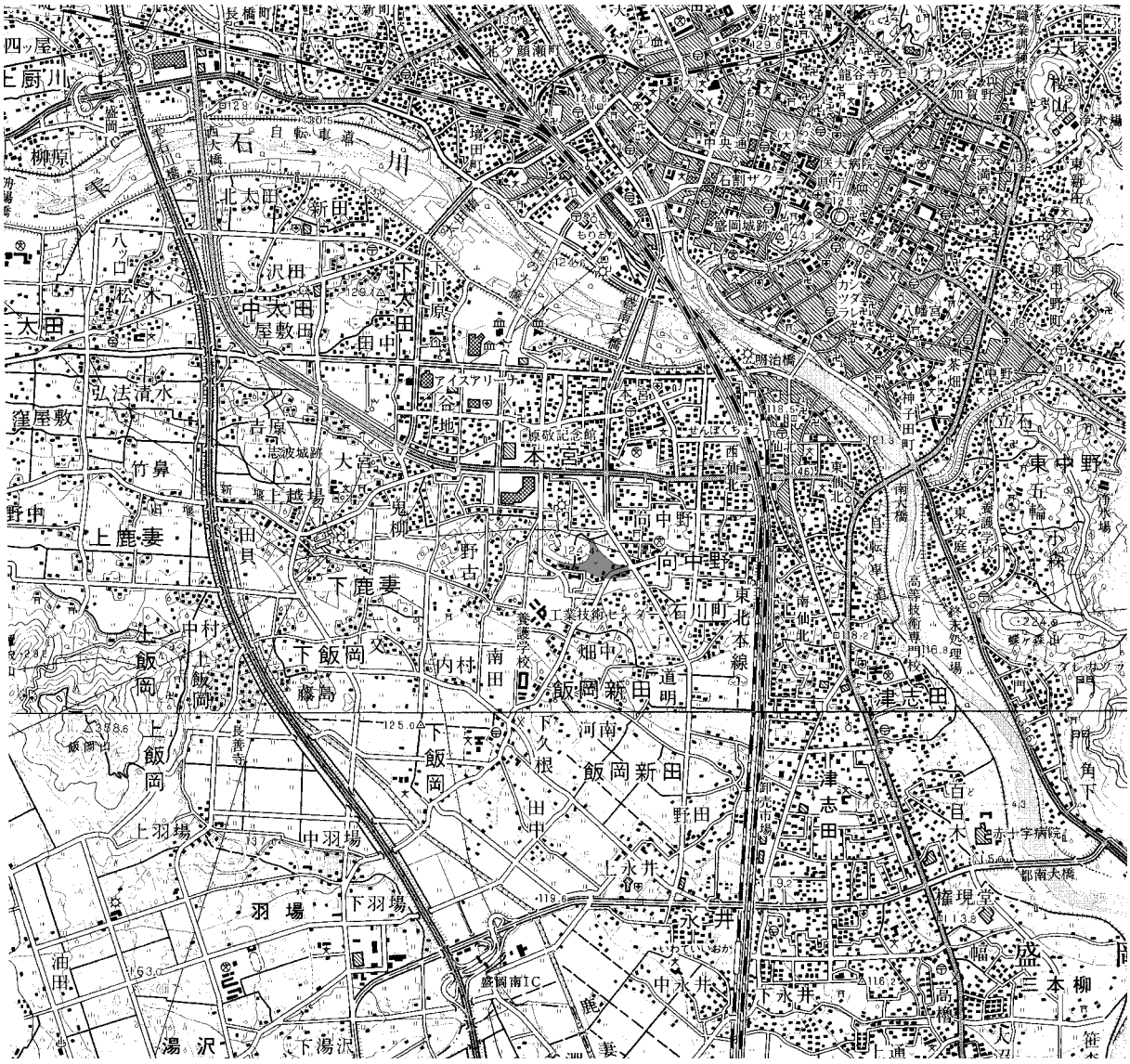
本遺跡は、東流する飯岡才川を南限とし、北東～東限は湿地、北西限は旧河道とする沖積段丘上に立地しているらしいが、沖積段丘上にも小規模な雨裂跡が認められる。今回調査した東区（後述）は、ほとんどがこれに当たり（第10図）、北東から南西に向い、南区の南東端に続いている。また、今回調査区の北西端は北側に落ち込む谷になっていた（写真図版41の下段）。

今回の調査区は第３図に示した範囲で、第15次調査地点を挟んで二地点に分かれ、当初①、②区とされていた。①区は7,903㎡、②区は1,396㎡である。これが、そのまま第18次、第19次調査区と呼び換えられたらしいが、第18次調査区の一部は、前年度に検出作業まで行われていた（第17次調査）。また進行上全域を同時に調査することはできなかったので、便宜的に第17次調査区を西区、その東隣を北区、南側を南区（写真図版16下段、24下段）、第19次調査区を東区と呼称した（第８～10図、詳細は第Ⅲ章）。写真図版26上段右上と左下に、北区調査中の南区の様子が写っている。

西区は、今回調査区の北西端にあたり、第18次調査区を東西に二分する旧幹線道路を含んで北側に相当するが、宅地跡から東側は前年度検出作業をしておらず、ここは北区となる（第３、５図）。そして、残りの南～東側が南区となる（写真図版44下段）。したがって、第８図には、北、南区の一部







第１図　遺跡の位置（１：50,000　盛岡・日詰）

西端を含んでいる。

現況。第17次調査区（西区）は畑地が大部分だが、北区、南区は宅地跡が大きく占めるため改変を強く受け、削平がひどくカクランが多かった（第５図）。東区は畑地だが、北側は宅地であったため（第５図）、北端は改変を受けている。なお、畑地だったところの多くは以前水田であったらしいことが調査によって窺われた。

２　基本層序と検出・出土状況

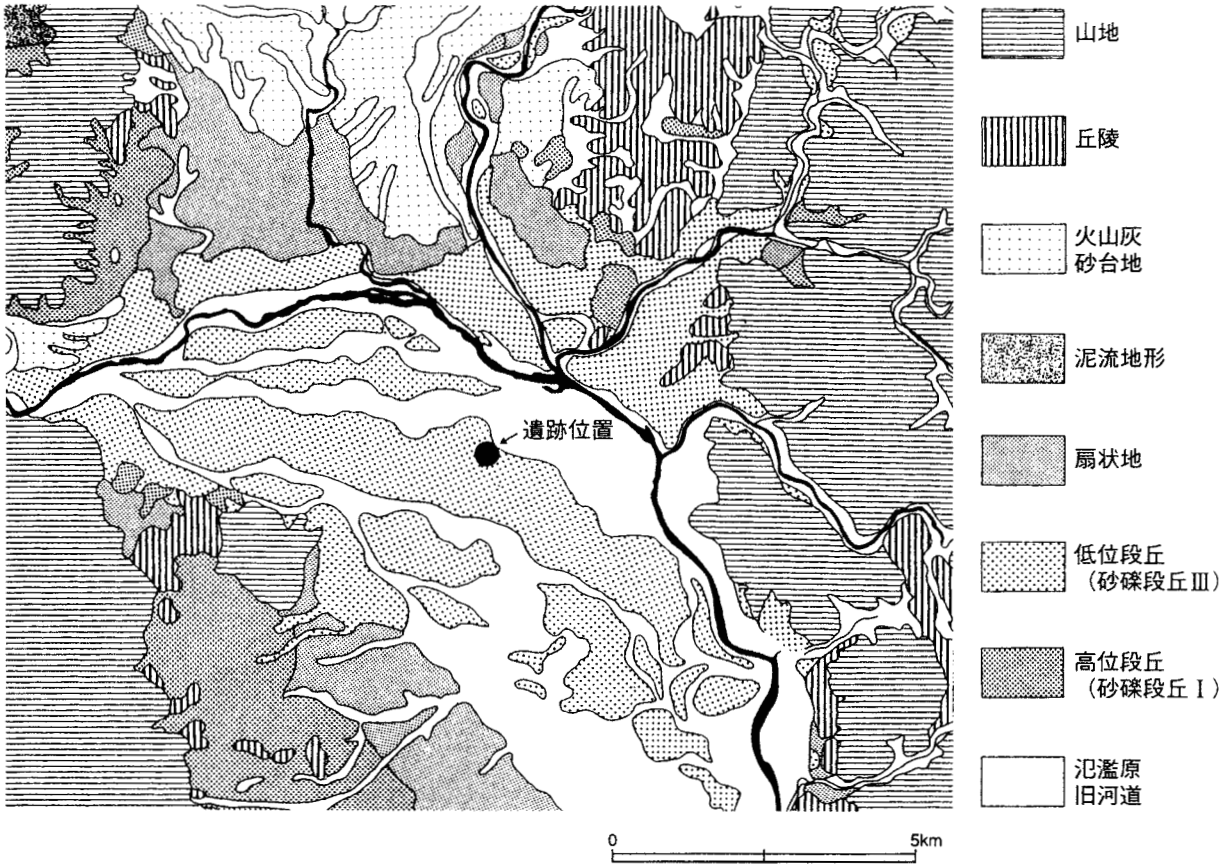
(a)基本層序

本遺跡では、概ね次のような土層堆積を示している。

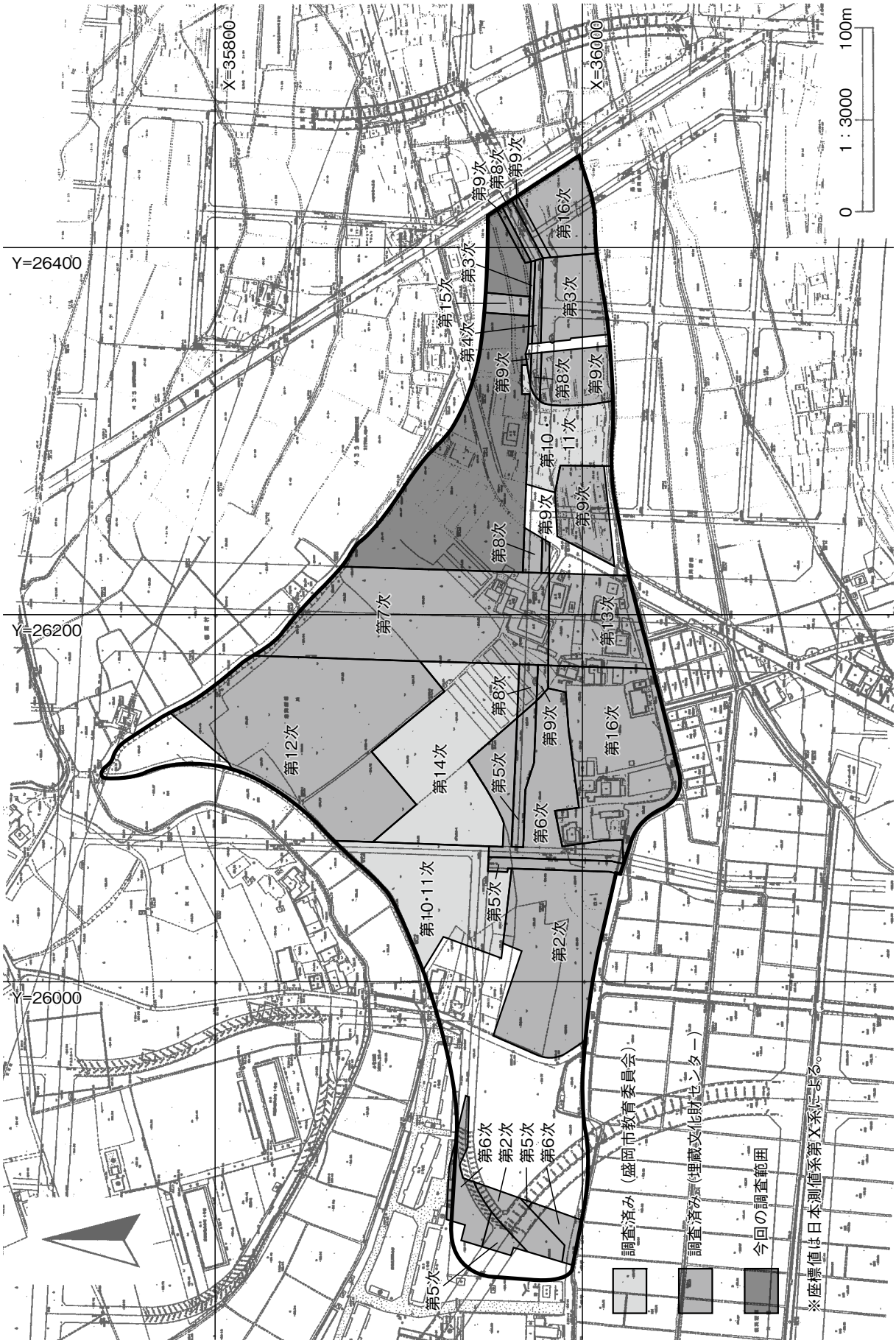
Ⅰ層	表土。層厚20～30cm。	
Ⅱ層	黒褐色土	クロボク土。旧河道や雨裂で厚く、層厚0～40cm以上。本来の古代遺構検出面。
Ⅲ層	暗褐色土	漸移層。層厚0～20cm。実質的な遺構検出面。
Ⅳ層	黄褐色土	粘土質あるいは砂質。層厚30～40cm。実質的な遺構検出面。
Ⅴ層	黄褐色砂礫	地点により黒褐色を呈する。層厚不明。東区旧雨裂底にあるＲＤ198土坑底の砂層では湧水が認められたが、稲刈り後付近の水位が下がるとなくなった。

(b)検出・出土状況

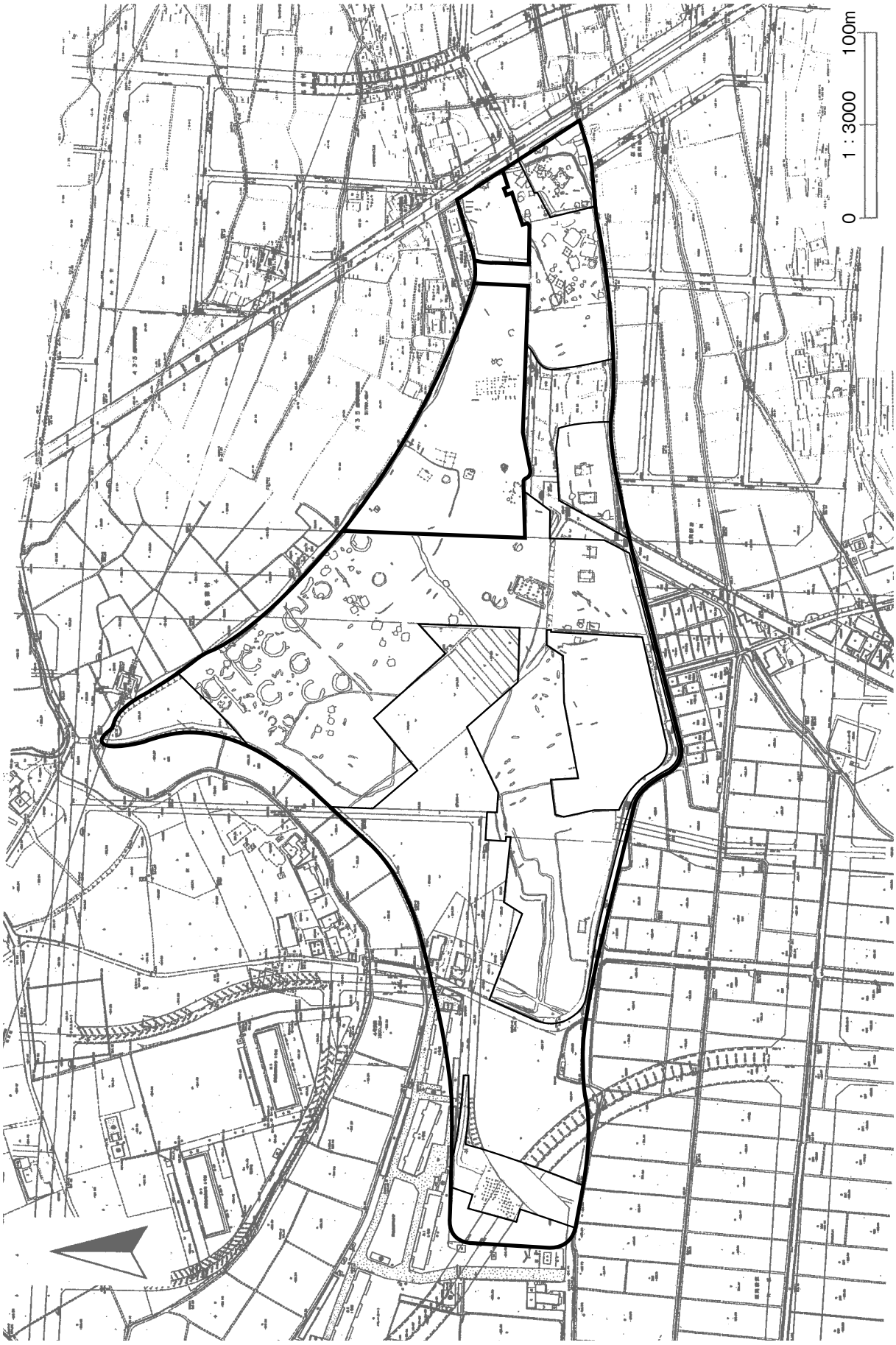
今回調査区は、東区以外みな削平されて、Ⅰ層の下は、かろうじてⅢ層が残るといった状態であっ



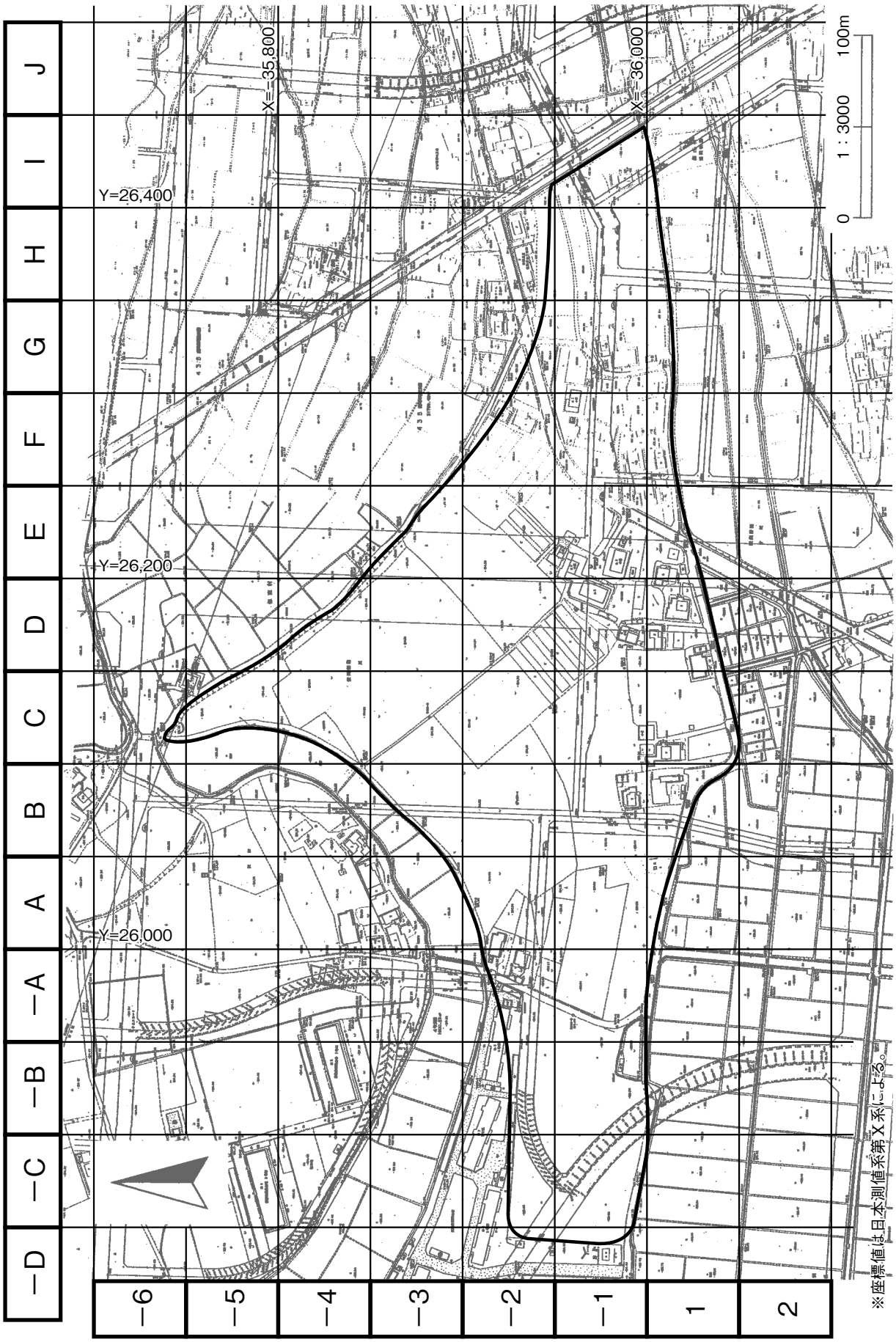
第２図　地形分類図



第３図　これまでと今回の調査範囲



第４図　これまでに検出された遺構


J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
−A
−B
−C
−D
X=35,800
X=36,000
Y=26,400
Y=26,200
Y=26,000
0
1：3000
100m
−6
−5
−4
−3
−2
−1
1
2
※座標値は日本測値系第Ⅹ系による。

第５図　大グリッド

たため、遺物の出土量は少なく、遺構内も全体的に少なかったと言える。地山は黄褐色土（Ⅳ層）、遺構覆土は黒褐色土（Ⅱ層起源）ということで、概ね遺構の検出はしやすかったが、ＲＤ197陥し穴状遺構は、上部の黒褐色土部分が削平されたため、黄褐色土に黄褐色土ということで難しかった。また、西区は、耕作時のカクランが著しく、遺構がカクラン土に覆われていることを恐れて、次年度に念のため検出面を10～20㎝程度下げてみたが、新たに検出された遺構はなかった。

西区は、耕作による改変著しく、特に長芋作付によるカクランがひどかった。北区、南区は、宅地に伴う改変（特に削平とゴミ穴）がひどかった（第８～９図）。住宅を壊した後更地になっていたが、コンクリートの基礎も一部残っていた。旧幹線道路は、舗装道路のため削平改変著しかった。また、道路の北側～西側に沿って古い側溝が見つかり、中から戦前の陶磁器片、ガラス片、瓶などが大量に出土した。このように、西、北、南区は、カクランが著しかったが、カクランも、ある程度の深さまで半裁したりトレンチを入れたりしたので、遺構の取りこぼしはほとんどないと思われる。ただし、南区はカクランが特にひどく、時間的に全てを除去できなかったので、深い陥し穴の底は残存していた可能性もある。ただし、陥し穴の分布は限られ、南区の宅地跡付近にあったとは考えにくい。

東区は、畑地であり、ほぼ全域が黒土（Ⅱ層）が比較的厚く残る雨裂跡であったため、改変は少なかったが（一部耕作に伴うと推測される穴など）、調査区北側は宅地であるため、北端は一部改変を受けている（第10図）。雨裂跡で水はけの悪さが嫌われたためか、南側に隣接する調査区（第４図）とは異なって遺構は疎らであり、遺物もほとんど出土しなかった。

今回の調査区の北端は、そのまま遺跡の北端にあたり、その北側は当時の湿地や旧河道に相当するが、現況は工事に伴う土山となっており（写真図版32最下段右）、その状況は十分に確認できなかった。ただし、第18次調査区の北西端と北東端は旧地形を確認でき、北西端に確認された谷と北東端の旧河道？にはトレンチを入れてみたが、上面から、流れ込みと推測される土器が出土した以外には、遺物は発見されなかった。

第１表　飯岡才川遺跡これまでの調査一覧（㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査分中心）

調査次数	委　託　者	概　　要（位置・立地）	調査面積㎡	調査機関	調査期間（西暦）	調査成果・検出遺構（時期不明遺構省く）	出　土　遺　物	文献	備考
1	地域振興整備公団	北西側半分	5,672	盛岡市教委	96.7.24～11.11			95	試掘
2	岩手県保健福祉部	環境保健センター	5,600	当センター	98.4.8～6.15	縄文陥し穴３	土師器片／寛永通宝	13	西端
3	盛岡市	東端近く 旧才川に面す	1,582	〃	00.7.17～11.29	縄文陥し穴状２／平安（９世紀前半含む）住居８、掘立柱建物跡（総柱）４、円形周溝２／近世墓	砂底土器・須恵器袋物多数、雁又鏃　／近世柄鏡、ガラス玉	21	隣接
4	地域振興整備公団	上隣接・雨裂跡	288	〃	00.8.1～8.14	縄文陥し穴２	土師器片１・須恵器片１	19	
5	〃	西端	1,258	〃	03.6.25～9.11	縄文陥し穴４	近世陶磁器片	37	隣接
6	盛岡市		4,339	〃	03.8.1～9.11	縄文陥し穴18／平安溝	大洞A1式土器片／土師器	〃	
7	国土交通省	中央縦断北側 古墳群隣接地	6,550	〃	05.8.19～10.31	縄文陥し穴２／８世紀後半～９世紀前半古墳８、平安住７	鉄鏃、小型住居からメノウ製石帯（「白玉帯」）	54	13次と一連
8	都市再生機構	南端東半分（東端まで）調査区点々と旧才川に面す	839	〃	05.9.1～9.29	縄文陥し穴７／平安住居５、住居状７、掘立柱建物跡２、土器埋設遺構／近世掘立柱建物跡３	土師器（把手状突起が付く甑）・須恵器、焼粘土塊、鉄斧／石臼	48	隣接
9	盛岡市		2,907		05.7.25～9.29				
10	〃	北西端	3,907	盛岡市教委	05.8.4～9.13	溝跡			詳細
11	〃・都市再生機構	〃	1,818	〃	05.11.7～12.6	竪穴住居７、掘立柱建物跡３			不明
12	盛岡市	中央北端 古墳群	4,000	当センター	05.10.3～11.10 06.9.19～11.24	縄文陥し穴11／古墳（８世紀前半主）17、奈良、平安住居14	土師器・須恵器、鉄鐸、土錘	57	隣接
13	国土交通省	７次南隣接地 低地？	2,280	〃	06.6.21～7.31	縄文陥し穴８／平安住居１／近世掘立柱建物跡５	土師器・須恵器／「赤間堰大森」銘の硯	54	7次と一連
14	盛岡市	中央	6,451	盛岡市教委	07.4.24～6.18	竪穴住居２			不明
15	〃	東端近く・道路	410	当センター	08.11.6～11.14	平安円形土坑１	土師器片・須恵器片	62	
16	〃	南端東半の調査区離れた二箇所（一つは東端）	5,921	〃	09.9.1～12.4	縄文陥し穴10／平安住居９（一辺７ｍを超えるもの１）、掘立柱建物跡３	石器剥片／墨書、刻書土器多数、焼粘土塊	70	

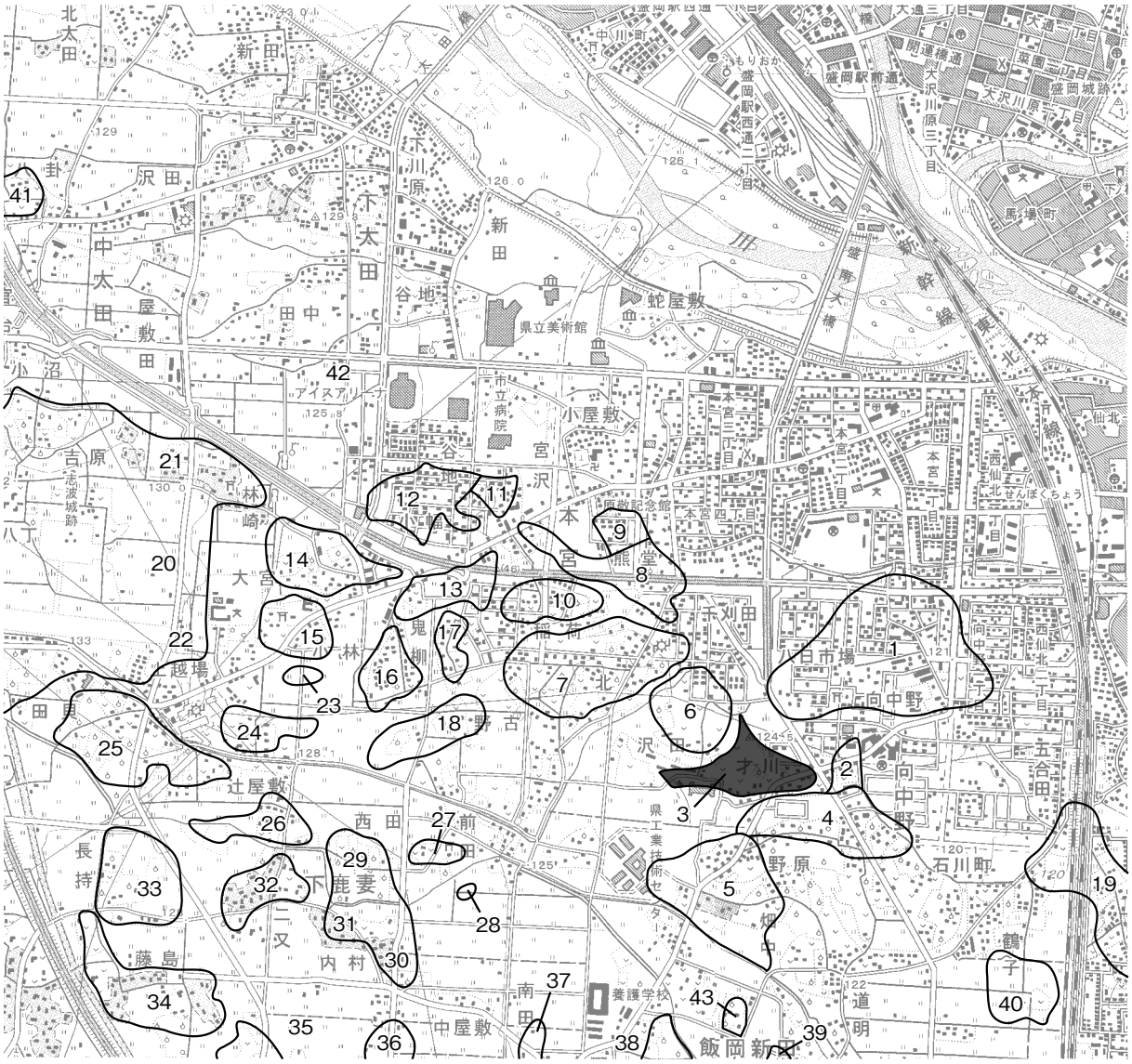
＊文献名は番号で示したので、p.9を参照いただきたい。

3　これまでの調査と周辺の遺跡

No.	遺跡名	内　容	文献（書名→本文中にある）
1	台太郎	縄文晩期集落／古墳～平安集落→住600以上／中世→五角形の居館、墓地	10、12、14、17、18、22、24～26、31、37、40、41、58、69、79、81、85、86、96
2	向中野館	縄文土坑／平安集落→旧河道、木製品封緘木簡、鉤／中世城館→堀、木簡、珠洲	14、15、52、53、58、65、67、95
4	細谷地	縄文晩住、陥穴34?／弥生／奈良～平安集落→住150以上、畠状遺構、土器焼成坑	22、23、36、37、49、54、55、56、59、61、64、67、79、95
5	矢盛	縄文陥穴60、袋状土坑／平安住16世紀中心の居館跡→堀跡、土橋	1、32、34、41、42、54、58、59、60、62、63、66、68、95
6	飯岡沢田	縄文陥穴／古墳～平安住居、古代の大規模な墓地／中世方形周溝	27、28、46、95
7	野古A	奈良～平安集落→住居約80、掘立、溝、縄文土器を模した土師器	9、29、30、37、79～81、95
8	本宮熊堂B	縄文土坑、陥穴、イノシシ形土製品奈良～平安集落→住居約140、勾玉	2、10、11、19、20、34、37～39、43、45、47、95
9	本宮熊堂A	縄文晩期中～後葉集落跡→住居、捨て場、土偶	6、8、35、43、51、81、95
12	小幅	縄文晩期住居／平安集落→住約40、掘立、円形周溝	3～5、7、14～16、19、81、94
13	鬼柳A	縄文陥し穴状遺構5奈良～平安集落	11、19、81、94
19	南仙北	縄文陥し穴／平安集落→住居、円形周溝／中世溝	63、68、78～81、95
20	志波城跡	平安初期の城柵・国史跡以前は、太田方八丁遺跡	72、83、84、89～93　ほか78年から市教委継続報告
21	林崎	平安集落（住11、掘立、溝跡土坑）、住居（古墳）1	77、80～82
35	飯岡林崎Ⅱ	平安集落→住居37、掘立、旧河道焼失住から多量の炭化米、円形硯	33、75、76

No.	遺跡名	内　容	文　献
10	稲荷	住（奈）1、溝、墓?	9、32、37、41、81、95
11	宮沢	溝（平安）	6、47、80、81、94
14	大宮北	平安集落（10ｃ後含）住2、掘立、廃棄坑	8、66、78、79、81、87、94
15	大宮	古代土坑、溝	77、81
18	野古B	溝、平安土師器数片	73
22	新堰端	縄文貯蔵、陥穴、後末土器、平安大溝、朱塗球胴甕	80、81、88
28	前田	縄文土坑、溝状陥し穴、土師器	74
31	内村	平安集落→住1、掘立、溝／常滑大甕	86
32	二又	平安集落→住1、溝	86
33	辻屋敷	住居（平安）2、須恵器、土師器坏	76
34	藤島	住居（古代）1	76
36	深渕Ⅰ	奈良～平安前期集落→住10、円形周溝	75
41	八卦	住（奈3、平1）、溝、土坑	77、80、81
42	太田田中	土師器坏(文献では田中遺跡)	74

No.	遺跡名	内容	文献
3	飯岡才川	本書第1表	
16	鬼柳B	古代	
17	鬼柳C	古代	80（何もなし）
23	小林	古代	
24	水門	古代	
25	上越場A	縄文古代	
26	上越場B	縄文古代	
27	西田B	古代	
29	西田A	古代	86（何もなし）
30	中屋敷	古代	
37	高屋敷Ⅰ	古代	
38	石持	古代	
39	夕覚	古代溝?	市試掘
40	向中野幅	古代	
43	焼野	中世近世	62



第6図　周辺の遺跡（1：25,000　盛岡・小岩井農場）

（『盛岡遺跡地図（2000年度版）』（盛岡市教育委員会2000）より作成

調査報告書一覧表

・㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行報告書（年は西暦下二桁）

凡例→『○○遺跡第○次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第○集
『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成○年度分）』〃　（※12年度から「分」とれる）
『平成○年度発掘調査報告書』〃

No.	書　　名（略）	年	集数
1	矢盛・第1次	94	205
2	本宮熊堂Ｂ・第１次・	95	226
3	小幅・第2次・	96	244
4	略報（平成7年度）	96	246
5	小幅・第4次	96	265
6	略報（平成８年度）	97	266
7	小幅・第5次・第7次・	98	267
8	大宮北・本宮熊堂Ａ・	98	281
9	略報（平成9年度）	98	282
10	熊堂Ｂ5次・台太郎16次	99	293
11	熊堂Ｂ４次・鬼柳Ａ４次	99	308
12	台太郎・第15次・	99	309
13	略報（平成10年度）	99	311
14	向中野４・小幅11・台太郎19	00	321
15	向中野館3次・小幅10次	00	338
16	略報（平成11年度）	00	340
17	台太郎・第22次・	01	365
18	台太郎・第18次・	01	369
19	略報（平成12年度）	01	370
20	熊堂Ｂ・第10次・・	02	377
21	飯岡才川・第3次・	02	393
22	略報（平成13年度）	02	397
23	細谷地・第4・5次・・	02	414

No.	書　　名（略）	年	集数
24	台太郎・第23次・	03	415
25	台太郎・第26次・	02	416
26	台太郎・第35次・	03	417
27	飯岡沢田・第3次・	03	418
28	飯岡沢田・第5次・	03	419
29	野古Ａ・第12次・	03	420
30	野古Ａ・第15次・	03	421
31	台太郎・第44次・	03	422
32	略報（平成14年度）	03	423
33	飯岡林崎Ⅱ・・	04	427
34	矢盛3次・熊堂Ｂ14次	04	451
35	本宮熊堂Ａ・第17次・	04	453
36	細谷地・第8次・	04	454
37	略報（平成15年度）	04	455
38	本宮熊堂Ｂ・第18次・	05	458
39	本宮熊堂Ｂ13・15・20次	04	467
40	台太郎・第51次・	05	468
41	平成16年度・・	05	469
42	矢盛・第6次・	05	488
43	熊堂Ａ・24・熊堂Ｂ・25・	06	470
44	台太郎・第54次・	06	486
45	本宮熊堂Ｂ・第27次・	06	487
46	飯岡沢田・第９・10次・	06	489

No.	書　　名（略）	年	集数
47	平成17年度・・	06	490
48	飯岡才川・第８・９次・	07	494
49	細谷地・第９次・第10次・	07	500
50	野古・第23・24・29次・	07	501
51	本宮熊堂Ａ・第26・29次・	07	502
52	向中野館・第５・６次・	07	503
53	向中野館・第７・８次・	07	504
54	※１	08	508
55	細谷地・第13次・第14次・	08	513
56	細谷地遺跡第15次	08	514
57	飯岡才川・第12次・	08	515
58	※２	08	516
59	平成19年度・・	08	524
60	矢盛・第12・13次・	09	534
61	細谷地・第16・17次・	09	535
62	平成20年度・・・・・・・	09	546
63	矢盛・第18・19次・・	09	555
64	細谷地・第19・20次・	10	556
65	向中野館・第10・11次	10	557
66	平成21年度・・・・・・・	10	571
67	※３	11	577
68	矢盛・第23・24次・・	11	578
69	台太郎・第66次・・	11	579
70	飯岡才川・第16次・	11	580

※１→飯岡才川・第７・13次・細谷地・第12次・矢盛・第９次
※２→矢盛・第10・11次・向中野館・第９次・台太郎・第58次
※３→細谷地・第24・25次・向中野館・第12・13次

・岩手県教育委員会発行報告書

71）1979年『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』岩手県文化財調査報告第35集
72）1982年『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ』岩手県文化財調査報告第68集
73）1990年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』岩手県文化財調査報告第86集
74）1991年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告第90集
75）1992年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』岩手県文化財調査報告第91集
76）1993年『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成4年度）』岩手県文化財調査報告第93集

・盛岡市教育委員会発行報告書

『盛岡市埋蔵文化財調査年報－○年度－』

No.	書　　名（略）	年
77	－昭和55～58年度－	1985
78	－昭和59年度－	1986
79	－昭和60・61年度－	1987
80	－昭和62年度－	1989
81	平成5・6年度	1998

※82の書名は、『盛岡遺跡群』

『盛岡市内遺跡群－○○○－』

No.	書　　名（略）	年
82	－平成10年度発掘調査概報－	1999
83	－平成11年度調査概報－	2000
84	－平成12年度発掘調査概報－	2001
85	－平成13年度発掘調査概報－	2002
86	平成15年度・16年度発掘調査概報	2005
87	平成18・19年度発掘調査報告	2008
88	平成20・21年度発掘調査報告	2011

『志波城跡－○○年度発掘調査概報－』

No.	書　　名（略）	年
89	平成8・9・10年度	1999
90	平成11～14年度	2003
91	平成15・16年度	2005
92	平成17・18年度	2008
93	平成20・21・22年度	1999

『盛南地区遺跡群発掘調査報告書○』（カッコ内は書名でなくメモ）

No.	書　　名（略）	年
94	Ⅰ（平成５～12年度調査報告①）	2007
95	Ⅱ（平成５～12年度調査報告②）	2009
96	Ⅲ（平成５～12年度調査報告③）	2010

３　これまでの調査と周辺の遺跡

(a)これまでの調査

飯岡才川遺跡のこれまでの調査は、第３～４図と第１表に略記した。報告書文献については、第６図の隣に示し、全て番号で引用している。

これまでの調査で、主として南限の飯岡才川と北側の旧河道に沿って縄文時代の溝状陥し穴が見られ、北端には北側に隣接する飯岡沢田遺跡から続く奈良時代を中心にした古墳群（竪穴住居も）が認められ、平安時代の集落は、東端を密に北西方向に疎らに広がることが分かってきた。今回の調査結果も概ねこの傾向を裏づけるが、遺跡中央東寄りに庇を持つ掘立柱建物跡が発見された。この地区は、遺構は疎らながら、第７次調査でメノウ製石帯が出土するなど、注目すべきことがわかった。

(b)周辺の遺跡

周辺の遺跡は、第６図とその右頁にある文献一覧に略記した。対象地域は、概ね今回の調査の原因でもある盛岡南新都市土地区画整理事業（通称「盛南開発」）が行われている範囲とその隣接地であり、雫石川より南で、東北自動車道より東、JR東北新幹線より西、第６図図幅をほぼ南限とする。この地域は、近年主に「盛南開発」による事前調査で多くのことが分かってきている。文献は、2012（平成24）年３月時点で報告書が刊行され当センターの図書室に配架されていたものしか扱っていないが、2010（平成22）年にも当センターによって、飯岡才川遺跡第17次調査、細谷地遺跡（第６図４）第26次調査、矢盛遺跡（第６図５）第27次調査、野古Ａ遺跡（第６図７）第30次調査が行われ（㈶岩手県文化振興事業団　2011）、2012（平成24）年３月末までに報告書が刊行されている（飯岡才川は本書、細谷地第595集、矢盛、野古Ａは第594集）。また、一般国道盛岡西バイパス改築工事に伴う試掘調査は、岩手県教育委員会によって行われ報告されているが（岩手県教育委員会　2007、2008など）、簡単なものであり、本調査は当センターによって実施・報告されているので割愛した。

以下、今回の調査で検出された遺構・遺物に関連する遺跡を時代別に概観する。

縄文時代。今回は、溝状の陥し穴状遺構と石器製作時の剝片（第57図16）のみである。陥し穴状遺構は比較的多くの遺跡に見られ、野古Ａ（第６図７）、飯岡才川、細谷地（同４）、矢盛遺跡（同５）で特に多い。後三者は三つの境界にある大きな旧河道に面して列状に掘られ、総数百を超える。

古代。飛鳥～奈良時代の竪穴住居跡は、それなりに検出されているが（同１、３、４、６～８、10、13、36など）、志波城造営存続期の９世紀前半の遺跡は、はっきりせず、僅かな集落跡（同35）、竪穴住居跡（同８、３も？）、「厨」と墨書された須恵器（同２）、その他土器片が出土している程度である。志波城が廃絶された後の９世紀中頃～10世紀初頭にかけて、この地域は爆発的に遺構、遺物が増え、これまで検出された千棟を超える竪穴住居跡の７割以上は、この時期と思われる。

中世。台太郎遺跡（同１）で14～15世紀を中心とした居館跡など、向中野館遺跡（同２）は16世紀ころの城館跡、矢盛遺跡（同５）でも同じころの居館、集落跡が発見されている。

近世後半、18世紀以降の痕跡は多くの遺跡に認められる。現在の集落に続くのであろう。

参考文献

岩手県教育委員会　2007『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成17年度）』岩手県文化財調査報告書第124集

岩手県教育委員会　2008『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成18年度）』岩手県文化財調査報告書第126集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2011『平成22年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第588集

Ⅲ　調査・整理の方法

１　野　外　調　査

（１）調　査　経　過

第Ⅱ章に記したように、今回の調査区は、第15次調査区を挟んで、第18次調査区（7,903㎡）と第19次調査区（1,396㎡）の東西に分かれる。第19次調査区はそのまま東区と呼んだが、第18次調査区は、前年度第17次調査として検出まで行った部分を西区と称した。西区の東隣で旧幹線道路までを北区、それより南側を南区と呼んだ（第５、８、９図）。第18次調査では西～北区を同時に調査できたが、調査開始時点には南区に土山が置かれていた（写真図版26上段右上と左下）。

以下、第18、19次調査の経過について述べる。６月16日（木）に調査に先立つ現地確認が矢盛遺跡第29次調査と一緒に行われ、担当者の金子が委託者と調査課長補佐から説明と指示を受けた。

７月１日（金）に器材搬入したが、７月は矢盛遺跡の調査を優先的に行った。ただし、矢盛遺跡に重機が入り始めた５日（火）～８日（金）には、危険を避けて作業員は西区のクリーニングを行った（草刈りと前年度シートの土留め撤去）。同様の理由で、19日（火）～26日（火）の作業員が矢盛遺跡を調査中に、北、東区の表土を重機で剥ぎ、北区の排土は南区に、東区は南北隣接地に出した。

８月１日（月）から本格的に調査開始し、最初に西区のクリーニングを全員で行い、大部分はそのまま遺構の精査に入ったが、男性約六名は北区の検出に移った。15日（月）～19日（金）盆休みで現場閉鎖。盆休み後は季候が大きく変わって雨の日が続き、ＲＢ022掘立柱建物跡の断面写真用クリーニングを一からやり直さざるをえなかったり、陥し穴状遺構の水を汲み出し流れ込んだ土砂を取り除くなど、作業は遅れ、10月３日（月）にやっと西、北区の調査を終了した。

盆休み後は、精査する遺構が限られてきたので、女性作業員の約半分８名は、ダメ押し（検出面を10㎝程度下げた）を９月下旬まで行っている。ＲＤ191陥し穴状遺構がポツンと点在するのが腑に落ちず、その周囲に長芋のカクランが多かったためで、下に遺構が隠れているのではないかと、ＲＤ191、ＲＥ015、ＲＢ022、ＲＧ064、ＲＥ016の間の大きな遺構空白箇所のダメ押しを行ったのである。この間、９月14日（水）に、西、北区の部分終了確認を、県教育委員会、市教育委員会、委託者、当センター調査第一課長、担当者出席で行っている。９月末、西区のダメ押し、北区の検出が終わると、細々と遺構の精査を続けながらも、危険な遺構（陥し穴状遺構など）の埋め戻しや北西端の谷部分にトレンチを入れて状況確認するなどの作業を行っている。

10月４日（火）から作業員は東区に移った。併せて重機で南区の表土を12日（水）までかかって剥ぎ、排土は終了した西区に出した。東区の排土は、遺跡範囲外の北側隣接地荒れ地に出すよう指示されたが、足りなかったため調査が終了していた南側隣接地にも置かせていただいた。しかし、調査範囲が不明瞭で、北側は道路に隣接していたため土山を築くのが難しく、結局北側が広げ足らなかったことが、検出時に陥し穴を確認してわかった。土山を築いた後で重機が入るのが難しく、人手で拡張した。南側も調査範囲が不明瞭で、こちらで作成した図面と指示された図面範囲が合わず、広げ足らないように思えてきて、10月20日（木）に重機で拡張した。こちらは最初に剥いだ範囲で合っていたことがわかったが、第８・９次調査区調査遺構の未了部分を発見したため、そのまま調査した。

10月18日（火）からは、全調査範囲を終了できるか見通しを立てるため、南区の検出作業を並行し

て行うこととし、東から西に向かって検出を進めた。カクランがひどく、また周囲の調査区の状況から、遺構の検出は少ないものと予測し、ほぼその通りだったが、竪穴住居跡の残骸が見つかるなど、思ったよりは多かった。ただし、今年度に終了できない数ではなかったので、11月２日（水）から検出された遺構から手をつけ始めた。ただし、検出作業自体は、カクランが多いこともあって、11月８日（火）までかかり、その後検出班は、カクランの半裁、除去等を行い、11日（金）に終了してからは遺物水洗を15日（火）まで行った。

東区の精査は、11月２日（水）に目途がついたが、ＲＡ052住居跡のカマド数が多く掘り方もあり、さらにはＲＤ204陥し穴状遺構が重複していたこともあって、時間がかかり、14日（月）まで細々と続けた。南区の精査は、東区の精査に目途がついた２日（水）から入り、15日（水）までかかった。

10日（木）に東、南区の終了確認が前述の出席者で行われ、14日（月）から道具水洗・梱包も並行して行い、16日（水）午前に土のう袋の土出し、午後に器材を搬出して調査の一切を終了した。

セスナ機による空中写真撮影は、９月27日（火）に西～北区に関して行い、東、南区は遺構数が少ないので撮影は行わなかった。全体の遺構数としては少ないものではないが、排土の関係で同時に調査できなかったため全体を見通せず、迷ううち時期を逸して現地説明会は開けなかった。

登録作業員数は、男性六名、女性十五名、全てベテランの方で作業ははかどったが、男性が少なく、タワーを建てる時や力仕事の際にやや困った。

（２）特　記　事　項

(a)グリッドについて

盛岡市教育委員会の指示に従った。平面直角座標（第Ｘ系）に合わせ、大グリッドは50×50ｍのメッシュで、東西方向に西からＡ、Ｂ、Ｃのアルファベット、南北方向には北から１、２、３のアラビア数字を付し、１Ａ、１Ｂ等と呼称した（第５図）。座標値は、第５図に記したが、数値は東日本大震災前の日本測地系である。小グリッドは、大グリッドを25等分し、南北方向に北から１、２、３のアラビア数字、東西方向には西からａ、ｂ、ｃのアルファベットをつけ、１Ａ１ａ等と呼称した。

(b)遺構の名称について

遺構名も、盛岡市教育委員会に準じている。略号は以下の通りで、番号は三桁で付け、第16次調査からの続き番号である。ＲＡ→竪穴住居跡、ＲＢ→掘立柱建物跡、ＲＣ→柱列、ＲＤ→土坑、ＲＥ→竪穴状遺構、ＲＩ→井戸跡、ＲＦ→焼土、ＲＧ→堀、溝跡、ＲＺ→その他。

野外では第○号住居跡、第○号土坑、○号土坑のように作業順に便宜的に名前を付け、報告時に全て付け直した。新旧遺構名対応表は、第２表に示したので参照いただきたい。なお、それぞれの中では概ね時代順に付け直したため、一部わかりづらくなっている点をお詫びする。また、第17次と第18、19次調査では担当者が異なるが、仮遺構名は同じものを使用した。したがって、第17次調査で確認された２～４、13土坑は、精査の結果遺構ではなかったので、削除したが、欠番が生じると不都合なので、新規発見土坑の一部にＮ２～３、N13土坑という名称を与えた（Ｎ＝newの意味）。

(c)調査方針

第18次調査区の調査予定面積は暫定で（開始時5,106㎡）、できれば全ての調査面積（7,903㎡）をこなすよう希望されたが、検出遺構数が多ければ今年度は途中で引き上げざるを得ない。さらに、土地区画整理（盛南開発）に伴う工事も進展してきて排土置き場の捻出に困り、終了調査区の使用を打診されもした。そこで、途中で終了しても支障がないように、委託者との連絡を密にして調査の進め

方を考え、また終了できるか見通しをつけるため最終調査区である南区の検出を前倒しで行った。

(d)気象ほかの調査条件について

空梅雨で、７月11日（月）早々に梅雨明けしてしまった年である。８月前半までは暑い日が多く、作業ははかどらなかった。８月後半から気温は下がってきたが、空梅雨の反動か雨の日が多く、９月下旬まで作業をしばしば中止せざるを得なかった。８月22日（月）休業補償、23日（火）中止、９月１日（木）中止、２日（金）休業補償、13日（火）休業補償、20日（火）中止、21日（水）休業補償という有様で、大雨で被せていたシートが水に浮き遺物が移動してしまう竪穴住居もあった。

９月下旬からは平年並みの降水に戻ったが、11月上旬まで気温は平年より高く、作業ははかどった。11月中旬気温が急激に下がったが、撤収まですぐだったので、あまり支障になっていない。

その他に作業の支障となったのは、排土置場である。北～西区調査では、南区に置いていたのだが運搬距離が長く、作業員に不評であった。東区では、調査区の南北隣接地に出していたが、北側の置き場は幹線道路に面していた（写真図版44上段）。東区南側の調査範囲がわかりづらく、一旦土山にした（写真図版45下段）北端を再び重機で剥いだりした。

(e)竪穴住居跡（住居状遺構含む）等出土遺物の取り上げについて

ＲＡ、ＲＥ完掘時には、遺物も層ごとに取り上げている。残りの良い土器や、床・底面出土遺物は、出土状況を図や写真等で記録した。出土遺物に番号を振って示す場合は、遺物の種類ごとに分けて連番とし、土器の場合はｐ、石器・石製品の場合はｓ、鉄製品の場合はｆを番号の前に付している。

(f)遺構等の実測について

平面図は、基本的には一般的な簡易遣り方で縮尺1/20で作成したが、大きな遺構等については、原則として平板を使用し小縮尺で図化した（ＲＢ023掘立柱建物跡）。ただし、実測者の希望により、一部遺構（ＲＧ063溝跡、ＲＩ005井戸跡、ＲＺ035柱穴群）と調査範囲については、光波測量機と電子平板システム（Cubic社製実測支援システム「遺構くん」）を用いて作成したが、すぐに図化印刷し基本的に紙実測と同様に扱っている。

(g)遺構等の写真撮影について

各々について、中判カメラ（６×７）で適正、＋、－の三カットと一眼レフデジタルカメラ（全自動モード）で手ぶれ用心のため（画面が汚れて不鮮明であったため）二カット撮影した。その他は当センターの基準に則っている。

２　室内整理と報告書の作成

（１）室　内　整　理

(a)整理経過

第18～19次調査分は、調査員のうち金子が11～３月まで（11月16日までは野外調査）、藤本が１～２月だけ、作業員は、11月１名、12～３月二名で整理作業を行った。作業員二名のうち一名は、最後まで同じ方だったが、残り一名は１月半ばを境に新人に交代した。

調査員（金子）は、作業指示、図面整理、土層注記入力、原稿執筆を行い、調査員（藤本）は、前段図版、写真図版作成を行った。

遺物水洗は現場で済ませていたので、作業員は、12月半ばまで注記・接合・復元を行い、12月半ば～２月上旬まで実測した。新人は、１月後半はアルバム整理に遺物撮影準備と補助、２月上旬拓本、２月中旬計測にトレース練習。２月中旬以降は二人で同じ作業を行い、２月後半～３月前半トレー

ス、３月後半図版作成、収納。トレース以降はなかなか順調には進まなかった。

(b)遺構図面の点検・修整について

平面図と断面図の照合等の図面点検は、基本的に現地で行った。合わない場合は計り直したが、どうしても合わない場合やセクション・ポイントがないなどの不備は、そのままにし本文中にその旨記した。ただし、1/20の縮尺で１㎜（原寸では２㎝、報告書では0.5㎜）の違いについては誤差範囲とし特にふれていない。報告書に嘘を書くべきでないという方針（金子　1998：p.10、13）に拠る。

(c)遺物の整理について

近世末以降の陶磁器以外は出土量が少なく、また小片がほとんどであったので、それほど選別に悩むことはなかった。掲載基準については、第Ⅵ章参照。遺物の実測・拓本・トレースは作業員が行い、実測図は調査員が点検した。

（２）報告書の特記事項

(a)遺構、遺物図版の凡例について

本書冒頭の例言の下にある。

(b)遺構出土遺物の掲載・記載の位置について

遺構出土の遺物も第Ⅵ章で掲載・記載しているが、遺構図版の後に遺構内遺物集成図として縮尺を落としてまとめてもいる（第43～46図）。出土状況は、第Ⅴ章の各遺構の項を参照。

(c)遺物の分類・掲載順序・記載の仕方について

遺物は、基本的に種類ごとに、出土位置の順（遺構内→遺構外）に並べている。遺物の記載は基本的に観察表で行い、表に入りきらない場合や表の項目に当てはまらないことは本文中に記し、その頁を表の「本文記載」という欄に記した。観察表の見方等は、第Ⅵ章冒頭に記した。

(d)註・引用参考文献の掲載位置、本文・表・図版のレイアウトについて

それぞれの節・項の最後にまとめている（例えば、(a)土師器）。原則として本文は本文、図版は図版とまとめている。報告書は通して読まれるということはほとんどないと思われるので、“捜し易さ”を優先すべきと考えたためである。

第２表　新旧遺構名対応表

・竪穴住居跡

旧	新
第１号	ＲＡ055
第４号	ＲＡ052
第５号	ＲＡ053
第６号	ＲＡ054

・掘立柱建物跡

旧	新
第１号	ＲＢ022
第２号	ＲＢ021
第４号	ＲＢ023

・柱列

旧	新
第３号掘立	ＲＣ006

・竪穴状遺構

旧	新
	ＲＥ006
第２号住状	ＲＥ015
第３号住状	ＲＥ016
第７号住状	ＲＥ014

・井戸跡

旧	新
N3号土坑	ＲＩ005

・土坑

旧	新
第1号	ＲＤ207
N2号	ＲＤ196
N4号	ＲＤ198
第５号	ＲＤ208
第６号	ＲＤ209
第７号	ＲＤ192
第８号	ＲＤ206
第９号	ＲＤ193
第10号	ＲＤ194
第11号	ＲＤ195
第12号	ＲＤ205

旧	新
N13号	ＲＤ211
第14号	ＲＤ210
第15号	ＲＤ191
第16号	ＲＤ212
第17号	ＲＤ199
第18号	ＲＤ200
第19号	ＲＤ201
第20号	ＲＤ202
第21号	ＲＤ203
第22号	ＲＤ204
第23号	ＲＤ197

・焼土

旧	新
第１号	ＲＦ004
第2号	ＲＦ003

・溝跡

旧	新
	ＲＧ039
第１号	ＲＧ063
第2号	ＲＧ064

・その他

旧	新
柱穴群	ＲＺ035

参考文献

金子昭彦　1998　「埋蔵文化財センターの考古学」『紀要』ⅩⅧ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

Ⅳ　第17次調査（西区の確認調査）

1　調 査 の 経 過

第17次調査は、当初平成22年６月より調査を開始する予定であったが、当該事業において、他の遺跡が優先となったこと、またこれより先に調査が開始されていた他の遺跡の調査期間の延長等により、10月から開始し、できるだけ表土を除去して遺構の検出までを行うという限定的なものに変更された。調査区の西側約4,000㎡の表土を除去した時点で、委託者から東側は産業廃棄物の処理等の関係で着手できない旨連絡を受け、それ以上広げずにその部分の遺構検出を行った。

10月４日　プレハブ用地の草刈り
10月５日　調査区草刈り、プレハブ設置
10月６日　調査区草刈り、器材搬入、試掘
10月７日　道路沿い単管設置、調査区草刈り、重機による表土掘削
10月８～13日　粗掘り、遺構検出、重機による表土掘削　調査区内は西半に長芋畑による撹乱が密に入っており、すべての撹乱を除去することは不可能だということがわかった。そこで、溝状の撹乱の合間に遺構の埋土と思われる黒褐色土を探し、その周辺の撹乱のみ除去して遺構のプランを現すことにした。
10月14～22日　遺構検出、写真撮影、遺構位置の実測を併行しながら行う。実測は調査区内の３級基準点No.82（X=-35,953.832、Y=26,262.487）からNo.81（X=-35,941.744、Y=26,319.428）を視準して、遺構くん（CUBIC製）により行った。
10月25日　遺構の養生も開始
10月28日　今年度分調査（遺構検出）を終了した。

2　調　査　成　果

調査の結果、古代の墓域は今回の調査区までは広がっていないことを確認した。平安時代の集落は今回調査区まで広がっており、縄文時代の陥し穴状土坑が遺跡北側の沢近くにも分布する。遺構は以下のとおり検出した。

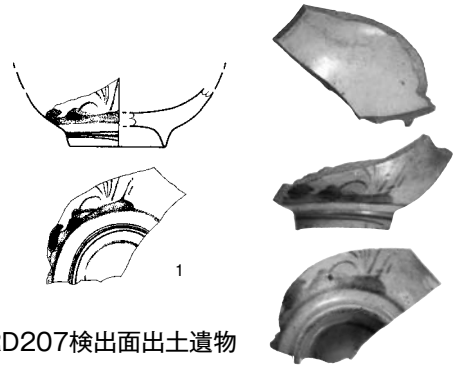
竪穴住居跡（平安時代）３棟、掘立柱建物跡（時期不明）１棟、土坑（平安時代、近世、時期不明）９基、陥し穴状土坑（縄文時代）４基、溝跡３条（古代２、時期不明１）、柱穴状土坑（時期不明）15個

なお、土師器及び須恵器小５袋、陶磁器（近世以降）小５袋が出土している。以上の調査成果は平成23年度に行われた第18次調査の担当者に引き継いだ。

出土遺物については、第18・19次調査の出土遺物と接合関係がないか確認し、RD207土坑の検出面で出土した磁器１点を掲載した。

RD207土坑出土遺物（右図１、右写真図版）

磁器の染付丸碗である。見込みに文様はない。外面文様は草花文か。高台内も施釉され、圏線が１条廻る。胎土は灰白色で呉須の発色は悪い。18世紀の肥前産と思われる。



RD207検出面出土遺物

Ⅴ 遺　　構

１ 概　　要

検出遺構は、縄文時代と思われる陥し穴状遺構14基、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の竪穴住居跡４棟、住居状遺構４基、掘立柱建物跡１棟、土坑８基、溝跡３条、古代～中世の掘立柱建物跡１棟、中世末～近世の柱列１基、近世後半以降の掘立柱建物跡１棟、井戸跡１基、柱穴群、時期不明（平安時代の可能性もある）の焼土２基である。

今回の調査区は、第15次調査区を挟んで、第18次調査区（7,903㎡）と第19次調査区（1,396㎡）の東西に分かれる。第19次調査区はそのまま東区と呼んだが、第18次調査区は、前年度第17次調査として検出まで行った部分を西区と称した。西区の東隣で旧幹線道路までを北区、それより南側を南区と呼んだ（第５、８、９図）。

遺構の種類別の概要。竪穴住居跡については次節参照。カマドを持たない住居状遺構は、３×３ｍ程度のものが多いが、ＲＥ015だけ大きく不整形である。掘立柱建物跡は３棟認定したが、平安時代のものは柱穴覆土に灰白色火山灰を含み、２間×２間で東辺に庇が付き梁、庇を入れて約５×８ｍ。古代～中世のものは、２間×３間で約４×6.2ｍ、梁行中央列の柱穴の規模は小さく浅い。柱列は、柱間２間の柱列が東西方向に二列並び、一列の長さは約５ｍ、柱穴底から銭貨が出土した。

土坑には、陥し穴状遺構（ＲＤ191～204）と平安時代の土坑（ＲＤ205～212）があり、陥し穴状遺構は、拳が回らないほど底が狭い。平安時代の土坑は、形・大きさ多様だが、ＲＤ208には焼土が検出されカマド状遺構にやや似る。ＲＤ207には下層に点圧したような非常に硬い灰白色土（酸化鉄付着）が広がる。ＲＤ210からは多くの土器破片と焼土粒が出土した。溝跡は、東区に１条、西区に２条検出した。東区のそれは、これまでの調査の続きで総延長100ｍを超え、上幅1.5ｍ、深さ50㎝を超える。西区の１条は途中で曲がり、第７次調査区のＲＧ028に続くとしたら全長150ｍにも及ぶが、狭く浅い。覆土に灰白色火山灰が検出されたＲＢ021掘立柱建物跡と重複している。

なお、遺構内出土遺物のうち土器については、出土総量を重さで示したが、手違いで土師器と須恵器を分けずに計測したものがあり、報告書では一括して示さざるを得なかったが、須恵器を含むことが明瞭なものについては明記した。

２ 竪 穴 住 居 跡（第11～17、43～45図、写真図版６～19）

４棟検出された。東区に１棟、南区に２棟、西区に１棟、いずれも平安時代で９世紀後半～10世紀初頭と思われるが、西区の１棟（ＲＡ055）は他よりやや新しいかもしれない。規模は一辺２ｍ弱から5.2ｍまで様々である。東区の１棟（ＲＡ052）にはカマドが五つ検出され、西区の１棟には床中央付近に焼土が検出、その脇に浅い楕円形の穴が確認され、鉄製品の出土が目立ち、カマド煙道が竪穴外にほとんど伸びない。

遺物観察表の出土位置の欄の住居に続く“①～④”は、住居を四等分した区画を意味し、土層ベルトを基準に、北西区画が①、北東が②、南西が③、南東が④となる。なお、柱穴は、現地では“柱穴１”のように呼称して、遺物観察表でも同様に記しているが、遺物図版（第11～16図）では煩雑さを避けるため、“①”～のように変更してしまった。どちらか判断に迷うような場合は少ないと思う

が、不必要な混乱の種を蒔いてしまったことも確かであり、お詫び申し上げる次第である。出土遺物に番号を振って示す場合は、遺物の種類ごとに分けて連番とし、土器の場合はｐ、石器・石製品の場合はｓ、鉄製品の場合はｆを番号の前に付している。

ＲＡ052住居跡（第11～14、43図、写真図版６～12）

＜位置・検出状況＞東区東端、－２Ｉ23ｆ～25ｈグリッド。重機で雨裂下Ⅳ層上面まで剥いだところでうっすら黒褐色土の輪郭が見え、ジョレンで明瞭に検出。一部カマドの煙道は、東側の調査範囲外（道路）に続く。雨裂跡＝クロボク土が周囲より厚く堆積する場所の底付近斜面に掘りこまれているため、おそらく水に浸かりやすいせいで、床面の所々に酸化鉄が付着し、床下のⅣ層は白色粘土化していた部分がある。古代遺構密集地の北端に相当し、この密集地は才川ほかの湿地を挟んで、細谷地、向中野館遺跡の古代遺構密集地に連続する（第60図）。**＜重複関係＞**東側の調査範囲外は不明。調査範囲内では、ＲＤ204という陥し穴状遺構と重複し、本遺構の方が新しい。北側の重複していない部分によって、検出面から陥し穴状遺構との重複に気づいていたが、覆土が比較的似ていて（陥し穴覆土再堆積によるものと思われる）、住居の壁も不明瞭であったため、住居を精査する際に陥し穴も大幅に掘ってしまい、西壁はほぼなくなってしまった（第12図東西断面参照）。さらに、カマド精査の際にも、頭に描いていたよりもカマド使用面が床面より非常に高かったため、陥し穴を大幅に掘り下げることになってしまった。検出面に見られた南西隅の煙道状の黒いシミは、半截して攪乱であることを確認した。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、Ａ´側の上場、完掘時掘りすぎて断面図と平面図合わない。Ｃ－Ｃ´断面、半裁の際壁掘り広がり、またＣ´側焼土範囲合わない。Ｄ－Ｄ´断面、断面実測時糸の真下を測っていなかったらしく、土器の位置など若干ずれる。Ｅ－Ｅ´断面も同様だが、トレンチの位置が真っすぐでないこともあって、厳密でない。Ｆ－Ｆ´断面、焼土範囲Ｆ´側合わない。Ｇ－Ｇ´断面、平面実測後崩れ、トンネル入口の上場、焼土Ｇ側範囲合わない。Ｉ－Ｉ´断面、調査範囲外に続きコンクリートのためセクションピンを適切に刺せなかったため、セクションポイント合わず、上場も崩れたのか合わない。**＜平面形・規模＞**東壁がはっきりしないが、煙道を除くと約4.2×3.8ｍの隅丸方形か。**＜覆土＞**単層に近く、クロボク土に黄褐色土が混じる土で、地点によって含有状態が異なり細分できそうにも思われるが、できなかった。平面図に示したように、南壁と東壁に焼土が検出された。いずれも壁から住居中央に向かって概ね下がるように形成されている。東壁の断ち割り断面は図化したが、南壁のそれは焼土が面として広がらず割愛した（厚さ床から約10㎝）。南壁焼土の壁際は検出面に露出していた。いずれも１層が焼けているようである。**＜床面・掘り方・貼床＞**床面中央はⅣ層をそのまま床としているようだが、その周囲は掘り方を持つ（写真図版12）。そのまま床としていた部分は硬く締まるが、使用時にそうだったかどうかは定かでない。カマドの数から推測されるように多時期にわたって竪穴が使用されたためか、掘り方を埋める土（５～９層）は貼床然としておらず黒さが目立ち（Ⅳ層ブロックは含まれているが）、周囲の多くは掘りすぎてしまった（覆土断面参照）。掘り方は、小穴が連続する一般的なもので、明確な溝状にはならない。Ⅳ層が白色化（粘土化）し酸化鉄が認められる。一部は床面より10㎝以上下がり、Ⅴ（砂）層となる。カマド１とカマド２の手前は特に顕著に窪み、水が溜まっていたせいか明瞭に白色粘土化し、周囲は酸化鉄に縁取られている。掘り方から内黒の坏が出土している（ｐ.42、44）。ｐ.44は、カマド２手前の窪みから出土しているが残りが悪い。ｐ.42は、比較的残りは良いが、カマド１の窪みの南横から出土し窪みとは無関係で（カマド断面図に記録）、さらに別の土器片や礫も出土している（詳細は出土状況の項参照）。**＜壁・壁溝＞**壁は、上面は通常のⅣ層だが、下に行くにつれ変色し、

検出面から15cmほど下がると酸化鉄が付着する。壁溝は確認できなかった。**＜柱穴＞**検出できなかった。床面が黒っぽいので見えないだけなのかと考えていたが、掘り方調査時にも確認できなかった。掘り方精査時に、カマド２と５手前に黒土が認められたが、不整形で根が入っており、攪乱と判断した。

＜カマド＞五つ検出された。カマド２、５は、検出面から煙道が確認できるが、カマド４の検出状況から推測すると、削平されたためと判断され、いずれもくり抜き式と推測される。カマド３、４の煙出底は白色粘土化しているようだが、他はⅣ層中に納まっているようだ。カマド精査に取り掛かるまで四つと思い込んでいたが、精査の結果カマド２の南側にもう一つ別の煙道が存在することがわかった。今、南北土層断面写真と住居平面写真を振り返ると確かに二つ連続しているのが見える。カマド２の煙道は褐色、５の方は黒色と、覆土が明確に異なり、住居壁面では両者は重複せずＵ字形の覆土が隣接するのみだが、壁上では重複しカマド５の覆土の方が新しく見える。その他のカマドは重複していないので新旧関係は不明だが、残存状況から判断すると、カマド１が最も新しいのは間違いない。その他は、いずれもカマド本体は残存していないが、カマド２、５には焚口焼土が検出され、さらにカマド５には袖残存部の可能性のある焼土粒、ブロックが南側に認められた。このことから、カマド３、４（新旧不明）→カマド２→カマド５→カマド１の順に新しい可能性が高い。以下、新しい順に記載していく。なお、検出時に住居南西隅にも煙道状の黒土が認められ、全体が不整形で輪郭がシャープであることや覆土の黒味が強いことなどから攪乱であろうと予測していたが、半截した結果非常に浅く、その通りであるとわかった。

カマド１は、西壁中央にあり、くり抜き式である。ＲＤ204陥し穴状遺構覆土を掘り込んで作られているため、この部分の住居壁がⅣ層でなく、さらにカマド手前の床が黒土で不明瞭なこともあり、床・壁とカマド崩土との境がはっきりせず、精査時にかなり掘りすぎてしまった（住居掘り方底まで）。既に竪穴を掘り下げる際カマド手前を掘りすぎていたため、焚口焼土の高さを低く想定していたためである。かなり掘り下げてから小さく淡い焼土（カマド断面５層）を認め、ここが火床面だとわかったのである。住居掘り方黒土上面に焼土があり、その範囲が狭かったため確認に時間をとってしまった。そのため、使用面の状況は想定しづらいものになってしまったが、現地性焼土６、22層の存在から、ここが煙道天井であることがわかる。なお、６層西側で削平により煙道が露出してしまった箇所では、煙道と地山Ⅳ層との境の北側の方で赤く焼けているのが見て取れた。この部分の煙道覆土はＲＤ204のそれとほとんど区別できない。焚口から煙出に向かって煙道底を記載すると、まず住居壁までほぼ水平に続き、カマド壁で階段状に上がり、そこから緩やかに下がるがほぼ水平に近い。煙出で再び階段状に下がるため、煙道は柱穴状を呈す。煙出が住居外に出る壁付近には完形厚手の土師器坏が伏せて置かれていたようである。断面実測図では、覆土中に浮いた状態で描かれているが、これはすぐ近くに東西ベルトがあったこと等により土器下を十分に観察できなかったためであり、真実を伝えていない可能性が高い。ただし、土器は火を受けていない。カマド本体は、土器破片や礫片を芯とし赤土（Ⅳ層）を貼って作っている（カマド２層）。その天井が崩落して溜まった土がカマド１層である。煙道より北側の袖残存部には、細かい焼土ブロックの集合が見られる。煙道覆土は、黒さが目立つが（カマド17、18、21層）、カマド４、19、20層は黒土に焼土粒が顕著で、18層はⅣ層再堆積土を顕著に含み、15、16層にもⅣ層粒子、ブロックが見られる。煙出では、検出面や覆土上部（17、19、20層）から礫が出土し、覆土中位と下部から土器片が出土している（ｐ.39～41）。

カマド５は、東壁北寄りに作られ、東側の調査範囲外に続き、煙出まで調査できなかった。また、削平のためか、検出面まで煙道覆土が露出している。上述のように、カマド２と重複し、検出面での

状況写真ではカマド５の方が新しいように見えるが、実際にはカマド２の精査時に重複に気づいたので厳密ではない。南側の袖が想定される位置には焼土粒やブロックから成る土山が認められ、袖の残りの可能性がある。焚口と想定される位置には、酸化鉄が大きく広がるばかりで焼土は認められなかった。しかし、酸化鉄の広がりが認められたのは、住居内でここだけだったので、焼土に酸化鉄が付着して変色した可能性もなくはない。煙道は、底がほぼ平らに竪穴外に出て全く焼けておらず、腑に落ちないが、天井は調査区境で確認され急傾斜に下がり、その部分は赤く焼けている。煙道覆土は黒さが際立ち、1層は真っ黒である。２～４層にはⅣ層ブロックを含む。

カマド２も、東壁北寄りにあり、東側の調査範囲外に続くため煙出まで調査できず、検出面まで煙道覆土が露出していた。上述のように、カマド５と重複し、検出面での覆土の状況から、本カマドの方が古いと判断された。焚口焼土が検出されている（カマド２層）。しかし、ここから竪穴壁まではカマドの残影を認めることはできず、竪穴壁から煙道が急傾斜に調査区外に下がっていく。煙道覆土は、焼土粒、ブロックを顕著に含む特徴的な赤黒い（褐色）土で、カマド５覆土との違いが際立つ。検出面に露出した煙道の地山Ⅳ層との北側の境は赤く焼けている。袖と思しき位置の掘り方からは窪みが検出され（底は砂層最上部）土器が出土したが（p.44）、明瞭な掘り込みを呈しておらず掘り方の一部と見ることもできたので窪みの図は取らなかった。

カマド３は、東壁南端付近にあり、煙出はＲＧ039溝跡に近い。カマド袖や焚口焼土は検出されなかった。くり抜き式であるが、竪穴壁付近は、おそらく削平により、煙道が検出面に露出している。煙道は、竪穴壁から煙出に向かって急傾斜で下がり、そのせいか、煙道天井と煙出東側中位は赤く焼けていた。覆土は５層以外互いによく似ており、黒褐色土にⅣ層粒子、ブロックを含み、その含有量の差でしかなく、１層は粒子多く、２層は黄色、３層は黒さが目立つ。煙出底の５層は、真っ黒なネトネトした土で、その下の地山は白色粘土化している。

カマド４は、南壁東寄りにあり、カマド袖や焚口焼土は検出されなかった。くり抜き式であるが、削平により大部分が検出面に露出している。煙道は比較的急傾斜で煙出に向かうが、赤く焼けている部分は認められなった。煙出底は白色粘土化していたようである。覆土は、４層がⅣ層汚れ再堆積土であるほかは、一般的なⅣ層粒子、ブロックを含む黒～黒褐色土で、３層には顕著に礫が含まれる（検出面に露出しているものも３層と推測）。検出面に露出している礫のうち北東端のものは赤くボロボロに焼けているが、下の土の締まりが悪く、改変を受けているか攪乱の可能性もある。

＜その他の付属施設＞検出されなかった。

＜遺物＞（出土状況）出土量はそれほど多く見えなかったが、今回の調査ではＲＡ055住居跡を凌ぐ遺構最多の土器が出土した。ほとんどが、カマド２、５手前（p.２～８）、カマド１上～手前（p.９～15？）、カマド１袖内（p.16？～38）、カマド１煙出内（p.39～41）から出土している。石器・石製品は、これらとあまり関係ない場所から出土したが（s.１、２）、磨石状のもの（s.３、４）は、掘り方から土器（p.42、43）とともに出土した。p.44も掘り方から出土し、カマド２手前（袖下？）の窪みから出土し、カマド祭祀の可能性を窺わせるが、土器は破片であり、あまり説得力がない。

以下、個別にもう少し詳しく出土状況について述べる。現地でp.１を振ったものが土器ではなく石であったため別の土器にその番号を当てたはずが、意思疎通がうまくいかずp.２を重複して振ってしまったため、p.１がなくp.２が二つある。お詫び申し上げる次第である。南側の比較的大きな破片の方が本来のp.２で、北側の方をp.１としたかったのである。南p.２は、１層から出土し、床上18～15㎝で南西から北東に若干傾斜している。p.３は、土層ベルト中にあったもので１層最下部から出土。p.４～７は６層から出土していると思われる（４は内面を上に向けて出土）。p.７、８は、壁から床

中央に向かって傾斜し、７は外面を上に向け、８は６層上面から出土している。p.９～12も掘り方から出土しているようで、いずれも内面を上に向け、10と11は、掘り方窪みの壁に貼りつくような状態で出土（写真図版７上から二段目右）。p.13～15はカマド１崩土上面から出土しているようで、p.13は外面を上にし口縁を南に向けて出土し、p.14は南西から北東へ傾斜して出土している。p.15は概ね上部を西に下部を東に向け押しつぶされたような状態で出土した。p.16～37は、カマド袖中から出土したということで詳細な記録は取らなかった（写真図版９最下段左）。p.38は、カマド１の項で述べたように、完形で伏せた状態で煙道から出土しているようである。p.39～41は煙出から出土し、39はほぼ水平に出土しカマド17層最下部からの出土か。40は内面を上に向け底から６～４㎝浮いており僅かに西から東に傾斜して21層から出土した。41はほぼ底に貼りついているが21層最下部からの出土か。掘り方精査時に出土したp.42～44のうち、42と43は隣接して出土し、さらにs.３、４とも一緒に出土している。42は、内黒の坏で内面底を上に向け掘り方底から２～４㎝浮き僅かに北から南に傾斜して出土。43は二つの破片から成り、北側の破片（甕？）が上から出土し内面を上に向け、南側の破片（坏？）は外面を上に向けて出土し、底から５～６㎝浮いて僅かに北から南に傾斜して出土した（写真図版９最下段右）。44は、破片であるが、カマド２の袖下？の窪み上部から出土した（写真図版７最下段右）。内黒の坏で内面底を上に向け、ほぼ座っているような状態で出土した。この土器の下の土は、42と43の下の土とほぼ同じと考えて良さそうだが、より淡い。

s.１は砥石状のもので、１層から出土。s.２は、石材だが、床面から５㎝浮いて出土し、５層からの出土か（写真図版７最上段右）。s.３、４は、掘り方からp.42、43と一緒に出土し（写真図版９最下段右）、s.３はp.42の下から座るような状態で出土し、s.４には赤いベンガラ状の付着物が認められた。

（遺物）土器7,153ｇ（須恵器含む）（第43図１～15、１、２掲載）、砥石類（写真図版50の１、３～７）、勾玉石材？（写真図版50の２）出土。

＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀初頭か。

ＲＡ053住居跡（第14～15、44図、写真図版13～14）

＜位置・検出状況＞南区中央より東寄り、－１Ｇ１ｉ～２ｋグリッド。ＲＡ054住居跡北側に隣接し、削平されているためかⅣ層検出面黒褐色土で明瞭に検出。全体に耕作時（～現代）の植栽痕（黒い小穴）が多数認められる。**＜重複＞**ないようである。**＜図・精査状況＞**Ｂ－Ｂ´断面、Ｂ側上場完掘時掘りすぎて、断面図と平面図合わない。Ｄ－Ｄ´断面、Ｄ´の上場、完掘時掘りすぎて、合わない。**＜平面形・規模＞**約1.82×1.58ｍ程度のひしゃげた隅丸方形か。**＜覆土＞**削平されて浅い割に複雑であるのは、カマド起源の土があるためで（２、３層）、２層は炭化物を多く含み、３層は点圧したような土である。１＝４層に見えるが、そうすると辻褄が合わなくなる。１層と５層が基本的な竪穴の覆土、５層は壁際三角土で、Ⅳ層汚れ再堆積土。**＜床面・掘り方・貼床＞**Ⅳ層を床とし、トレンチを入れたが掘り方は確認できなかった。ちなみに床面より５㎝下がると砂利層になる。**〈壁・壁溝〉**Ⅳ層を壁とする。壁溝は確認できない。**＜柱穴＞**床面をクリーニングしたが確認できなかった。**＜カマド＞**東壁南寄りに一つ（カマド２）、南壁南東隅近くに一つ（カマド１）検出された。南壁のものに支脚らしき土器の残存が認められたので、こちらを新しいと判断した。カマド１の煙道は、壁から離れた地点から始まり煙出に続く。くり抜き式が削平されたため、このような形で検出されたのだと思われるが、煙道の底は住居壁付近では床面より比較的高い位置にあったことがわかる。そうすると、床よりやや高い位置から出土した支脚らしき土器にも首肯できる。この土器は、土器の底部を逆さまにして据えられたらしく、ほぼ水平である。火を受けていて赤くボロボロであり、住居覆土４

層下部から出土しているらしい。ただし、焚口焼土やカマド袖などは確認されず、煙道にも火を受けた痕跡は認められない。土器の下のカマド覆土５層は焼土のようにも思えるが、チリヂリで面的に広がらない。煙道覆土は、２層がⅣ層ブロックを多く含んで特徴的な以外は、皆黒い。３層は根カクラン状である。

カマド２は、煙道しか残っていない。カマド１と同様、僅かであるが住居壁との間に煙道の断絶が見られ（平面図では開通させてしまっているが断面図には記録）、くり抜き式が削平されたとわかる。煙道に火を受けた痕跡は認められず、覆土は１層が顕著に黒く、２、３層は混土で、２層は３層が根によるカクランを受けたように霜降り状態を呈す。

＜その他の付属施設＞検出されなかった。

＜遺物＞（出土状況）出土量は多くない。p.１は1層下部、p.２は４層中部、p.４はカマド支脚？で４層下部？、p.３は土層ベルトから出土し記録が残っていない。**（遺物）**土器924ｇ（第44図16、17掲載）、焼粘土塊（写真図版49の１）出土。**＜時期＞**出土遺物から９世紀後半～10世紀初頭か。

ＲＡ054住居跡（第14～15、44図、写真図版15～16）

＜位置・検出状況＞南区中央より東寄り、－１Ｇ３ｉ～４ｋグリッド。ＲＡ053住居跡南側に隣接。南側は削平により残っていない。重機で表土を剥いだ直後雨の日（10月６日）にⅣ層検出面で土器と焼土を発見したが、攪乱や削平のせいで、ざっとジョレンをかけても覆土（黒褐色土）がちりぢりで住居であると確信は持てず、攪乱を受けた際住居覆土がたまたま地山に埋まりこんだのではないかとの思いが捨てきれなかった。後日再度ジョレンを丁寧にかけたら、それらしく見えたので土層ベルトをかけて精査を開始したが、床がそれらしくなく根によってボソボソで、覆土も根カクランとあまり変わらないように見えた。悩んでいる最中に北東隅に隣接して焼土粒を多く含む黒褐色の円形のシミが目に留まった。これが煙出ならば住居に間違いないということになり、半裁してみた。正直それでも確信が持てなかったが、底が住居反対側に向かって下がっていることから煙道に間違いないだろうということで住居と認定した。全体に耕作時（～現代）の植栽痕（黒い小穴）が多数認められる。**＜重複関係＞**南半に柱穴様のカクランが三つある。**＜図・精査状況＞**Ｂ－Ｂ´断面、Ｂ´側の上場、断面実測時測り間違いか、平面図と合わない。Ｃ－Ｃ´断面、礫の多い所にセクションピン刺したせいか、セクションポイント合わない。**＜平面形・規模＞**南半が削平されているので不明だが、3.3×3.3m程度の隅丸方形か。**＜覆土＞**削平で覆土がほとんど残っておらず単層に近い。Ⅳ層粒子の混じる黒褐色土層が基本だが（２層）、カマド付近だけ少し異なる（１層）。カマド近くの床が汚れているようだが、汚れⅣ層再堆積土の可能性もある（３層）。**＜床面・掘り方・貼床＞**北半はⅣ層を床とし、南半は削平されているためか一部礫が露出している。煙出底は砂礫層であるが、関東地方のソフトローム層に近い。トレンチを入れたが、根穴のみで掘り方は確認できなかった。床面より５㎝下げると砂礫（Ⅴ）層になる。**＜壁・壁溝＞**壁は削平され、ほとんど残っていないが、Ⅳ層である。壁溝は確認できなかった。**＜柱穴＞**床面をクリーニングしたが、確認できなかった。**＜カマド＞**東壁北端近くに一つ検出された。検出状況は上に記したとおりである。くり抜き式で、削平により煙道はほとんど残っておらず、ほぼ煙出と焚口焼土のみの検出である。焚口焼土は少し面的に広がるところもあるが、基本的にちりぢりである。煙道底は、ＲＡ053住居跡同様、竪穴壁付近では床面よりやや高い位置から始まっていて、念のためトレンチも入れてみたが（写真）トンネルは確認できなかった。煙道に火を受けて赤くなっている所はない。煙道覆土は、認定前にトレンチを入れたこともあって（上述）、精査時に間違って完掘されてしまい、不明である。**＜その他の付属施設＞**検出されなかった。

＜遺物＞（出土状況）出土量は多くない。p.２は床直、p.３は壁から住居中央に向かって傾斜、p.４は甕で、床直、外面を上に向け横たわった状態で出土。**（遺物）**土器1,121ｇ出土。（第44図18～22掲載）出土。**＜時期＞**出土遺物から９世紀後半～10世紀初頭か

ＲＡ055住居跡（第16～17、44～45図、写真図版17～19）

＜位置・検出状況＞西区中央南寄り、－２Ｆ18ｄ～21ｆグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出済みで（１号住居跡）、カマドの位置も特定されていたが、東壁のそれは、煙出が実態と異なり、南壁のそれは、半裁した結果風倒木であることがわかった。**＜重複関係＞**南西隅（上述）、南東隅に古い風倒木痕あり、いずれよりも本遺構の方が新しい。南東隅の風倒木中に煙出があって、カマドの精査を悩ました（後述）。柱穴の数と位置から建て替えが行われている可能性もあるが、不明である。壁等に現代の耕作痕が認められるが、それほどひどくない。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、土坑は床面掃除後に見つけたので断面図に入っていない。Ｃ－Ｃ´断面、焼土範囲、平面と断面の見た目の違いで、合わない。Ｄ－Ｄ´断面、Ｄ´側竪穴上、下場、測り間違いで合わない（断面図は1/10で作成したため現地で照合していない）。Ｅ－Ｅ´断面、焚口焼土のＥ´側の範囲、合わない（断面図は1/10で作成したため現地で照合していない）。竪穴外の焼土の範囲淡くて断面に見えず、合わない。関東のそれのように煙道が短く登っていて、風倒木痕の上に煙道があったこともあり、煙道の全容把握に手間取った。また、８月22日前後に続いた大雨で水がたまってシートが浮いてしまい、記録するために残していた土器の一部が動いてしまった。**＜平面形・規模＞**約5.28×5.2ｍのひしゃげた隅丸方形か。**＜覆土＞**概ね三層に大別され、上層の黒土（１層）、下層の黒～暗褐色土（２～３層）、壁際三角土（４～５層）で、４層の上面には灰白色火山灰が認められた。**＜床面・掘り方・貼床＞**Ⅳ層を床とするようだが、一部で礫が露出し（Ⅳ層下部）、カマド前面はⅤ（砂礫）層。精査の際床面付近の土が移植ゴテでパカパカ剥がれたので貼床をしているのかと思ったが、Ⅳ層とⅣ層下部の性質の違いによるものと判断した。実際、土層ベルトに沿ってトレンチを入れてみたが、多少の凹凸に黒土が入っていても、掘り方と言えるものは確認できなかった。**＜壁・壁溝＞**比較的垂直に近く立ち上がる。南西隅、南東隅は風倒木痕の黒土。北西隅は、なぜか検出面－５㎝くらいまで砂利（Ⅴ層）が上がっているが、他は砂質Ⅳ層。壁溝は確認できなかった。

＜柱穴＞最初の床面掃除で①～⑤の五個、実測して土器を取り上げた後に⑦、⑧の二個確認した。⑦は土器柱除去後に明瞭に黒く床面に検出されたが、他は、床面がⅣ層下部で礫が露出しており、柱穴覆土もその再堆積土が多かったため、わかりにくかった。検出位置から考えると、カマドの南側にも柱穴があってしかるべきである。しかし、何回も検出を試み、それらしいものを全て裁ち割ったが、床面が砂礫（Ⅴ）層であることもあって、柱穴を確認することはできなかった。また、①と⑧、さらに③～⑤の関係から、建て替えの可能性も窺えるが、裏付けは得られなかった。

個々の柱穴の特徴と覆土。①は、断面記載時には北側の壁が垂直に近いのに対し、南側は上に向かって開くように傾斜していた。単層で、10YR3/2黒褐色シルト、上面に炭化物が見られ大きな礫含む。②の上層に似るが、より淡く茶色っぽい。②は、①とは逆に北側の壁が開くように傾斜し、覆土は二層に分かれ、上下層の境はほぼ水平である。上層は深さ５㎝程度、10YR2/2黒褐色シルト、炭化物含む。下層は10YR3/1黒褐色シルト、礫、砂利多い。③は、半截時には断面逆台形で深さ13㎝くらいだったのが、完掘時には52㎝にもなっていて、砂礫層であることによる、おそらく掘りすぎと思う。半截時には二層に分かれ、上下層の境はほぼ水平であり、両方とも②と同じ覆土で、上層は深さ５㎝。④の断面形は①と同様、二層に分かれ、やはり境は水平であるが、下層はややあやしく、柱

穴ではないかも知れない。上層は深さ４㎝で、10YR2/2黒褐色シルト、もろく、炭化物含み、上面から土器出土。②、③の上層に似るが、より暗くもろい。下層は、10YR3/2黒褐色・砂質シルト、非常にもろく、攪乱か。礫、砂利多い。⑤は浅く周溝状である。半截時には深さ８㎝程度の浅い逆台形状だったものが、完掘時には23㎝にもなっていて、③と同様の理由による掘りすぎと思う。覆土は、10YR3/1黒褐色・砂質シルト、砂利、Ⅳ層粒子多い。⑥は柱穴とは思われず、次々項で説明する。⑦は、断面形が逆三角形に近い弧状を呈し、覆土は上下二層に分かれ、その境も弧状を呈す。上層は、④の上層によく似た土で、半截時には④は完掘されていて比較ができなかったので別物としたが、同じなのかもしれない。10YR3/1黒褐色シルト、炭化物、灰、土器多い。下層は10YR3/2黒褐色・砂質シルト、砂利（Ⅴ層）汚れ再堆積。⑧は若干壁を削っており、覆土から埋め戻しているらしいと判断される。断面形は丸みを帯びた逆台形で、覆土は単層、10YR3/2黒褐色・砂、黒土シルトブロック混じる汚れⅤ層（砂利）再堆積。

＜カマド＞東壁南端に一つ。既に前年度に推測され、カマド袖崩土が確かに検出された。しかし、煙出の位置は、丁度古い風倒木痕と重なることもあって、推測通りではなかった。一般的な煙出を想定していたこともあって、何度クリーニングを繰り返しても見つけられず、最終的に想定よりずっと竪穴に近く、本当に焼けているか確信が持てないようなうっすらと赤みのある土を煙出と考えた（第16図下左図）。しかし、その後壁に残っていた黒土のうち（ほとんどが植栽痕と見られる）、焚口焼土正面壁のものの一部が比較的強く赤く焼けていたので（第16図下右図の壁左側の丸い焼土）、半裁してみたところ、底が風倒木痕中なので明瞭に赤く焼けていないが、うっすらと赤かったので、これが煙道であると判断して記録した（第16図下右図）。したがって、第16図下左図の竪穴上焼土は煙出ではなく（煙道最上部ではあるが）、本遺構のカマド煙道は、煙出を持たず、竪穴壁を斜めに削り、そのままダラダラと登って竪穴外に出るという構造であった可能性が高い。なお、竪穴壁に比較的明瞭に形成された焼土（第16図下右図の壁左側の丸い焼土）の手前焚口側には、拳大より小さい赤いチャート礫があったが、周囲に黒土があり、それが特に埋設されたもののようには見えなかったので、カマドとは直接関係ないものとして取り上げてしまった。

カマド袖は、Ⅳ層下部～Ⅴ層上に礫（一部土器小片？）を芯として砂質Ⅳ層土を貼って作っていたようだ。焚口焼土は、その貼った砂質Ⅳ層上に形成されているようである。第16図下左図に掲載した礫は芯として使われていたようで、南東端の大きめの礫は赤く火を受けている。調査時には、袖下を、後述の穴を掘る際に一緒に削平しているのではないかと思っていたが、今写真を見ると、それほど周囲の床面と変わりなく、特に改変していないと考えたほうが良さそうである。

カマド袖下南北端壁際に一つずつ小穴を確認した（⑨、⑩）。周囲のカマド下の土とあまり変わらず、単なる落ち込みと思っていたので、断面は確認できなかった。自然堆積のⅤ層中にしばしば見られる黒砂に近かったが、土器が混じっていたので掘る必要があることだけはわかった。覆土は、上面の土器の周囲が10YR4/2灰黄褐色土・シルト、砂利混じりで、その下は黒っぽい砂利を基本とする。⑨は検出面から、⑩は検出面－10㎝程度の場所から土器が出土した。⑩から出土したp.21は、出土状況（後述）からカマド祭祀の可能性も窺わせるが、土器は欠損している。

＜その他の付属施設＞竪穴の床面ほぼ中央に焼土が検出され、その脇に浅い楕円形の穴が確認された。焼土は、燃焼面がⅤ層のため不明瞭である。土坑覆土は、壁際（下層）と中央（上層）で分かれ、上層は柱穴②、③上層と同じで、下層は10YR4/2灰黄褐色・砂質シルト、床面が汚れただけのような土だが、炭化物比較的多い。欠損した安山岩砥石や鉄製品が出土している。鍛冶関係の施設かと想像されるが、鍛造剥片等の明瞭な証拠は見つからなかった。

＜遺物＞（出土状況）土器の出土はそれほど多くないが、鉄製品が目立つ。カマド周辺～北側（竪穴区画②、④）からの出土が多く、その他では、竪穴区画③もやや多めだが、基本的には壁際から出土した程度である。出土位置を記録したものでは、p.１～９、f.１～３（２は土坑上出土でもある）は、竪穴覆土～床面、s.１は中央土坑覆土、p.10～19はカマド袖崩落土内、p.20、21はカマド“掘り方”からの出土である。なお、p.９は、竪穴が雨水に浸かった後位置が動いてしまったようなので図に記録しなかったが、p.３と柱穴③の間から出土した。また、北西隅付近・床直（５層？）からもやや大きめの土器破片が出土したが、雨水に浸かった後バラバラになってしまった。

以下、個別にもう少し詳しく出土状況について述べる。まず土器から。p.１は、壁から中央に向かって傾斜し２層から出土しているようである。p.２は、床面から１㎝の床直上で、粉々の破片がほぼ水平に大量に出土している（写真図版19上から二段目右）。４層か２層の出土で、３層ではないと思う。p.３は、底を上に向け壁から中央に向かって傾斜して４層から出土している（写真図版19上から二段目左）。p.４は、底を上にし壁にへばりつくような状態で壁から中央に向かって傾斜して５層から出土。p.５は、カマド崩落土上で壁方向から中央に向かってやや傾斜して出土した（２層？）。p.６は、床面から水平に出土。p.７は、床にはまり込むような状態で出土しp.１と同一個体か（４層の出土？）。p.８は、床直上からほぼ水平に出土（２層？）。p.９は上述のとおり。p.10～19はカマド崩落土内からの出土なので詳細な記録はとらなかったが、いずれも焚口焼土周囲（特に北側）から出土した。p.10は甕の底で内面を上に向けて出土したが北側は袖の土（袖石が埋まっており、動いていない？）中に埋まっている。p.11は甕の口縁部で、外面を上にし口縁を北側に向けて横倒しで出土。p.13は、甕の口縁部を上に向けて出土。p.14は二片に分かれ、北側の胴部破片の下に南側の破片がある。北側の破片は外面を上に向け、南側のそれは内面を上に向けている。p.15も小片ながら二片に分かれている。p.20は、カマド穴の上縁付近から内面を上に向けほぼ水平に出土。p.20は、もう一つのカマド穴検出面より10㎝くらい下がったところから正位に内面底を上に向けて穴中央から縁に向かってやや傾斜して出土した。

次に鉄製品。f.１は鉄滓で、床面から20㎝ほどの高さから僅かに壁から中央に傾斜して出土（１層）。f.２は、竪穴中央の穴検出面より上で竪穴中央から壁に向かって僅かに傾斜して出土（2層）。f.３は、やや離れて出土した二地点のものを棒状で同じものの可能性があったため一括しているが、ほぼ床面から転がったような状態でほぼ水平に出土。

以上のほか、炭化材がp.８とf.３の近くから出土したが、これらよりずっと高い位置にある（２層？）。雨水に浸かった後ちりぢりになってしまい取り上げられなかった（未鑑定）。

（遺物）土器5,882ｇ（須恵器含む）（第44図23～第45図44、３掲載）、鉄製品（第45図１～８、13）、砥石類（写真図版51の８～12）出土。**＜時期・所見＞**出土遺物と火山灰から10世紀初頭前後か。鉄製品の出土が目立ち、住居中央の焼土や土坑から鍛冶関係の施設を想像させるが、鍛造剥片等の裏付けはない。

３ （竪穴）住居状遺構（第18～20、46図、写真図版27～30）

竪穴住居跡に似るがカマドを持たない遺構である。“竪穴住居跡状遺構”で、盛岡市教育委員会では「竪穴状遺構」と呼んでいる。４棟検出されたが、東区に一つ、南区に一つ、西区に二つと調査範囲内に点々と検出されている。出土遺物等から、いずれも９世紀後半～10世紀初頭と思われる。３×３ｍ程度のものが多いが、ＲＥ015だけ大きく、不整形であり（ＲＥ006も不整形？）、ＲＥ006で今

回調査したのは第８・９次調査の未了部分である。なお、“①～④”は、竪穴住居跡と同じ区分で、出土遺物に番号を振って示す場合は遺物の種類ごとに分けて連番としているが、これも同じなので詳細は竪穴住居跡冒頭参照。

ＲＥ006住居状遺構（第18図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞東区中央南端、－１Ｈ10～11ｖグリッド。本来は全てが第８・９次調査区Ｅ区（当センター報告書第494集＝2007年発行、本報告書第Ⅱ章参照）の範囲内にあるのだが、今回の調査にあたり調査区境が不明瞭であったため第８・９次調査区の端をクリーニングして捜したところ、北西隅が調査されずに残っているのが確認されたため、調査したものである。周囲の既調査区は砂利で埋め戻されていたが、ここだけⅣ層が残り明瞭な黒褐色土で確認。輪郭もそれらしくボンヤリしていて最近のカクランでないことは明確であった。**＜重複関係＞**前回調査区ではＲＥ007住居状遺構と重複し、本以降の方が新しい。今回の調査区では遺構との重複はないが、黒い小穴状の耕作痕（カクラン）が多数見られ、精査に支障を来たした。**＜図・精査状況＞**上場完掘時掘り広がって、平面図と断面図合わない。耕作痕により（上述）、壁がわかりづらく特に南半を掘りすぎてしまい、前回調査範囲との齟齬を生じてしまった。**＜平面形・規模＞**前回調査範囲と合わせると、約3.2×2.8ｍの不整形隅丸方形か。**＜覆土＞**Ⅳ層ブロックを含む黒褐色砂質シルトで、単層に近いが地点によって若干異なる。前回もほぼ同様である。**＜床面・掘り方・貼床＞**砂質Ⅳ層最下部を床とする。底を断ち割っても掘り方は確認できず、すぐ砂利（Ⅴ）層が露出した。**＜壁・壁溝＞**壁は砂質Ⅳ層で、壁溝は確認されなかった（前回も）。**＜柱穴＞**検出したが、それらしいものは確認できなかった。前回調査では北東隅に１個確認されている（第18図上右図）。pp６は伴わないらしい。**＜その他の付属施設＞**検出されなかった（前回も）。**＜遺物＞**調査した面積にしては比較的多くの土器が出土したが、掲載基準を満たすものはなかったらしい。土師器206ｇ、須恵器42ｇ出土。前回調査では、坏と甕の破片が二点掲載されている。**＜時期＞**出土遺物と前回調査の所見から、９世紀後半～10世紀初頭か。

ＲＥ014住居状遺構（第18、46図、写真図版27～28）

＜位置・検出状況＞南区東寄り、－１Ｇ６ｑ～７ｓグリッド。重機で剥いだ時は全体がゴミ穴だと思っていたが、ゴミ穴の北東側をジョレンで検出したら土器がまとまって出てきて（p.３）、覆土もそれらしかったので、土層ベルトを設定して掘り始めた。遺構であると確信したが、周囲も含め焼土が検出されなかったので、住居状遺構とした。**＜重複関係＞**遺構との重複はない。南西側はゴミ穴に壊され、さらにその南西側には住宅の基礎がある。このゴミ穴は謎が多い。上層はゴミ混じりの砂利で埋まっているのだが下部には土のう袋が入れられてあり、範囲も、南端は別としてほぼ住居状遺構の範囲しか掘っていないのである。このことから、ゴミ穴ではなく、住居状遺構の南西部を発掘調査した後埋め戻したのではないかと推測されるが、以前調査された記録もなく、不明である。ただし、床面より下まで掘られている。また、黒い小穴の稲株痕が多く見られる。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、完掘時掘り広がって全て平面図と断面図合わない。Ｂ－Ｂ´断面、上場完掘時掘り広がって合わない。北半（Ｂ－Ｂ´ラインより北）は壁を全体的に掘りすぎている。**＜平面形・規模＞**カクラン範囲も含めて推測すると、3.1×3.1ｍ程度の不整隅丸方形か。**＜覆土＞**ほぼ単層で、Ⅳ層粒子混じる黒褐色土である。**＜床面・掘り方・貼床＞**砂質Ⅳ層を床とする。ＲＡ053、054住居跡等より、より床面らしく汚れているが（稲株痕を差し引いても）、トレンチを入れても掘り方は確認できなかった（礫も露出しなかった）。p.２、３西側の床面が踏み固められたような状態で、床面付近に８㎝程度

の厚さで霜降り状の覆土が認められたが、掘り方かどうか確信は持てなかった。**＜壁・壁溝＞**壁は砂質Ⅳ層だが、不明瞭である。壁溝は検出されなかった。**＜柱穴・その他の付属施設＞**床面で、北西隅と南東隅に黒い楕円形のシミが認められ、半裁あるいはトレンチを入れたが、カクランであった。**＜遺物＞（出土状況）**出土量はそれほど多くないが、住居状遺構の割には比較的多くの土器が出土した。東壁付近から出土したものが多い。p.１は須恵器甕胴部片で、外面を上にし壁から中央に向かってやや傾斜して出土。p.２、３は、粉々で床面に突き刺さっていたり住居外にもはみ出して出土していたことから、出土位置は原位置を保っていないと判断される。**（遺物）**土器2,174ｇ（須恵器含む）（第46図47～51、４掲載）、砥石類出土（写真図版の52の17）。
＜時期＞出土遺物から、９世紀後半～10世紀初頭か。

ＲＥ015住居状遺構（第19、46図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞西区ほぼ中央、－２Ｆ13ｃ～15ｃグリッド。ＲＧ063溝跡の曲がり角付近にあり、関係あるか。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出。不整形だが、覆土はそれらしく見えた。非常に浅く、削平されている可能性が高い。**＜重複関係＞**遺構との重複はない。耕作時のカクラン多く、特に長芋のそれにより南西隅の壁がわからないような状態であった。**＜図・精査状況＞**耕作時のカクランひどく、浅いこともあって壁がはっきりしなかった。**＜平面形・規模＞**壁が不明瞭なのではっきりしないが、4.3×４ｍ程度のひしゃげた隅丸方形か。**＜覆土＞**浅いこともあって、単層である。当該地域の古代遺構の覆土に一般的なⅣ層粒子、ブロック含む黒褐色（クロボク）土。**＜床面・掘り方・貼床＞**Ⅳ層を床とする。ほぼ平坦ではあるが、僅かにすり鉢状に傾斜する。床は硬く締まりはしないが、比較的それらしい。掘り方は、土層断面に沿って幅20㎝、深さ20㎝のトレンチを入れたが、砂質Ⅳ層が広がるばかりで、確認できなかった。**＜壁・壁溝＞**耕作時の攪乱により、壁は不明瞭。Ⅳ層を壁とする。壁溝は確認できなかった。**＜柱穴＞**床面をクリーニングし、南東隅に一個それらしき窪みを確認したが、半裁した結果耕作時のカクランとわかった。**＜その他の付属施設＞**検出されなかった。**＜遺物＞**出土遺物はほとんどなかった。土師器86ｇ（第46図52掲載）出土。**＜時期＞**覆土と出土遺物から９世紀後半～10世紀初頭か。

ＲＥ016住居状遺構（第20、46図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞西区北端、－３Ｅ19ｓ～20ｕグリッド。遺跡の北端、湿地に続く谷に近い。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出。大きく削平されており、非常に浅く、ほぼ床しか残っていない。ただし、覆土は淡いが、きれいに隅丸方形に広がって見えた。
＜重複関係＞検出面では把握できていなかったが、精査していく過程で重複が判明した。ＲＤ210土坑は、検出面で土器や焼土が認められたので、本遺構のカマドと考えていた。重複付近に二条の長芋の溝状カクランがあるため、なかなかはっきりしなかったが、カクランの除去を含めて周囲をクリーニングしたところ、煙道を確認できず、東壁との関係から、ＲＤ209のような別土坑との重複を想定した方が良いとわかった。新旧関係は、土層断面により、ＲＤ210土坑の方が新しいと判断される。ＲＤ211土坑は、本遺構床面に検出されたもので、黒色土がもやーと広がり自然現象かと思ったが、半裁した結果底が明瞭に確認されたので、土坑と認定した。本遺構の南東隅を超えているので、本遺構の一部（施設等）でなく別土坑の重複と考えて良いと思う。新旧関係を推測する材料はない。なお、この土坑の西側にももやーとしたシミが続くが（ＲＤ211土坑の３層）、不整形で、一部掘ってみたが（サブトレンチ）自然現象と思われた。ＲＤ212土坑は、土層断面にかかっているた

め早くから存在に気づいていたが、覆土、壁～底がそれらしくなく、自然現象の可能性を捨てきれないでいた。その後、ＲＤ211土坑の確認などから土坑と考えた方が良いと思うに至った。土層断面から、土坑の方が新しい。なお、ＲＤ211と212の間に小穴がある。小穴の検出面には礫が載り、覆土は10YR3/1黒褐色・砂であった（ＲＤ212土坑の下層＝10層に非常によく似る）。ただし、端に行くと淡くなり、掘り込んでいるかどうかはっきりしない。報告者が掘ってみると、覆土と底との境がパカパカ剥がれて確かにそれらしい。しかし、底の周囲には、ＲＤ211土坑西側に見られる自然現象の土（ＲＤ211土坑の３層）が広がっており、自然現象の一部の可能性もある。また、図に示したように、遺構にしては異様に角張り、カクランの可能性も捨てきれない。さらに、土層断面（Ｂ－Ｂ´）を見ると、本遺構に伴うように見える。悩んだ挙句、独立した遺構・カクランとせず、本遺構の一部として掲載することにした。本遺構東壁は、二条の長芋のカクランでほぼ全壊、その他にも、黒い小穴（稲株痕）等の耕作痕多い。

＜図・精査状況＞Ａ´側の上場、完掘時掘り広がって合わない。Ｂ－Ｂ´断面、中央小穴、掘り広がって合わない。Ｂ´側の長芋穴、土器も合わない。以上は、調査中の大雨により竪穴が水と泥に浸かり、そのクリーニングに伴って起こった可能性が高い。ほぼ調査開始とともに精査に入ったが（８月２日）、カクランが多く、またカマドと想定していたものがそれでなく、大雨で何度も水に浸かり（谷頭斜面に位置するため）、さらに次々に土坑が検出されたため、時間がかかり、全て終了したのは９月12日であった。

＜平面形・規模＞3.2×2.8m程度の隅丸方形か。**＜覆土＞**ほぼ床しか残っておらず、単層（12層が相当）で、黄褐色土を基本とする床直上の土。これでも掘りすぎの可能性があり、一部床土を含んでいるかも知れない。**＜床面・掘り方・貼床＞**砂質Ⅳ層を床とする。カクランが多く、掘りすぎた可能性もある。硬く締まることもなく、あまり床らしくない。掘り方は確認できなかった。**＜壁・壁溝＞**砂質Ⅳ層を壁とする。非常に浅くて、それらしくなく、掘りすぎの可能性がある。壁溝は検出されなかった。**＜柱穴＞**床中央南寄りに１個、小穴が確認されているが、“重複関係”の項で述べたように、それらしくない。床面をクリーニングしたが、その他にも柱穴らしいものを検出することはできなかった。**＜その他の付属施設＞**検出されなかった。**＜遺物＞**ほとんどない。ＲＥ016で取り上げている僅かなものもほぼ全てＲＤ210土坑に帰属すると判断した。少なくとも、12層から出土した遺物はない。**＜時期＞**形・覆土、今回の調査結果全体から、９世紀後半～10世紀初頭か。

４　掘立柱建物跡・柱列・柱穴群（第22～26、45～46図、写真図版20～26、41）

柱穴状土坑で構成される一群で、掘立柱建物跡３棟、建物は構成できなかったが、柱列が二列並んだ１基、全くランダムな集合体の“柱穴群”が１基検出された。掘立柱建物跡は、平安時代（10世紀初頭前後）１棟（ＲＢ021）、古代～中世１棟（ＲＢ022。平安時代の可能性高いか）、近世後半以降１棟（ＲＢ023）、柱列は中世末～近世、柱穴群は近世後半～現代。平安時代の掘立柱建物跡は、２間×２間で東辺に庇が付き、庇を入れて約５×８ｍ、柱穴覆土に灰白色火山灰を含む。古代～中世のものは、２間×３間で約４×6.2ｍ、梁行中央列の柱穴の規模は小さく浅い。柱列は、柱間２間の柱列が東西方向に二列並び、一列の長さは約５ｍ、柱穴底から銭貨が出土している。

ＲＢ021掘立柱建物跡（第21～22、45図、写真図版20～21）

＜位置・検出状況＞西区中央東寄り、－２Ｆ13ｇ～16ｊグリッド。重複関係にはあるが、ＲＧ063溝

跡と軸方向が非常に近く、何らかの関係があるかもしれない。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出されていたが、検出面が耕作痕で汚れ、根穴等の擬似現象も多く、あくまで「柱穴群」との認識であった。そして、覆土が比較的淡く、周囲に根穴が多かったことから、遺構の可能性は低いと判断されていた。今年度は取りあえず検出されたものは全て半裁してみたところ、灰白色火山灰が含まれているものがあり、また擬似現象として取り除かれるものが増えるにつれて、集約されていったが、この時点では、重複するＲＧ063溝跡も未だ一部しか掘っていない状況であったため、全体像が見えず掘立柱建物跡という認識には至らなかった。以下、Ａ－Ａ´のセクション・ポイントを付した柱穴を①、Ｂ－Ｂ´のそれを②云々という前提で、読んでいただきたい。検出時から、柱穴①、②、④、⑤が並んでいることは感づいていたが、あまりに規模が小さいので掘立柱建物とは思い至らず、検出面では柱穴③がそれらしく見えなかったため、全く想定しなかった。半裁が進み、同時併行で調査していたＲＧ063溝跡底から柱穴⑥が検出され、柱穴①～⑨が揃った時点で番号をつけ断面実測を開始した。柱穴が並んでいることは確実だったが、柱穴⑤と⑥の間に空白があったため、まだ掘立柱建物跡とは考えなかった。ところが、ＲＧ063溝跡底から再び柱穴⑩が検出されるに至り、これは掘立柱建物跡に違いないと残りの相当部分をクリーニングしたところ溝に隣接する汚れと思っていたものが柱穴⑪となって、ようやく全容把握に至ったのである。

＜重複＞ＲＧ063溝跡と、柱穴⑥、⑩、⑪が重複するが、検出面で重複に気づいていなかったため新旧関係不明。検出状況から判断すれば、溝跡の方が新しいのではないかと推測される。柱穴の幾つかから灰白色火山灰が検出されているので、灰白色火山灰＝十和田ａ降下火山灰（西暦915年）とすれば、溝跡は10世紀初頭ころの可能性が高い。ところで、ＲＧ063は、途切れているので同じものとして扱わなかったが、第７次調査区（当センター報告書第508集＝2008年発行、本報告書第Ⅱ章参照）のＲＧ025、026、027溝跡と一連のものである可能性が高い（第３～４図）。ＲＧ025～027には出土遺物がないので時期は特定できないが、これらの続きとされるＲＧ028溝跡は、ＲＡ010竪穴住居に切られることから、９世紀後半より古いとされる（報告書：p.67）。今回の調査所見と矛盾することになるが、新旧判断の証拠が明示されていないので、これ以上のことはわからない。ただし、ＲＡ010竪穴住居出土土器を見ると今回出土土器と著しい差はなく、違いは位置づけ（解釈）による部分が大きい。そうすると、重複関係はわからないが、時期としてはそう変わらない可能性が高い。

＜図・精査状況＞Ｂ－Ｂ´断面、セクション・ポイントが１㎜動いていて、平面図と断面図合わない。Ｅ´側の下場、完掘時掘りすぎたのか、合わない。Ｆ－Ｆ´の溝の上場、完掘時掘り広がって、合わない。Ｇ－Ｇ´、両上場、掘り広がって、合わない。Ｈ側の上場、掘り広がって、合わない。Ｊ－Ｊ´、溝の上場、掘り広がって、合わない。Ｋ側の上場、掘り広がって、合わない。Ｍ－Ｍ´、セクション・ポイントが１㎜動いていて、合わない。検出状況の項で述べたように、全容が掴めない中で作業を進めていかざるを得なかったため、ＲＢ022掘立柱建物跡のように通して半裁することができず、煩雑になってしまった感は否めない。

＜平面形・規模＞身舎は２間×２間で、東辺に庇が付く。柱穴の特徴（後述）から庇と判断した。庇を入れて約８×５ｍ、身舎のみで約６×５ｍの長方形。**＜方位＞**軸方向はＥ－18°－Ｓ。西端で重複するＲＧ063溝跡と、この付近では走向方向がかなり近い。南側に離れて位置するＲＡ055住居跡のそれとも概ね一致する。**＜柱間寸法＞**2.3～3.3ｍと比較的変異が大きいが、2.3～2.5ｍが多い。

＜柱穴＞身舎８個、庇３個。庇部分のそれは、身舎より規模がやや小さく、浅い。全体的に規模が小さく浅いためか、掘り方や柱痕跡はあまりはっきりしない。底は、柱穴①と⑩が礫露出するⅣ層、その他はⅤ層で、柱穴②と⑥は底から10㎝上からⅤ層、柱穴５は20㎝上からⅤ層である。柱穴⑦の底の

みがやや硬く締まるかと言った程度である。柱穴②、③、⑦の覆土から火山灰が出土し、柱穴⑦の上面には礫、⑨からも礫が出土した。

＜出土遺物＞柱穴②から土師器（第45図45）、柱穴⑤から砥石類出土し（第45図13）、柱穴⑥からも砥石類の可能性がある石が出土している（写真図版の52の14、15）。

＜時期・所見＞軸方向、覆土（火山灰）、出土遺物から平安時代（10世紀初頭前後）。

ＲＢ022掘立柱建物跡（第23～24、46図、写真図版22～23）

＜位置・検出状況＞西区中央北寄り、－２Ｆ６～10ｅグリッド付近に位置する。前年度にⅣ層黒褐色土で検出され、建物跡としての構成も把握されていた。クリーニングした際、その覆土の黒さが特に注目された。

＜重複＞柱穴②がＲＤ206土坑と重複。検出面で柱穴覆土の黒さから一目瞭然に柱穴の方が新しいことが分かったので（明瞭に円を描いていた）、通して半裁せず別々に調査した。柱穴６が長芋穴に壊され底だけ残っていた。稲株痕らしい黒い小穴が点々とみられる。周囲にビニールハウスがあったらしく、土中に埋められていた鉄棒の先が点々と残っていた（周囲赤く変色）。

＜図・精査状況＞Ａ－Ａ´断面、柱穴①のＡ´側上場、②のＡ側上場、③のＡ´側上場、④全て、断面実測後に崩れて、平面図と断面図合わない。Ｂ－Ｂ´断面、柱穴⑧のＢ´側上場、⑦両側上場、⑥Ｂ´側上場、⑤両側上場、断面実測後崩れて合わない。Ｃ－Ｃ´断面、柱穴⑩のＣ´側上場除いて、崩れたため全て合わない。柱穴が深いため手が届かず、裁ち割らざるを得なかった。精査していたのが８月末～９月上旬と、丁度大雨が続く時期に当たり、大きく崩れ、断面図と平面図の齟齬が多い。

＜平面形・規模＞柱間２間×３間、約４×6.2mの長方形だが、梁行中央列の柱穴は明らかに貧弱である。**＜方位＞**軸方向はＮ－36°－Ｅ。東側に位置するＲＧ063溝跡と、この付近では走向方向が概ね一致する。**＜柱間寸法＞**柱穴②と③の間は2.2mとやや広いが、他はほとんどが２mである。ただし、桁行中央列には当てはまらず、柱穴⑨と⑩の間は1.1mである。

＜柱穴＞11個である。柱穴⑨、⑩と③、④の間にも柱穴状土坑を検出したが、裁ち割った結果極めて浅く、擬似現象とわかった。

梁行中央列の三個以外は、カクランによって底しか残っておらず確認できない柱穴⑥を除いて、全て柱痕跡が見られ掘り方を持つ。ただし、掘り方埋土も、柱痕跡と同様黒土を基本とする（Ⅳ層ブロックを含むが）。壁～底は全て砂質Ⅳ層だが、以下、個々の底の状態を記載する。柱穴①は、半円形にグライ化しているが硬くない。②は、底の小穴内にブロック状に硬く締まる部分がある。③の底は硬く締まる。④は丸くグライ化している。⑤は少しグライ化し、砂地だがカリカリと硬く締まる。⑥はややグライ化しているようにも見えるが、周囲とほとんど変わりない。ただし硬く締まる。⑦は、硬くはないが丸くグライ化している。⑧は⑤と同じだが、底小穴の壁は硬く締まり底は丸くグライ化している。柱穴⑨～⑪の底は、周囲と全く同じで、硬く締まらない。

＜出土遺物＞なし。柱穴６の近くから鉄製品が出土しているが（第46図９）、現代の蝶番の可能性もある。また、裁ち割りの際周囲から近現代と思われる陶磁器が出土している。**＜時期・所見＞**ＲＤ206土坑より新しく、柱穴覆土の特徴的な黒さは、この地域では中世によく見られるものである。しかし、掘り方を持つ在り方が気になり、軸方向は中世末～近世のＲＣ006柱列より古代のＲＧ063溝跡の方に近い。

ＲＢ023掘立柱建物跡（第25図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞北区最南端～南区中央西寄り、－２Ｇ22ａ～－１Ｇ８ｆグリッド付近に位置する。調査前に建っていた家の東側に隣接し、軸方向は一致しないが、何らかの関係を有すると考える方が自然である。北区旧幹線道路下を検出する際に砂質Ⅳ層上で北端の柱穴４個を確認したが、確実に南区に続くと分かったので南区に入るまでそのままにしておいた。南区に入り、ジョレンで検出したが、南側の続きがなぜか一回目の検出では見つからず、繰り返さねばならなかった。**＜重複＞**遺構との重複はない。南の方では、柱穴が同様の覆土の穴と重複するが新旧関係不明。北端は旧幹線道路下、その他は宅地跡で、極めてカクランが多い。第25図北西端から南に二個目の柱穴南と北東端の柱穴南を結ぶ線を北端として水道管が入っており（写真図版24上）、水道管の南端は、北東端では南に二個目の北から、斜に並んでいるように見える柱穴の北側に沿い、梁行西端列では、より大きく南に広がり、このカクランにより本来存在していた柱穴が消滅した可能性もなくはない。また、柱穴群の南西側には現在の住宅基礎が残っていた（写真図版24下）。

＜図・精査状況＞断面図は縮尺1/20、平面図は1/50で作成したため、現地で照合することができなかった。今縮尺を合わせて照合すると、セクションポイントが合わず、Ｂ－Ｂ´断面に至っては、本来直線上にない部分を実測していることになる。これは、礫を多く含む土層上に無理やりピンポールを立て、さらにＢ－Ｂ´の場合は、長くてメジャーが垂れ下がるため途中にもピンポールを立てて洗濯ばさみで無理やり留めたためと推測される。なお、平面図は平板で実測した。

検出した結果、当初、第25図Ａ－Ａ´断面実測した列より北側が、一つの掘立柱建物跡を構成するものと考えていた（桁行北端と梁行東端がほぼ等間隔）。ところが、検出作業を繰り返すうちに（上述）、その南側から多数の柱穴が確認された。全部半裁はしたが、こちらの方は、ゴチャゴチャしていて並ぶようには見えず、また掘立柱建物跡としても、ここに建っていたお宅の昔の建物と推測され18世紀を遡るとは思われなかったため、調査終盤で作業が急がれていたこともあり、写真記録だけで済ませようと考えていた。しかし、柱穴は、大体は浅く根カクランと区別できないようなものであったが、一部は立派なものもあり、少なくとも覆土上は前記掘立柱建物跡と区別できなかった。何より、軸方向は全く一致しており、少なくとも見た目は並んでいるように見えるところがある。どうしたものかと考えていたところ、課長補佐から「平板実測でも良いから記録すべし」と指示を受けたので、この範囲の調査方針は課長補佐に委ね、カクランと記録すべき柱穴を分けてもらい、また断面実測をとる場所を指示してもらった。

＜平面形・規模＞当初掘立柱建物跡と考えていた範囲は、概ね柱間４間×３間、約7.4×4.9mのほぼ長方形である。北端の桁行は、柱穴の規模がやや小さく浅めで、この部分は庇の可能性もあるが、旧幹線道路下にあって削平されているためと判断した。また、上述のように、梁行西端列の柱穴の欠けている部分はカクランによる可能性もあるが、他の部分はカクランも含めて半裁した結果で、ほぼ本来の状態であると思われる。軸方向や柱穴間隔などから、ここで想定した建物跡より南に続く可能性もあるが、そうすると連綿と続いてしまい、どこで区切って良いかわからない。**＜方位＞**軸上記で想定した掘立柱建物跡の軸方向はＥ－８°－Ｎ。**＜柱間寸法＞**２ｍ前後が多いが、1.2mから2.5mまで様々である。

＜柱穴＞概ね南にいくほど規模が大きくなっているが、北端桁行の一列が小さいのは、上述のように旧幹線道路下で削平されたためと考える。この列は道路下にあったため覆土が非常に硬く締まり、深さは10㎝。他の柱穴は20～40㎝であるが（底は砂利層なので掘りすぎも）、上記想定の掘立柱建物跡の南西隅の柱穴は浅い（削平のため？）。覆土は、10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色が混じる砂質シルトで、混入の割合は様々で霜降り状のものもある。南端は削平されているため砂礫（Ⅴ）層だ

が、北半は、検出面は砂質Ⅳ層で、検出面より10cm下がると砂礫（Ⅴ）層となる。
＜出土遺物＞なし。現代の基礎跡付近を除いて周囲からも陶磁器片は出土しなかった。**＜時期・所見＞**宅地跡から検出されたことと覆土から18世紀以降の可能性が高い。

ＲＣ006柱列跡（第26、46図、写真図版25～26）
＜位置・検出状況＞西区北東寄り、－２Ｆ11ｉ～13ｋグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土でＲＢ021掘立柱建物跡の柱穴とともに柱穴状土坑群（遺構の可能性低し）として検出されていたが、次年度検出・半裁の結果、ＲＢ021とカクラン・擬似現象が除かれ、残りの柱穴の覆土・規格が似ていたので一つにまとめられ、並んでいるのに気づいたが、どうしても建物跡を構成することができず、柱穴列として報告する。調査時覆土の黒さが際立っていた。以下、Ａ－Ａ´のセクション・ポイントを付した柱穴を①、Ｂ－Ｂ´のそれを②云々という前提で、読んでいただきたい。**＜重複＞**遺構との重複なし。周囲、稲株痕は多いが、植栽痕のカクランはそれほどひどくない。
＜図・精査状況＞Ａ－Ａ´断面、Ａ´側上場、完掘時掘り広がって、平面図と断面図合わない。Ｃ－Ｃ´断面、セクションポイント合わない。Ｄ－Ｄ´断面、両側上場掘り広がって合わない。Ｆ－Ｆ´断面、Ｆ´側の上場、掘り広がって合わない。Ｈ－Ｈ´断面、最初の柱穴④のＨ側上場、最後の柱穴⑥のＨ´側の上場、掘り広がって合わない。
　上述のように、幾つかの柱穴が一つのまとまりとして把握されたので、建物跡の構成を把握しようとした。柱穴①－②と⑤－⑥が平行に並んでいるように見えたので、柱穴③に対向するものがあるはずだと、その部分を丹念に検出し、最終的に周囲より５cm以上下げたが見つけることはできなかった。
＜平面形・規模＞柱間２間の柱穴列が東西方向に二列並んでいる。一つの柱列は５ｍの長さで、柱列の間隔もほぼ５ｍである。**＜方位＞**軸方向はＮ－20°－Ｅ。西に位置するＲＧ063溝跡とも似るが、調査で検出された幹線道路の軸方向により近い。幹線道路は、調査前この付近では西南西から東北東に伸びていたが（第５図）、古くはこの付近でやや曲がり北東に伸びていたことが分かった。第８図ＲＤ205東の溝はこの時の側溝である。さらに、この道路の方向は、調査前に建っていた住宅の軸方向にも一致している（第５図）。**＜柱間寸法＞**列方向では、ほぼ全て2.5mと、かなり規格的である。
＜柱穴＞６個。覆土は黒く、断面はストーンと円筒状に下がるものが多い。柱穴④～⑥は底に礫が露出しているが（Ⅳ層最下部）、他は砂質Ⅳ層である。柱穴①は、底東寄り直径10cm程度の範囲が硬く締まる。柱穴②底には柱あたりがあり、底ほぼ中央直径15cmくらいの範囲が硬く締まる。柱穴③底にも柱あたりがあり、中央直径15cmくらいの範囲が硬く締まる。底から銭貨が出土したはずだが整理時に見つからなかった。底東側には礫が露出する。柱穴⑥は、他と比べてやや深く、底の柱あたりの硬い濁った土から木端と銭貨（底東側から）が出土した。
＜出土遺物＞上述のように、柱穴③底から銭、柱穴⑥底から木端と銭（第46図１）が出土した。
＜時期・所見＞柱穴覆土の特徴的な黒さから中世以降は確実である。柱穴⑥の底から出土した銭は永楽通宝だが、中世末まで遡るかどうか。旧道路との関係から近世ではないかと推測する。

ＲＺ035柱穴群（第８、46図、写真図版41、33最下段右）
＜位置・検出状況＞西区南西端～北区南西端、－１Ｅ４ｙ～－１Ｆ９ｂグリッド付近。前年度Ⅳ層下部面（礫露出）黒褐色土で柱穴状土坑群として検出されていたが、遺構との認識は薄かったようである。今年度精査する前に旧幹線道路下（北区）を検出したところ、同様の柱穴状土坑が発見されたの

で同時に精査した。なお、「ＲＺ」という記号は、「その他」の遺構にあてられるもので、柱穴群の記号ではない。**＜重複＞**遺構との重複なし。一部柱穴状土坑は、道路側溝を切っている（写真図版33最下段右）。
＜図・精査状況＞他と覆土が大きく変わらない柱状土坑の一つが道路側溝を明らかに切っているのを確認したので、カクラン扱いとしたが、後に寛永通宝が出土する柱穴状土坑（後述）が見つかったので位置だけは記録することにした。ただし、発見されたものは全て半裁し、観察した後完掘している。また、記録は取らなかったが、本土坑群の北西隣接地から改葬後に取り残された人骨の一部や寛永通宝が出土した。**＜全体規模・構成＞**概ね12×10ｍの範囲に偏って検出されているが、性格が異なる柱穴土坑が偶然まとまって発見されたにすぎないようである。
＜柱穴状土坑＞上述のように、近世～現代の性格の異なるものが含まれていると考えられるが、覆土は比較的似ていて、茶色がかった黒褐色土のノペーとした均質密な土で、古代の覆土ではないが、新しいと言い切るのもという土。検出面は、Ⅳ層最下部の礫露出する土で、壁上半も同様だが、深さ25㎝より下がると礫（Ｖ）層となる。深さは概ね20～30㎝だが、50㎝を超えるものも４個あった。
＜出土遺物＞ほとんどないが、南端の大小二個並ぶうちの大きい方から磁器片、寛永通宝（第46図２）が出土した。**＜時期・所見＞**江戸時代後半～現代。規模・深さからは否定的だが、柱穴覆土の特徴から、近世墓の残存が主体を占めると推測する。

５　井戸跡・陥し穴状遺構・土坑（第27～39、46図、写真図版34～40）

土坑とは一般的に「その他の穴」を意味し、用途を特定あるいは推定できない穴を一括したものである。盛岡市教育委員会の分類名称では、陥し穴状遺構は土坑扱いなので、ここに含めるが、そうすると、本遺跡で井戸跡（盛岡市教育委員会ではＲＩと分類される）としたものも井戸枠等が確認されたわけではないので、土坑と分けて別扱いすることに違和感を覚える。そこで、本報告書では一括して報告することにした。ここでは、井戸跡と推測されるもの、類例から縄文時代の溝跡陥し穴状遺構とされるもの、その他に分類した。

井戸跡（ＲＩ005）は１基のみで、北区最南端に検出され、近世後半以降の可能性が高い。陥し穴状遺構は14基（ＲＤ191～204）、全ての区に検出されたが、西区でＲＤ192～195、東区でＲＤ198～204が密集するが、その他は点在する。これまでの類例から縄文時代と思われるが、出土遺物はなく、時期は、形と類例からの推測である（Ⅶ章１節に詳細）。中近世の可能性もあるのではないかと指摘されたが、中近世のものはズングリしたものが多く（桜井　2000ほか）、また覆土と検出状況、重複関係（ＲＤ204）から、今回検出されたものは縄文時代の可能性が高い。いずれも下半が非常に狭く拳が回らないほどであったため、全て中央部にサブトレンチを入れた。

その他の土坑は（ＲＤ205～212）、形・大きさ多様だが、いずれも平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。ＲＤ208には焼土が検出され、カマド状遺構にやや似る。ＲＤ207では下層に点圧したような非常に硬い灰白色土（酸化鉄付着）が広がる。ＲＤ210からは多くの土器破片と焼土粒が出土した。

なお、西区は前年度検出作業まで行っており、今年度は基本的に精査から開始しているが、南端に検出されていた第２～４号土坑は、半裁した結果、いずれも遺構でないと判断された。２号はプランは明確だったが底がメチャクチャで、３、４号（ＲＡ055住居跡に隣接）は検出面から天地返しで風倒木とわかった。逆に、ＲＥ016住居状遺構（旧第３号住居）下からＲＤ210～212の三つの土坑を新

たに検出している。

参考文献

桜井秀雄　2000　「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』第52巻第10号　信濃史学会

ＲＩ005井戸跡（第27図、写真図版40）

＜位置・検出状況＞北区南西端（旧幹線道路下）、－１Ｆ３ｇ～５ｇグリッド付近。Ⅳ層下部（礫露出）面ジョレンによる検出黒土で確認。東側が隅丸方形に見え、竪穴住居跡かと思ったが、覆土が黒すぎるような気がした。水道管が縦断していたので、その覆土砂利層をとりあえず抜いてみたが、黒土の底は平らでなかった。カクランかと考え、西～北区調査終盤までそのままにしておいた。**＜重複＞**遺構とは重複しない。南西側の不整形の穴を別土坑とすれば重複の可能性が出てくるが、間に水道管が入っていて不明瞭で、また通して設定した土層断面では不連続なところはなく、後述のように一連のものと考えている。水道管に壊される。**＜図・精査状況＞**平面図は、光波測量機と電子平板システム（Cubic社製実測支援システム「遺構くん」）を用いて作成。セクションポイントのＡ´が図上で5.5㎜、合わない。おそらく、下が礫層であったためピンが刺しづらく、ずれてしまった可能性と図化方式の違いによるものと思われる。調査終盤に、一応十字に土層ベルトをかけて掘り始めた。カクランと考えていたのが予想外に深く、覆土から井戸跡の可能性が高いと考えて南北ベルトは外した。**＜覆土＞**大きく四つに分けられ、上層は黒土（１～６層）、中層は埋め戻したような土（７～11層）、下層は黒土（12～15層）、最下層はⅣ、Ⅴ層再堆積土（16、17層）。**＜平面形・規模＞**2.85×2.6m程度の楕円形の西側に、2.6×1.5m程度の不整形な張り出し部が付く。**＜断面形・深さ＞**楕円形の方は1.05mのすり鉢状。不整形の方は約40㎝の浅皿状。**＜壁・底＞**西端の検出面はⅤ層、その他はⅣ層下部（礫混じり）で、その下はⅤ層となる。底はⅤ層。底は平らでない。**＜出土遺物＞**豆粒のような土師器片206ｇ（不掲載）出土。摺り鉢片が出土したとの記録があるが、整理時に見当たらなかった。

＜時期・所見＞覆土から近世後半（以降）の可能性が高い。規模、深さと断面形から井戸跡の可能性が高いと思うが、酸化鉄等は見当たらず、段丘上にあるので、この深さで水が出たとは考えられない。失敗したものか。また、南西側に見られる不整形の穴は、隣接する矢盛遺跡第12・13次調査でしばしば見られた（ＲＩ048など。当センター報告書第534集、2009年発行、第Ⅱ章参照）、井戸を埋め戻す際に土を取られて（結果的に）掘られた穴だろうか。

ＲＤ191土坑（陥し穴状）（第28図、写真図版26、34）

＜位置・検出状況＞西区中央西端、－２Ｅ９ｏ～10ｐグリッド。前年度Ⅳ層面黒土で３号溝として検出。長芋穴のカクランがひどい場所にあり、溝の続きを見つけようと周囲をクリーニングしたが、見えなかった。ベルトを設定して掘り下げ、やはり陥し穴だとわかった。今回の調査で最初に精査した陥し穴である。**＜重複＞**遺構との重複はないが、長芋穴にひどくカクランされている。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、完掘時掘りすぎて、底、断面図と平面図合わない。原因不明だが、セクションポイントのＢ´合わない。掘り残したベルト状部分（周囲が掘りすぎ）のＢ側合わない（断面実測時に測り間違いの可能性が高い）。カクランがひどい上に、検出面以外の覆土が周囲の地山と区別し難く、さらに非常に狭かったため、大部掘りすぎてしまった。底の多くは掘りすぎか。土層ベルト（Ａ－Ａ´断面）では、完掘時に丁寧に覆土のみを取り除き周囲を掘りすぎた部分をベルト状に残したのだが、大雨で崩れてしまった。**＜覆土＞**検出面の１層のみ黒土で、他は汚れⅣ層再堆積で淡い土の

ため、壁～底の区別し難い。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。約3.7×0.3m。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は両側にオーバーハングするようだ、短軸方向はＩ字形に近く、削平されているせいか、上部も広がらない。約80㎝。**＜壁・底＞**壁～底は砂質Ⅳ層で、底付近は砂質強くＶ層に近い。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。しかし、周囲に類例がなく、最も近い第７次調査区のＲＤ071（当センター報告書第508集、2008年発行）まで30mあって、ポツンと点在する。陥し穴の在り方としては不自然で、おそらく周囲に見落としがあるものと遺構空白区域の検出面を５～10㎝下げてみたが、見つけることはできなかった。耕作時のカクランはほとんどを取り除けたので、これが実態である可能性も高いと考える。

ＲＤ192土坑（陥し穴状）（第29、30図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞西区北端東寄り、－２Ｆ７ｊ～８ｌグリッド。ＲＧ063溝跡、ＲＤ193～195土坑（陥し穴状）と近接する。前年度Ⅳ層面黒土で検出。**＜重複＞**遺構とは重複しない。ハゼ杭状の小黒穴少しあるが、長芋カクランなく、比較的良い状態。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、底、完掘時掘りすぎて、底、平面図と断面図合わない。覆土は、今回の調査ではわかりやすい方だったが、精査中大雨が繰り返し降り、弱い中位の壁がその度崩れてしまった（単軸方向もオーバーハングして見えるのはそのため）。**＜覆土＞**上位（１層）黒土、中位（２～４層）黒土と黄褐色土の互層、下位（５～７層）黄褐色土、最下層（８層）黒土。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。約3.7×0.4m。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は、大雨による崩落後に実測したので、実態を伝えているか定かでない。短軸方向は、上部が開いてＹ字形に近い。約80㎝。**＜壁・底＞**壁～底は概ね砂質Ⅳ層だが、東半のみ底に砂利が露出している（Ｖ層）。底付近は非常に狭い。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ193、194と並んでおり、その可能性を裏づける。

ＲＤ193土坑（陥し穴状）（第29、30図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞西区北端東寄り、－２Ｆ６ｌ～７ｍグリッド。ＲＧ063溝跡、ＲＤ192、194、195土坑（陥し穴状）と近接する。前年度Ⅳ層面黒土で検出しているが、途中に長芋耕作時の天地返しがあり、検出面に黄褐色土が露出して、遺構が途中で途切れているように見えた。**＜重複＞**遺構とは重複しないが、上述のように長芋耕作時のカクランひどい。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、底、完掘時掘りすぎて、平面図と断面図合わない。Ｂ－Ｂ´断面、Ｂ側の上場、断面実測時測り間違いで、平面図と合わない。天地返しで遺構の続きが確認できない場所にトレンチを入れ、底付近にそれらしい土が検出されて、単なるカクランではなく陥し穴状遺構であることを確認した後、覆土断面にカクランが比較的入らない場所を選んでトレンチを入れた。大雨の繰り返しで、底付近がやや抉れてしまったが、ＲＤ192ほどひどくはない。**＜覆土＞**上面（１層）黒土、その下黒土と黄褐色土の互層。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。約４×0.7m。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は、大雨による崩落後に実測したので、実態をどの程度伝えているか定かでないが、両端はオーバーハングするらしい。短軸方向は、上部が開いてＹ字形に近い。約１ｍ。**＜壁・底＞**壁は砂質Ⅳ層、底は砂礫（大きな礫目立つ）（Ｖ）層。底付近は非常に狭い。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ192、194と並んでおり、その可能性を裏づける。

ＲＤ194土坑（陥し穴状）（第30、31図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞西区北端東寄り、－２Ｆ４ｍ～５ｎグリッド。ＲＧ063溝跡、ＲＤ192、193、195土坑（陥し穴状）と近接する。前年度Ⅳ層面黒土で検出。**＜重複＞**ＲＤ195土坑（陥し穴状）と重複し、ＲＤ194が新しい。上面に長芋耕作時のカクランひどかったが、ＲＤ194覆土の黄褐色土が上面に露出していたためか、新旧関係は検出面で比較的明瞭で、前年度に把握されていた。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、Ａ側崩れて、平面図と断面図合わない。覆土の下半が周囲の地山Ⅳ層と区別し難く、今回の調査の中で最もわかりづらい陥し穴状遺構であった。曇りの日に大きく裁ち割り、５層と８層の違いで何とか壁を判別でき、６層まで到達してやっと確信を得るという状態であった。検出面では平面形が弧を描く（東に行くにつれ北に曲がる）ように見えたが、中位の覆土が判別しにくく、さらに大雨を繰り返していくうちに、ほぼ真っすぐになっていた（精査に慣れ上手な作業員が掘削したので間違いないと思うが）。**＜覆土＞**上面（１層）のみ黒土、その下下がるにつれて淡くなっていき、下半（４、５層）は汚れⅣ層再堆積、最下部（６層）は黒土。４層は周囲の地山と区別できず、５層はかろうじて８層（粗砂）によって区別される。４層は、土層線を引く前には幾つかの縞が連続して堆積しているように見え分層できそうに思われたが、移植ゴテできれいにしたら見えなくなってしまった。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。約４×0.7～0.8ｍ。**＜断面形・深さ＞**大雨による崩落と覆土のわかりづらさから、図が実態をどの程度伝えているか定かでないが、長軸方向の両端はオーバーハングするらしい。短軸方向は、上部がやや開いてＶ字形に近い。約85㎝。**＜壁・底＞**壁は砂質Ⅳ層、底は砂礫（Ⅴ）層。底付近は非常に狭い。**＜出土遺物＞**ないが、近くの長芋穴から土師器や陶磁器片が出土していた。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ192、193と並んでおり、その可能性を裏づける。

ＲＤ195土坑（陥し穴状）（第31、32図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞西区北端東寄り、－２Ｆ４ｎ～５ｍグリッド。ＲＧ063溝跡、ＲＤ192、193、194土坑（陥し穴状）と近接する。すぐ北側は、遺跡範囲外の湿地である。前年度Ⅳ層面黒土で検出。**＜重複＞**ＲＤ194土坑（陥し穴状）と重複し、ＲＤ194が新しい。上面に長芋耕作時のカクランひどかったが、ＲＤ194覆土の黄褐色土が上面に露出していたためか、新旧関係は検出面で比較的明瞭で、前年度に把握されていた。南側は黒い小穴の耕作痕程度だが、北側はモヤーとした黒いカクラン（植物による？）に覆われている。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、両側上場、Ａ´側下場、完掘時掘りすぎて（軟らかい砂）、平面図と断面図合わない。Ｂ－Ｂ´断面、Ｂ´側上場、崩れて合わない。ＲＤ194土坑調査後、ＲＤ194の壁を裁ち割って土層断面を調査した。北側の黒いモヤーとしたカクランにより北端は確認できなかった。北端の上場は全く確認できなかったが、トレンチ等入れた結果、底が既に通りすぎている点は確認できたので、図内に立ち上がりがあったことは確実である。
＜覆土＞概ね、黒褐色土と褐色土（汚れⅣ層再堆積）の互層。５層は６、７層堆積後に入り込んだと考えた。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。北端が不明だが、約3.5×0.5ｍ程度か。**＜断面形・深さ＞**長軸方向の北端は不明だが、オーバーハングはしないらしい。短軸方向は、削平されているのか上部が開かずＩ字形に近い不整形である。約70～80㎝。**＜壁・底＞**壁は砂質Ⅳ層、底は、ＲＤ194重複部分より北は砂質Ⅳ層、それより南は砂礫（Ⅴ）層。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高いが、ＲＤ194土坑（陥し穴状）と直交する。ＲＤ194は、ＲＤ192、193と並んでおり、ＲＤ195土坑の後、並んで掘られたらしい。

ＲＤ196土坑（陥し穴状）（第32図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞北区南東寄り、－２Ｆ21～23ｙグリッド。北東側に使用中の電柱があり、その周囲を２ｍ四方土山として残している（遺構図には記録しているが、手違いで第９図には載っていない）。旧幹線道路下ジョレンで検出中に所々黒いモヤーとしたシミを検出。何となく溝状にまとまって見えたが、立地などから陥し穴状遺構とは想定していなかった。横断する水道管埋土の砂利を抜いてみたところ、上の方は淡い覆土ではっきりしなかったが、底にはっきりとした黒土（６層）を確認し、陥し穴状遺構に間違いないと判断した。**＜重複＞**遺構の重複はない。水道管に壊されている。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面側下場、見た目の違いで、平面図と断面図厳密には合わない。**＜覆土＞**黒褐色土と褐色土（Ⅳ層再堆積）の互層。最下層（６層）クロボク土（Ⅱ層）に近い。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。約４×0.5ｍ。**＜断面形・深さ＞**長軸方向はオーバーハングしないらしい。短軸方向は上に開くＶ字形に近い。約70㎝。**＜壁・底＞**検出面から北は20㎝、南は30㎝まではⅣ層で、その下～底はＶ層。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。一つだけ点在するのが不自然だが、陥し穴の規模から考えて電柱の土山に全く隠れてしまうとは考えにくい。段丘の中央付近から検出された特徴はＲＤ191土坑（陥し穴状）と共通し（ＲＤ197も？）、こうした立地のものは点として掘られるのかもしれない。

ＲＤ197土坑（陥し穴状）（第33図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞南区北東端、－２Ｇ25ｘ～－１Ｇ１ｘグリッド。砂質Ⅳ層面で、淡く途切れがちな溝状のシミを検出。遺構とは思えなかったが、念のため真ん中にトレンチを入れたところ、不整形だが底に黒土が認められた。ただし、覆土中位はⅣ層そのものに見え根穴のようにも思われる。確信が持てなかったが、さらに二箇所トレンチを入れ同様の結果が得られたので擬似現象ではないと判断した。**＜重複＞**遺構との重複はない。周囲に長芋耕作によるカクランあり。**＜図・精査状況＞**上述のように、覆土中位はわかりづらいが、トレンチを三箇所入れ、そこから掘り広げていったので、掘り間違いはあまりないと思う。**＜覆土＞**上層（１層）淡い黒褐色土、中層（２層）Ⅳ層再堆積土、下層（３層）ボソボソの黒土。下層は根カクランと崩れで不整形である。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。南西端が若干曲がっているように見えるが、カクラン等に左右された掘り間違いの可能性もある。約3.95×0.16ｍ。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は両側に若干オーバーハング。短軸方向は削平されているせいか浅くＩ字形に近い。約35㎝。**＜壁・底＞**壁は、東半は検出面から30㎝下まで、西半は15㎝下まで砂質Ⅳ層で、その下～底砂利層（Ｖ層）。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。遺跡北端の湿地（段丘崖）に近いが、単独での検出である。周囲を丹念に検出したが、それらしいものさえなく植栽痕くらいであった。ただし、分布（第７図）からは段丘中央にあったＲＤ191、196土坑（陥し穴状）の在り方に似通っているようにも見えるので、単独で存在して良いのかもしれない。深さと断面形から大きく削平されているのは確実である。

ＲＤ198土坑（陥し穴状）（第33図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞東区中央東寄り、－１Ｈ25ｙ～－１Ｉ25ｂグリッド。雨裂底のⅣ層上面黒土で明瞭に検出。北側にＲＤ199～203土坑（陥し穴状）が並ぶ。**＜重複＞**なし。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、Ａ´側上場崩れ、断面図と平面図合わない。雨裂底にあるため雨水に浸かりやすく、10月前半は雨が多かったため土層断面実測後しばらく放置しておいて、雨が少なくなった10月26日に一気に水を汲んで調査終了した。写真図版26中段右にＲＤ200精査中に水に浸かっているＲＤ198の様子が写っ

ている。覆土下半が周囲の地山に似ていてわかりづらく、掘り間違いがあるかもしれない。なお、Ａ－Ａ´断面半裁時に、底がやや浅いのが気になり、さらに下げている。湧水があったので（後述）不正確で、周囲に比べて締まりやや弱いような気もしたが、周囲の地山と同様酸化した砂層であった。**＜覆土＞**上面（１層）黒土、その下はⅣ層再堆積土で、ブロック、ダマ状の塊の集合体であり、明らかに掘削した土で埋まっている。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。中央付近が広がっているのは、掘りすぎのせいか。約3.2×0.6ｍ。**＜断面形・深さ＞**長軸方向はオーバーハングしない。短軸方向は上部がやや開きＹ字形に近い。約80㎝。**＜壁・底＞**壁は、北西側の低い方は検出面から５㎝下までⅣ層、その下30㎝まで白色粘土、その下～底は砂（Ⅴ）層。その他は、検出面から10～15㎝下までⅣ層、その下40㎝くらいまで白色粘土、その下砂（Ⅴ）層。Ⅳ層と白色粘土の間は酸化鉄が付着。Ａ－Ａ´断面では、７層より２～３㎝下から水が湧き出したが、10月下旬以降は湧水も止まった。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。他に比べて、雨裂底という低い場所に立地しているのが気になるが。壁の状況から、検出面ギリギリまで水に浸かっていた可能性が高い。

ＲＤ199土坑（陥し穴状）（第34図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞東区中央北端、－２Ｈ20～22ｖグリッド。Ⅳ層上面黒褐色土で明瞭に検出したが、重機で剥いだラインより北側に続いていたので周囲の土山を人力で移動した。遺跡北限（北側は湿地）に位置し、ＲＤ200～203土坑（陥し穴状）と並ぶ。**＜重複＞**遺構との重複はないが、黒い小穴（植物による？）が周囲に広がる。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、Ａ´側上場、完掘時掘りすぎて断面図と平面図合わない。Ｂ－Ｂ´断面、Ｂ´側上場、完掘時掘りすぎて合わない。**＜覆土＞**上面（１層）黒土、その下はⅣ層再堆積土と黒土との混土（汚れⅣ層再堆積）の互層。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。南側の中間場が内側に張り出す。約3.95×0.5ｍ。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は両端ややオーバーハング。短軸方向は上部がやや開きＹ字形に近い。約80㎝。**＜壁・底＞**壁は、検出面から50㎝下まで砂質Ⅳ層、その下～底は、酸化鉄が付着する白色粘土。底が平らなのが特徴である。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ200～203と並んでおり、その可能性を裏づける。壁の状況から、下部は水に浸かっていた可能性が高い。

ＲＤ200土坑（陥し穴状）（第34図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞東区東寄り北端、－２Ｈ22～23ｙグリッド。砂質Ⅳ層面黒褐色土で明瞭に検出。遺跡北限（北側は湿地）に位置し、ＲＤ199、201～203土坑（陥し穴状）と並ぶ。ＲＤ198土坑（溝状）の北側に位置するが、本土坑は雨水に浸からなかった。**＜重複＞**遺構との重複はないが、黒い小穴（植物による？）が周囲に広がる。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、Ａ´側上下場、完掘時掘りすぎて断面図と平面図合わない。南半は不整形でわかりづらかった（後述）。**＜覆土＞**１層黒土、２層Ⅳ層とⅡ層混土（黒褐色地に黄褐色土混じる）、３層Ⅳ層再堆積（黄褐色土）、４層白色粘土再堆積、５層Ⅳ、Ⅴ、Ⅱ層混土（白色地に黒土混じり）。４層は周囲の白色粘土層に良く似る。**＜平面形・規模＞**蛇行する不整形溝状。北半は整形だが、南半は不整形である。北側の中間場が内側に張り出す。約3.1×0.5ｍ。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は両端オーバーハング。短軸方向は不整形だが、他と異なり長さに比して幅が広いことから、Ｙ字形が崩落したものか。約90㎝。**＜壁・底＞**壁は、検出面から30㎝下までⅣ層、その下10㎝ほどが白色粘土、その下～底は、砂（Ⅴ）層。Ａ－Ａ´断面で

は、２層途中の最初の弧を描くところがⅣ層と白色粘土の境、４層と５層の境がほぼそのまま白色粘土と砂層の境になる。南半の壁下半は奥に入ってオーバーハングしてしまい（黒土）、わかりづらかった。精査中、北半底に湧水があり（10月26日以降は枯れた）、底15cmほど常時水に浸かっていた。湧水と南半の土がわかりづらかったことにより、Ｂ－Ｂ´方向の底は掘りすぎの可能性もある。**＜その他＞**上述のように、南半は壁がわかりづらく不整形なのに対し、北半は整形で、ねじれて蛇行したような形になっている。精査したベテランの作業員をして「北と南で別の人が掘った」と言わしめたほどである。ＲＤ202土坑も同様である。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ199、201～203と並んでおり、その可能性を裏づける。壁の状況から、下部は水に浸かっていた可能性が高い。

ＲＤ201土坑（陥し穴状）（第35、36図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞東区東寄り北端、－２Ｈ19～21ｘグリッド。Ⅳ層面淡い褐色土で検出。不明瞭であったが、RD202、203と一緒に検出したので、陥し穴が並んでいる可能性が高いと考えた。重機で剥いだラインより北側に続いていたので周囲の土山を人力で移動した。遺跡北限（北側は湿地）に位置し、ＲＤ199～203土坑（陥し穴状）と並ぶ。**＜重複＞**遺構との重複はないが、黒い小穴（稲株痕？）が周囲に広がる。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、Ａ´側下場、完掘時掘りすぎて断面図と平面図合わない。Ｂ－Ｂ´断面、原因不明だがセクションポイント合わない。半裁時（Ａ－Ａ´断面）、４層が根で汚れている周囲の地山とほとんど変わりなく、３層で終わりかと思いかけたが、浅すぎて変だということで、裁ち割った結果８層までとわかった。**＜覆土＞**今回調査では珍しく比較的わかりやすい覆土であった。黒土とⅣ層再堆積土の互層で、１、３、８層が黒土。６層に酸化鉄含む。４層は周囲の地山とほとんど変わらない。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形だが、北側が若干弧を描いているように見えるのは、削平の度合いの違いによるものか。約3.2×0.4m。**＜断面形・深さ＞**長軸方向はオーバーハングほとんどしない。短軸方向は上部がやや開きＶ字形に近い。約75cm。**＜壁・底＞**壁は、検出面から45cm下までⅣ層（９層）、その下10cmは酸化鉄が付着する白色化したⅣ層（10層）、その下～底白色粘土（11層）で、底最下部には酸化鉄付着。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ200～203と並んでおり、その可能性を裏づける。壁の状況から、検出面近くまで水に浸かっていた可能性が高い。

ＲＤ202土坑（陥し穴状）（第35、36図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞東区東寄り北端、－２Ｈ19ｙ～－２Ｉ21ａグリッド。Ⅳ層面淡い褐色土で検出。中央は黄褐色土で、途中で途切れるように見え、通常の陥し穴より細かった。不明瞭であったが、RD201、203と一緒に検出したので、陥し穴が並んでいる可能性も高いと考え、重機で剥いだラインより北側に続いていたので周囲の土山を人力で移動した。半裁した結果、陥し穴であることが明確になった。遺跡北限（北側は湿地）に位置し、ＲＤ199～203土坑（陥し穴状）と並ぶ。**＜重複＞**遺構との重複はないが、黒い小穴（稲株痕？）が周囲に広がる。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、断面実測時に厳密なセクションより少しずれたところを測っているので、トレンチのＡ´側の位置少し平面図と合わない。Ｂ－Ｂ´断面、Ｂ側の上下場、完掘時掘りすぎて合わない。拡張した場所の北端、ここより南より高い位置で検出できたため、10cmほど高い位置から掘り始めている。**＜覆土＞**削平されているため上面に黒土顕著でないが、概ね黒土とⅣ層汚れ再堆積土の互層で、３、６層が黒土。１層と４層は斑ら。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形だが、蛇行しているように見えるのは、削平の度合

いの違いによるものか（北端はより高い）。南端は中間場を持つ。約3.3×0.2m。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は両端大きくオーバーハング。短軸方向は非常に狭くＩ字形に近い。約55cm。**＜壁・底＞**壁は、検出面から10～20cm下までⅣ層（７層）、その下30～40cmは酸化鉄が付着する白色粘土（８層）で、底の多くも同様だが、底上５cmから縞砂（Ⅴ）層（９層）のところもある。単なる掘りすぎの可能性もあるが、底は北側に向かって若干下がっているか。**＜その他＞**ＲＤ200土坑同様北と南で形が異なり、南半は整形、北半は不整形で蛇行する。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（周辺地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ200～203と並んでおり、その可能性を裏づける。幅と短軸方向の覆土断面から、削平されている可能性が高い。壁の状況から、検出面近くまで水に浸かっていた可能性が高い。

ＲＤ203土坑（陥し穴状）（第35、36図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞東区北東端、－２Ｉ19～21ｂグリッド。Ⅳ層面淡い褐色土で検出。不明瞭であったが、RD201、202と一緒に検出したので、陥し穴が並んでいる可能性も高いと考え、重機で剥いだラインより北側に続いていたので周囲の土山を人力で移動した。半裁した結果、陥し穴であることが明確になった。遺跡北限（北側は湿地）に位置し、ＲＤ199～202土坑（陥し穴状）と並ぶ。**＜重複＞**遺構との重複はないが、黒い小穴（稲株痕？）が周囲に広がり、コンクリートの丸い基礎が近くにある。**＜図・精査状況＞**Ａ－Ａ´断面、Ａ´側の下場、完掘時掘りすぎて断面図と平面図合わない。Ｂ－Ｂ´断面、トレンチの位置Ｂ側合わない（高低差が大きく、平面実測時正確に測れないため）。**＜覆土＞**上面に淡い黒褐色土（１層）、中位汚れⅣ層、Ⅳ層再堆積（２～４層）、下位黒土（５～７層）。４層酸化鉄付着。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。北側の方が狭いのは、削平の度合いの違いによるものか、検出時に下げすぎたか。約3.6×0.3m。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は両端オーバーハング。短軸方向は上にやや開きＶ字形に近い。約80cm。**＜壁・底＞**壁は、検出面から５～20cm下までⅣ層、その下は、北側では40～50cmまで、南側では60cmまで、酸化鉄付着したり白色まだら化したⅣ層、その下、南では底上20cm～底は酸化鉄が付着する灰白色粘土、北の底（一部底上５cmから）は砂（Ⅴ）層。南側では底がはっきりせず、灰白色粘土を掘りすぎている可能性が高く、長軸断面の南側底が下がっているのは、単なる掘りすぎの可能性が高い。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ200～202と並んでおり、その可能性を裏づける。壁の状況から、検出面ギリギリまで水に浸かっていた可能性が高い。

ＲＤ204土坑（陥し穴状）（第37図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞東区中央東端、－２Ｉ22～24ｆグリッド。雨裂下Ⅳ層上面で、輪郭はボヤーとしていたが明瞭な黒褐色土でＲＡ052住居跡と一緒に検出。覆土上部にカマド１が重複するが、ほとんど影響を受けず、住居覆土を剥がした時点で既に全容が窺えた（写真図版６上）。遺跡北限（北側は湿地）近くに位置し、ＲＤ198～203土坑（陥し穴状）と近い。**＜重複＞**ＲＡ052住居跡と重複し、検出面で本土坑の方が古いと明瞭に確認。**＜図・精査状況＞**Ｂ－Ｂ´断面、トレンチの位置合わない（高低差が大きく、平面実測時正確に測れないため）。土層断面は、最も多く残っているＲＡ052住居壁付近を裁ち割って設定。**＜覆土＞**比較的特徴的な覆土で、上半は黒褐色土と（１、３層）汚れⅣ層再堆積（２、４層）の互層、下半は、５層が汚れた白色粘土再堆積、６層が砂再堆積、７層が黒褐色土。**＜平面形・規模＞**溝状の長楕円形。幅の違いは、削平の度合いの違いによる（南側はＲＡ052と重複）。約４×0.5m。**＜断面形・深さ＞**長軸方向は両端オーバーハング。短軸方向は上にやや開きＶ～Ｙ字形。

約80cm。短軸方向の壁も、一部オーバーハングするように調査されていたが、掘りすぎの可能性が高い。**＜壁・底＞**最も残りの良い場所を基準に、壁は、検出面から30cm下までⅣ層で酸化鉄付着、その下20cmは白色粘土で酸化鉄付着、その下～底は砂（Ｖ）層。さらに下がると砂利層になることを確認しているが、本土坑には関係なく、土坑掘削時にギリギリ止めてある。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土と形と類例（地域内の検出状況）から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。ＲＤ198～203と近く、その可能性を裏づける。壁の状況から、下部は水に浸かっていた可能性が高い。

ＲＤ205土坑（第37図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞西区北東端、北区隣接地、－２Ｆ８ｒグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出。遺跡北端にポツンと点在。道路が北に折れていたころの旧幹線道路に近く、近くに側溝がある。**＜重複＞**遺構との重複はなし。長芋耕作時のカクランに壊されている。**＜覆土＞**二層に分かれ、上（１）層は黒褐色土、下（２）層はⅡ、Ⅳ層混土。**＜平面形・規模＞**カクランがひどくて不明だが、80×70cm程度の小判形か。**＜断面形・深さ＞**逆台形～浅皿状。約25cm。**＜壁・底＞**壁～底は砂質Ⅳ層。底は凹凸あるがほぼ平ら。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**覆土から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）か。

ＲＤ206土坑（第38図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞西区中央北寄り、－２Ｆ８～９ｆグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出。**＜重複＞**ＲＢ022掘立柱建物跡柱穴２と重複するが、検出面で柱穴覆土の黒さから一目瞭然に柱穴の方が新しいことが分かったので（明瞭に円を描いていた）、通して半裁せず別々に調査した。黒い小穴カクラン（耕作時のもの。稲株痕？）多し。**＜図・精査状況＞**Ａ´側の上場、完掘時掘りすぎて断面図と平面図合わない。検出時、黒褐色土（１層）の部分が不整形で、遺構か疑問に思っていたが、半裁して霜降り状の覆土（３層）まで掘った結果納得した。柱穴２の横掘りすぎ（Ⅳ層中に茶色がかった部分あったので）。**＜覆土＞**概ね二層に分かれ、上（１、２層）層は黒土、下（３）層は霜降り状混土で、埋め戻したような土。**＜平面形・規模＞**カクランがひどくて不明だが、1.6×0.9m程度の小判形か。**＜断面形・深さ＞**逆台形～浅皿状。約10cm。**＜壁・底＞**壁～底は砂質Ⅳ層。底はほぼ平らで、ダラダラ立ち上がり、はっきりした壁を持たない。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**出土遺物はないが、重複関係からＲＢ022掘立柱建物跡より古く、覆土から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）の可能性が高い。規模・平面形と覆土下層から、墓の可能性がある。

ＲＤ207土坑（第38図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞西区南西端、－１Ｅ５ｗグリッド。前年度Ⅳ層下部面黒褐色土で検出。近世～現代のＲＺ035柱穴群の中にある。**＜重複＞**遺構との重複はないが、周囲に黒い小穴カクラン（耕作時のもの。稲株痕？）あり。**＜図・精査状況＞**検出時西半に灰色の硬い土が見え、酸化鉄が付着していたことから井戸跡を想定していたのに非常に浅かったので拍子抜けした。半裁時、力の強い作業員が力任せに掘ったので、南半の底を掘りすぎている可能性がある。**＜覆土＞**二層に分かれ、上（１層）層は黒褐色土、下（２）層は非常に硬い灰色土で酸化鉄付着。半裁時は記憶が定かでない部分があるが、下層はほぼ土坑全域に広がり、その上の東側のやや窪んだ範囲にⅡ層（クロボク土）再堆積土が覆ったといった状態である。**＜平面形・規模＞**1.7m×1.4m程度の胴張隅丸方形。**＜断面形・深さ＞**削平されているせいか、立ち上がりがほとんどなく、浅皿状。約10cm。**＜壁・底＞**北東半分の壁はⅣ

層下部で、北東端の底も同様である。その他の壁～底は、礫がゴロゴロ露出するⅣ層最下部～Ⅴ層最上部。底はほぼ平らで、ダラダラ立ち上がり、はっきりした壁を持たない。**＜出土遺物＞**17次調査で検出面から18世紀の梁付埦が出土している。**＜時期・所見＞**埋土からの出土遺物はないが、覆土（１層）から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）の可能性が高い。点圧し敷き詰めたような硬い下層（酸化鉄付着）は何を意味するのだろうか。古代の遺構は周囲に他になく、ポツンと点在している。

ＲＤ208土坑（第38図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞西区北西端、－３Ｅ18ｔグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出。ＲＤ209土坑と連続しているように見え、一連のものである可能性も高いが、覆土は別れるので（後述）、前年度の登録どおり別土坑として扱った。ＲＥ016住居状遺構の北東、谷落ち際に位置する。北側は遺跡北限の湿地である。**＜重複＞**前述のようにＲＤ209土坑と重複する。通して半裁してみても覆土は接するように分かれ境界も曖昧だったが、５層の方が新しく見え、平面形からもそう判断した方が合理的なので、一応ＲＤ209土坑の方が新しいと判断した。周囲黒い小穴カクラン（耕作時のもの。稲株痕？）多し。**＜図・精査状況＞**焼土範囲、断面と平面の見た目の印象の違いで、合わない。検出時、ＲＤ209と新旧関係はっきりしないので通して半裁。焼土が検出されたが、残りがあまり良くなかったので土坑平面図作成時にまとめて記録しようとサブトレンチ状に掘り進んだ。**＜覆土＞**１～４層が相当。燃焼と根カクランにより細かく分かれるが、Ⅳ層汚れ再堆積上に焼土というのが基本か。**＜平面形・規模＞**カクランがひどくて掘り込みもはっきりせず、特に平面形はあやしい。不明だが、80×60㎝程度の不整方形～円形に、約60×15㎝の不整溝状の張り出し部が付くようだ。張り出し部が付くのは間違いない。**＜断面形・深さ＞**カクランがひどくて不明瞭だが、逆台形～浅皿状か。約10㎝。**＜壁・底＞**覆土焼土下（炭化物含む）１～３㎝で底となる。壁～底は砂質Ⅳ層。張り出し部の反対側は、浅皿状に窪み、底は概ね平らで、ダラダラ立ち上がり、はっきりした壁を持たない。張り出し部の基部底が二箇所に分かれて表面うっすらと焼けている（第38図左図）。底焼土は、裁ち割った結果最大厚３㎜程度で、厚さは張り出し先端に向かって薄くなる（手前の方がよく焼けている）。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**出土遺物はないが、覆土から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）の可能性がある。中世のカマド状遺構にやや似ているが、張り出し部は全く火を受けていない。中世後半のカマド状遺構は隣接する矢盛遺跡で比較的多く検出されているが（当センター報告書第534、555集）、本遺構の場合は覆土が中世のそれほど黒くなく、近くにカマドを持たないＲＥ016住居状遺構があることから想像をたくましくすれば、古代のカマド状遺構なのかもしれない。焼土が検出された点や平面形が近接するＲＤ210土坑にもやや似るが、張り出し部を持たない点が異なり出土遺物は多い。その他の可能性では、土師器焼成坑があり、隣接する細谷地遺跡では多数検出されているが（当センター報告書第514集ほか）、やはり張り出し部は持たないし、焼成失敗品などが裏付けとして発見される必要がある。

ＲＤ209土坑（第38図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞西区北西端、－３Ｅ17ｔ～18ｕグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出。ＲＤ208土坑と連続しているように見え、一連のものである可能性も高いが、覆土は別れるので（後述）、前年度の登録どおり別土坑として扱った。ＲＥ016住居状遺構の北東、谷落ち際に位置する。北側は遺跡北限の湿地である。**＜重複＞**前述のようにＲＤ208土坑と重複する。通して半裁してみても覆土は接するように分かれ境界も曖昧だったが、５層の方が新しく見え、平面形からもそう判断し

た方が合理的なので、一応ＲＤ209土坑の方が新しいと判断した。周囲黒い小穴カクラン（耕作時のもの。稲株痕？）多し。**＜図・精査状況＞**検出時、ＲＤ208と新旧関係はっきりしないので通して半裁。**＜覆土＞**５層のみが相当。Ⅱ、Ⅳ層混土。**＜平面形・規模＞**80×70㎝程度の不整円形。**＜断面形・深さ＞**浅皿～浅いすり鉢状。約10㎝。**＜壁・底＞**壁～底は砂質Ⅳ層。底は浅いすり鉢状で、あまり平らではないが傾斜は緩やかである。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**出土遺物はないが、覆土から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）の可能性がある。

ＲＤ210土坑（第39、46図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞西区北西端ＲＥ016住居状遺構内、－３Ｅ20ｕグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で３号住居跡検出。十字ベルト設定して掘り始めたが、底の高さがＲＥ016と合わない場所があった。焼土が検出されたが、掘り進めるうちカマドでないことが明らかになったので土坑として別に登録した。遺跡北限の湿地に近い。**＜重複＞**前述のようにＲＥ016住居状遺構と重複し、通して半裁しているが、間に長芋のカクランが入って新旧関係不明。印象としては本土坑の方が新しいか。南東側にＲＤ211土坑があり、重複していた可能性があるが、ＲＤ211はＲＥ016精査後に床面で見つけ、ＲＤ210精査時には存在さえ認識されていなかったので、新旧関係不明。ただし、検出状況からは本土坑の方が新しい可能性がある。周囲長芋のカクランひどい。その他にも耕作時のカクランひどい。**＜図・精査状況＞**カクラン範囲、完掘時掘りすぎて、断面図と平面図合わない。なお、調査はＲＥ016住居状遺構と同時に行い、土層も一括して注記していたが、土坑報告にあたり分離してつけ直している。ここで５層というのは第20図の11層と同じであることをお断りしておく。**＜覆土＞**カクランひどく、確認できたのは５層のみ。Ⅱ、Ⅳ層混土で、一般的な覆土だが、土器と焼土粒顕著に含むところが違う。**＜平面形・規模＞**カクランがひどくて不明だが、1.3×0.45ｍ程度の長楕円形。**＜断面形・深さ＞**カクランがひどくて不明瞭だが、南北方向に底が二段になっており、南側の方が下がる形。東西方向は記録がなくて不明。約20㎝？**＜壁・底＞**壁～底は砂質Ⅳ層。壁はカクラン多く不明瞭。南北方向に底が二段になっており、南側の方が下がり、南側の底は平らでなく南に向かって傾斜している。北側の底は平ら。

＜出土遺物＞（出土状況）今回検出された土坑にしては珍しく多くの土器が出土した。カクランがひどく、確認できていないが全て５層の出土か。いずれも覆土からの出土で、それも比較的底から離れた位置から出土している（写真図版38下から二段目右に北東からの写真）。p.１は須恵器大甕胴部破片で、内面を上に向け、北から南に大きく傾斜して出土（底から８㎝以上浮いている）。p.２は土師器坏底部で、底を上に向けほぼ水平に出土（底から４㎝浮いて）。p.３は土師器甕底で、内面を上に向け正位にほぼ水平に出土（底から２～３㎝浮いて）。p.４は内黒土師器坏で、内面を上に向けほぼ水平に出土（底から２㎝浮いて）。p.５は須恵器壺？で、内面を上に向け西から東に傾斜して出土（底から６～４㎝浮く）。p.６は土師器で、p.１、５と同様に傾斜して出土。p.７はp.１の下から出土。**（遺物）**ＲＥ016住居状遺構出土として取り上げられたものも、本土坑帰属として判断した。土器1,032ｇ（須恵器含む）（第46図53～59、５掲載）出土。

＜時期・所見＞出土遺物と覆土から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）の可能性がある。平面形や底は中世のカマド状遺構にやや似ており、覆土に焼土も含まれているが、実際に火を受けている場所はない。出土土器は多いが焼成失敗品ではないので、ＲＤ208土坑と同様土器焼成坑の可能性もない。底が二段なのは、本来別々の穴で、覆土がカクランを受けたため土器が両方の穴に跨っているだけの可能性もある。

ＲＤ211土坑（第39、46図、写真図版39）

＜位置・検出状況＞西区北西端ＲＥ016住居状遺構内、－３Ｅ20ｔ～ｕグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で３号住居跡検出。今年度住居跡（ＲＥ016）精査後床面から黒いシミが検出された。西側に連続して擬似現象のシミがあり（３層）、全体が自然のものかと思ったが、半裁した結果底が明瞭に検出されたので土坑として登録した。遺跡北限の湿地に近い。**＜重複＞**前述のようにＲＥ016住居状遺構と重複するが、住居状遺構検出時には本土坑の存在に気づかなかったので新旧関係不明。検出状況としては本土坑の方が古いか。北西側にＲＤ210土坑があり、重複していた可能性があるが、ＲＤ211はＲＥ016精査後に床面で見つけ、ＲＤ210精査時には存在さえ認識されていなかったので、新旧不明。検出状況としては本土坑の方が古い可能性があるが、平面位置から住居状遺構の壁を意識して土坑を掘っている可能性も窺え、そうすると逆転する。周囲長芋のカクランひどく、東壁が壊されている。その他にも耕作時のカクランひどい。西側に同時に検出されたシミ（３層）は、半裁の結果底が階段状で、シミは周囲にどんどん広がってしまうので、自然現象（植物根カクラン？）と考えた。

＜図・精査状況＞半裁時、覆土と底が明瞭に分かれパカパカと剥がれたので土坑と確信した。**＜覆土＞**二層に分かれ、上（１）層は黒褐色土、下（２）層は汚れⅣ層再堆積土で、一般的な覆土だが、下層に土器を含む。**＜平面形・規模＞**1.15×1.3m程度の略円形。**＜断面形・深さ＞**カクランとＲＥ016を先に精査したことにより不明瞭だが、逆カマボコ形か。20cm以上。**＜壁・底＞**壁～底は砂質Ⅳ層。壁傾斜するが、底は比較的平ら。植物によるカクラン多い。**＜出土遺物＞**土器34ｇ（第46図60掲載）出土。p.１のみか。**＜時期・所見＞**出土遺物と覆土から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）の可能性がある。平面形・規模・底の形状から墓の可能性もあり、ＲＥ016より新しいとすれば廃屋墓の可能性がある。覆土はそれらしくないが、ＲＢ022掘立柱建物跡の柱穴掘り方埋土も黒かったので、その可能性もないとは言えない。

ＲＤ212土坑（第39図、写真図版39）

＜位置・検出状況＞西区北西端ＲＥ016住居状遺構内、－３Ｅ19ｔ～ｕグリッド。前年度Ⅳ層面黒褐色土で３号住居跡検出。十字ベルト設定して掘り始めたが、底の高さがＲＥ016と合わない場所があった。覆土断面から住居跡（ＲＥ016）を切っている可能性が高いので土坑として別に登録した。遺跡北限の湿地に近い。**＜重複＞**ＲＥ016住居状遺構と重複。通して半裁し、その覆土断面から本土坑の方が新しい。黒小穴状の耕作時のカクランひどい。**＜図・精査状況＞**Ａ側の上場、完掘時掘りすぎて断面図と平面図合わない。なお、調査はＲＥ016住居状遺構と同時に行い、土層も一括して注記していたが、土坑報告にあたり分離してつけ直している。ＲＥ016と通して半裁しているが、土層ベルト裏面で２層がＲＥ016の覆土の下に入り込んでいるように見えて、この“ねじれ”から当初土坑とすることに躊躇し自然現象かと思ったが、整然とした壁～底から思い直した。**＜覆土＞**二層に分かれ、上（１）層は黒色土、下（２）層はⅡ、Ⅳ層混土で、一般的な土坑覆土。**＜平面形・規模＞**１×0.6m程度の不整長楕円形。**＜断面形・深さ＞**逆台形～カマボコ形。約33cm。**＜壁・底＞**壁～底は砂質Ⅳ層。壁は比較的垂直に立ち上がり、底は概ね平ら。**＜出土遺物＞**鉄製品らしきものが覆土上層から出土していたように記憶するが、大雨による土砂流入後見えなくなってしまった。**＜時期・所見＞**覆土から古代（９世紀後半～10世紀初頭？）の可能性がある。位置からＲＤ211土坑同様ＲＥ016を意識して掘削している可能性がある。

6　焼　　土（第42図、写真図版39）

東区に１基、西区に１基検出した。いずれも、黒土中、下に検出され、あまり発達せず、時期不明。

ＲＦ003焼土（第42図、写真図版39）
＜位置・検出状況＞東区中央東寄り、－１Ｉ３ａグリッド。雨裂跡緩斜面覆土黒土下（Ⅲ層上面）中に検出し、面的に広がることから明らかに現地性のものであると判断した。重機で表土を剥いでいる際に既に検出していた。**＜重複＞**重複遺構はないが、周囲に耕作によるカクラン多く、焼土の一部もカクランを受けブロック状に飛んでいる。**＜図・精査状況＞**ＲＦ004を先に1/20で実測しており、あえて今回1/10に変えて実測するほどの理由がなかったので、そのまま1/20で実測した。**＜覆土＞**不明。**＜平面形・規模＞**約30×20㎝の楕円形。**＜断面形・厚さ＞**厚さ３㎝程度。検出時の印象に比べて未発達。**＜形成層＞**Ⅱ層下部～Ⅲ層上面らしい。周囲の遺構検出面であるⅣ層上面より６㎝ほど高い。**＜帰属施設＞**確認できなかった。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**不明。形成面から古代としたくなるが、周囲に当該期の遺構なく、逆に現代の耕作時のカクランが顕著なことから現代の可能性を否定しきれない。

ＲＦ004焼土（第42図、写真図版39）
＜位置・検出状況＞西区中央南端、－２Ｆ24ｆグリッド。前年度Ⅳ層面で検出登録された４号土坑の黒土上面にあった。土坑自体は半裁の結果擬似現象（風倒木痕）として退けられたのだが、焼土の取り扱いに困った。焼土自体は、不整形でちりぢりのブロック状、細かい焼土粒の集まりで炭化物も出土せず、通常なら現地性でないとして遺構として登録しないのだが、周囲は削平されており、削平の結果こうした状態を呈しているか、あるいは黒土中に形成されているためかと思われたので、遺構とした。**＜重複＞**重複遺構はない。**＜図・精査状況＞**Ａ側の上場、遺構かどうか定かでないので1/10でなく1/20縮尺で実測した。半裁後ネズミに穴を掘られた。**＜覆土＞**不明。**＜平面形・規模＞**30㎝程度の範囲で不整形。**＜断面形・厚さ＞**残存厚は３㎝程度。**＜焼土の状態＞**上述のように、ちりぢりのブロック状。根穴等のカクランによる部分もあるかもしれない。**＜形成層＞**風倒木痕の黒土（クロボク土）。**＜帰属施設＞**確認できなかった。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**時期不明。

7　溝　　跡（第40～41、46図、写真図版31～33）

東区に１条、西区に２条検出した。時期はいずれも平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。東区のそれは、第８・９次、第16次調査区から続くＲＧ039溝跡で、総延長100ｍを超え、上幅1.5ｍ、深さ50㎝を超える立派なものである。西区の１条（ＲＧ063）は、今回調査した範囲では、途中で曲がり、長さ約58ｍである。第７次調査区のＲＧ028に続くとしたら全長150ｍにも及ぶが、狭く浅い。覆土に灰白色火山灰が検出されたＲＢ021掘立柱建物跡と重複している。もう１条は、長さ約３ｍで一部が検出されたのみである。

ＲＧ039溝跡（第40、46図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞東区東端、－２Ｉ24ｉ～－１Ｉ４ｊグリッド。Ⅳ層面黒褐色土で検出。第８・９次調査区（当センター報告書第494集、2007年発行）、第16次調査区（当センター報告書第580集、

2011年発行）からの続きで、16次調査区は今回の担当者が調査したが、失念していて、検出時調査区端にシャープに伸びる遺構プランを見て大型竪穴住居跡かと当初思った。北東側の調査範囲外にさらに続く。南端は、第３次調査区（当センター報告書第393集、2002年発行）のＲＧ012溝跡に続く可能性が高いが、図面上にはズレがある。**＜重複＞**今回の調査範囲にはないが、南側の過去の調査区では多数ある。**＜図・精査状況＞**底の認識の違いはあるが、断面図と平面図は概ね合っている。第９次調査区との境がはっきりせず、一応ここではないかと想定される範囲まで重機で剥いでいたが、検出した結果調査後に埋め戻した範囲がなかなか出てこず、結局大幅に３×３ｍくらいの範囲を広げてしまった。しかし、後で良く見ると、ほぼ最初の範囲で合っていて、未調査と見えたのは、９次調査時道路との境に植え込みがあったため東端が調査できなかっただけであったことがわかった。**＜覆土＞**以前の調査区の土層と対照できなかったので厳密ではないが、概ね以前の調査区と同様の黒褐色砂礫層（Ⅱ層とⅤ層の再堆積混土）だと思う。ただし下部に酸化鉄等の水成層が認められる。**＜走向・規模＞**南側はしばらく南南西に向かうが、第16次調査区内飯岡才川の手前で、大きく曲がって西南西に向かい、最終的に飯岡才川に合流するようである。全長100ｍを超えるが、さらに北側に続く。検出面の幅は1.8ｍ以下。**＜断面形・深さ＞**逆カマボコ形の場所が多いが、北側では底が角ばって下がり箱薬研に近い。検出面の高さの違いによるものと思われるが（北端では雨裂内にあるが、他と同様検出時には雨裂底のⅣ層上面まで下げた）、調査区南端では深さ60㎝、北端では30㎝程度。前の調査区では、第16次調査区北端でⅤ字形、60㎝。崩れている所は逆カマボコ形を呈し60㎝に満たないようである。**＜壁・底＞**断面実測箇所より北は、検出面－30㎝まで砂質Ⅳ層、その下20㎝までは白色化した砂質Ⅳ層（南寄りは砂礫混じりⅣ層）、底は砂層で酸化鉄多い。南は、検出面から15～20㎝下まで砂質Ⅳ層、その下～底砂礫（Ⅴ）層である。他の調査区でもおおむね同様だが、南に行くと底も砂質Ⅳ層までに納まってしまう。**＜出土遺物＞**パラパラしか出土しない。土器（須恵器含む）295ｇ（第46図61、６掲載）出土。16次調査区では比較的多く出土している。**＜時期・所見＞**出土土器とこれまでの調査結果から、９世紀後半～10世紀初頭か。今回調査したＲＧ063溝跡と同様の構造を持っており、何らかの関係があるかもしれない。

ＲＧ063溝跡（第41、46図、写真図版31～32、42上段）

＜位置・検出状況＞西区中央東寄り。－２Ｅ15ｓ～－２Ｆ２Ｆグリッド付近。前年度検出。Ⅳ層検出面に黒土で明瞭だが（黒すぎて、新しいかという印象も）、西端は耕作によるカクランで途絶えている。北端は、遺跡範囲外の湿地に続くようだ。西側は、第７次調査区（当センター報告書第508集、2008年発行）のＲＧ025～028に続くようだが（第３、４図）、断絶があり、さらに第７次調査でも、一連のものと推測される溝跡を断絶のため別々に命名しているので、今回も同様に扱い、新たにＲＧ063溝跡と命名した。ＲＢ022掘立柱建物跡と軸方向が一致する場所があり、ＲＡ055住居跡、ＲＥ015住居状遺構を意識している可能性がある。

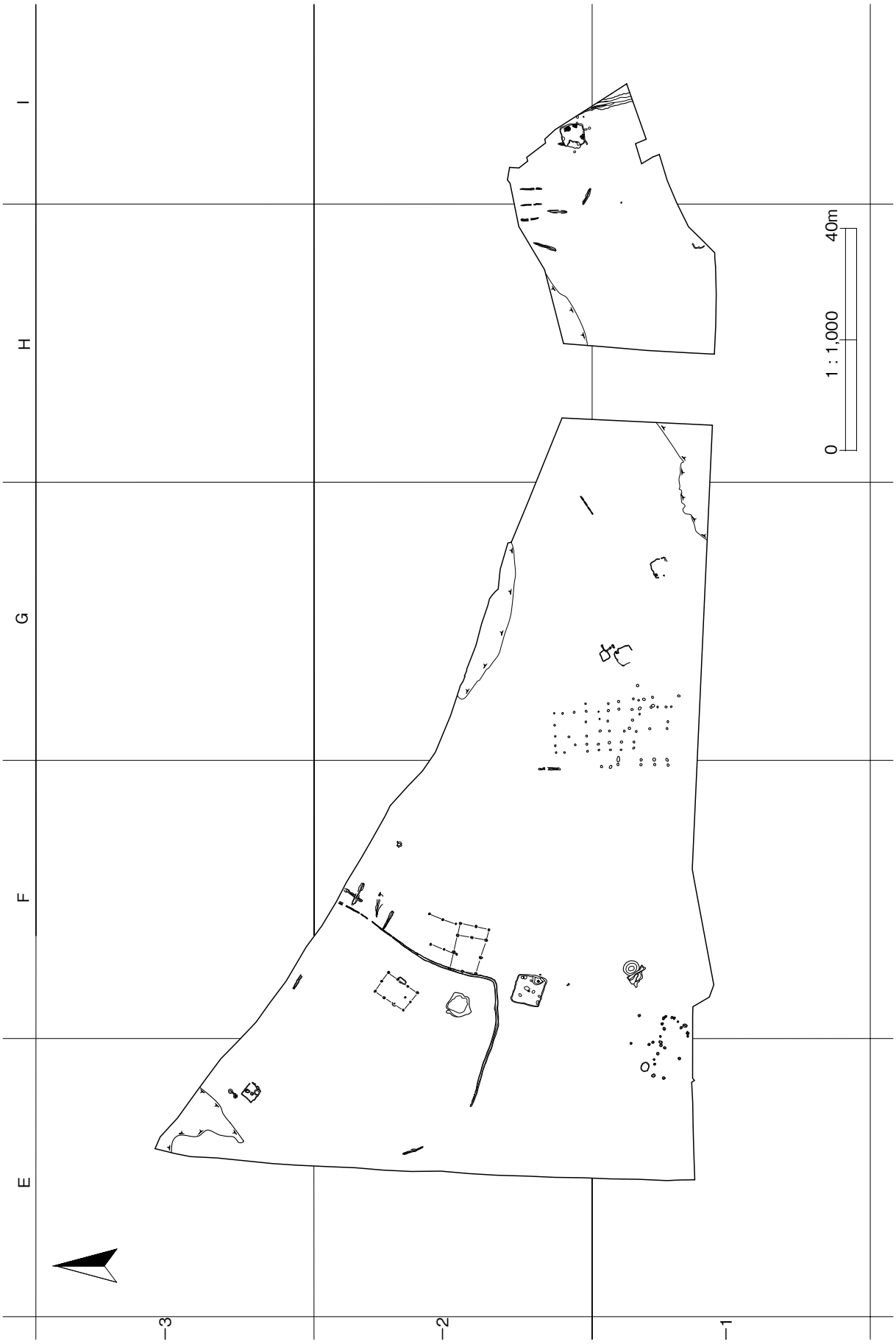
＜重複＞ＲＢ021掘立柱建物跡の柱穴10、６、11と重複するが、検出面で重複に気づいていなかったため新旧関係不明。溝跡覆土は黒く、柱穴覆土は淡い。検出状況から判断すれば、溝跡の方が新しいのではないかと推測される。柱穴の幾つかから灰白色火山灰が検出されているので、灰白色火山灰＝十和田ａ降下火山灰（西暦915年）とすれば、溝跡は10世紀初頭以降の可能性が高い。ところで、ＲＧ063は、上述のように第７次調査区のＲＧ025、026、027、028溝跡と一連のものである可能性が高い。ＲＧ025～028には出土遺物がないので時期は特定できないが、これらの続きとされるＲＧ028溝跡は、ＲＡ010竪穴住居に切られることから、９世紀後半より古いとされる（報告書：p.67）。今

回の調査所見と矛盾することになるが、新旧判断の証拠が明示されていないので、これ以上のことはわからない。ただし、ＲＡ010竪穴住居出土土器を見ると今回出土土器と著しい差はなく、違いは位置づけ（解釈）による部分が大きい。そうすると、重複関係はわからないが、時期としてはそう変わらない可能性が高い。長芋耕作痕により、北端よりやや南の部分は浅く途切れがち、西端は断絶しており、西端は、上面は何度もクリーニングし、さらに残っている部分から西に掘り進めてみたが、続きを確認することはできなかった。長芋以外にも耕作痕多し。また、南東端の西に曲がってしばらく経った場所には風倒木痕が認められ、検出状況から風倒木痕の方が古い。

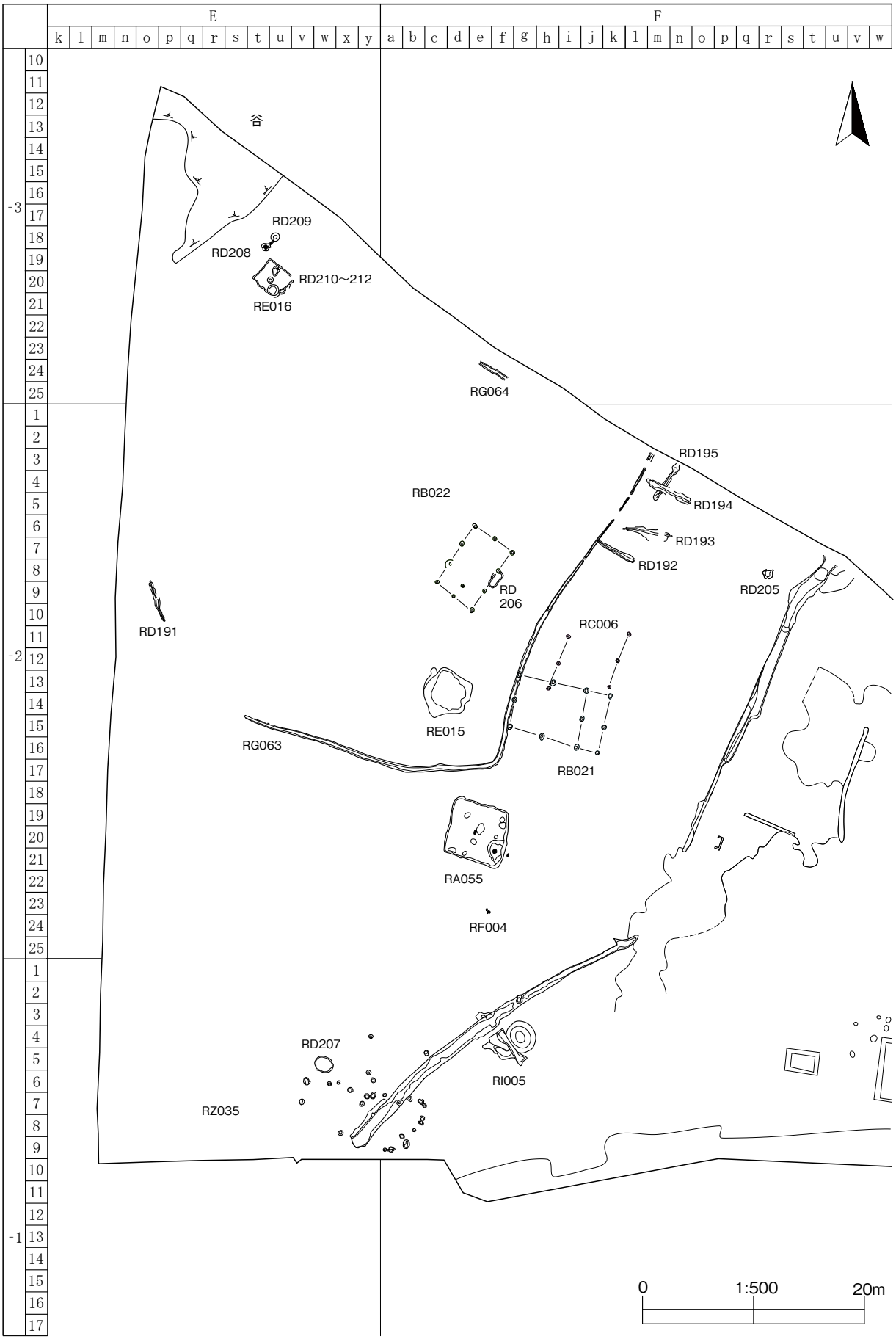
＜図・精査状況＞平面図は、光波測量機と電子平板システム（Cubic社製実測支援システム「遺構くん」）を用いて小縮尺（1/200）で作成したため、断面図（1/20作成）と照合していない。排土の関係で、西区終盤にＲＢ021、ＲＣ006等とともに調査した。**＜覆土＞**黒色土を基本とするが、やや深めの場所には、中位に黒土に黄褐色土が混じる土、下位に汚れた黄褐色土（Ⅳ層汚れ再堆積）が見られる。**＜走向・規模＞**今回の調査区では、西南西から途中で曲がって、若干湾曲しながら北北東に向かい、遺跡外の湿地に至る。底の標高はほとんど変わらないが、南より北側が10㎝程度低いので、水が流れればこの方向に進むはずである。長さ約58ｍ。上述のように、西側は、７次調査区のＲＧ025～028溝跡に続く可能性があり、そうすると全長150ｍにも及ぶ。検出時の幅は50㎝以下で、７次調査区も変わらない。**＜断面形・深さ＞**Ｕ字状～浅皿状で、Ｅ－Ｅ´断面付近だけ約35㎝と深めだが、他は全て20㎝以下と浅く、７次調査区でも同様である。今回の調査区の深さを西から順に辿ると、カクランを過ぎると比較的深いが、カーブの前後では浅くなり、ＲＢ021掘立柱建物跡を過ぎるとさらに浅くなるが、緩やかに弧を描く付近から階段状にやや深くなり、その後長芋カクラン付近で浅くなるが、最後再び深くなる。**＜壁・底＞**全て砂質Ⅳ層（一部礫露出）。底は多少凹凸があるが、概ね平らである。大きくカーブする辺りでは、壁～底に礫が若干露出している。**＜出土遺物＞**土師器がパラパラと出土したが、手違い（注記ミス？）で重量記録なし（第46図62、63掲載）。その他、フイゴ羽口破片（同２）、鉄製品（同10、11）、砥石類（写真図版52の18、19）破片が出土している。**＜時期・所見＞**重複関係に若干の問題を抱えているが、出土遺物から、９世紀後半～10世紀初頭であることは間違いない。概ね北側に行くほど底が下がっているが誤差範囲に近く、幅も含めて排水目的とは考えにくい。７次調査区のＲＧ028溝跡も一連のものであるとしたら、遺跡北側の湿地を含めると全体形が歪んだ長方形になる。遺跡南東端にあるＲＧ039溝跡も、本溝跡と比べると立派なものであるが形や走向が若干似ており、何らかの関係を有するかもしれない。

ＲＧ064溝跡（第40図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞西区中央北端。－３Ｆ23ｅ～24ｇグリッド。両端はカクランで途切れ、その先も検出できなかった。前年度Ⅳ層面黒褐色土で検出。北側は、遺跡範囲外の湿地。**＜重複＞**両端カクランで残っていない。黒小穴の稲株痕？多。**＜図・精査状況＞**Ａ´側完掘時掘り広がって、平面図と断面図合わない。**＜覆土＞**二層で、上層はクロボク土（Ⅱ層再堆積土）、下層は周囲から流れ込んだ汚れⅣ層再堆積らしい。**＜走向・規模＞**北西から南東。北側の湿地に沿っている。検出できた範囲は約３ｍで、さらに東西に続いたものと推測される。**＜断面形・深さ＞**浅皿状。12㎝未満。**＜壁・底＞**壁～底砂質Ⅳ層。西側の底の一部が落ち込んでいるが、元々そうなっていたのかカクランが入っていたのか確認できていない。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期・所見＞**出土遺物がなく、他に確たる証拠がない中で危険であるが、覆土からは平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

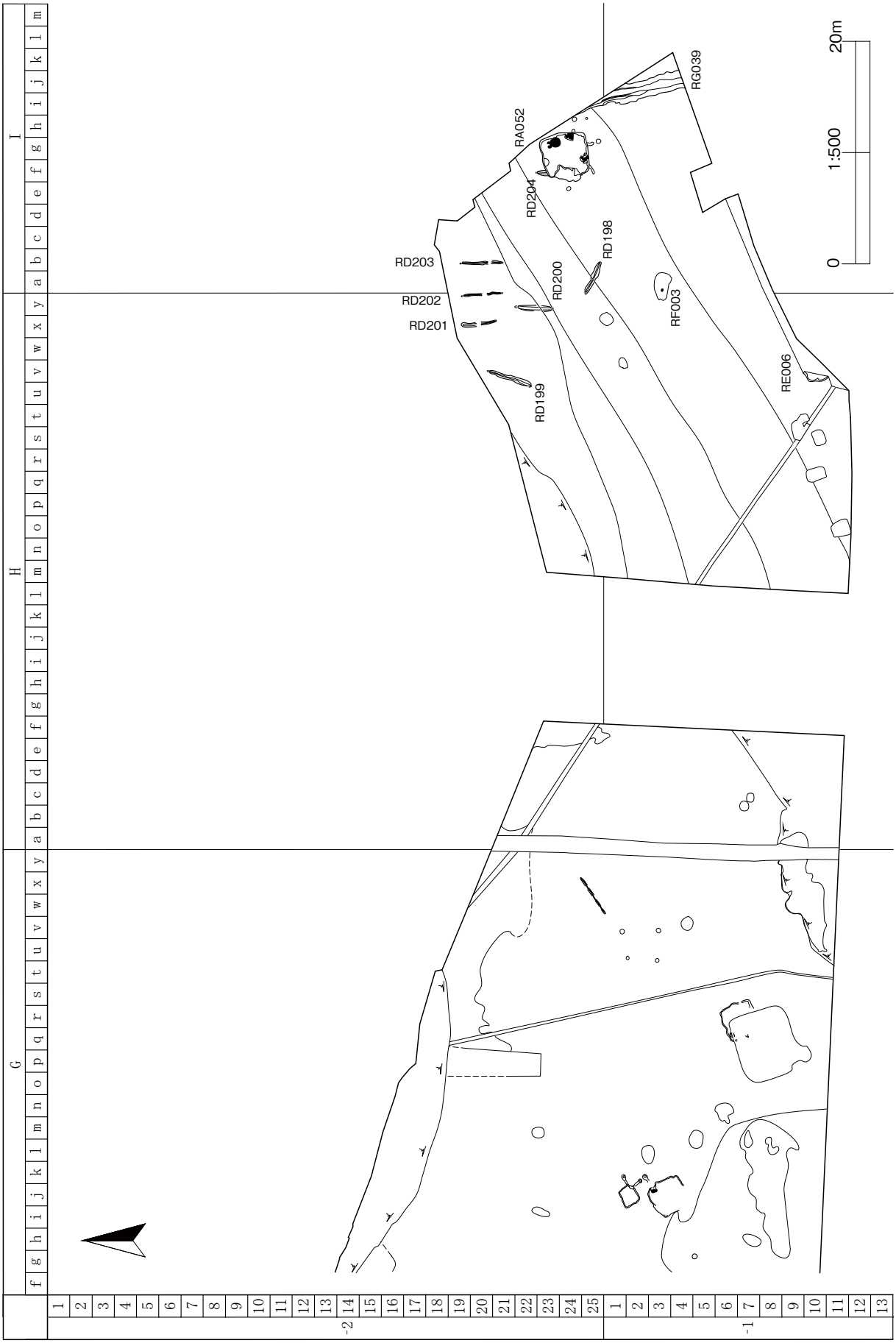


第７図　遺構配置図


E
F
k l m n o p q r s t u v w x y
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w
-3
-2
-1
谷
RD209
RD208
RD210～212
RE016
RG064
RD195
RB022
RD194
RD193
RD192
RD
206
RD205
RD191
RC006
RE015
RG063
RB021
RA055
RF004
RD207
RI005
RZ035
0
1:500
20m

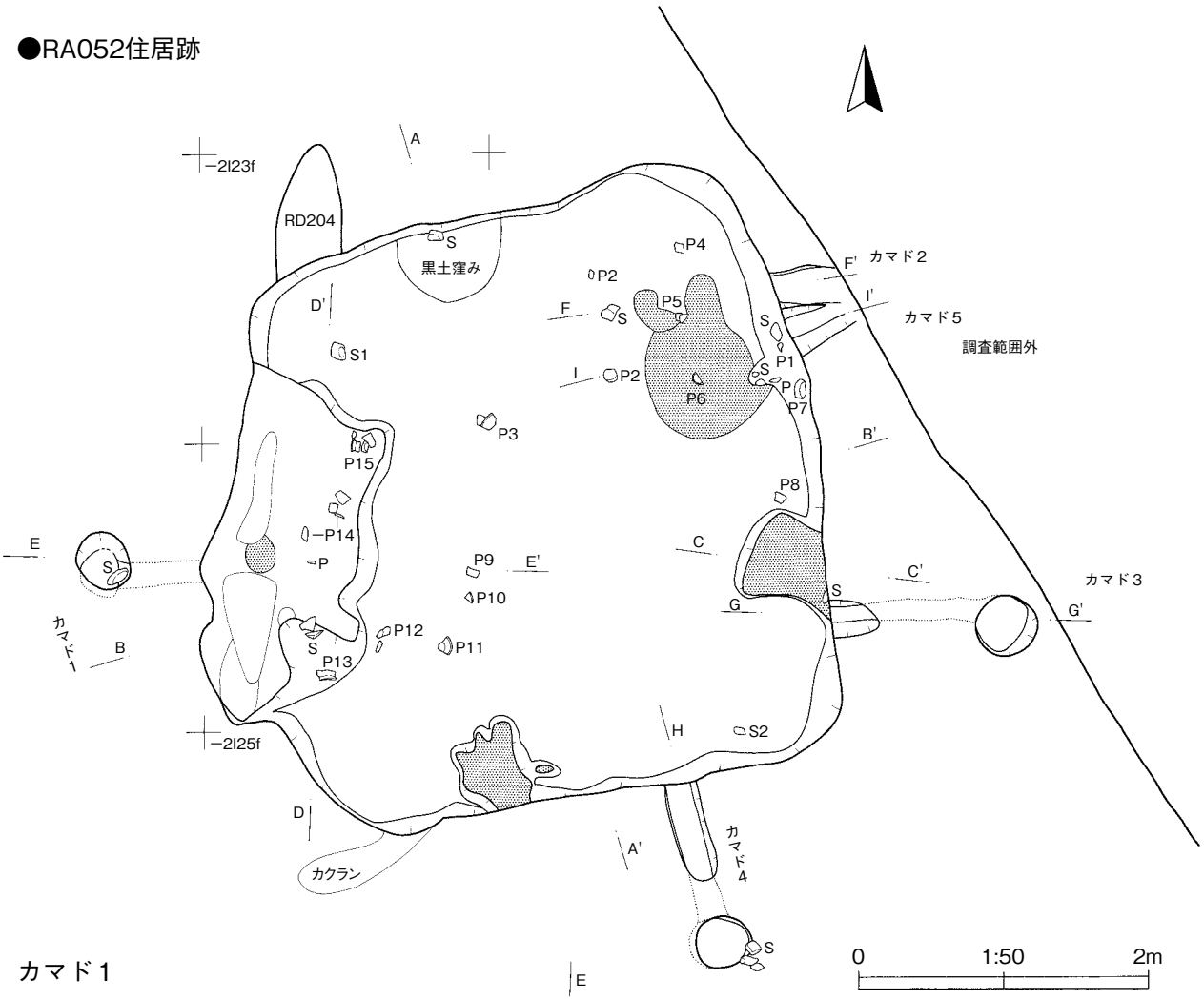
第８図　西区遺構配置図

第９図　北～南区遺構配置図

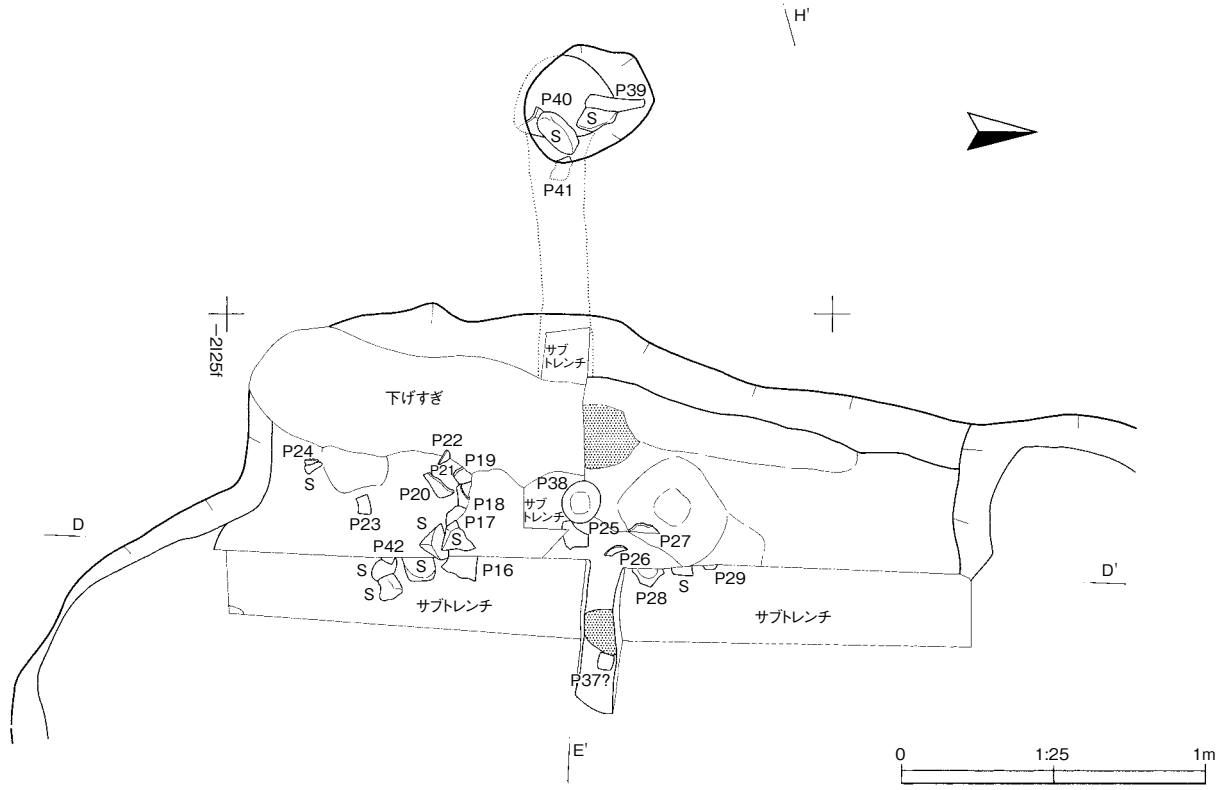


第10図　東区ほか　遺構配置図

●RA052住居跡

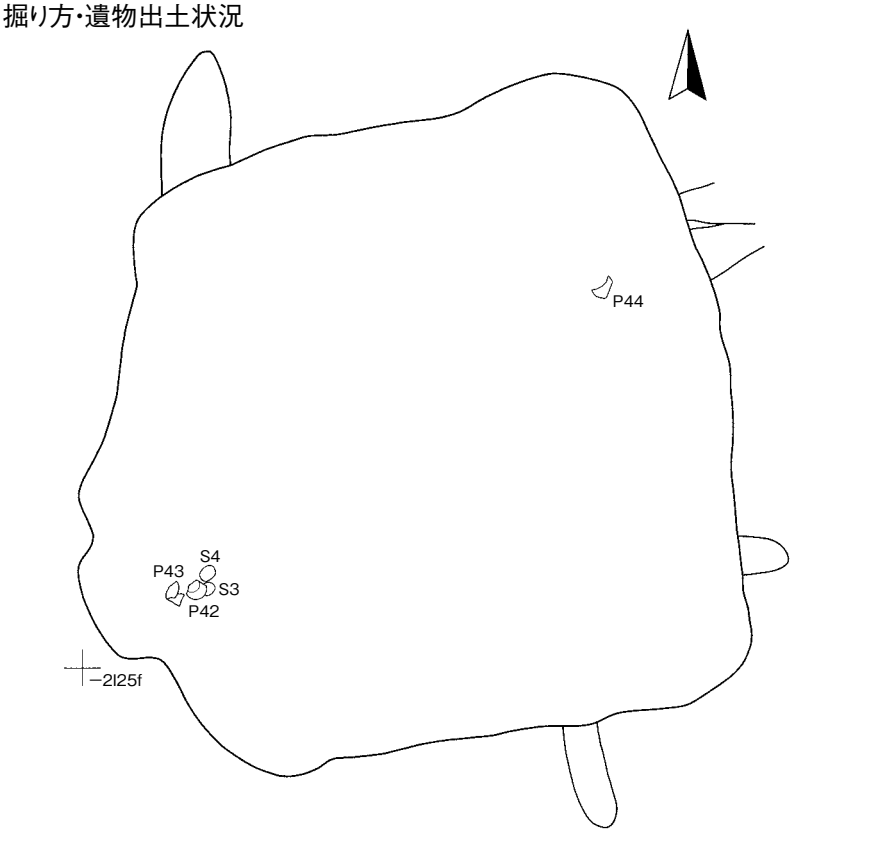


カマド1



第11図　RA052 住居跡（1）

掘り方・遺物出土状況



ＲＡ052住居跡

1：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の細かいブロック散る　砂質シルト　径２㎝以下のⅣ層ブロック、炭化物、焼土粒、ブロック含む。Ⅳ層ブロック全体的に散るが、層境に並ぶこともある。検討したが面的に違いが広がらず細分はできそうにない。

2：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子、ブロック多い。

3：10YR2/1黒色　シルト　粘性あり。ノペーとした感じに一様（自然現象？）。

4：10YR3/2黒褐色　シルト　汚れⅣ層再堆積。カマド崩土。

5：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック多い　シルト　Ⅳ層ブロックの含有量地点によって異なる。住居掘り方？（ある時の生活面より下という意味）埋土。

6：10YR1.7/1黒色　シルト　掘り方？埋土だが、５層に比べ黒くⅣ層ブロック少なめ。

7：10YR2/1黒色地に10YR6/2灰黄褐色のブロック　砂質シルト　白色粘土ブロック含む。６層と同じかもしれないが上面に酸化鉄広がる。掘り方埋土。

8：10YR5/4にぶい黄褐色地に10YR2/1黒色の霜降り状混土　シルト　掘り方埋土。

9：10YR6/2灰黄褐色地に10YR2/1黒色の霜降り状混土　シルト　８層の白色化したもの？　掘り方埋土。

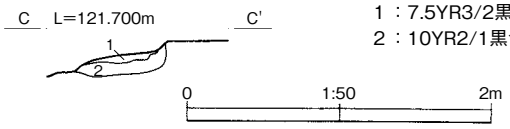
10：10YR5/6黄褐色　砂質シルト　Ⅳ層が白色粘土化したものに酸化鉄含む。地山。

11：10YR6/2灰黄褐色　粘土　シルト　Ⅳ層の白色粘土化したもの。地山。

0　1:50　2m

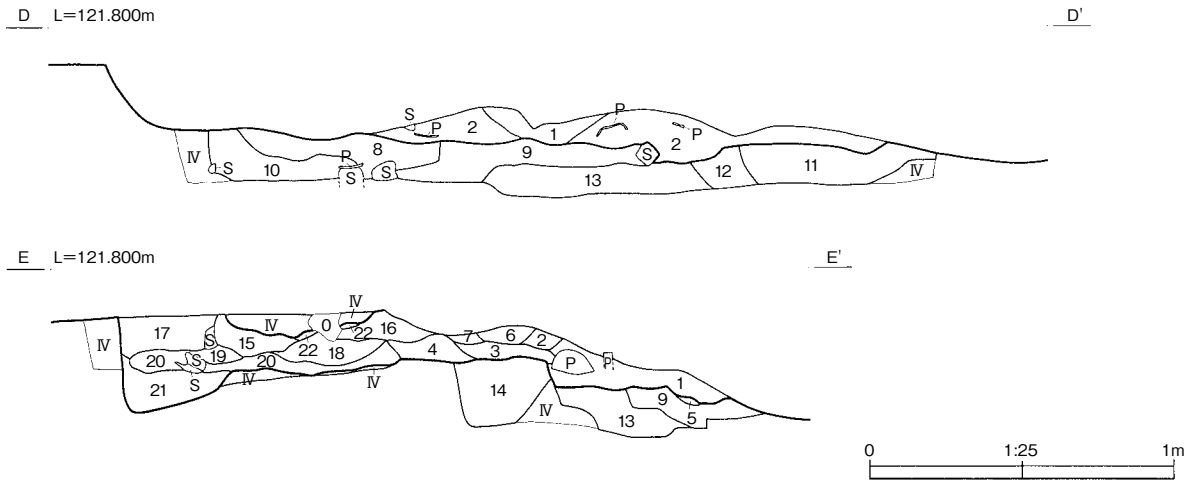
第12図　RA052 住居跡（２）

覆土焼土



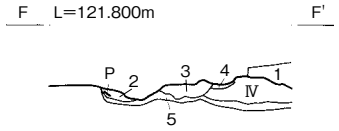
ＲＡ052住居内焼土（Ｃ－Ｃ'）
１：7.5YR3/2黒褐色　シルト　焼土。
２：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層ブロック、炭化物含む。カマド覆土。住居覆土１層と同じか。

カマド１

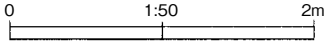


ＲＡ052住居カマド１（Ｄ－Ｄ'、Ｅ－Ｅ'）
０：根カクラン。
１：10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層ブロック、焼土ブロック、炭化物含む。炭化物面的に広がる部分もあり。カマド覆土。
２：10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　Ⅳ層再堆積土に、北側では焼土粒、ブロック含む。礫、土器含む。カマド本体崩落土。
３：10YR2/1黒色地に５YR4/4にぶい赤褐色のブロック　シルト　焼土ブロック含む。煙道覆土。
４：7.5YR3/1黒褐色　シルト　焼土粒含む。カマド内煙道覆土。
５：7.5YR4/2灰褐色　シルト　焚口焼土だが不明瞭。
６：５YR4/4にぶい赤褐色　シルト　天井焼土。
７：7.5YR3/1黒褐色　シルト　陥し穴覆土最上部？
８：7.5YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のダマ　シルト　Ⅳ層ブロック多く、焼土粒も僅かに含む。住居掘り方埋土？
９：10YR3/1黒褐色地に10YR6/6明褐色のブロック　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。住居掘り方埋土。
10：10YR3/2黒褐色　シルト　９層より暗いが同じらしい。住居掘り方埋土。
11：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のダマ　シルト　Ⅳ層粒子、ブロック含む。住居掘り方埋土。
12：10YR4/1褐灰色地に10YR5/6黄褐色のダマ　シルト　焼土粒含む。住居掘り方埋土。
13：10YR2/1黒色　シルト　粘性強い。Ⅳ層ブロック含む。住居掘り方埋土。
14：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い。Ⅳ層粒子散る。陥し穴覆土。
15：10YR2/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
16：10YR2/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層粒子含む。15層と同じと思うがⅣ層粒子少ない。
17：7.5YR3/1黒褐色　シルト　焼土粒多く、Ⅳ層粒子含む。
18：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。
19：7.5YR3/1黒褐色　シルト　18層と同じと思うが焼土粒含む。
20：7.5YR3/2黒褐色　シルト　焼土粒多く、４層と同じ？
21：7.5YR2/1黒色　シルト　ややもろい。
22：7.5YR3/2黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層が火を受けたもの。

カマド２

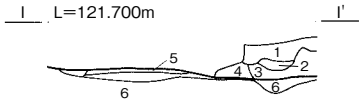


ＲＡ052住居カマド２（Ｆ－Ｆ'）
１：５YR3/1黒褐色　砂質シルト　焼土粒多い。
２：５YR4/4にぶい赤褐色　砂　焼土（カマド焚口）。
３：7.5YR4/4褐色　砂質シルト　Ⅳ層汚れ再堆積（酸化鉄付着）。貼床？
４：10YR3/1黒褐色　シルト　ややもろい。
５：N3/暗灰色　粘土



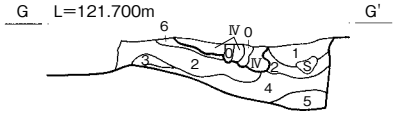
第13図　RA052 住居跡（３）

カマド５

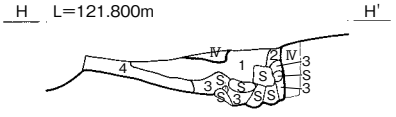


ＲＡ052住居カマド５（Ｉ－Ｉ'）
１：10YR2/1黒色　シルト
２：10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層ブロック。
３：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色の細かいブロック　シルト　Ⅳ層粒子含む。
４：10YR3/2黒色地に10YR5/6黄褐色の細かいブロック　シルト　Ⅳ層粒子多い。
５：7.5YR4/4褐色　砂質シルト　焼土に酸化鉄付着したものか酸化鉄そのもの。
６：10YR3/1黒褐色　シルト　上面に酸化鉄が層をなす。床下（掘り方埋土？）。

カマド３



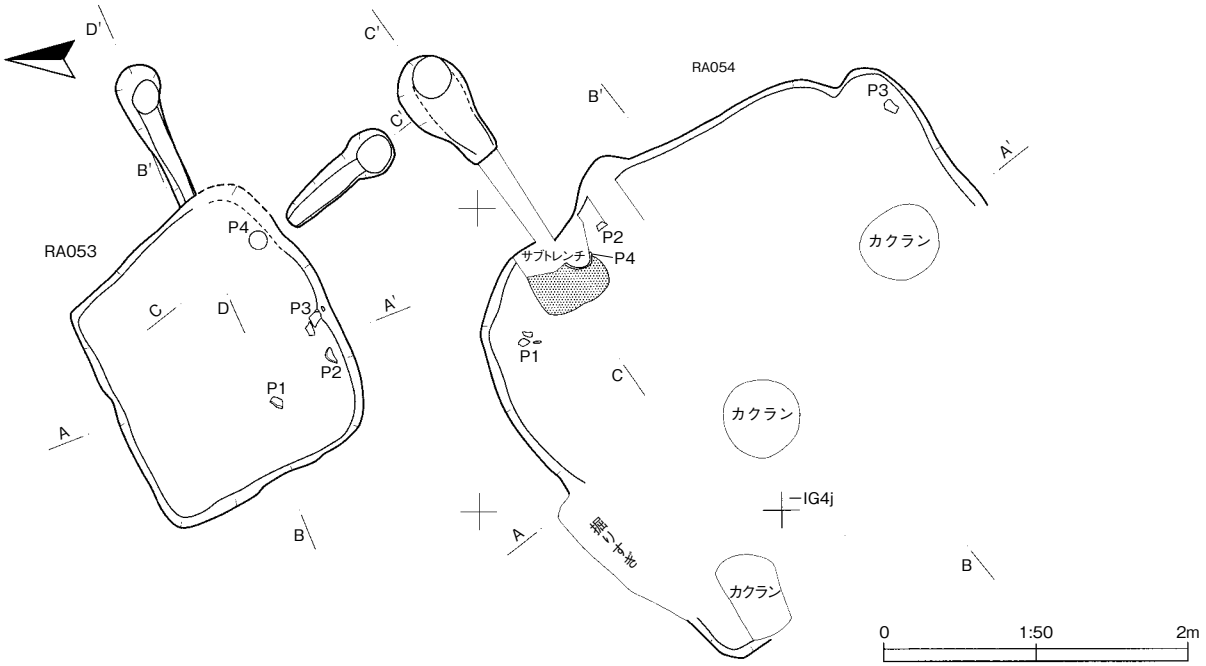
カマド４



ＲＡ052住居カマド３（Ｇ－Ｇ'）
０：根カクラン。
１：10YR3/1黒褐色地に10YR4/4褐色の細かいブロック　シルト　Ⅳ層粒子、ブロック多い。炭化物僅かに含む。
２：10YR3/1黒褐色　シルト　５㎜以下のⅣ層ブロック、粒子多く、焼土ブロック含む。カマド５の1層に似るが、より暗い。
３：10YR2/1黒色　シルト
４：7.5YR3/1黒褐色地に10YR4/4褐色の細かいブロック　シルト　1層によく似るが、３㎝大の焼土ブロック含む。
５：10YR2/1黒色　シルト
６：５YR3/2暗赤褐色　砂質シルト　Ⅳ層が焼けたもの。

ＲＡ052住居カマド４（Ｈ－Ｈ'）
１：10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　５㎜以下の焼土ブロック、Ⅳ層粒子含む。
２：10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　汚れⅣ層再堆積。
３：10YR2/1黒色　シルト　粘性強い。
４：10YR4/2灰黄褐色　シルト　細かいモザイク状に白色粘土、黒褐色土、酸化鉄付着Ⅳ層ブロック含む。

●RA053・054住居跡



第14図　RA052 住居跡（４）・RA053・054 住居跡（１）

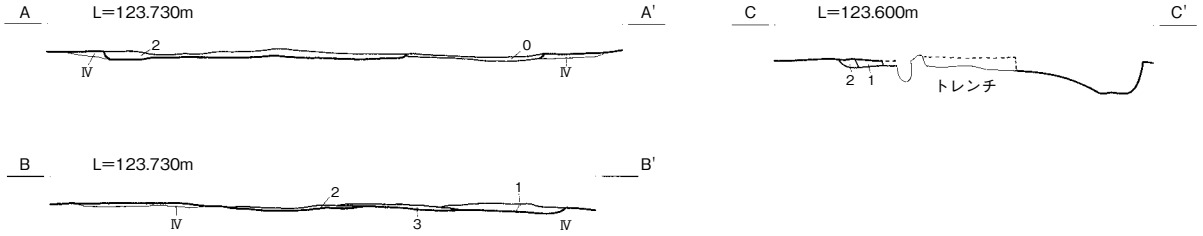
RA053

ＲＡ053住居跡
１：10YR3/1黒褐色地に10YR4/4褐色のブロック　砂質シルト　Ⅳ層粒子、ブロック含む。
２：N2/黒色　シルト　炭化物多く、焼土粒も含む。
３：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト　硬く締まる。縞状堆積でてん圧したような土（貼床かカマド崩土）。
４：10YR3/1黒褐色地に10YR4/4褐色のブロック　シルト　１層とほとんど同じだが炭化物含む。
５：10YR3/2黒褐色　シルト　汚れⅣ層再堆積。

ＲＡ053住居カマド１（Ｃ－Ｃ'）
１：10YR2/1黒色　シルト
２：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の大きなブロック　砂質シルト　Ⅳ層ブロック含む。カマド２の１層に非常によく似る。
３：10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層が根カクランを受けたような感じ。
４：10YR3/1黒褐色　シルト　非常にもろい。砂利含む。
５：7.5YR3/2黒褐色　シルト　焼土？
６：10YR3/1黒褐色　シルト　ややもろい。上面に焼土粒、炭化物含む。カマド掘り方？

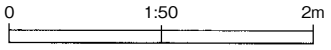
ＲＡ053住居カマド２（Ｄ－Ｄ'）
１：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の大きなブロック　砂質シルト　Ⅳ層ブロック含む。カマド１の２層に非常によく似る。
２：10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂
３：10YR3/3暗褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　汚れⅣ層再堆積に５㎜程度の炭化物散る。

RA054



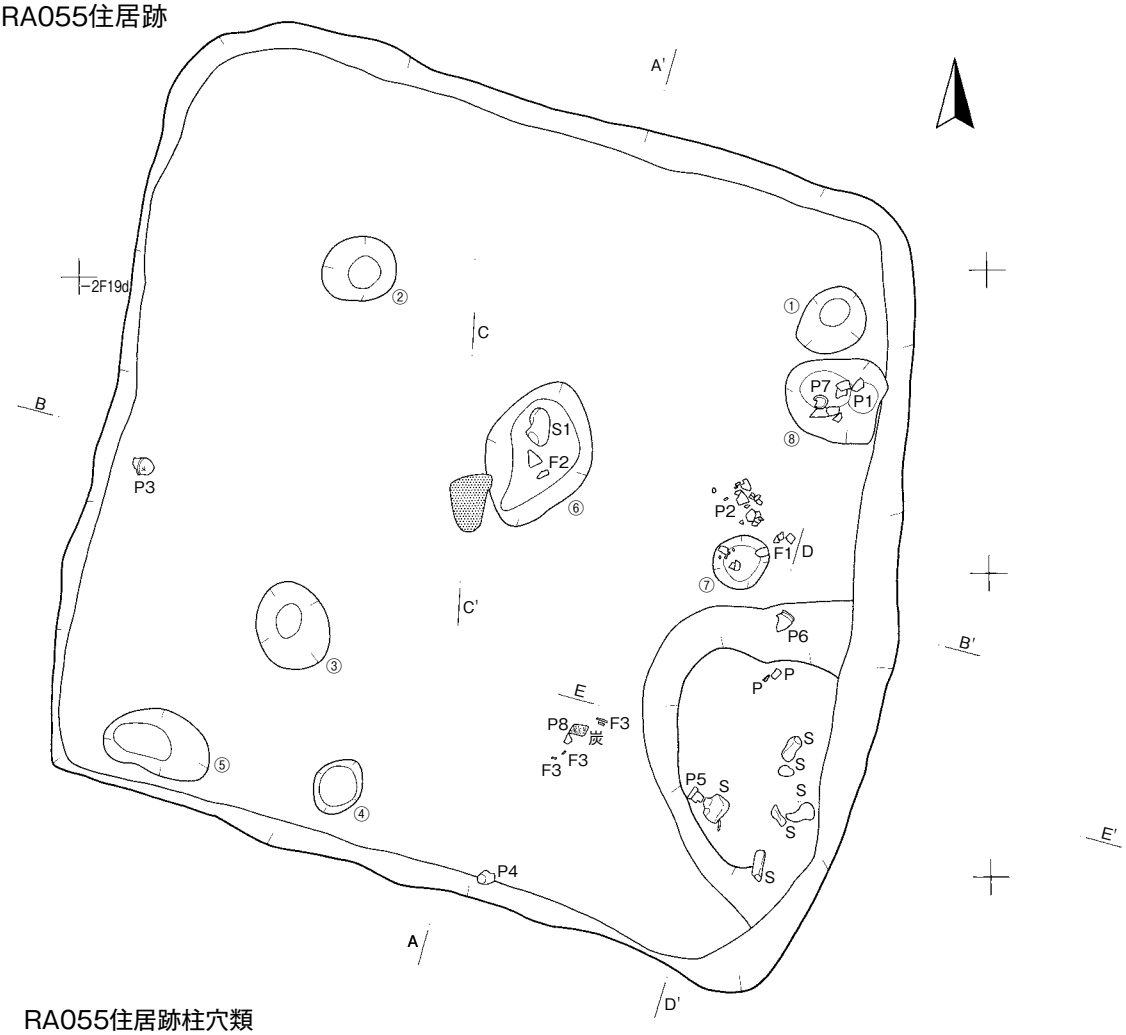
ＲＡ054住居跡
０：10YR3/1黒褐色　砂　砂利Ⅴ層再堆積。柱穴状カクラン。
１：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層粒子多く、焼土粒僅かに含む。
２：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層粒子多い。Ⅳ層粒子がてん圧したかのように水平に広がり、覆土というより床そのもの？
３：10YR3/2黒褐色　砂質シルト　床下が汚れたもの？

ＲＡ054住居４号カマド（Ｃ－Ｃ'）
１：10YR3/2黒褐色　砂　焼土ブロック含む。炭化物僅かに含む。
２：7.5YR3/2黒褐色　砂質シルト　焼土残骸。



第15図　RA053・054 住居跡（２）

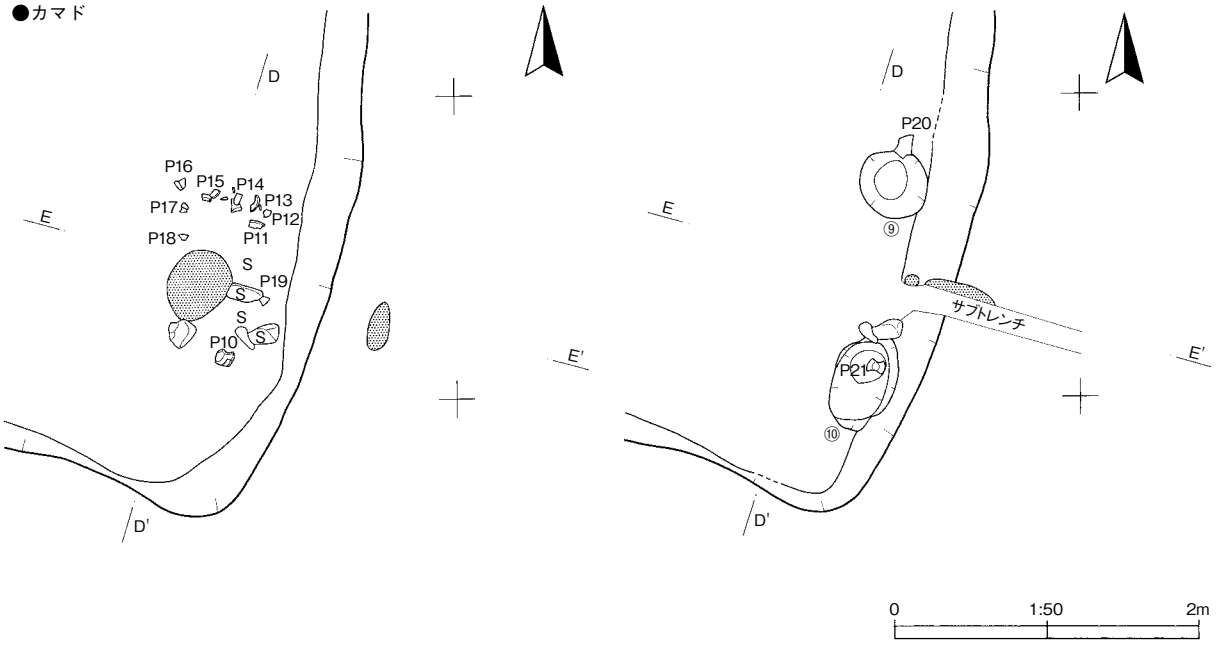
●RA055住居跡



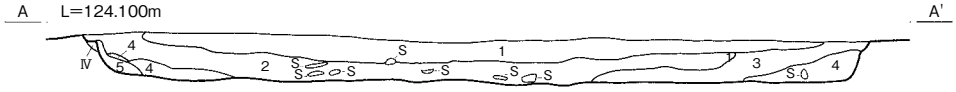
RA055住居跡柱穴類

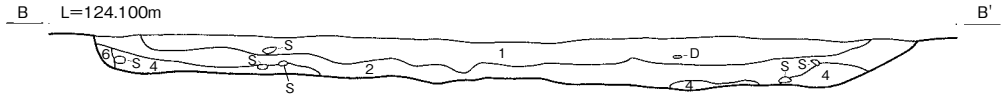
名称	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
径（cm）	49×41	50×44	59×47	40×33	73×43	100×70	36×34	66×55	50×44	66×42
深さ（cm）	29	38	(52)	11	(23)	9	13	38	30	31

●カマド

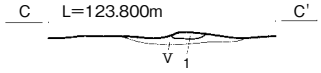


第16図　RA055 住居跡（1）

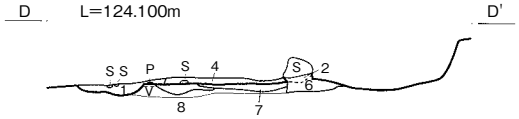


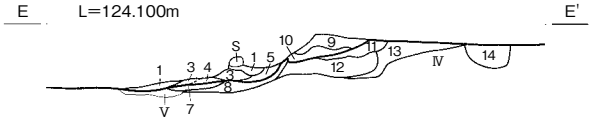


・ＲＡ055住居跡（Ａ－Ａ'、Ｂ－Ｂ'）
１：10YR2/1黒色　シルト　土器少量、礫含む。クロボク土の再堆積。
２：10YR2/3黒褐色　砂質シルト　礫が顕著で、Ⅳ層粒子含む。
３：10YR3/3暗褐色　砂質シルト　小礫、炭化物を若干含む。２層に似るが、Ⅳ層粒子多量に含む。
４：10YR2/3黒褐色　シルト　上面中心に灰白色火山灰をブロック状に含む。
５：10YR3/4暗褐色　砂質シルト　ややもろい。炭化物含む。汚れⅣ層再堆積。
６：10YR4/6褐色　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層がカクランを受けたものと思う。掘りすぎか。

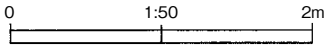


ＲＡ055住居中央焼土（Ｃ－Ｃ'）
１：5YR3/1黒褐色　砂　焼土。厚みがなく上面のみ焼けているだけだが、図に示したＣ'側のＶ層の端まで焼土は続いている。



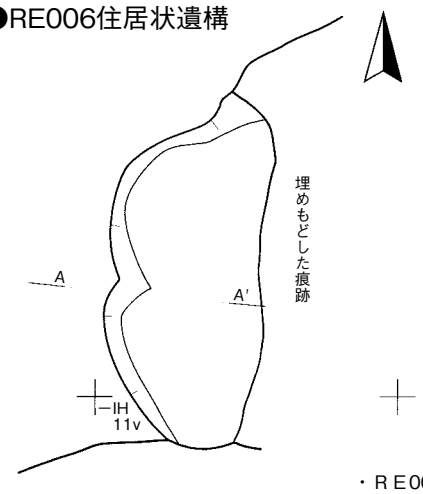


ＲＡ055住居カマド（Ｄ－Ｄ'、Ｅ－Ｅ'）
１：10YR3/1黒褐色　シルト　砂質Ⅳ層ブロック混じる。カマド覆土。
２：10YR3/2黒褐色　シルト　粘性あり。１層より暗い。１層と同じか、カマド袖石掘り方埋土の可能性もある。
３：10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　砂質Ⅳ層再堆積。カマド本体崩落土。
４：7.5YR4/3褐色　砂質シルト　３層に焼土粒多く含んだもの。
５：7.5YR3/2黒褐色　砂質シルト　焼土粒多い。カマド内煙道覆土。
６：7.5YR3/1黒褐色　シルト　砂利含む。袖本体残土？　下はＶ層。
７：5YR4/8赤褐色～7.5YR3/2黒褐色　砂　焼土（カマド焚口）。
８：10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　焼土粒含む。カマド袖本体。
９：10YR3/3暗褐色　砂質シルト　カマド煙道覆土。
10：7.5YR3/2黒褐色　シルト　煙道か煙道崩落土。
11：10YR3/2黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多い。８層と同じ？
12：10YR3/1黒褐色　シルト　風倒木痕。
13：10YR3/2黒褐色　シルト　風倒木痕。
14：10YR3/2黒褐色　シルト　根カクラン。

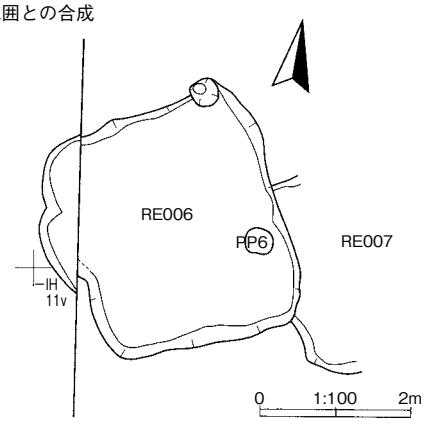


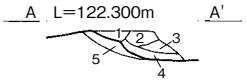
第17図　RA055 住居跡（２）

●RE006住居状遺構



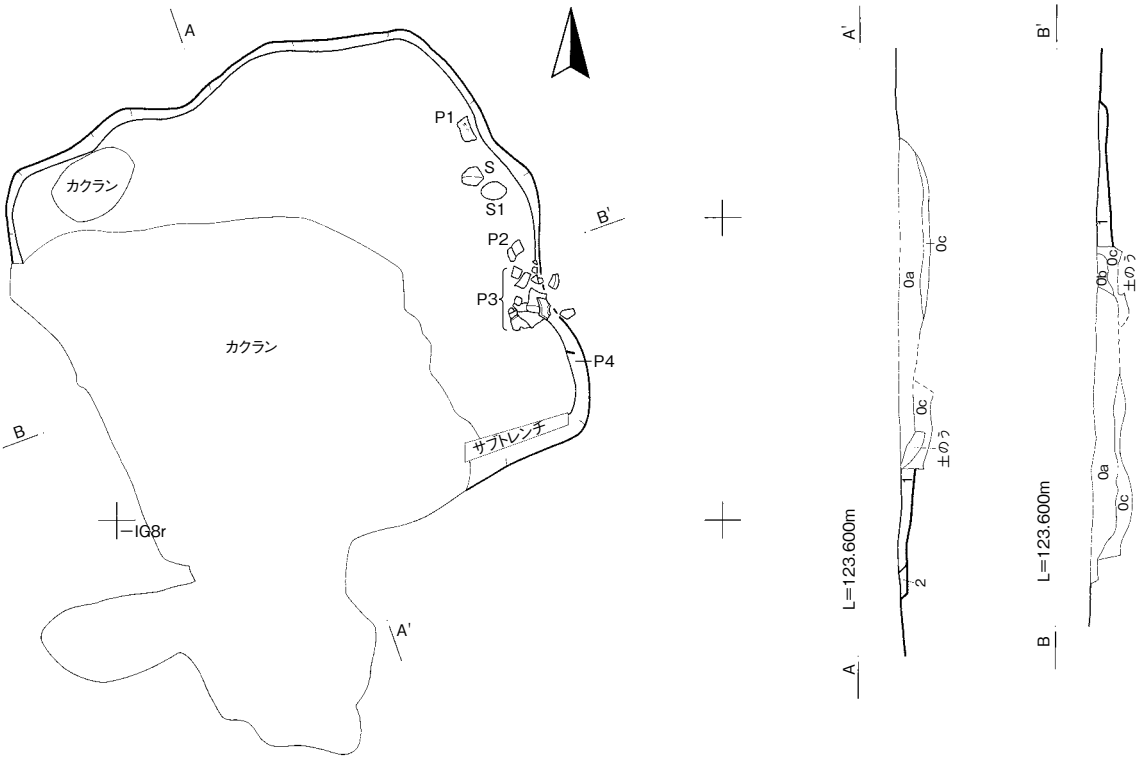
●前回調査範囲との合成





・ＲＥ006住居状遺構
1：10YR2/2黒褐色　砂質シルト　砂質Ⅳ層粒子、ブロック含む。
2：10YR3/2黒褐色　砂質シルト　砂質Ⅳ層粒子、ブロック含む。
3：10YR2/2黒褐色　砂質シルト　砂質Ⅳ層粒子、ブロック含む。
4：10YR3/2黒褐色　砂質シルト　砂質Ⅳ層粒子、ブロック含む。
5： 10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色のシミ　砂　地山が根によって汚れたもの。

●RE014住居状遺構

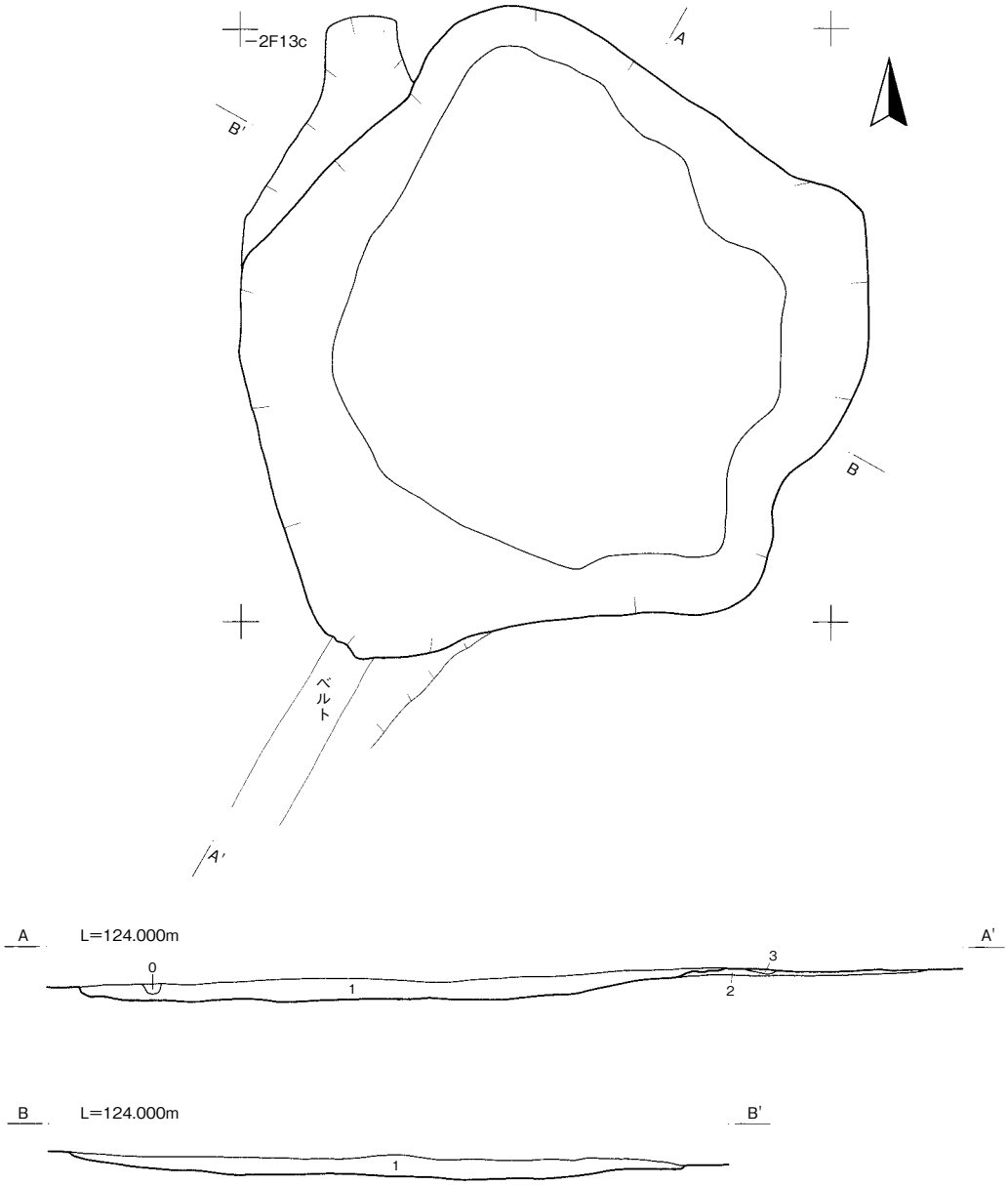


・ＲＥ014住居状（Ａ－Ａ'、Ｂ－Ｂ'）
０ａ：礫混じるカクラン。ゴミ穴。
０ｂ：０ｃ層の黄褐色土が集中する部分。カクラン。
０ｃ：１層の再堆積で、点圧されたのか非常に硬く締まり、場所によっては１層と区別しがたい所も。ただし底との境がシャープなのでカクラン穴の埋め戻し土であることは確実。
１：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の細かいブロック　シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
２：10YR3/2黒褐色　シルト　汚れⅣ層再堆積かⅣ層が根カクランを受けたもの。

0　1:50　2m

第18図　RE006・014 住居状遺構

●RE015住居状遺構

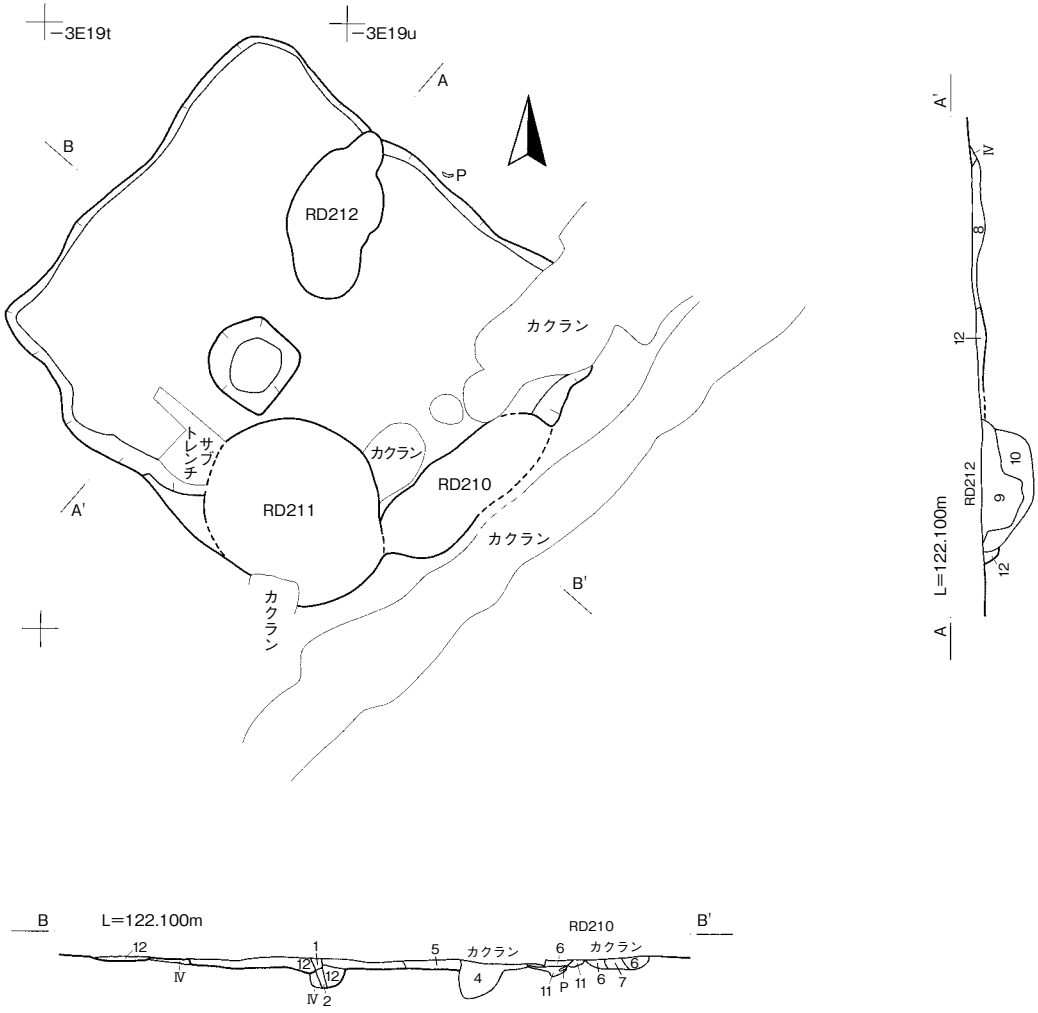


・ＲＥ015住居状（Ａ－Ａ'、Ｂ－Ｂ'）
０：10YR1.7/1黒色　シルト　硬く締まる。耕作時のカクラン。
１：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層ブロック多い。Ⅱ層より黒くチョコレートケーキのようにしっとりした感じ。
２：10YR2/1黒色　シルト　Ⅲ層の一部？
３：10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅲ層の一部？

0　1:50　2m

第19図　RE015 住居状遺構

●RE016住居状遺構



・ＲＥ016（Ａ－Ａ'、Ｂ－Ｂ'）

1：10YR2/1黒色　シルト　根穴？

2：10YR2/1黒色　シルト　もろい。１層がもろいだけ。根穴？

3：10YR2/1黒色地に10YR4/3にぶい黄褐色のブロック　シルト　耕作痕？

4：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　長芋穴。

5：　10YR4/4褐色地に10YR2/1黒色のブロック　砂質シルト　非常に硬く締まる。耕作痕と思うが、黒淡く11層に似る。11層がカクランを受けて出現したもの？

6：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色がガマの腹状に混土　砂質シルト　非常に硬く締まる。長芋穴。

7：　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック少し　砂質シルト　非常に硬く締まる。長芋穴。

8：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック少し　砂質シルト　クロボク土再堆積。土坑？（自然現象？）

9：10YR2/1黒色　シルト　ＲＤ212土坑覆土（自然現象？）。

10：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の細かい粒子散る　シルト　ＲＤ212土坑覆土（自然現象？）。

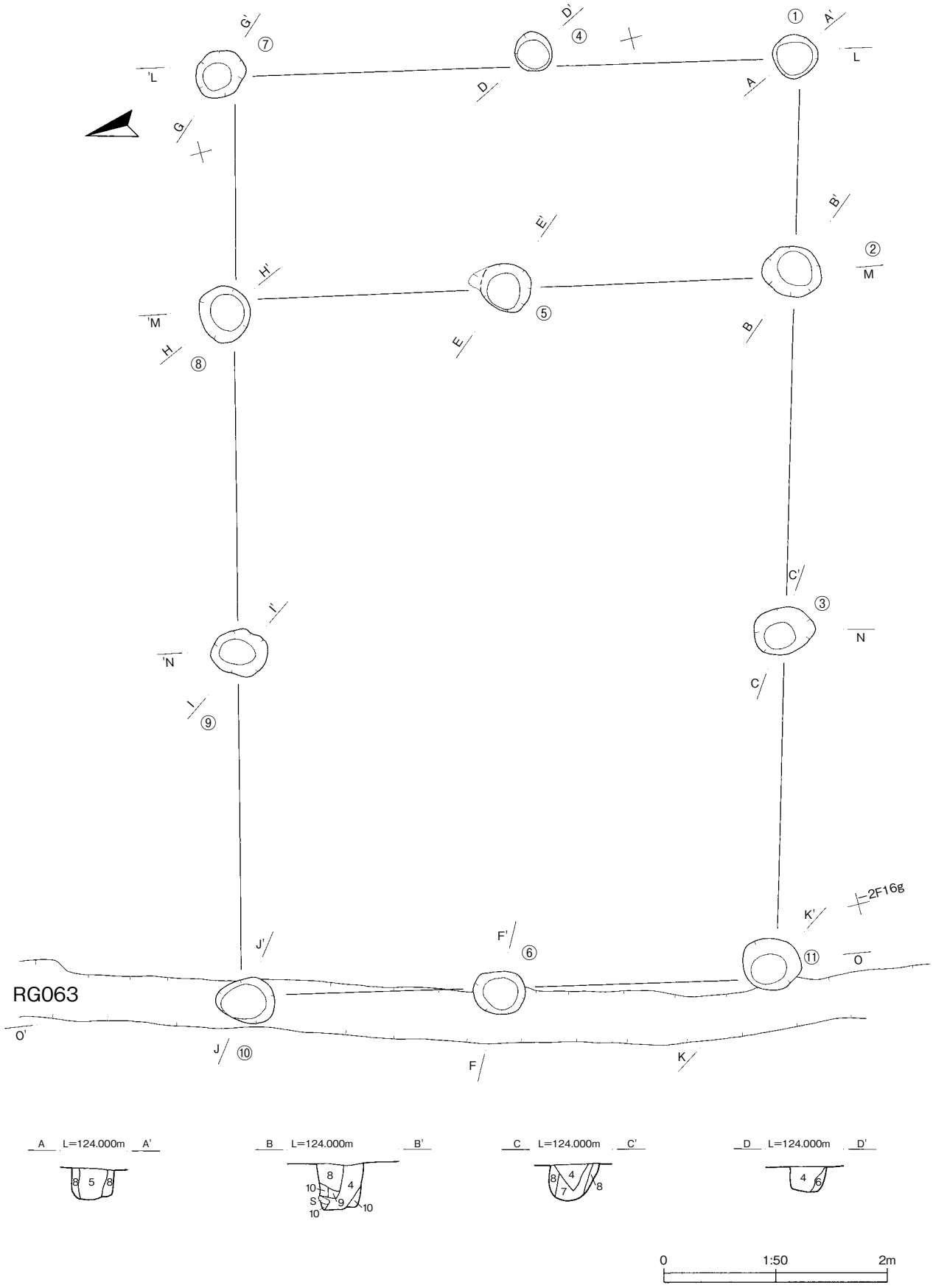
11：10YR3/2黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　砂質シルト　硬く締まる。土器多く、焼土粒少し含む。ＲＤ210土坑覆土。カクランに近いが、他に比べて茶色基調。

12：　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色散る　砂質シルト　非常に硬く締まる。地山が汚れただけのように見えるが、上面から見たプランは整った隅丸方形に見えた。これだけがＲＥ016竪穴状遺構覆土。

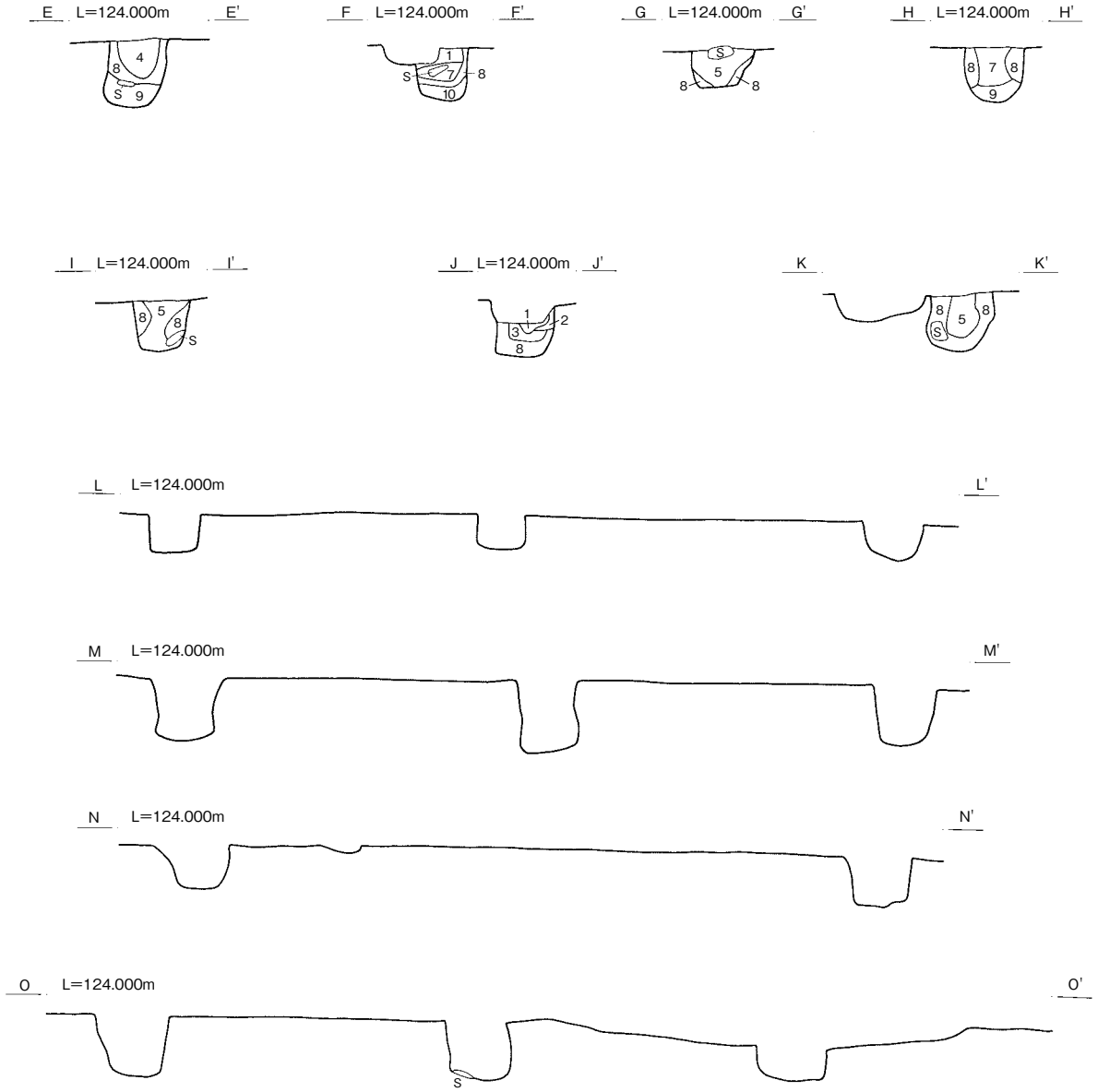
0　1:50　2m

第20図　RE016 住居状遺構

●RB021掘立柱建物跡



第21図　RB021 掘立柱建物跡（1）

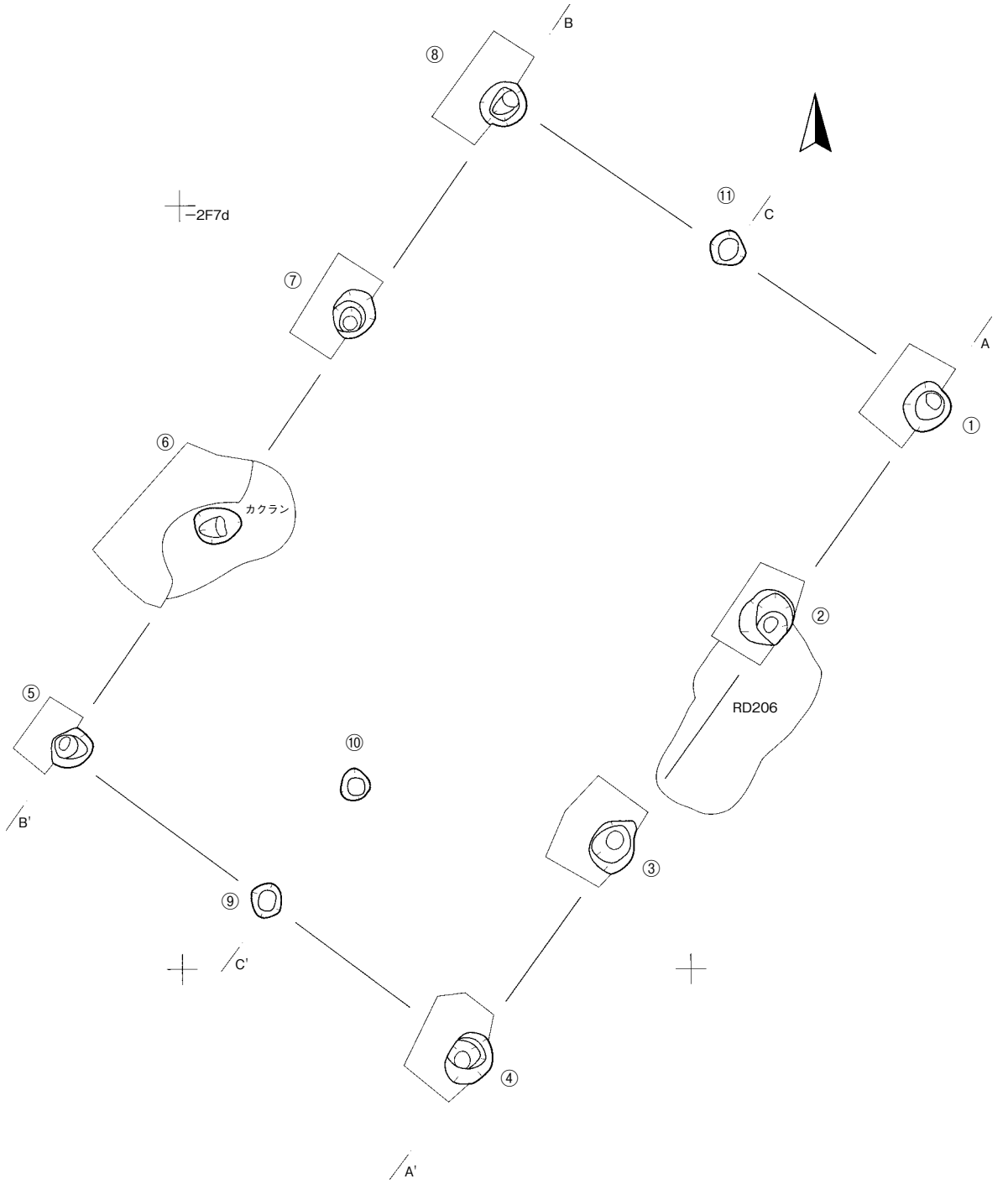


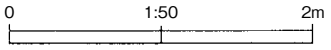
・ＲＢ021掘立柱建物跡
1：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
2：10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　非常にもろい。Ⅳ層再堆積。
3：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子含む。
4：10YR2/2黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子、灰白色火山灰含む。柱痕跡か。
5：10YR2/2黒褐色　シルト　粘性あり。比較的硬く締まる。Ⅳ層粒子含む。柱痕跡。
6：10YR2/1黒色　シルト　硬く締まる。Ⅳ層粒子含む。
7：10YR3/2黒褐色　シルト　比較的硬く締まる。５層と同じと思うが、Ⅳ層粒子多く、より明るい。
8：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　もろい部分あり。Ⅳ層粒子多い。掘り方埋土。
9：10YR3/1黒褐色　シルト　もろい部分あり。掘り方埋土と思うがⅣ層粒子少なく暗い。
10：10YR3/2黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層汚れ再堆積。掘り方埋土か。

0　1:50　2m

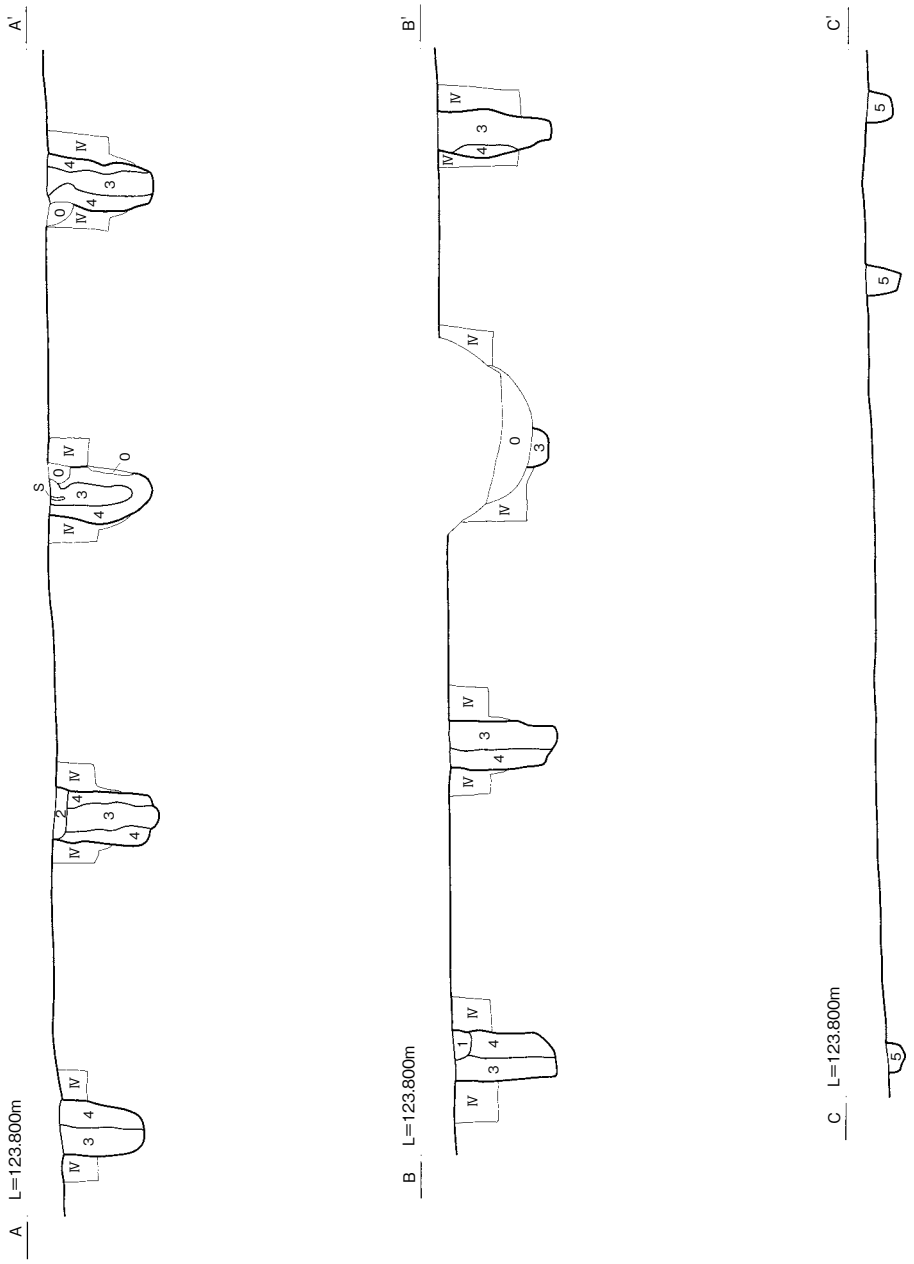
第22図　RB021 掘立柱建物跡（２）

●RB022掘立柱建物跡





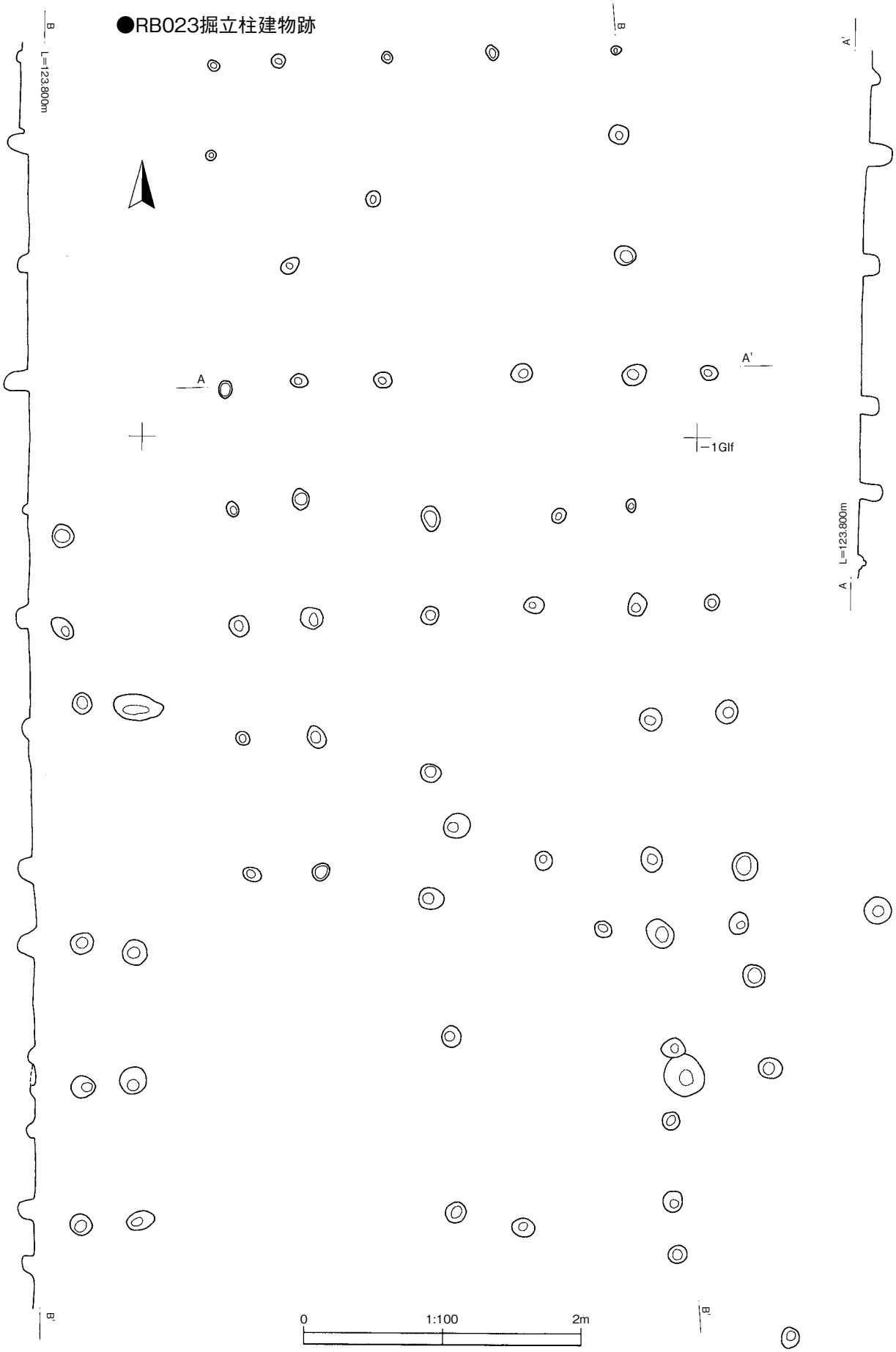
第23図　RB022 掘立柱建物跡（1）



・ＲＢ022掘立柱建物跡
０：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルトあるいは砂質シルト　長芋カクラン穴。
１： 10YR5/6黄褐色と10YR3/1黒褐色の霜降り状混土　シルト　硬く締まる。
２：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色混じる　シルト　硬く締まる。３層の一部か。
３：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色、10YR4/2灰黄褐色混じる　シルト　礫混じる。上部は硬く締まり、下部はボソボソ。柱痕跡。
４：10YR1.7/1黒色地に10YR5/6黄褐色の細かいブロック　シルト　３層に似るが、より暗い。柱掘り方埋土。
５：10YR1.7/1黒色地に10YR5/6黄褐色混じる　シルト　色調は４層に似るがブロック少ない。

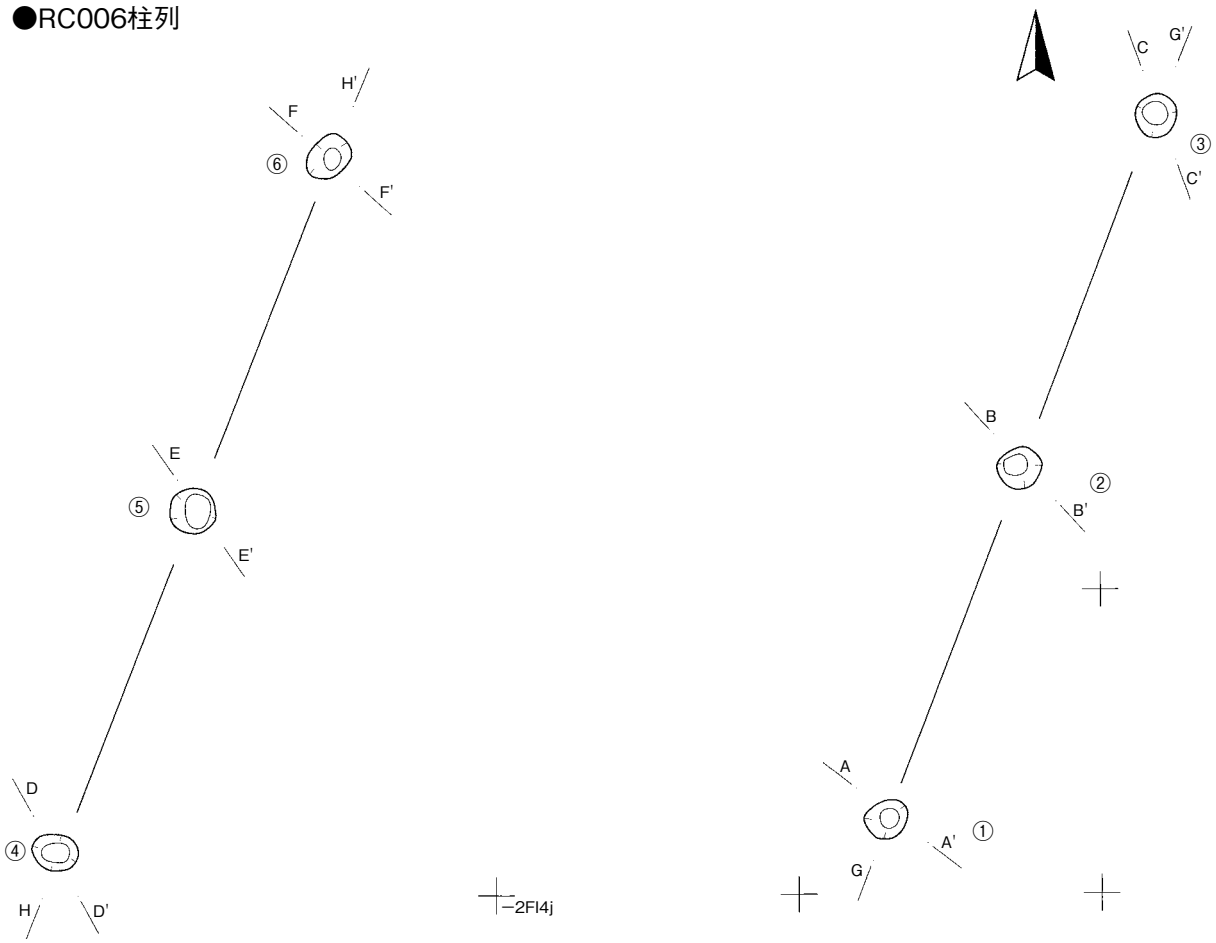
0　1:50　2m

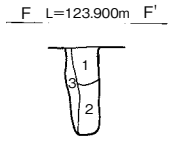
第24図　RB022 掘立柱建物跡（２）



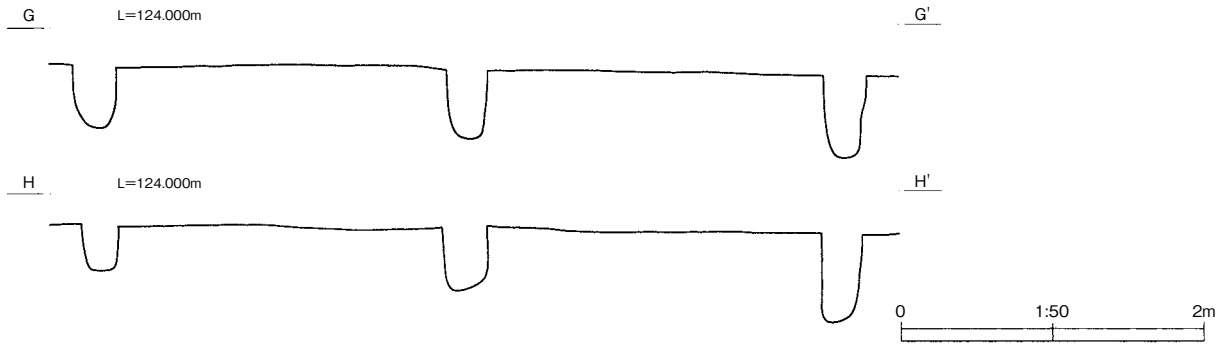
第25図　RB023掘立柱建物跡

●RC006柱列



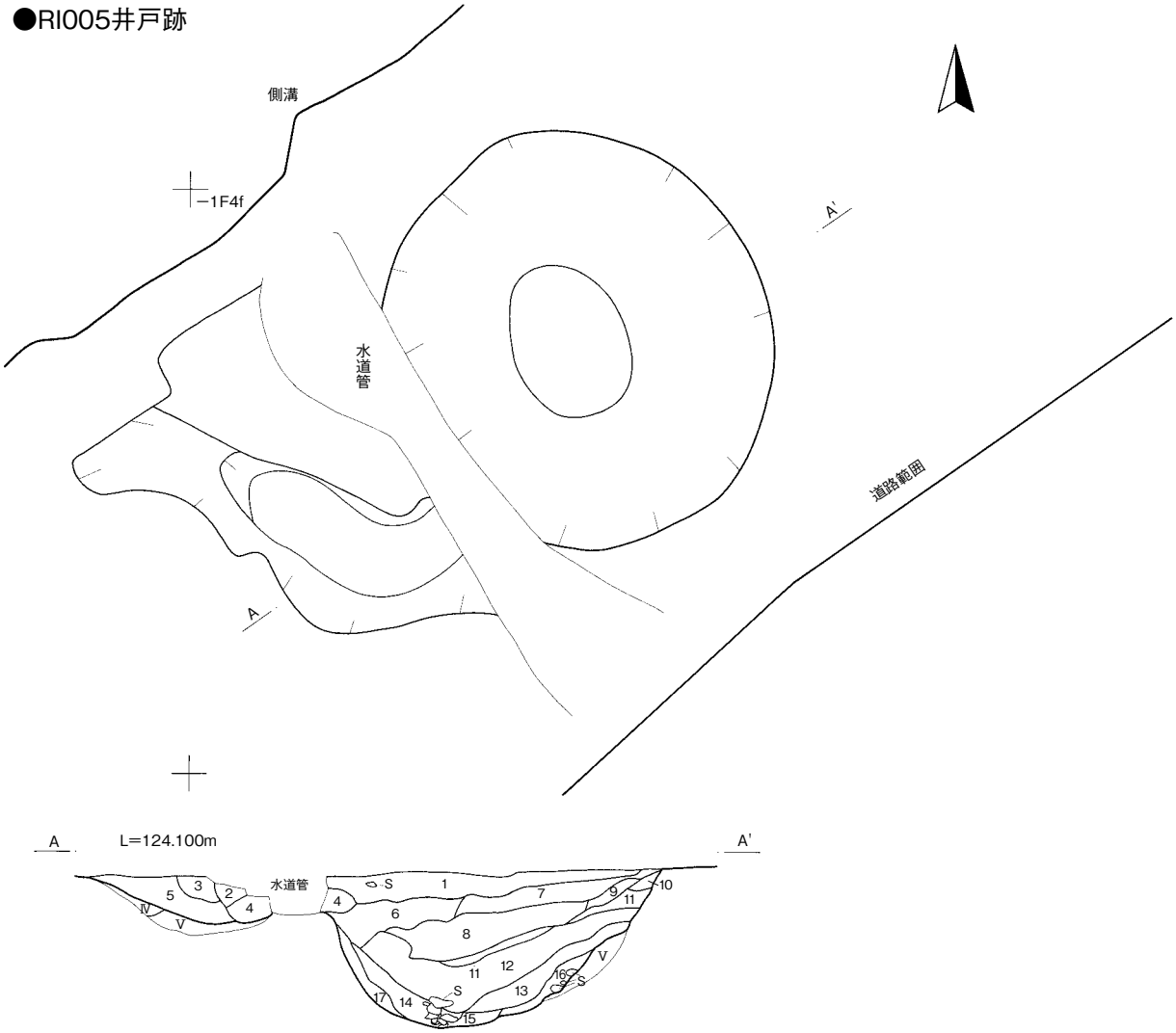


・ＲＣ006柱列
1：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子、細かいブロック含む。
2：10YR1.7/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子、ブロック含む。1層に似るが、より暗い。
3：10YR1.7/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　もろい。Ⅳ層ブロック多い。掘り方埋土？
4：10YR4/2灰黄褐色　シルト　硬く締まる。柱あたり。



第26図　RC006 柱列

●RI005井戸跡

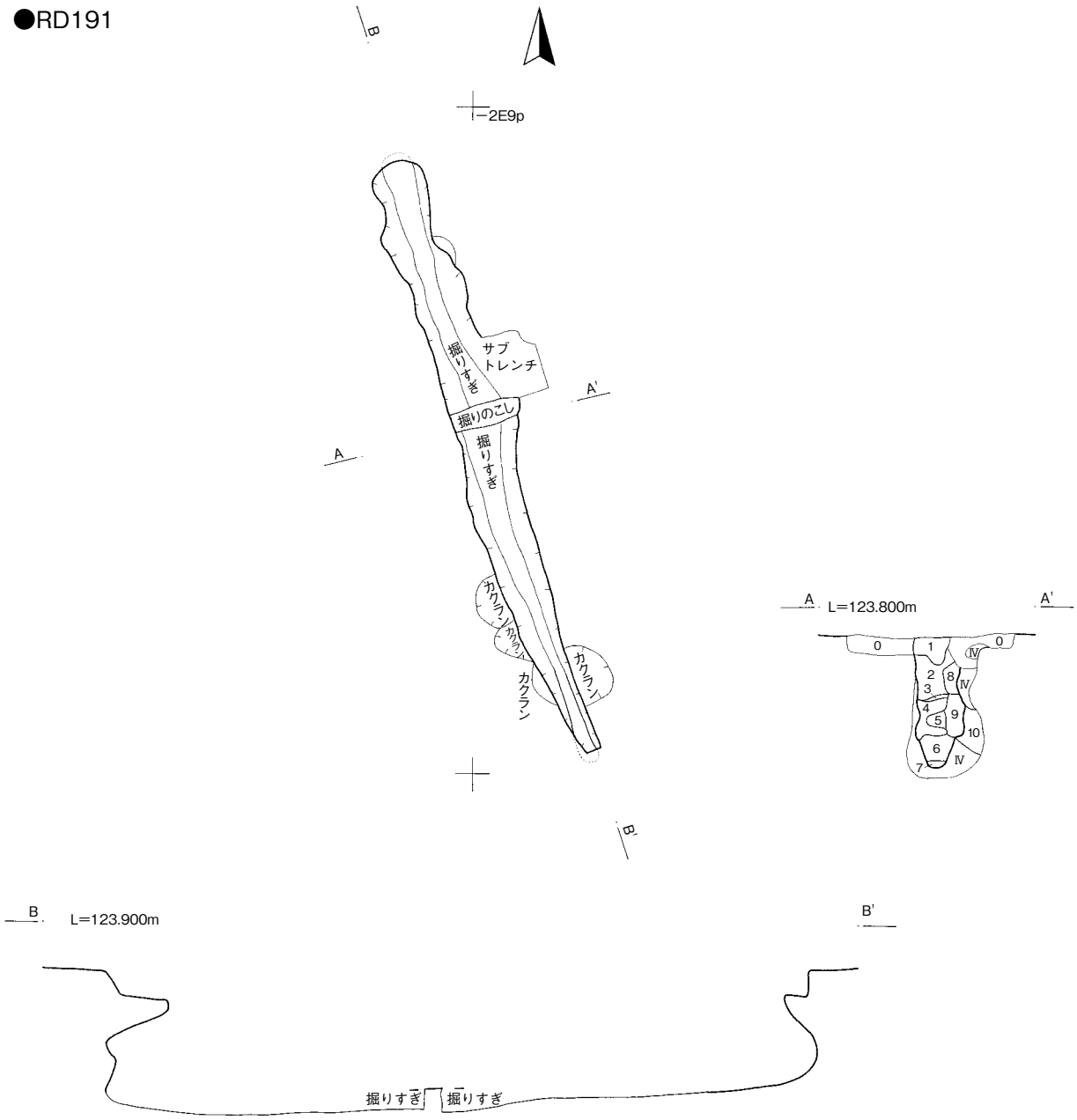


・ＲＩ005井戸跡
1：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　砂利混じり。Ⅳ層粒子散る。
2：10YR3/2黒褐色　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積に砂利混じる。
3：10YR2/2黒褐色　砂質シルト　僅かに砂利混じる。
4：10YR3/1黒褐色　砂　砂利再堆積。
5：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　６層に似るがずっと明るい。
6：10YR2/1黒色　シルト　僅かに砂利、Ⅳ層粒子含む。
7：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色ガマの腹状混土　シルト
8：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色ガマの腹状混土　シルト　７層よりⅣ層ブロック小さい。
9：10YR3/1黒褐色　シルト　僅かに砂利含む。
10：10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。
11：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　礫混じる。
12：10YR3/1黒褐色　シルト　僅かに砂利混じる。
13：10YR3/1黒褐色　シルト、砂　砂利多量に混じる。
14：10YR3/1黒褐色　砂、シルト　砂利再堆積に黒土混じる。
15：10YR2/1黒色　シルト　礫混じる。
16：10YR5/6黄褐色　シルト　Ⅳ層再堆積に多量の砂礫混じる。
17：10YR4/4褐色地に一部10YR3/1黒褐色混じる　砂、シルト　Ⅴ層再堆積に黒土混じる。

0　1:50　2m

第27図　RI005 井戸跡

●RD191

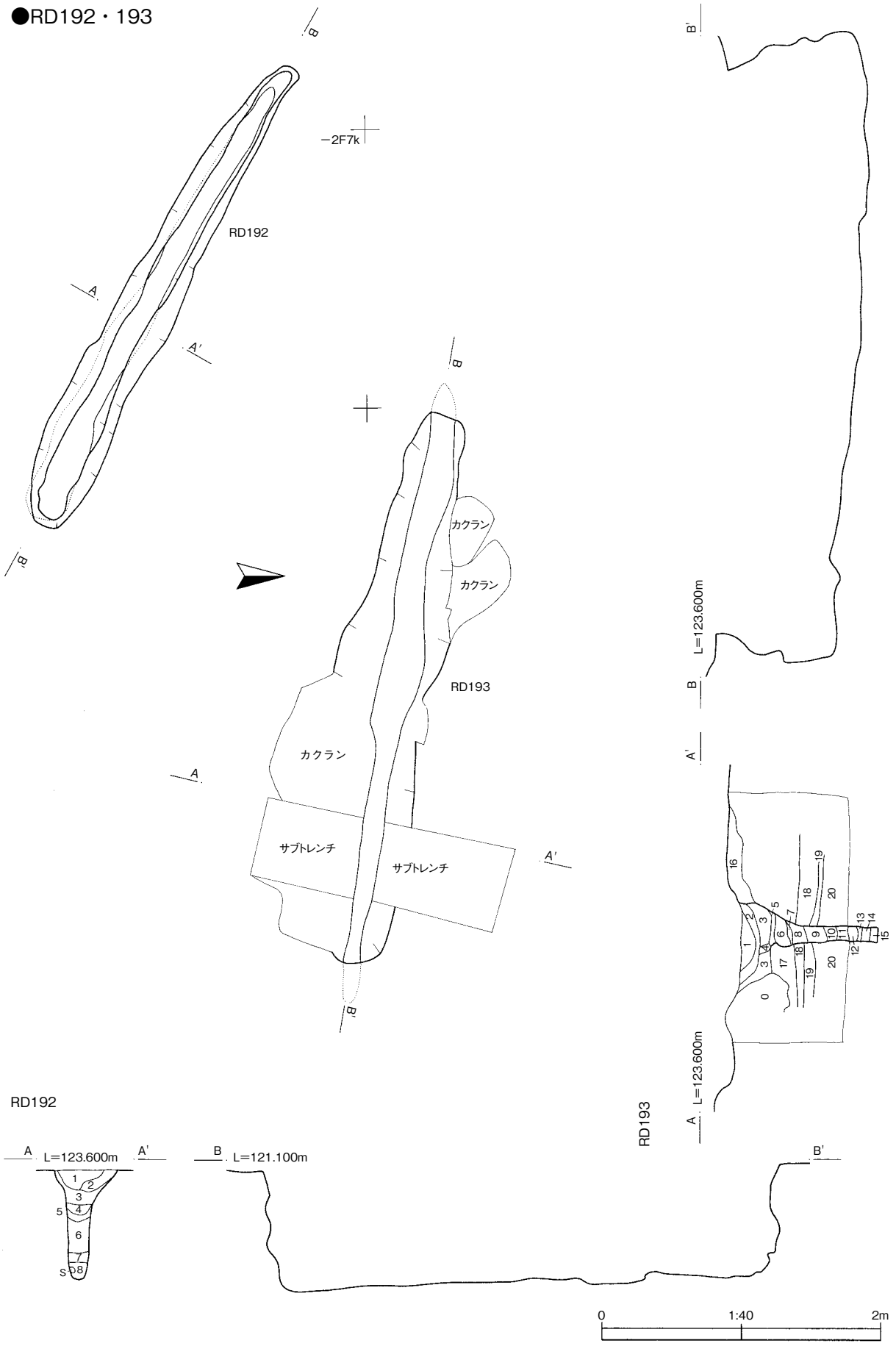


・ＲＤ191土坑（陥し穴）
0：10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　カクラン。長芋穴。
1：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
2：10YR3/3暗褐色　シルト　汚れⅣ層再堆積。
3：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　非常にもろい。根によるカクランらしい。
4：２層とほとんど同じ。
5：10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　Ⅳ層ブロック。９層との境不明瞭。
6：10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　やや暗いかと思う程度で、周囲のⅣ層とほとんど同じ。
7：10YR4/2灰黄褐色　シルト　もろい。汚れⅣ層再堆積。
8：10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層が根カクランを受けて２層の土が混じったものと思う。
9：10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　８層とほとんど同じだが、より一様で淡い。
10：10YR4/3にぶい黄褐色地に僅かに10YR3/1黒褐色のブロック　シルト　Ⅳ層が根カクランを受けたものと思う。

0　1:40　2m

第28図　RD191 土坑

●RD192・193

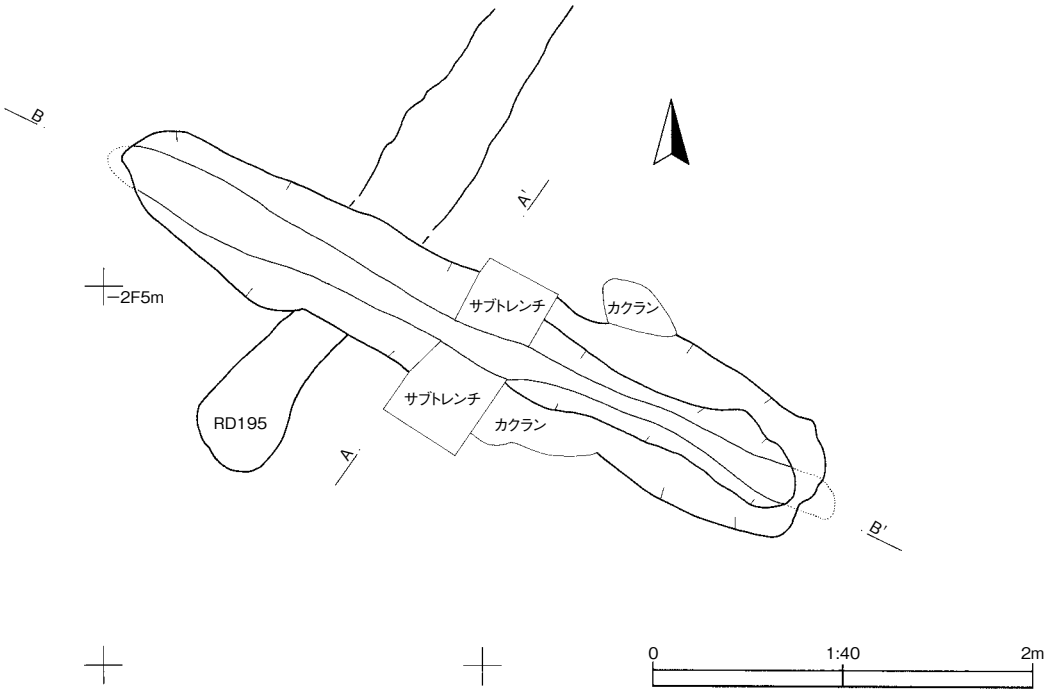


第29図　RD192・193 土坑（1）

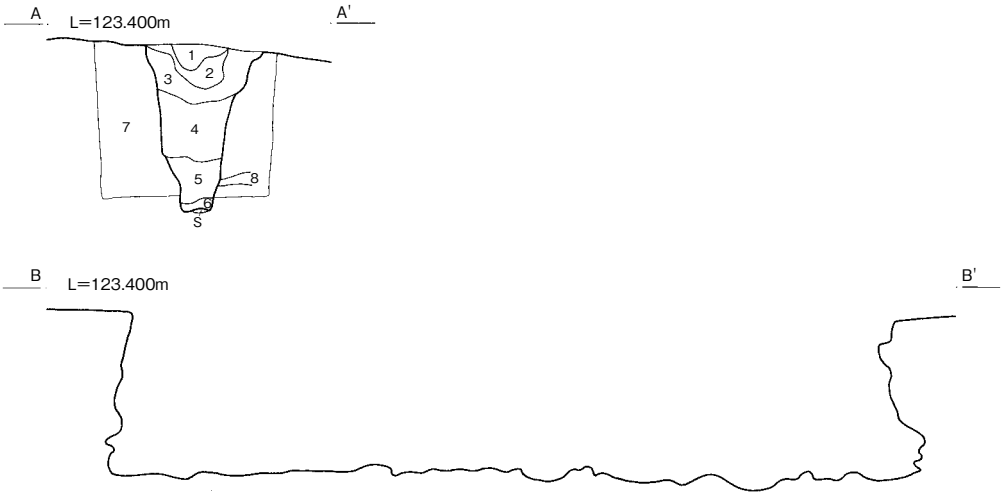
・ＲＤ192土坑（陥し穴）
１：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子散る。
２：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色粒子散る　シルト　ややもろい。Ⅳ層ブロック含む。
３：10YR5/6黄褐色地に10YR2/3黒褐色のブロック　シルト　粘性あり。Ⅳ層汚れ再堆積。
４：10YR2/2黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子含む。
５：10YR5/6黄褐色　粘土　Ⅳ層再堆積。
６：10YR5/6黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土　シルト　粘性あり。１層とⅣ層の混土。
７：10YR5/6黄褐色　粘土　Ⅳ層再堆積。
８：10YR3/1黒褐色　シルト　非常にもろい。Ⅳ層粒子含む。

・ＲＤ193土坑（陥し穴）
０：10ＹＲ3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色ガマの腹状混土　シルト　カクラン。
１：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子散る。
２：10YR2/1黒色、10YR5/6黄褐色、　10YR4/2灰黄褐色の混土　砂質シルト　クロボク土とⅣ層の混土。
３：10YR4/4褐色　砂質シルト　Ⅳ層再堆積。４層の左はカクランの可能性あり（長芋耕作による天地返し）。
４：10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　汚れⅣ層ブロック。
５：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色混じる　シルト　ややもろい。
６：10YR4/4褐色地に筋状に10YR2/1黒色のブロック　粘土質シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。
７：10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　粘性強い。
８：10YR4/3にぶい黄褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。
９：10YR5/6黄褐色　砂　もろい。Ⅳ層再堆積。
10：10YR3/4暗褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層汚れ再堆積。
11：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性あり。非常にもろい。
12：10YR3/3暗褐色　シルト　粘性非常に強い。Ⅳ層汚れ再堆積。
13：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性非常に強い。もろい。
14：10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性強い。汚れⅣ層再堆積。
15：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い。非常にもろい。
16：10YR5/6黄褐色　砂質シルト　非常に硬く締まる。砂質Ⅳ層がシルト硬化した部分？
17：10YR5/6黄褐色　砂　硬く締まる。シルト質ダマ状部分あり。
18：10YR5/6黄褐色　シルト　17層より暗い。
19：10YR5/6黄褐色　砂　もろい。粒子やや粗い。
20：10YR5/6黄褐色　砂　色は18層に近い。

●RD194

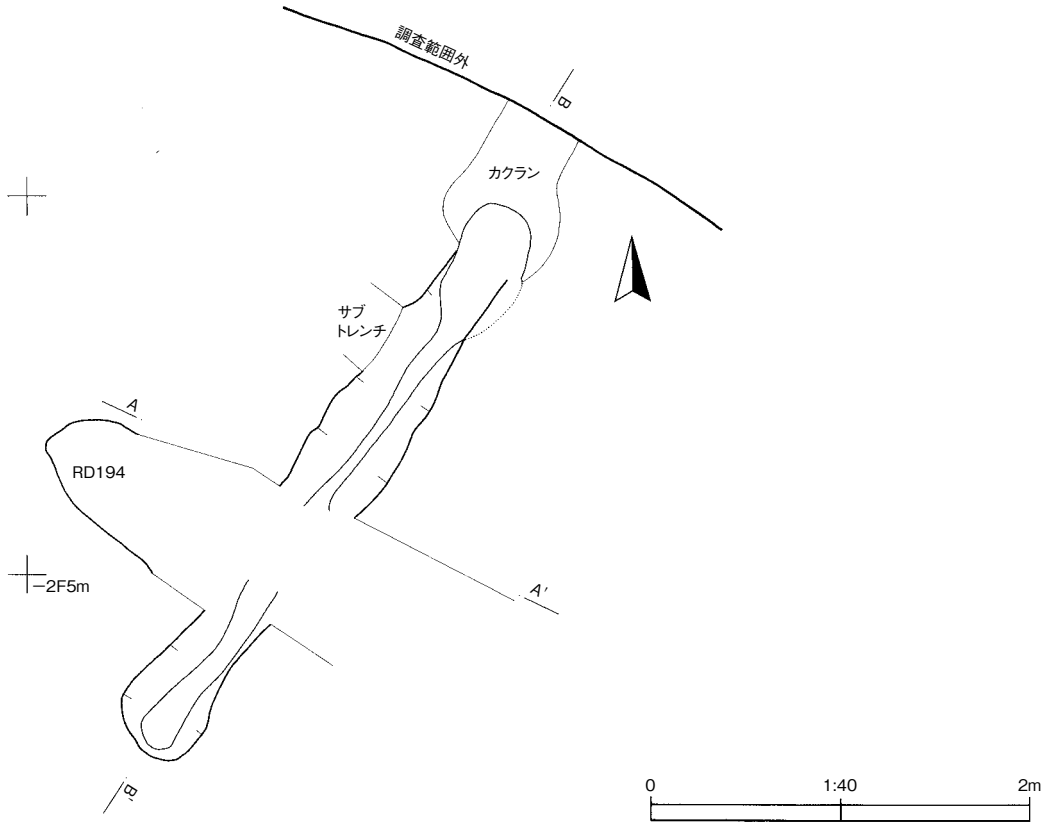


第30図　RD192・193 土坑（２）・RD194 土坑（１）

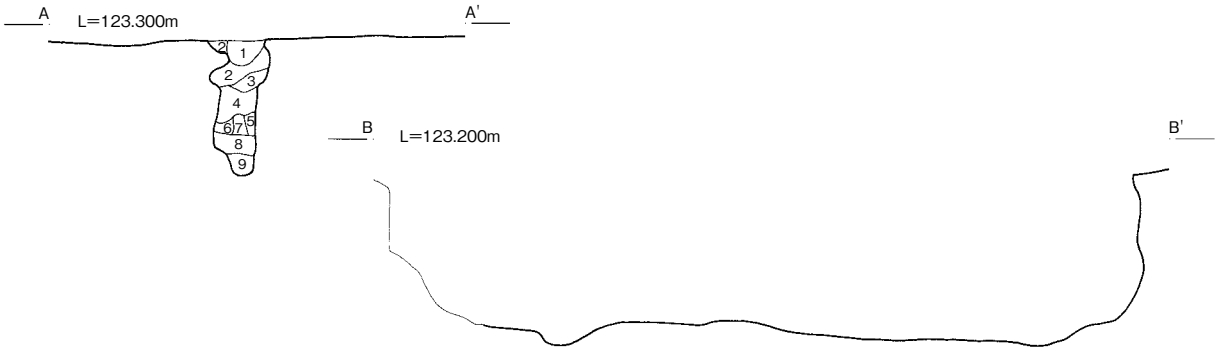


・ＲＤ194土坑（陥し穴）
１：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子散る。
２：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色混じる　砂質シルト　硬く締まる。クロボク土とⅣ層の混土。
３：10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色混じる　シルト　硬く締まる。
４：10YR4/6褐色　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積に何段もの縞状に黒土のブロックが入っているように見えたが消えてしまった。
５：10YR4/6褐色　砂質シルト　硬く締まる。４層に似るがより暗い。
６：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性あり。非常にもろい。
７：10YR5/6黄褐色　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層。
８：10YR5/4にぶい黄褐色　砂　非常にもろい。Ⅳ層の粗砂部分。

●RD195

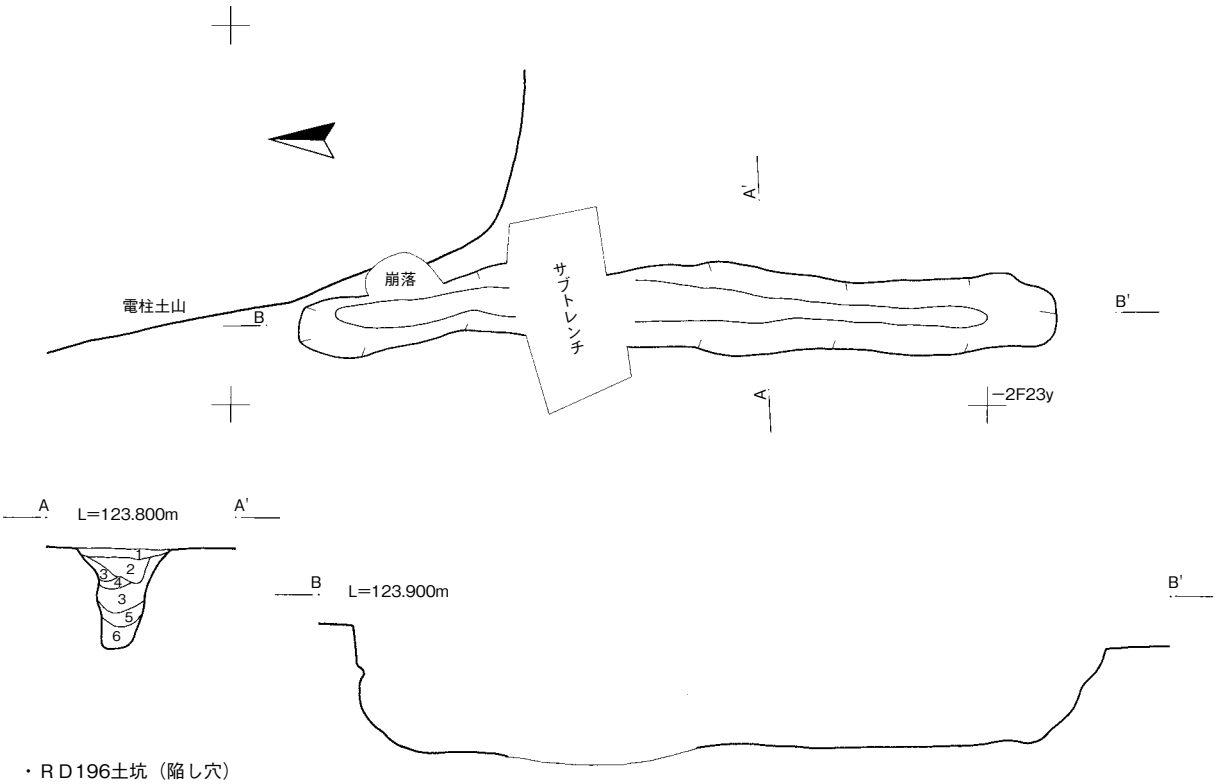


第31図　RD194 土坑（２）・RD195 土坑（１）



・ＲＤ195土坑（陥し穴）
１：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子散る。
２：10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層汚れ再堆積。
３：10YR3/2黒褐色　砂質シルト　非常に硬く締まる。Ⅳ層汚れ再堆積。
４：10YR5/6黄褐色地に10YR4/2灰黄褐色混じる　砂質シルト　小さいクロボク土ブロック含む。Ⅳ層汚れ再堆積。
５：10YR3/2黒褐色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　ややもろい。Ⅳ層粒子含む。
６：10YR3/2黒褐色　砂質シルト　本遺構で一番硬く締まる。Ⅳ層粒子僅かに含む。
７：10YR3/1黒褐色　シルト　本遺構で一番硬く締まる（６層と同じくらい）。
８：10YR2/1黒色　シルト　非常に硬く締まる。
９：10YR5/6黄褐色地に10YR4/2灰黄褐色混じる　砂質シルト　ややもろい。４層とほとんど同じ。

●RD196

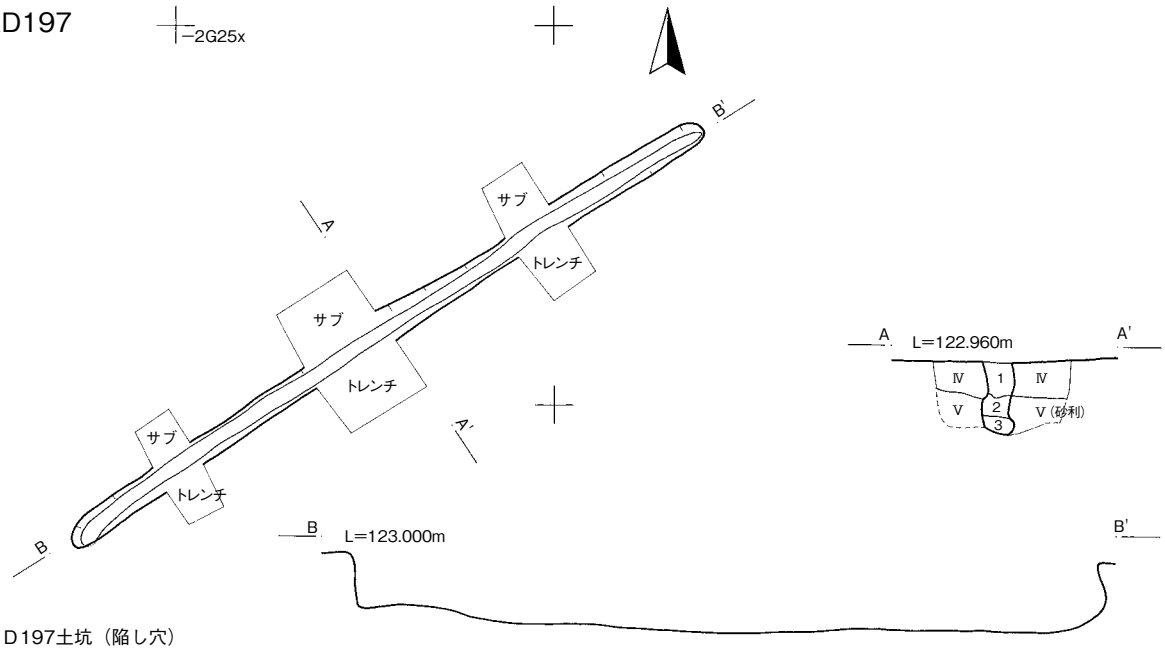


・ＲＤ196土坑（陥し穴）
１：２層が道路の加重で硬く締まったもの。
２：10YR3/1黒褐色　シルト　硬く締まる。
３：10YR5/6黄褐色地に10YR3/2黒褐色のシミ　シルト　粘性あり。
４：10YR5/6黄褐色　砂　ややもろい。Ⅳ層再堆積。
５：10YR4/4褐色　砂　ややもろい。
６：10YR2/2黒褐色　シルト　礫混じり。

0　1:40　2m

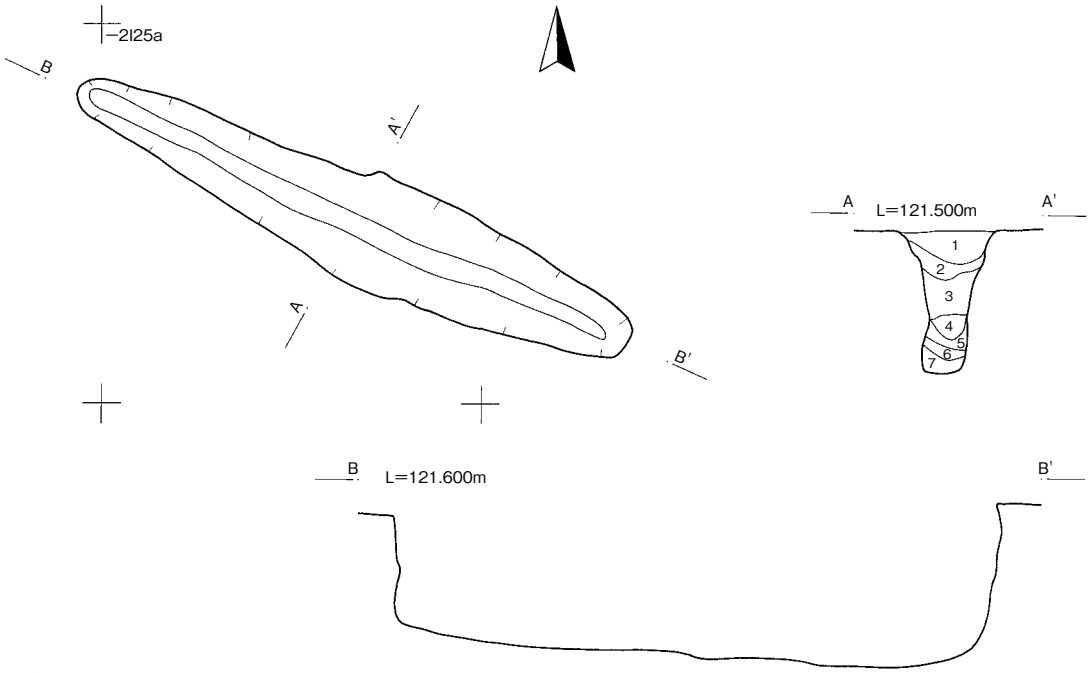
第32図　RD195 土坑（２）・RD196 土坑

●RD197

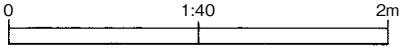


・ＲＤ197土坑（陥し穴）
1：10YR3/2黒褐色　シルト　もろい。汚れⅣ層再堆積。
2：10YR5/6黄褐色　シルト　ほぼⅣ層そのもの（再堆積）。
3：10YR3/1黒褐色　シルト　非常にもろい。

●RD198

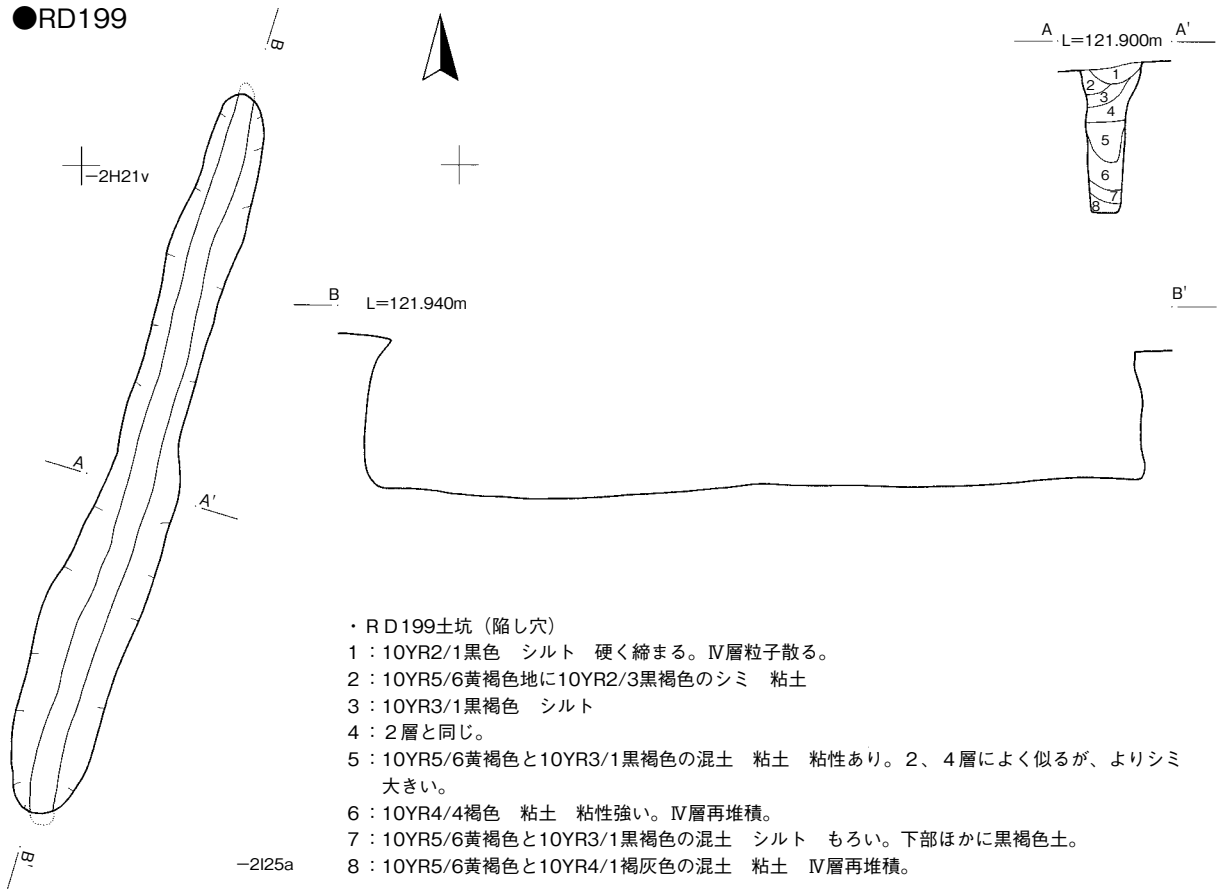


・ＲＤ198土坑（陥し穴）
1：10YR2/1黒色　シルト
2：10YR2/1黒色、10YR3/1黒褐色、10YR5/6黄褐色混土　シルト　粘性あり。硬く締まる。クロボク土とⅣ層の混土。
3：10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強い。酸化鉄（7.5YR5/8明褐色）のブロック含む。Ⅳ層ブロック汚れ再堆積。
4：10YR5/4にぶい黄褐色　粘土　粘性強い。もろい。Ⅳ層ブロックの集合体。
5：10YR5/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強い。ややもろい。Ⅳ層再堆積。
6：10YR5/3にぶい黄褐色地に10YR4/1褐灰色の筋　粘土　粘性強い。ややもろい。Ⅳ～Ⅴ（砂）再堆積に黒土混じる。
7：10YR4/4褐色　砂　酸化したⅤ（砂）層と思うが、周囲よりややもろい気がしないでもない（再堆積？）。



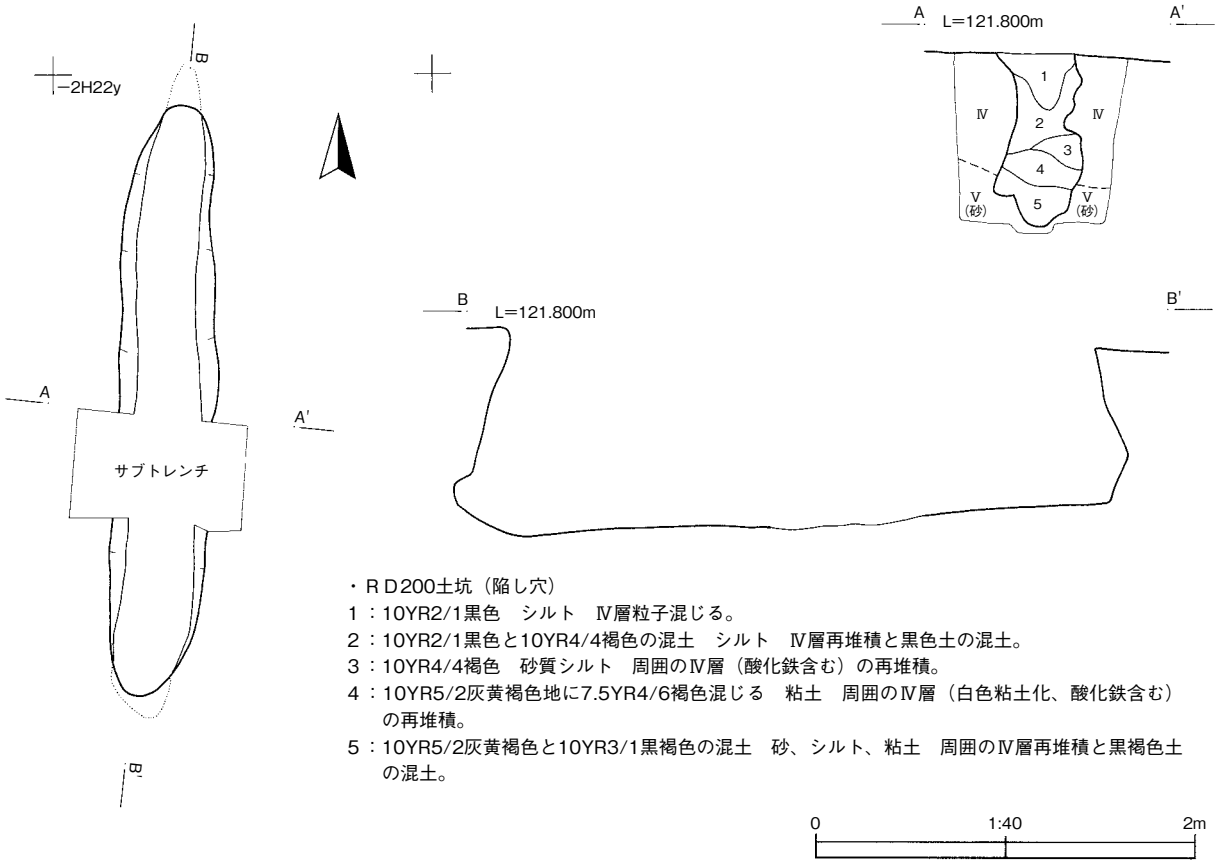
第33図　RD197・198 土坑

●RD199



・ＲＤ199土坑（陥し穴）
1：10YR2/1黒色　シルト　硬く締まる。Ⅳ層粒子散る。
2：10YR5/6黄褐色地に10YR2/3黒褐色のシミ　粘土
3：10YR3/1黒褐色　シルト
4：２層と同じ。
5：10YR5/6黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土　粘土　粘性あり。２、４層によく似るが、よりシミ大きい。
6：10YR4/4褐色　粘土　粘性強い。Ⅳ層再堆積。
7：10YR5/6黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土　シルト　もろい。下部ほかに黒褐色土。
8：10YR5/6黄褐色と10YR4/1褐灰色の混土　粘土　Ⅳ層再堆積。

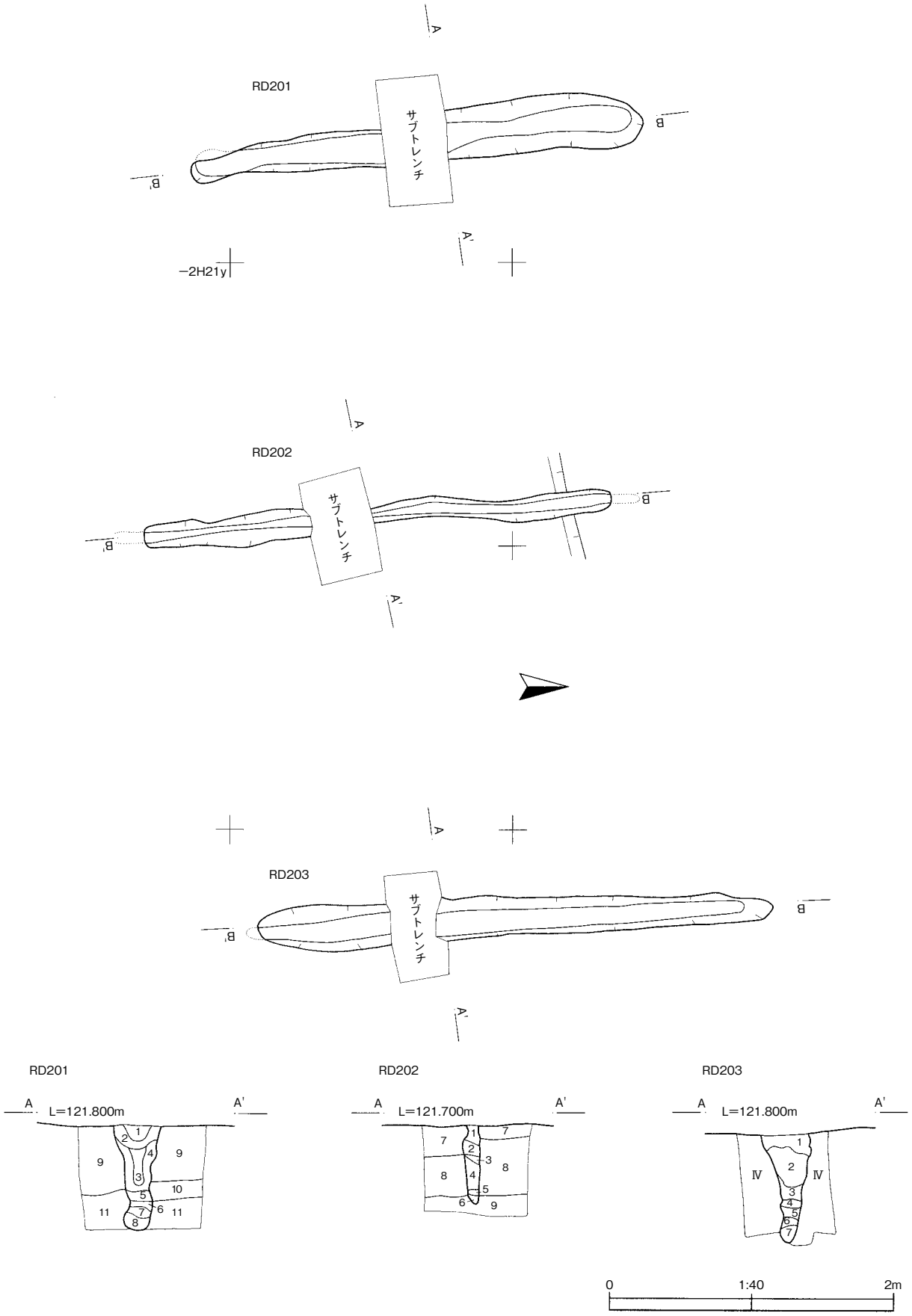
●RD200



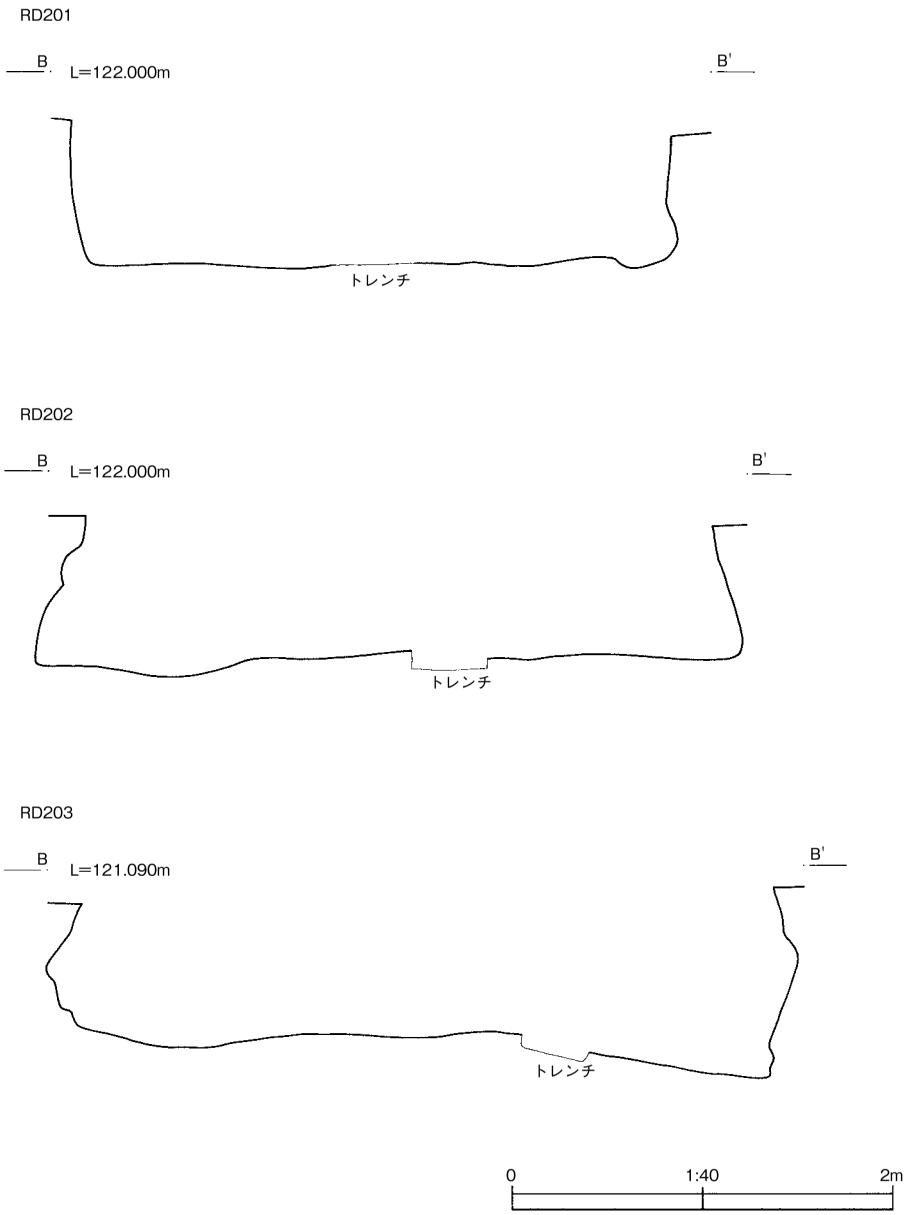
・ＲＤ200土坑（陥し穴）
1：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子混じる。
2：10YR2/1黒色と10YR4/4褐色の混土　シルト　Ⅳ層再堆積と黒色土の混土。
3：10YR4/4褐色　砂質シルト　周囲のⅣ層（酸化鉄含む）の再堆積。
4：10YR5/2灰黄褐色地に7.5YR4/6褐色混じる　粘土　周囲のⅣ層（白色粘土化、酸化鉄含む）の再堆積。
5：10YR5/2灰黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土　砂、シルト、粘土　周囲のⅣ層再堆積と黒褐色土の混土。

第34図　RD199・200 土坑

●RD201・202・203



第35図　RD201～203 土坑（1）



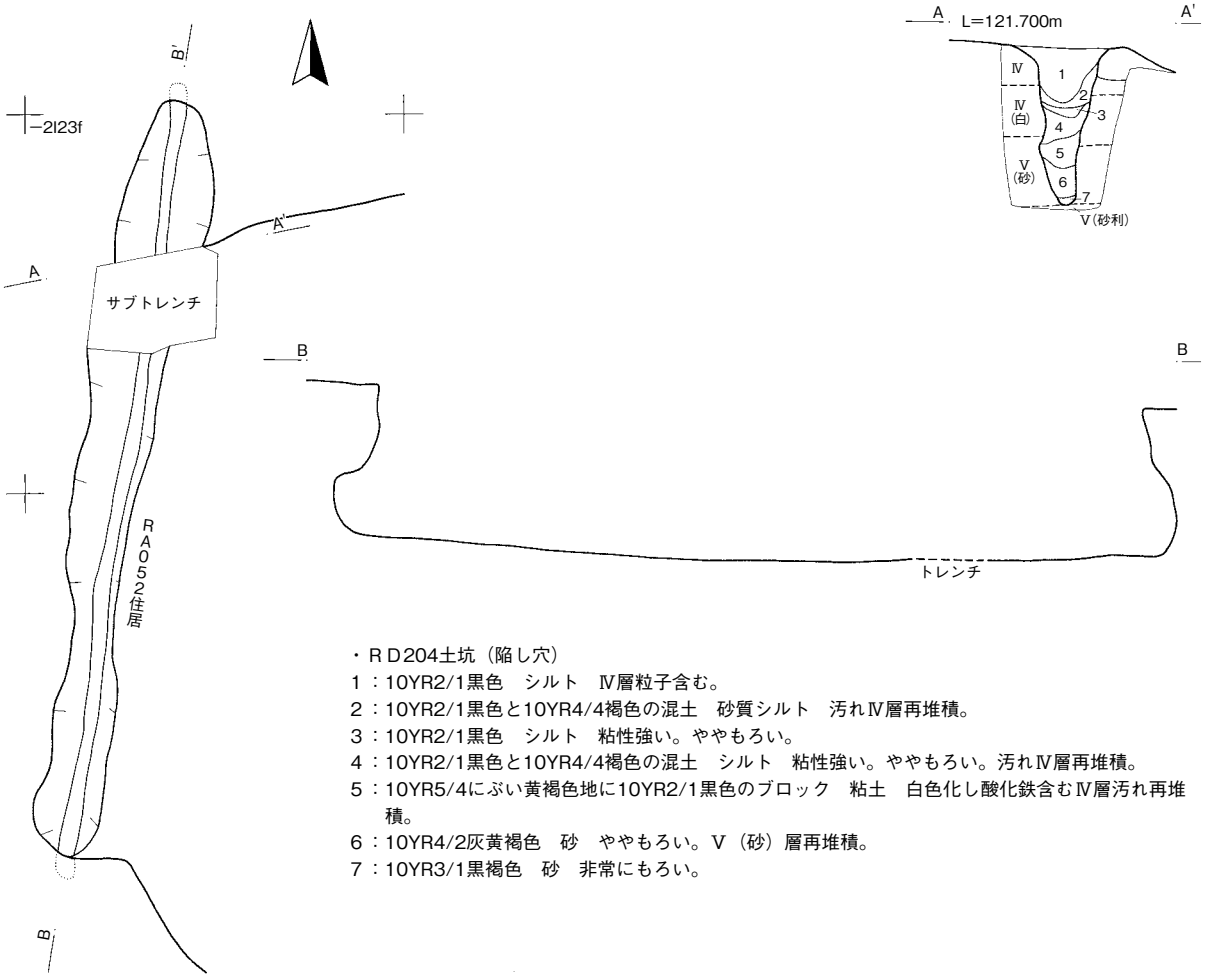
・ＲＤ201土坑（陥し穴）
1：10YR2/1黒色　シルト
2：10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層再堆積土とクロボク土の混土。
3：10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　粘性あり。Ⅳ層ブロック、粒子含む。
4：10YR5/6黄褐色　粘土　Ⅳ層再堆積。
5：10YR3/1黒褐色　シルト　ややもろい。粘性あり。
6：10YR5/6黄褐色　粘土　ややもろい。酸化鉄の付着したⅣ層再堆積。
7：10Y4/1褐灰色　粘土　ややもろい。白色粘土の汚れ再堆積。
8：N2/黒色　粘土　白色粘土含む。
9：通常のⅣ層。
10：白色粘土化したⅣ層（酸化鉄付着）。
11：白色粘土化したⅣ層。

・ＲＤ202土坑（陥し穴）
1：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　黒褐色土とⅣ層起源土の混土。
2：10YR4/4褐色　粘土　汚れⅣ層再堆積。
3：10YR2/1黒色　シルト　ややもろい。
4：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　粘性あり。酸化鉄とⅣ層ブロック含む。
5：10YR4/4褐色　シルト　クロボク土とⅣ層再堆積混土。
6：10YR2/1黒色　シルト　もろい。
7：10YR5/6黄褐色　砂質シルト　通常のⅣ層。
8：10YR5/3にぶい黄褐色地に7.5YR5/8明褐色の筋　砂質シルト　Ⅳ層白色粘土化し酸化鉄の筋。
9：7.5YR3/2黒褐色　砂　Ⅴ層。水成堆積で、白色部分と交互層。

・ＲＤ203土坑（陥し穴）
1：10YR5/6黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土　シルト　硬く締まる。
2：10YR5/4にぶい黄褐色地に10YR3/1黒褐色のシミ　シルト
3：10YR5/3にぶい黄褐色地に10YR3/1黒褐色のシミ少し　粘土　周囲のⅣ層再堆積。
4：7.5YR5/6明褐色　粘土　酸化鉄に染まる。
5：7.5Y4/1灰白色地に下部中心にN3/暗灰色　粘土　Ⅳ層起源土と黒土の混土？　水で周囲Ⅳ層と同様に変色？
6：7.5Y4/1灰白色　粘土　Ⅳ層再堆積？　水で周囲Ⅳ層と同様に変色？
7：7.5Y4/1灰白色地に下部中心にN3/暗灰色　粘土　Ⅳ層起源土と黒土の混土？　水で周囲Ⅳ層と同様に変色？

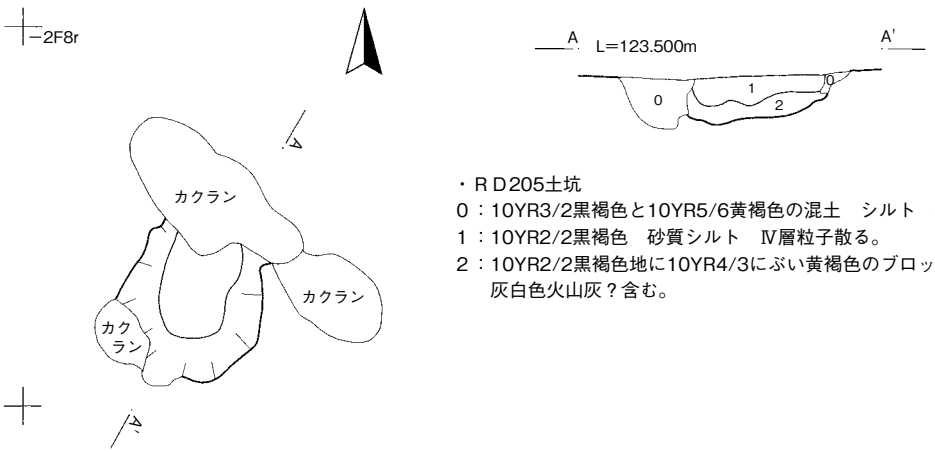
第36図　RD201～203 土坑（2）

●RD204



・ＲＤ204土坑（陥し穴）
1：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
2：10YR2/1黒色と10YR4/4褐色の混土　砂質シルト　汚れⅣ層再堆積。
3：10YR2/1黒色　シルト　粘性強い。ややもろい。
4：10YR2/1黒色と10YR4/4褐色の混土　シルト　粘性強い。ややもろい。汚れⅣ層再堆積。
5：10YR5/4にぶい黄褐色地に10YR2/1黒色のブロック　粘土　白色化し酸化鉄含むⅣ層汚れ再堆積。
6：10YR4/2灰黄褐色　砂　ややもろい。Ⅴ（砂）層再堆積。
7：10YR3/1黒褐色　砂　非常にもろい。

●RD205

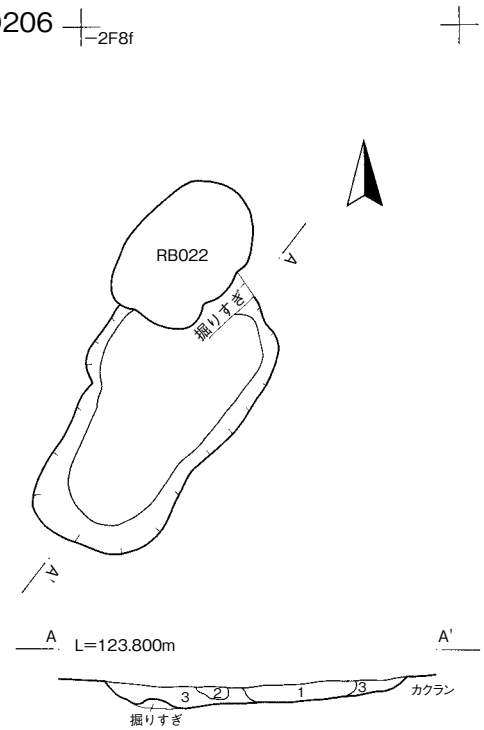


・ＲＤ205土坑
0：10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　長芋穴。
1：10YR2/2黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子散る。
2：10YR2/2黒褐色地に10YR4/3にぶい黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層ブロック含む。灰白色火山灰？含む。

0　1:40　2m

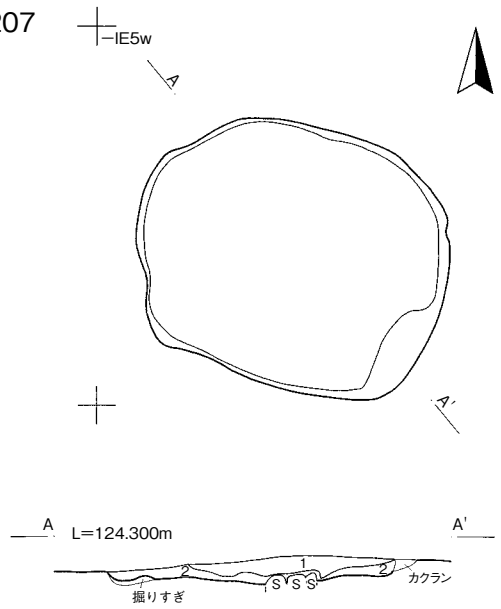
第37図　RD204・205 土坑

●RD206



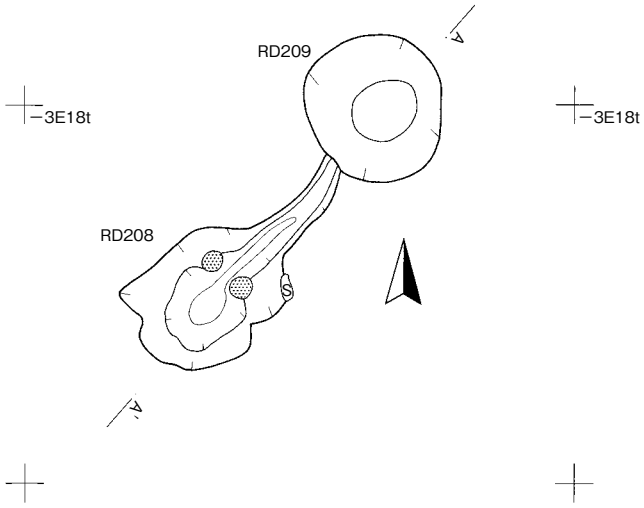
・ＲＤ206土坑
1：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層ブロック含む。
2：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　１層の淡い部分。
3：10YR4/1褐灰色（濃淡あり）と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　埋め戻し土？

●RD207

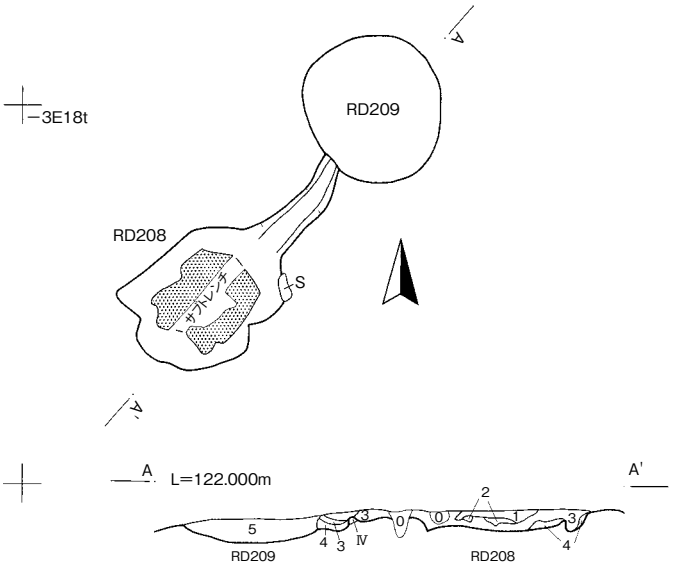


・ＲＤ207土坑
1：10YR3/2黒褐色　シルト　クロボク土？
2：10YR6/1褐灰色　シルト？　非常に硬く締まる。酸化鉄見える。

●RD208・209



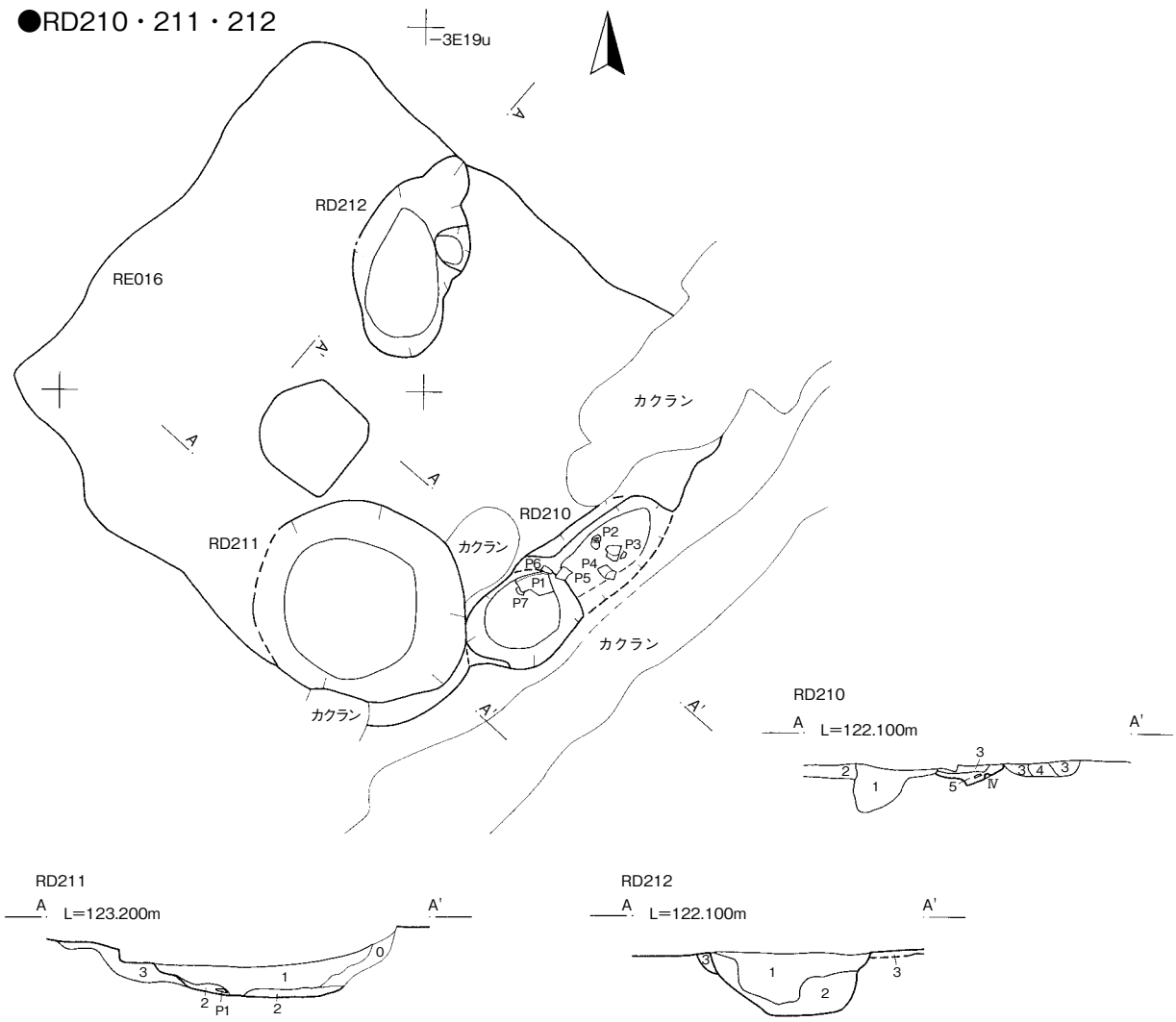
●RD208焼土検出状況



・ＲＤ208・209土坑
0：耕作時のカクラン。
1：10YR5/3にぶい黄褐色　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層砂層再堆積？　ＲＤ208土坑覆土。
2：10YR7/4にぶい黄褐色の一部が7.5YR5/6明褐色に焼けている　砂質シルト　焼土（ブロック？）。ＲＤ208土坑覆土。
3：10YR5/3にぶい黄褐色と10YR1.7/1黒色の混土　砂質シルト　炭化物、灰？多く、焼土粒含む。ＲＤ208土坑覆土。
4：10YR5/6黄褐色地に一部10YR3/2黒褐色のブロック　砂質シルト　Ⅳ層が汚れたもの？（Ⅳ層そのもの？）。ＲＤ208土坑覆土。
5：10YR3/1黒褐色地に細かい10YR5/6黄褐色のブロック　砂質シルト　硬く締まる。色調、プランからは、耕作時のカクランのように見える。ＲＤ209土坑覆土。

0　1:40　2m

第38図　RD206 ～ 209 土坑



・ＲＤ210
1：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　長芋穴。
2： 10YR4/4褐色地に10YR2/1黒色のブロック　砂質シルト　非常に硬く締まる。耕作痕と思うが、黒淡く５層に似る。５層がカクランを受けて出現したもの？
3：10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色がガマの腹状に混土　砂質シルト　非常に硬く締まる。長芋穴。
4： 10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック少し　砂質シルト　非常に硬く締まる。長芋穴。
5：10YR3/2黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　砂質シルト　硬く締まる。土器多く、焼土粒少し含む。カクランに近いが、他に比べて茶色基調。

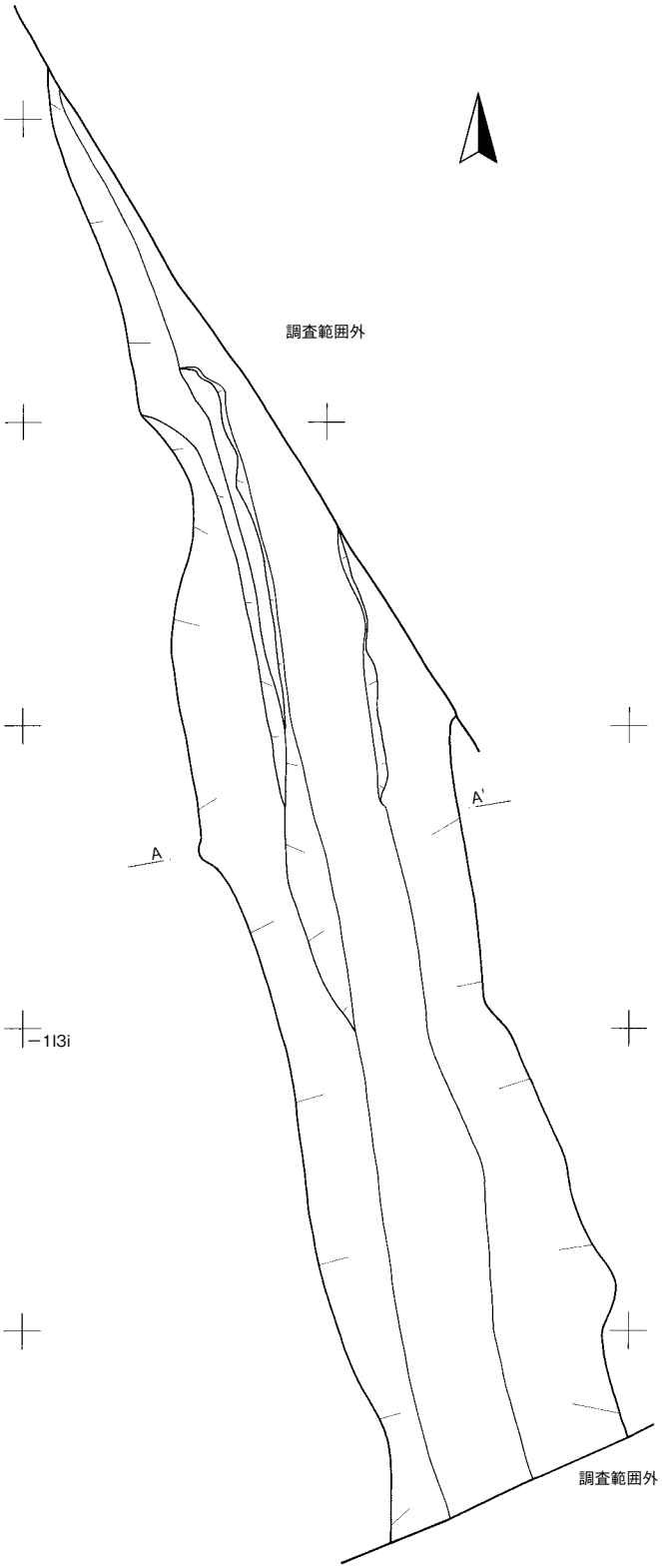
・ＲＤ211土坑
0：10YR5/6黄褐色地に10YR2/1黒色のブロック　粘土　カクラン。
1：10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子、細かいブロック含む。
2：10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　ややもろい。土器含む。Ⅳ層汚れ再堆積。
3：10YR5/6黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土　シルト　Ⅳ層が淡く汚れた感じ。住居状遺構全体に広がり、本土坑とは関係ないと思う。

・ＲＤ212
1：10YR2/1黒色　シルト　土坑？（自然現象？）
2：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の細かい粒子散る　シルト　土坑？（自然現象？）
3： 10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色散る　砂質シルト　非常に硬く締まる。地山が汚れただけのように見えるが、上面から見たプランは整った隅丸方形に見えた。ＲＥ016覆土。

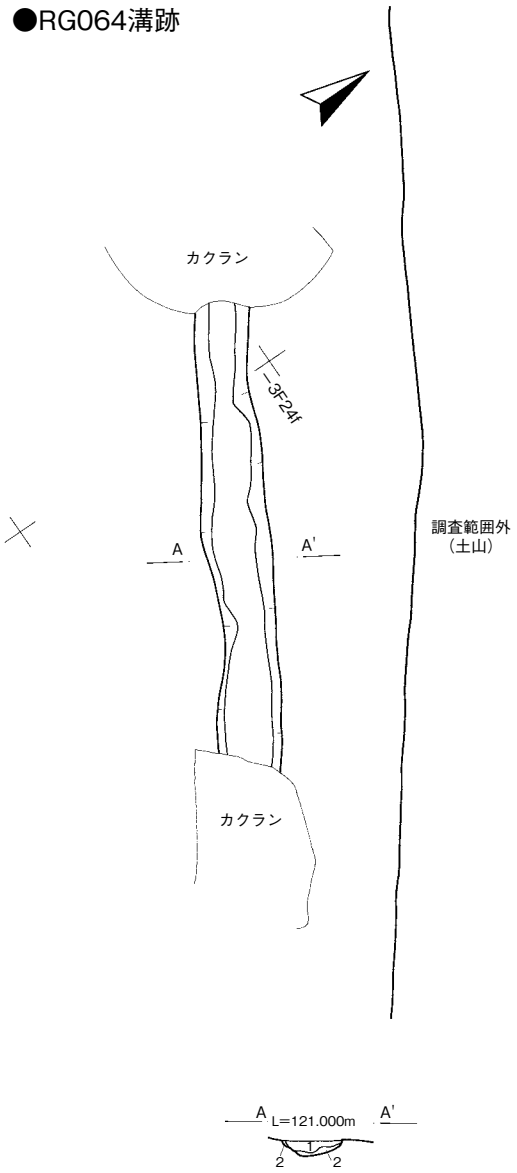
0　1:40　2m

第39図　RD210～212 土坑

●RG039溝跡

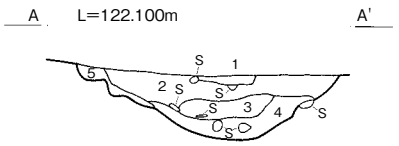


●RG064溝跡



・ＲＧ064溝
1：10YR2/1黒色　シルト
2：10YR5/6黄褐色地に10YR2/1黒色のブロック　砂質シルト　硬く締まる。地山（Ⅳ層）がカクランを受けたもの？

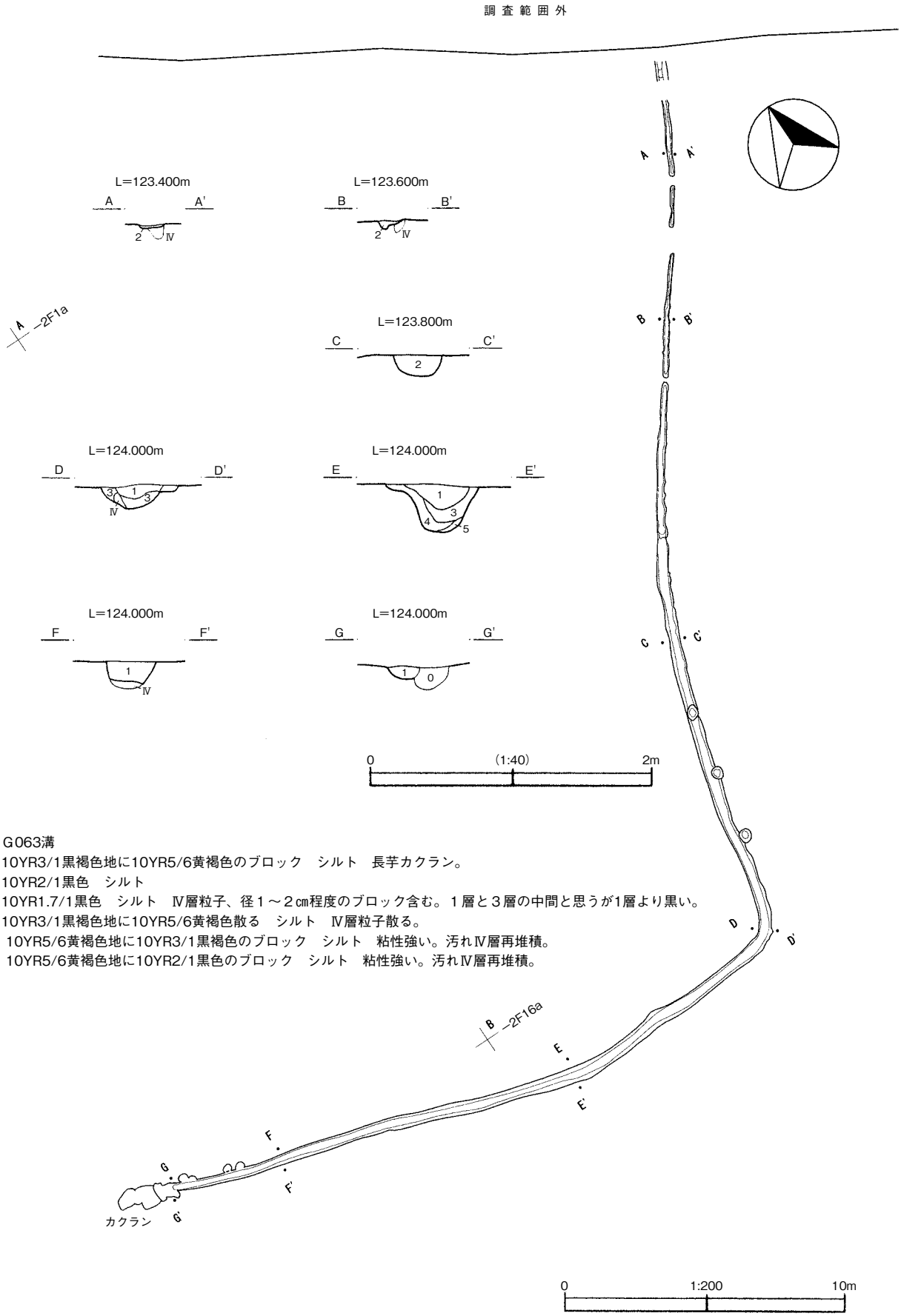
0　1:50　2m



・ＲＧ039溝跡
1： 10YR3/1黒褐色　砂　砂礫含む。
2： 10YR3/2黒褐色　砂質シルト　砂礫含む。１層に似るが、より明るい。
3： 10YR3/1黒褐色　砂質シルト　砂礫、酸化鉄含む。青っぽく、水成堆積？
4： 10YR3/2黒褐色　砂　砂礫多く、酸化鉄含む。青っぽく、水成堆積？
5： 10YR2/1黒色　砂質シルト　地山が根によって汚れたものらしい。掘りすぎ？

第40図　RG039・064 溝跡

●RG063溝跡

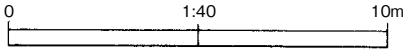


・ＲＧ063溝
0：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　長芋カクラン。
1：10YR2/1黒色　シルト
2：10YR1.7/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子、径１～２㎝程度のブロック含む。１層と３層の中間と思うが1層より黒い。
3：10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　Ⅳ層粒子散る。
4： 10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック　シルト　粘性強い。汚れⅣ層再堆積。
5： 10YR5/6黄褐色地に10YR2/1黒色のブロック　シルト　粘性強い。汚れⅣ層再堆積。

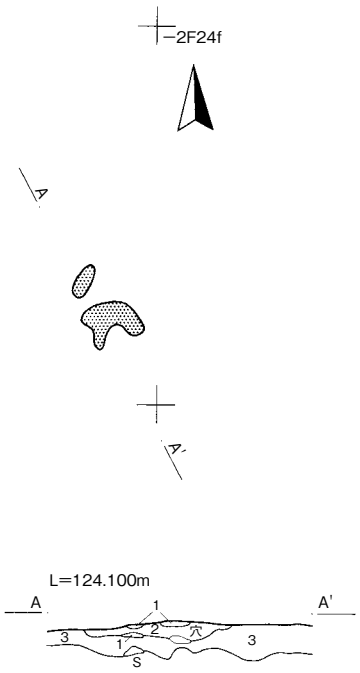
第41図　RG063 溝跡

●RF003

ＲＦ003焼土
0：10YR5/3にぶい黄褐色　砂　砂質Ⅳ層ブロック。カクラン。
1：５YR3/2暗赤褐色　砂　焼土。

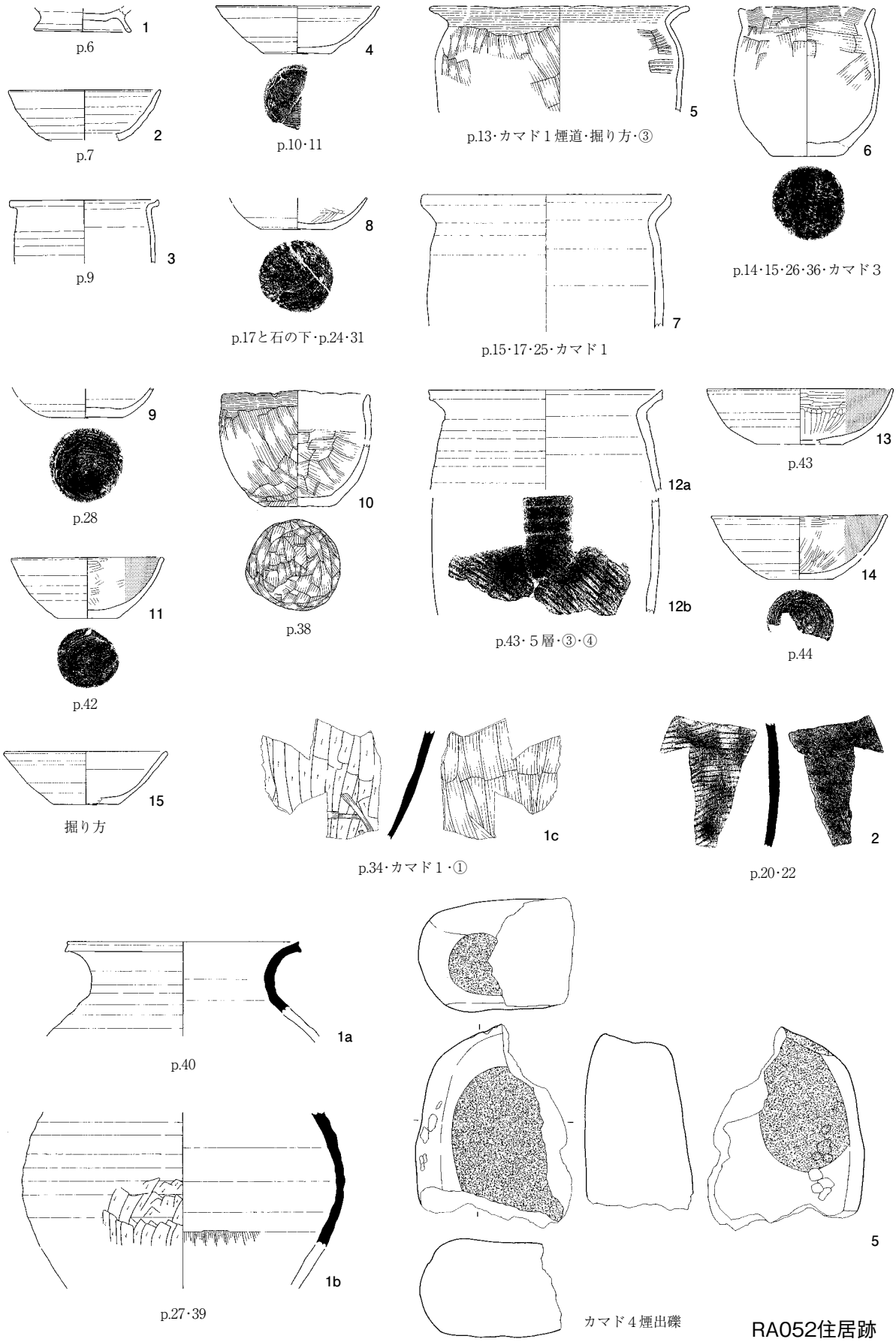


●RF004

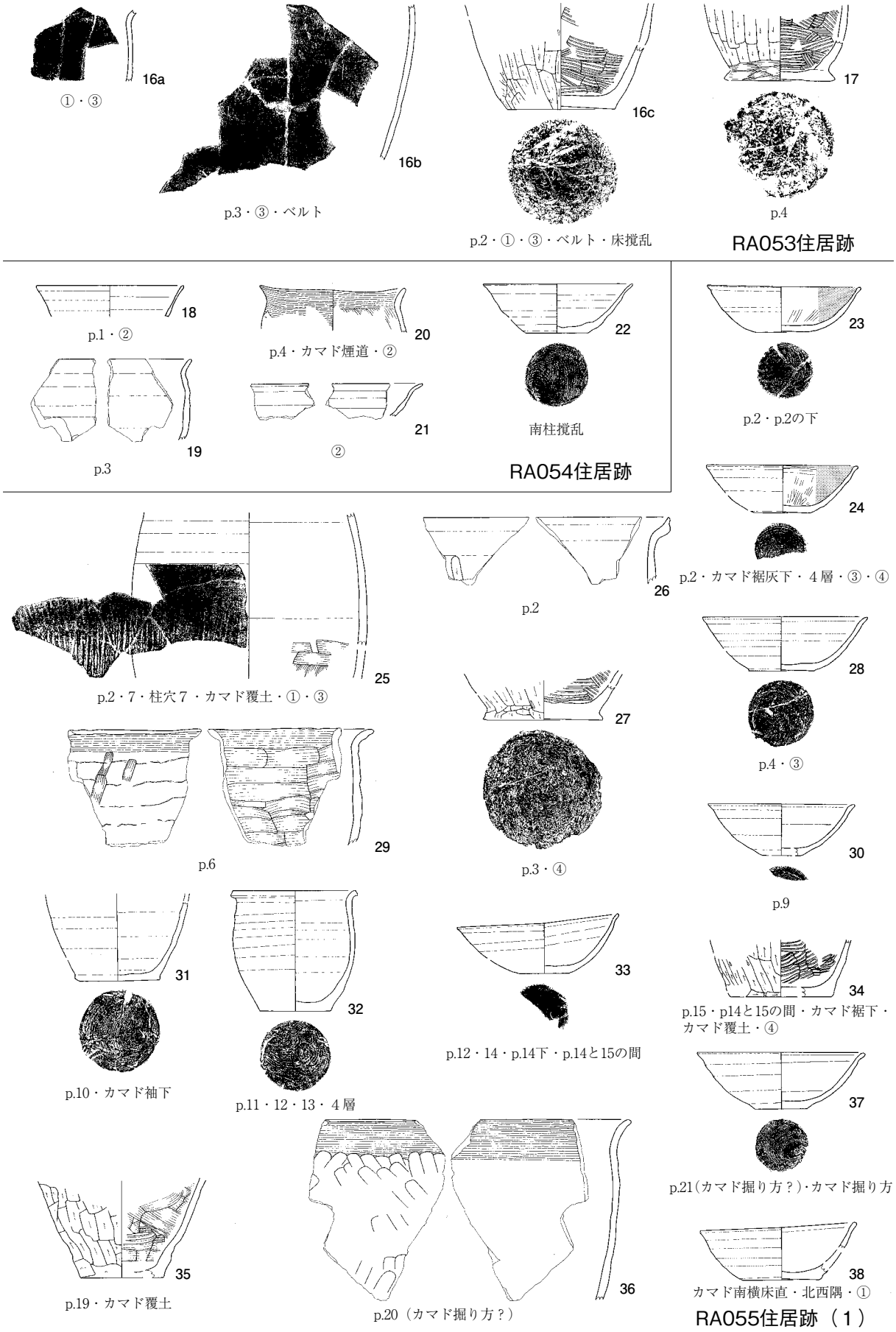


ＲＦ004焼土
1：7.5YR3/2黒褐色　シルト　焼土。２mm程度の焼土粒の集まりといった感じで、現地性か不明。クロボク土で火を焚くとこうした状態になるか。
2：7.5YR3/1黒褐色　砂質シルト　２mm程度の焼土粒含む。２mm程度の炭化物も僅かに含む。
3：10YR3/1黒褐色～10YR5/6黄褐色　シルト　風倒木でⅣ層が汚れたもの。

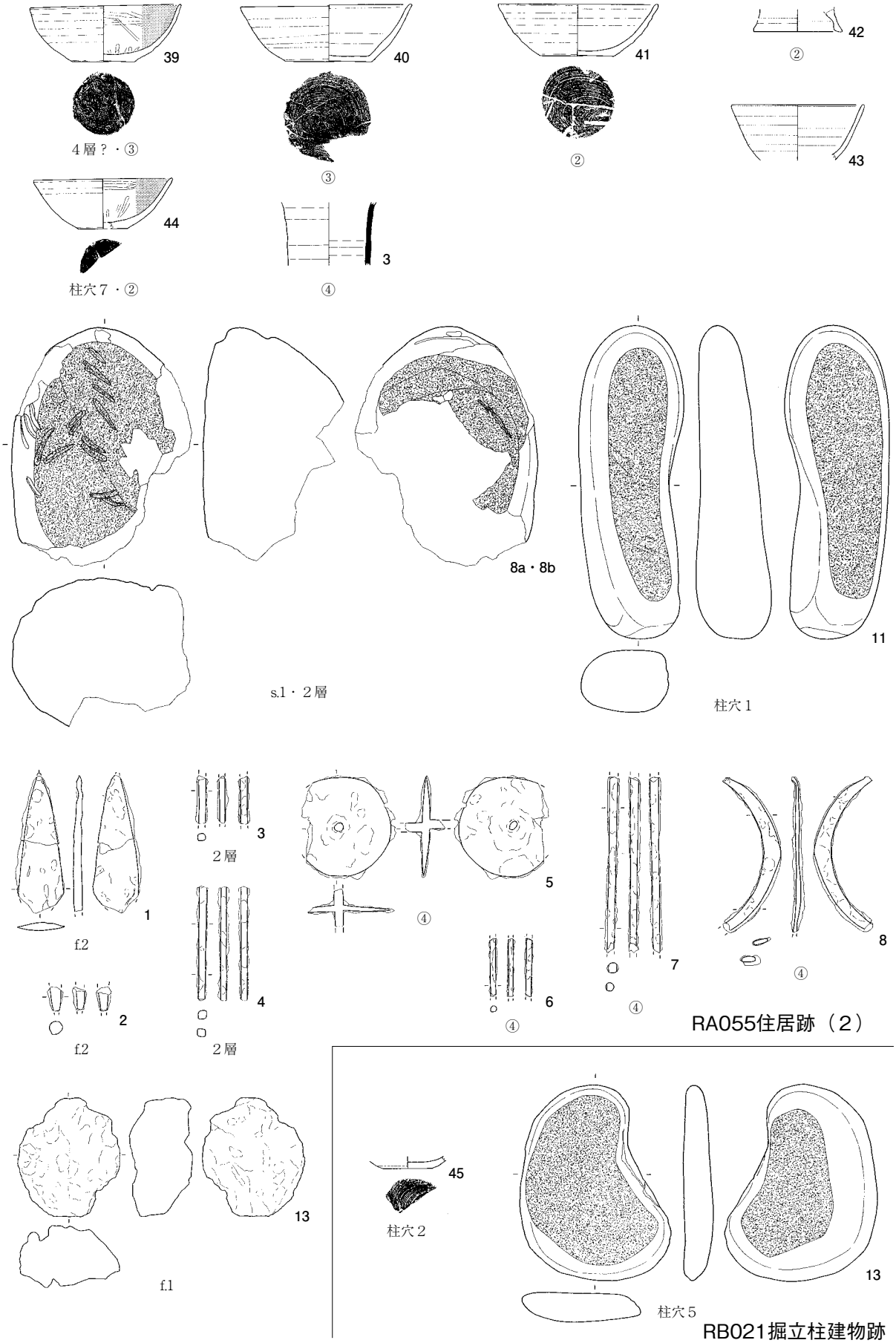
第42図　焼土



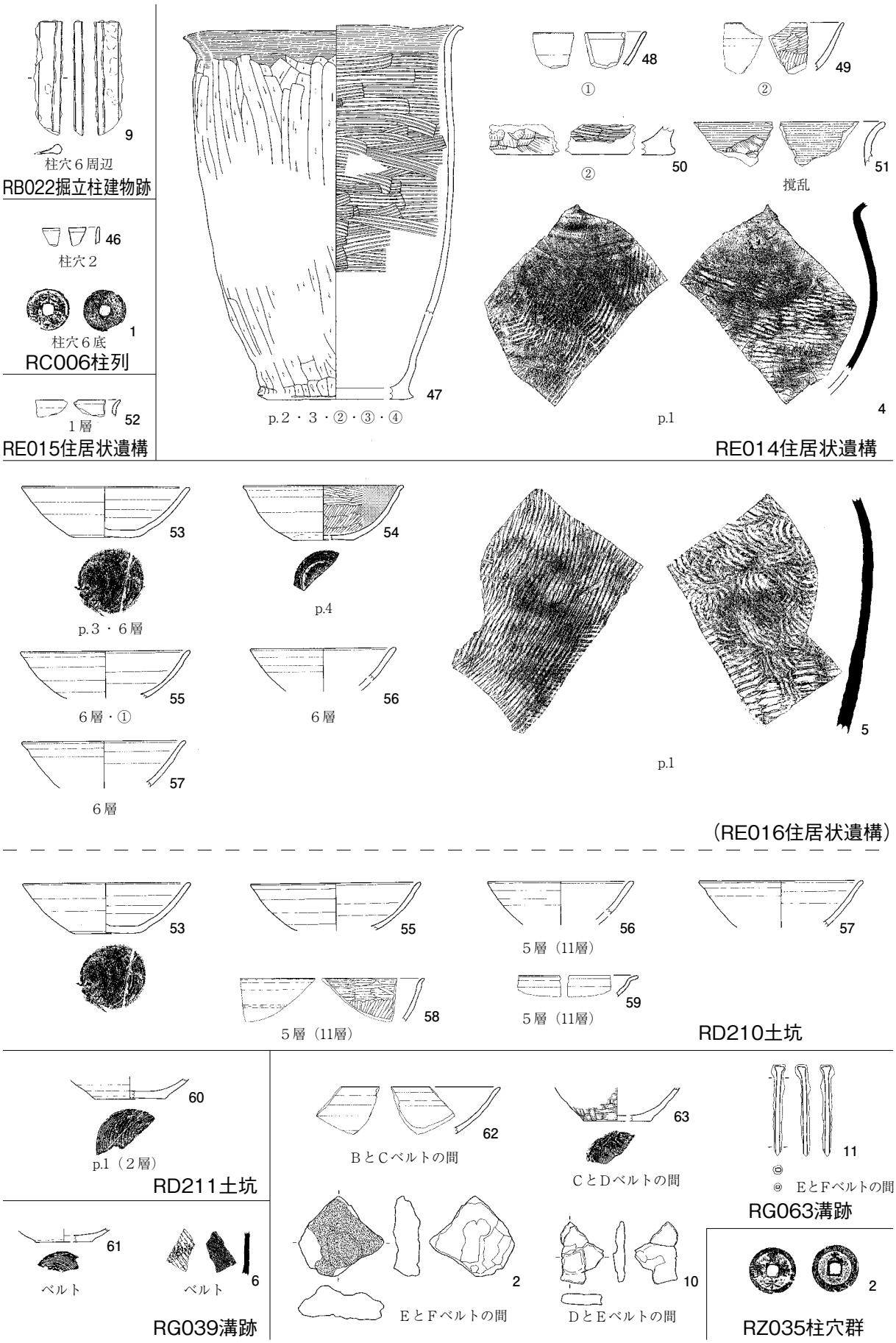
第43図　RA052 住居跡出土遺物（1/5）



第44図　RA053 ～ 055 住居跡出土遺物（1/5）



第45図　RA055住居跡（2）、RB021掘立柱建物跡出土遺物（土器・石器1/5、鉄製品1/3）



第46図　RB022 掘立柱建物跡、柱列、住居状遺構、土坑、溝跡、柱穴群出土遺物
（土器1/5、土製品・鉄製品・銭貨1/3）

Ⅵ　遺　　物

第18、19次調査で出土した遺物は、土師器・須恵器24,806g、土製品３点（フイゴ羽口、焼粘土塊）、石器類19点（砥石、石器製作時の剥片、勾玉石材？）、石製品１点（勾玉）、鉄製品13点（鏃、紡錘車、釘、鉄滓ほか）、銭貨４点（永楽通宝、寛永通宝）ほかである。この他、近現代の陶磁器が出土し、１点掲載した。

縄文時代の可能性が高い石器製作時の剥片、銭貨（近世）以外のほとんどは古代（平安時代）の遺物と考えて良いと考える。

本章では、遺構出土の遺物も含めたが、それぞれ、その種類の遺物の中で冒頭に掲げている。遺構出土品は、第Ⅴ章の中に遺構ごとの集成図を掲げているので参照いただきたい（第43～46図）。

個々の遺物の記載は、基本的に図と表で行ったので、ここでは概要と表の補足のみ記す。出土割合は、大雑把な数字で目安程度と考えていただきたい。なお、“出土位置・層”の欄に書かれた分数も、出土割合である。また、遺構内出土品の個々の出土状況は、Ⅴ章各遺構の記載中に記した。

遺構内出土品に対する補足。遺物観察表の出土位置欄の住居、住居状遺構に続く“①～④”は、住居を四等分した区画を意味し、土層ベルトを基準に、北西区画が①、北東が②、南西が③、南東が④となる。遺構内出土土器については、総量を重さで示したが、手違いで土師器と須恵器を分けずに計測したものがあり、報告書では一括して示さざるを得なかったが、須恵器を含むことが明瞭なものについては明記した。

(a)土師器（第47～52図、写真図版46、47、観察表は図版）

大コンテナ（32×42×30㎝）約1.6箱（接合前）出土し、64個体掲載した。須恵器と併せて24,806ｇとなる。観察表の“→”は調整順序を示し、矢印左側の方が前で、右側が後である。図表の器面調整は、工具よりも“効果”を重視したが、今回出土品では、ヘラケズリとヘラナデの中間的な調整がしばしば見られ悩んだ。砂の移動は観察できるのだが、ケズリ様に面をなすことは少なく、ナデ状に細かい平行線が見られるのだ。原則として器形を復元できるもの（1/4周以上）を掲載したが（遺構内出土No遺物であっても）、出土量が少ない遺構や量があっても基準を満たさないものばかりの遺構では、この限りでない。

今回出土品は、点数が少ない割に出来栄え等多様な土器群といった印象を持つ。例えば、10は北奥系の甕、12と25は出羽系の甕で、16、17、47？、50は、砂底土器である。その他、注目される土器としては、27底面の×の刻文がある。また、９の内外の調整を見ると坏か甕かの判断に迷う。

長胴甕然とした甕は少なく（47）、墨書土器は見られなかった。時期を特定する材料はないが、型式学的な傾向から、ほとんどは10世紀初頭前後といったところか。

以下、表の補足。５の出土割合、「p.13」が60/96、「カマド１煙道」が9/96、「掘り方」が12/96、「③」が15/96。外面頸部より上赤く、胴突出部より下ススコゲ付着し、内面は赤く摩耗。６の出土割合、石膏入れの際に注記がとれて不明だが、「p.14」が1/3弱を占める。外面赤く所々スス付着し、底部は黒い。内面は全面にコゲ薄く付着するが、一部口縁付近赤い。７の出土割合不明だが「p.15」として取り上げたものが多いようだ。その他に、「p.16」、「掘り方」、「②」で取り上げたものにも、接合しない同一個体片がある。外面上部赤く、内面上部薄くコゲ付着。10の外面胴部調整赤くただれていて不明だがヘラナデか。外面赤く、一部にスス付着、内面口縁部スス付着。

12a、bには、その他にも接合しない同一個体口縁～胴下部破片があり、全部を合わせた出土割合は、「p.43」、「５層」、「③」、「④」、「掘り方」で顕著な差はない。色調は、赤あるいは白い部分とススで黒くなっている部分があるが、部位による偏りはあまり無いようである。16bには、接合しない同一個体胴部片があり、注記は、同住居、「p.１」と「ベルト」である。16cの出土割合、概ね、「p.２」3/15、「①」2/15、「③」2/15、「ベルト」2/15、「床攪乱」6/15であり、16全体としては、16ａが注記ミスで割合不明なため、はっきりしないが、「p.３」と「床攪乱」が同程度で、この二者で概ね全体の2/3を占める。25の出土割合、「p.2」1/22、「p.７」9/22、「柱穴７」3/22、「カマド覆土」3/22、「①」3/22、「③」3/22。32の出土割合、注記ミスで不明。38の出土割合、「カマド南横床直」1/9、「北西隅」2/9、「①」6/9で、「北西隅」とは、出土状況を記録しようと考えていたが精査時にバラバラになり大雨後位置が特定できなくなってしまったもので、床直（５層？）出土か。39の「４層？」は、③区画の南東隅土層ベルト横からほぼ水平の状態で出土したもので、２層の可能性もある。写真撮影のクリーニングの際に動いてしまったようで位置は記録していない。47の出土割合、注記石膏入れの際に剥がれて不明だが、「p.３」が1/2、「④」が1/4程度を占める。外面、口～頸部赤く焼け、その下スス付着。内面、口縁部のみ赤く焼け、底部中心にコゲ？付着。口縁内面黒斑？　55の出土割合、「６層」1/7、「①」2/7、「ＲＤ210土坑」4/7。

参考文献

八木光則　1993　「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙検討会　特集シンポジウム北日本における律令期の土器様相』同青森大会事務局（青森県埋文センター）（1992年開催のシンポジウム結果をまとめたもの）

(b)須恵器（第96～97図、写真図版48～49、観察表は図版）

大コンテナ（32×42×30㎝）約0.4箱（接合前）出土し、８個体掲載した。須恵器と併せて24,806ｇとなる。掲載基準。最低限部位が特定できる破片を掲載し、大甕の胴部破片は最小限にとどめたが、土師器と同様、遺構内はこの限りでない。

以下、表の補足。１には、この他に、「p.18」、「p.33」、「カマド１」から出土した接合しない同一個体胴部片があり、これらを合わせた出土割合は、「p.18」3/54、「p.27」8/54、「p.33」7/54、「p.34」5/54、「p.39」9/54、「p.40」11/54、「カマド１」6/54、「①」5/54となる。

(c)陶器（第55図、写真図版49の１、観察表は図版）

今回の調査区は宅地跡を含み、道路側溝を中心に大量（42×32×30㎝コンテナ1.5箱程度）の近現代陶磁器片（ビール瓶やガラス片も）が遺構外から出土した。このうち形が復元できるものを掲載した。

(d)土製品（第55図、写真図版49下段、観察表は写真図版）

３点出土し、全点掲載した。フイゴ羽口１点、焼粘土塊２点（５塊）である。1の色調は、朱色がかった肌色だが、最大塊の一部は灰色である。

(e)石器・石製品（第56～58図、写真図版50～52、観察表は、石器は写真図版、石製品は図版）

石器類19点、石製品１点（勾玉）出土し、不明瞭なものも含め全て掲載した。石器製作時の剥片１点（16）、敲石の可能性のあるもの２点（３、４）、砥石およびその可能性のあるもの15点（写真図版49～50のその他）、勾玉の石材の可能性のあるもの１点（２）、勾玉１点（第58図１）である。石器製作時の剥片は縄文時代と思われるが、それ以外は古代（平安時代が主）の可能性が高い。勾玉およびその石材は、平安時代より古いか。

砥石は、代表的な白色凝灰岩のものは出土せず、二番目に多い安山岩や三番目に多い？デイサイトのものばかりである。デイサイトのものは本当に砥石かどうか疑われるが、11の平坦面はツルツルで、明らかに人工的な改変を受けている。

勾玉の石材と推定したもの（２）は、本当に勾玉の製作を目指したものかどうか明確な根拠はないが、石質が本遺跡の勾玉（第58図１）と同じで非常に硬く他の石器にはあまり使われないこと、厚めの板状という形と大きさが、ここから勾玉を作り出すにふさわしいと思われた。石質と形からは石帯の石材の可能性もあるが、本遺跡ＲＡ014竪穴住居から出土した石帯（㈶岩手県文化振興事業団2008）に比べるとやや小さい。

以下、表の補足。**8a**と**8b**は接合し、写真図版51に接合前と後の写真を掲載した。**11**は、古代の砥石には傍流の石質だが、平坦面は非常に滑らかでツルツルである。石製品の**第58図１**の表面はこげ茶色だが、内面（欠損面）は石材（写真図版50の２）と同じ白色である。

参考文献

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008『飯岡才川遺跡第７・13次・細谷地遺跡第12次・矢盛遺跡第９次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第508集

(f)鉄製品（第58図、写真図版53、観察表は図版）

13点出土し、全て掲載した。鏃１点（１）、紡錘車１点（５）、釘？２点（３？、11）、不明８点、鉄滓１点（13）出土し、不明品には、棒状のもの（２、４、６、７）、平面形が弧状（断面形は板状）のもの（８）、蝶番状のもの（９）、鉄破片（板）の集合体のようなもの（10）、刀？（12）があり、棒状のものには紡錘車の軸の可能性のあるものが多い（４、６？、７）。９は新しい可能性が高いが、その他は概ね平安時代と考えて良いのではないかと思う。

出土地点が極めて偏っており、ＲＡ055住居跡出土品はさることながら（１～８、13）、12の東区出土品を除いて全て西区の近接した場所から出土している。庇を持つＲＢ021掘立柱建物跡の近くということで、何か特別な意味を持っているのだろうか。

(g)銭貨（第59図、写真図版52下段、観察表は図版）

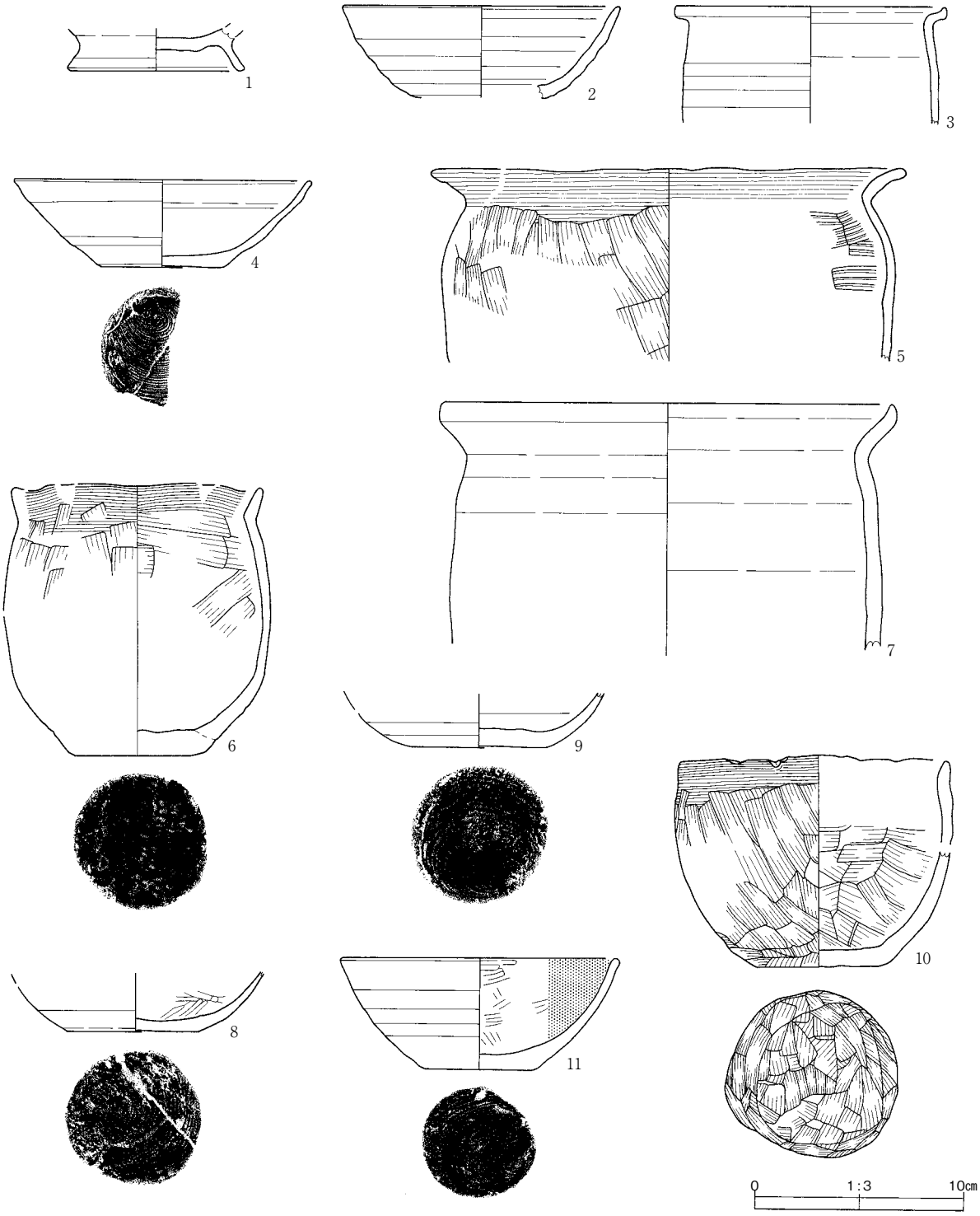
４点出土し、全点掲載した。１点が永楽通宝（１）のほかは、全て寛永通宝（新寛永）と思われるが、残りが悪いものが多く確実ではない。**２**は、ＲＺ035柱穴群（第８図南西隅）の南端の平面形菱形状の柱穴状土坑から出土した。周囲の同様の土坑の調査状況から（第Ⅴ章参照）、墓の可能性がある。

参考文献

永井久美男　1996『日本出土銭総覧　1996年度版』兵庫埋蔵銭調査会

(h)自然遺物、その他

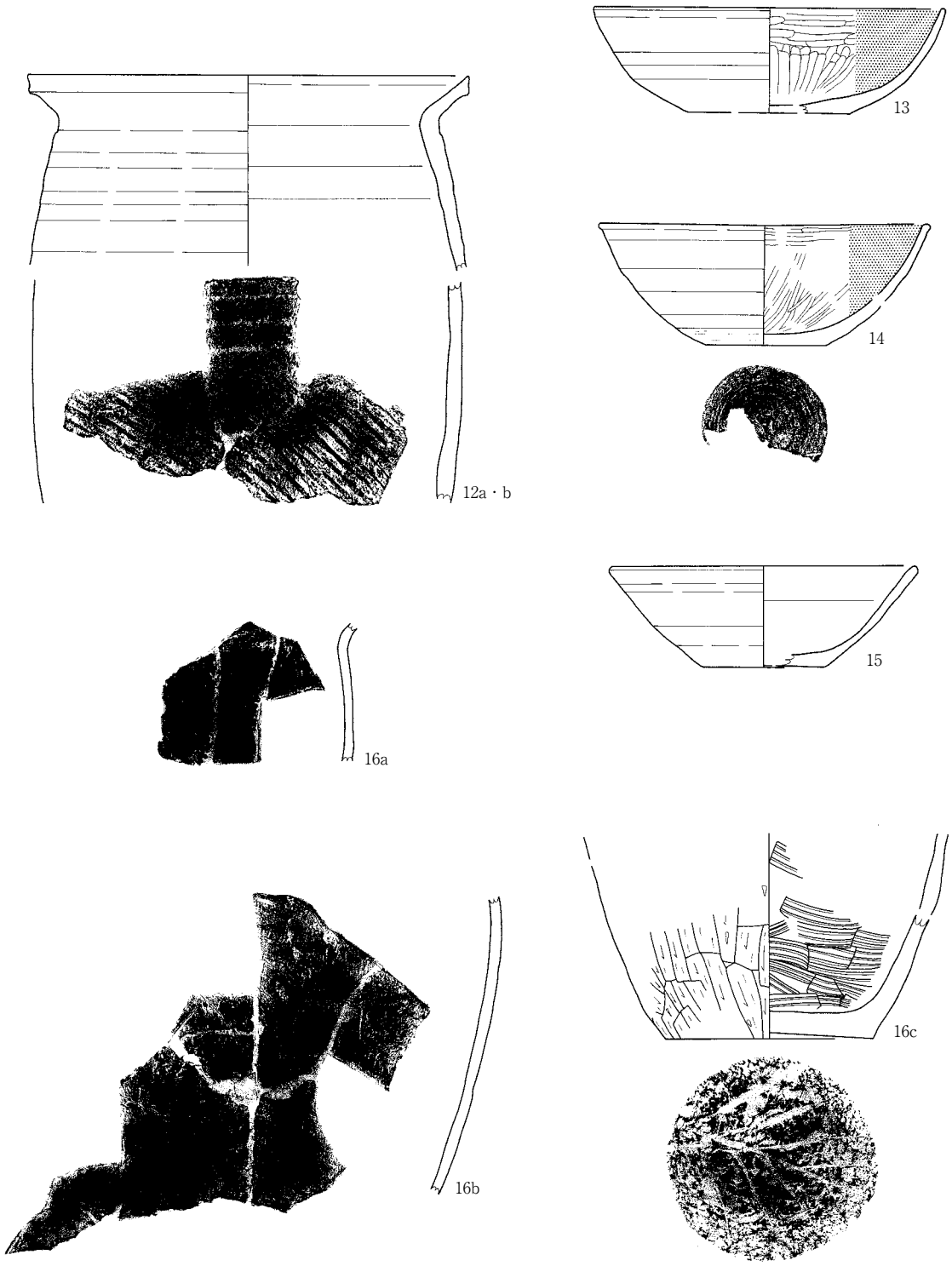
親指以下の微小な炭化材については取り上げてきておらず、今回の調査では、ＲＡ055住居跡以外では基準を満たす炭化材や炭化物は全く出土しなかった。ＲＡ055住居跡カマド手前から出土した唯一の比較的大きな炭化材は、８月後半ブルーシートが浮かぶほどの大雨により残念ながら消失した。



土師器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
1	RA052住居跡 p.6	台付坏・台	1/3周強	ロクロナデ（やや摩耗）	（摩耗。ヘラミガキ?）		
2	RA052住居跡 p.7	坏	1/3周	ロクロナデ（粘土まくれ痕）	ロクロナデ		
3	RA052住居跡 p.9	甕・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	内外やや摩耗	
4	RA052住居跡 p.10、11（割合不明）	坏	1/2周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	内面やや摩耗	
5	RA052住p.13、カマド1煙道、掘り方、③	甕・口～胴部	1/4周以下	口：ヨコナデ／胴：ヘラナデ（ケズリ?）	口：ヨコナデ／胴：ヘラナデ	胴内面一部ハケメ見える	p.87
6	RA052住p.14、15、26、36、カマド3	甕	底のみ一周	ヘラナデ?（口縁指なでに近い）	ヘラナデ?	外面底網代痕?	p.87
7	RA052住居 p.15、17、25、カマド1	甕・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ（やや摩耗）	ロクロナデ	注記ミスで出土割合不明	p.87
8	RA052住居跡 p.17と石の下、p.24、31	坏・底部	底一周	ロクロナデ（摩耗）／底：回転糸切	ヘラミガキ?（摩耗）	p.24、31は4/11、残り3/11	
9	RA052住居跡 p.28（割れてない）	坏?・底部	底一周	ロクロナデ（摩耗）／底：回転糸切	ロクロナデ	外面スス付着?、甕?	
10	RA052住居跡 p.38（二つに割れて）	甕?	1/2周以上	口：ヨコナデ／胴?／底“ナタケズリ”	ハケメ?→ナデ	内外輪積痕・外胴赤くただれ	p.87
11	RA052住居跡 p.42	坏	1/3周以上	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ（内面黒色処理）	胎土金雲母多・丁寧製作	

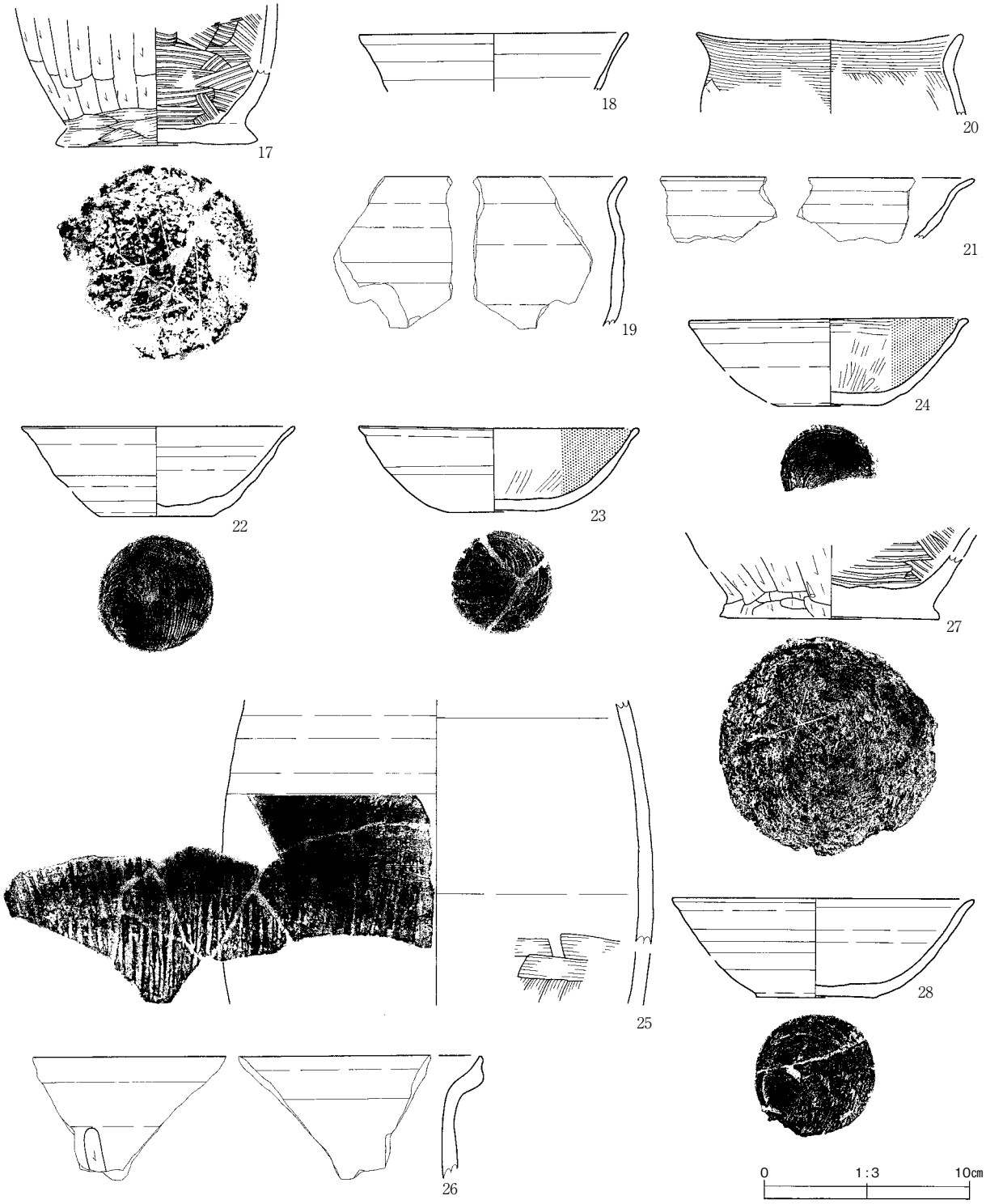
第47図　土師器（1）



土師器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
12a	RA052住居跡 p.43（4/7）、5層（3/7）	甕・口～頸部	1/4周以下	ロクロナデ（頸部工具当て）	ロクロナデ	色調、p.43大きく異なる	p.88
12b	RA052住居跡 5層、③、④	甕・胴部	1/5周以下	上：ロクロナデ（工具）／下：タタキ	ヘラナデ	出土割合略1：1：1	p.88
13	RA052住居跡 p.43	坏	1/5周以下	ロクロナデ／底：ヘラケズリ?	ヘラミガキ（内面黒色処理）	胎土金雲母多	
14	RA052住居跡 p.44	坏	1/4周以上	ロクロナデ／底～面：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（内面黒色処理）	丁寧製作・酸化鉄付着	
15	RA052住居跡・掘り方	坏	1/5周以下	摩耗ひどい（ロクロナデ?）	摩耗ひどい（ロクロナデ?）	胎土良	
16a	RA053住居跡 ①、③（割合不明）	甕・胴上部	小片	摩耗（調整痕見えず）	ヘラナデ?（摩耗）		
16b	RA053住居跡 p. 3、③、ベルト	甕・胴部	1/4周以下	ヘラナデ?（ケズリ?）	ハケメ（摩耗）	p.3が3/5、③とベルトが各1/5	p.88
16c	RA053住居跡 p.2、①、③、ベルト、床撹乱	甕・胴～底部	底のみ一周	〃／底：木葉痕→縁粗砂	〃／底付近輪積痕	外部底、胴黒斑	p.88

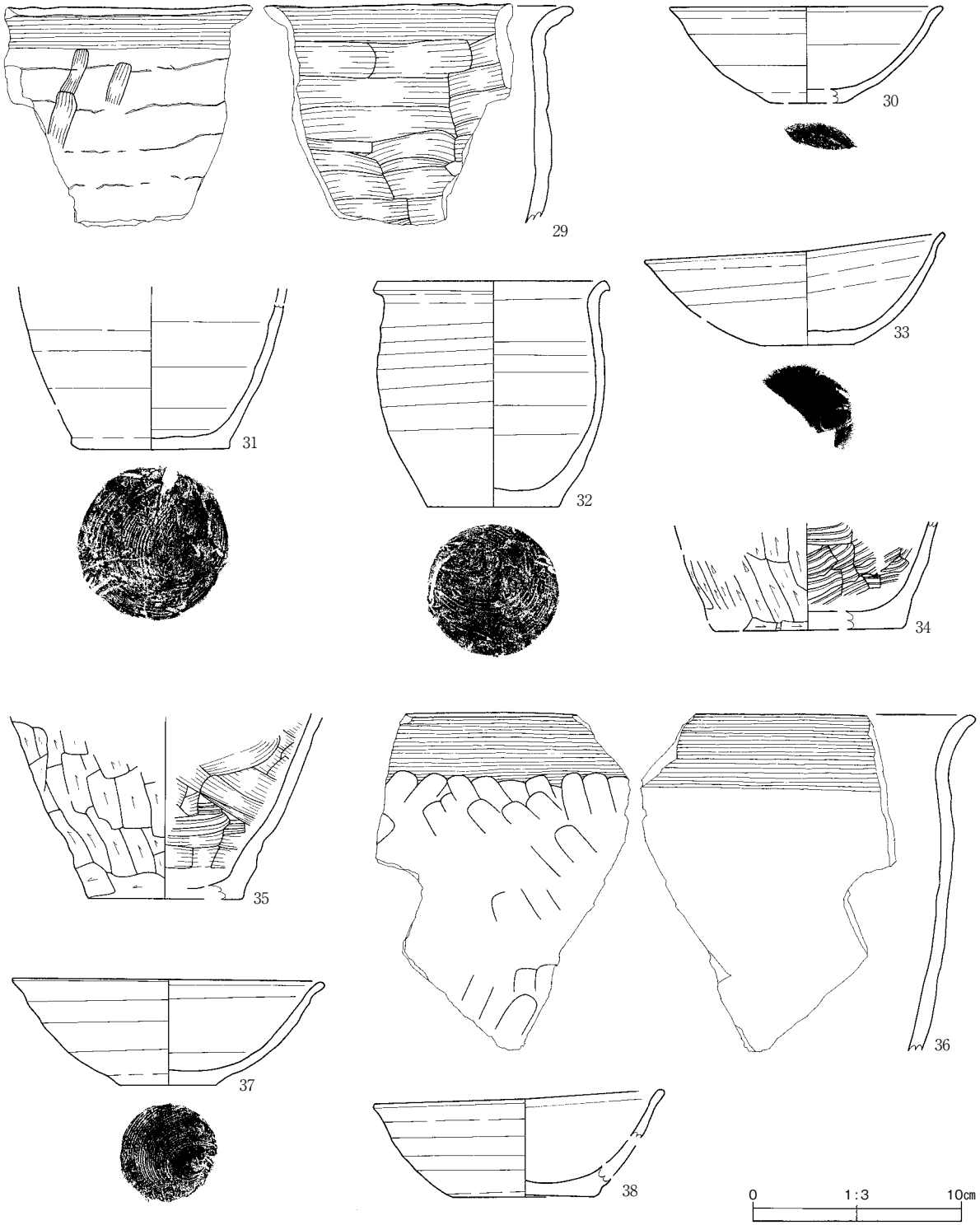
第48図　土師器（2）



土師器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
17	RA053住居跡 p.4	甕・底部	略一周	ヘラケズリ（ナデ?）／底：〃	ハケメ		
18	RA054住居跡 p. 1、②	坏・口縁部	1/3周未満	ロクロナデ	ロクロナデ	器壁薄い・光沢	
19	RA054住居跡 p.3	坏・口～胴部	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	器壁薄い・表面剥落	
20	RA054住居跡 p.4、カマド煙道、②	甕・口縁部	略一周	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	割合不明・内外最上スス付	
21	RA054住居跡 ②	坏・口～胴部	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	器壁薄い	
22	RA054住居跡 南柱撹乱	坏	1/4周以上	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外面上部スス?付着	
23	RA055住居跡 p.2、p.2の下	坏	モザイク欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ミガキ（内面黒色処理）	割合不明・内面摩耗	
24	〃　p.2、カマド裾灰下、4層、③、④	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ミガキ（内面黒色処理）光沢	割合不明・外底黒斑	
25	〃p.2、7、柱穴7、カマド覆土、①、③	甕・胴部	1/4周以下	ロクロナデ→下部タタキ	ヘラナデ?（滑らか）		p.88
26	RA055住居跡 p.2	甕・口～頸部	1/5周未満	ロクロナデ	ロクロナデ	丁寧製作	
27	RA055住居跡 p.3（14/15）、④	甕・底部	底一周	ヘラケズリ（底面ナデ?）	底指なで→胴ハケメ	外面底面刻文記号★	
28	RA055住居跡 p.4、③（割合不明）	坏	1/5周以上	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外底黒斑?・朱色・摩耗	

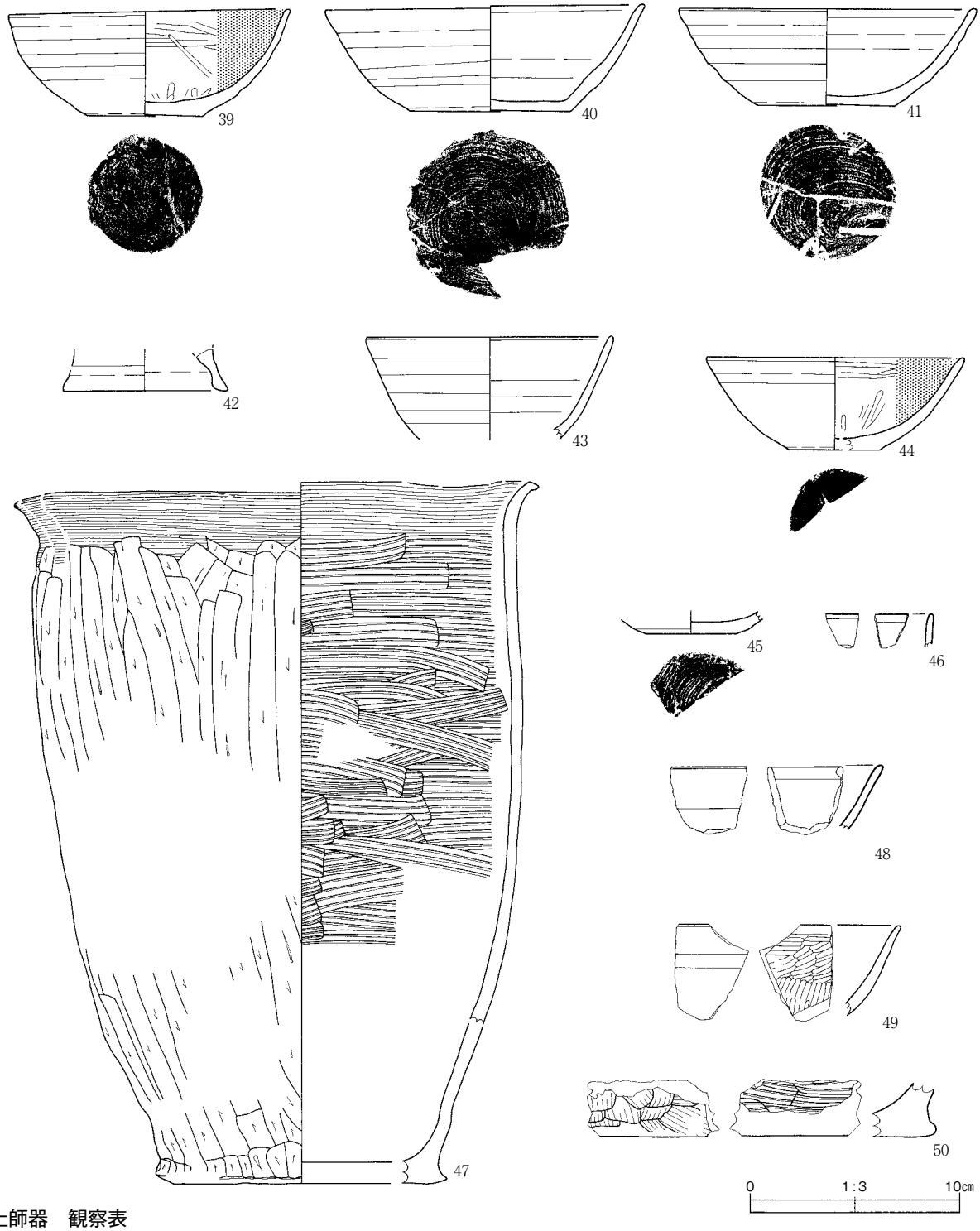
第49図　土師器（3）



土師器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
29	RA055住居跡 p.6	甕・口～胴部	1/5周以下	輪積痕→指なで?→口縁ヨコナデ	ヘラナデ?→口縁ヨコナデ?	下の割口粘土接合面	
30	RA055住居跡 p.9	坏・口～胴部	1/5周未満	ロクロナデ	ロクロナデ?（内面摩耗）	朱色	
31	RA055住居跡 p.10（5/6）、カマド袖下	甕・胴～底部	胴1/3周	ロクロナデ?／底回転糸切→ケズリ?	ロクロナデ	底一周・外底黒斑?、上スス	
32	RA055住居跡 p.11、12、13、4層	甕	一部欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外底赤、上スス、内口スス、下赤	p.88
33	〃 p.12、p.14、p.14下、p.14と15の間	坏	2/3周未満	摩耗（ロクロナデ／底：回転糸切?）	摩耗（ロクロナデ）	出土割合不明・外底調整?	
34	〃p.15、p.14と15間、カマド袖下、カマド覆土、④	甕・底部	1/3周以下	ヘラケズリ／底：ナデ?	底指なで?→胴ハケメ	割合不明・内コゲ・外底黒斑	
35	RA055住居跡 p.19（3/5）、カマド覆土	甕・底部	1/5周未満	ヘラケズリ／底：木葉痕	ハケメ（→ヘラナデ?）	内面ススコゲ?	
36	RA055住居跡 p.20（カマド掘り方?）	甕・口～胴部	1/5周未満	口縁ヨコナデ→胴指なで?	口：ヨコナデ／胴剥落で不明	外スス付着?、内面胴剥落	
37	〃 p.21（カマド掘り方?）、カマド掘り方	坏	ほぼ完形	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	出土割合p.21が3/4	
38	〃カマド南横床直、北西隅、①	坏	1/3周以上	摩耗（ロクロナデ／底：不明）	摩耗ひどい（ロクロナデ?）	内外赤く、スス付着	p.88

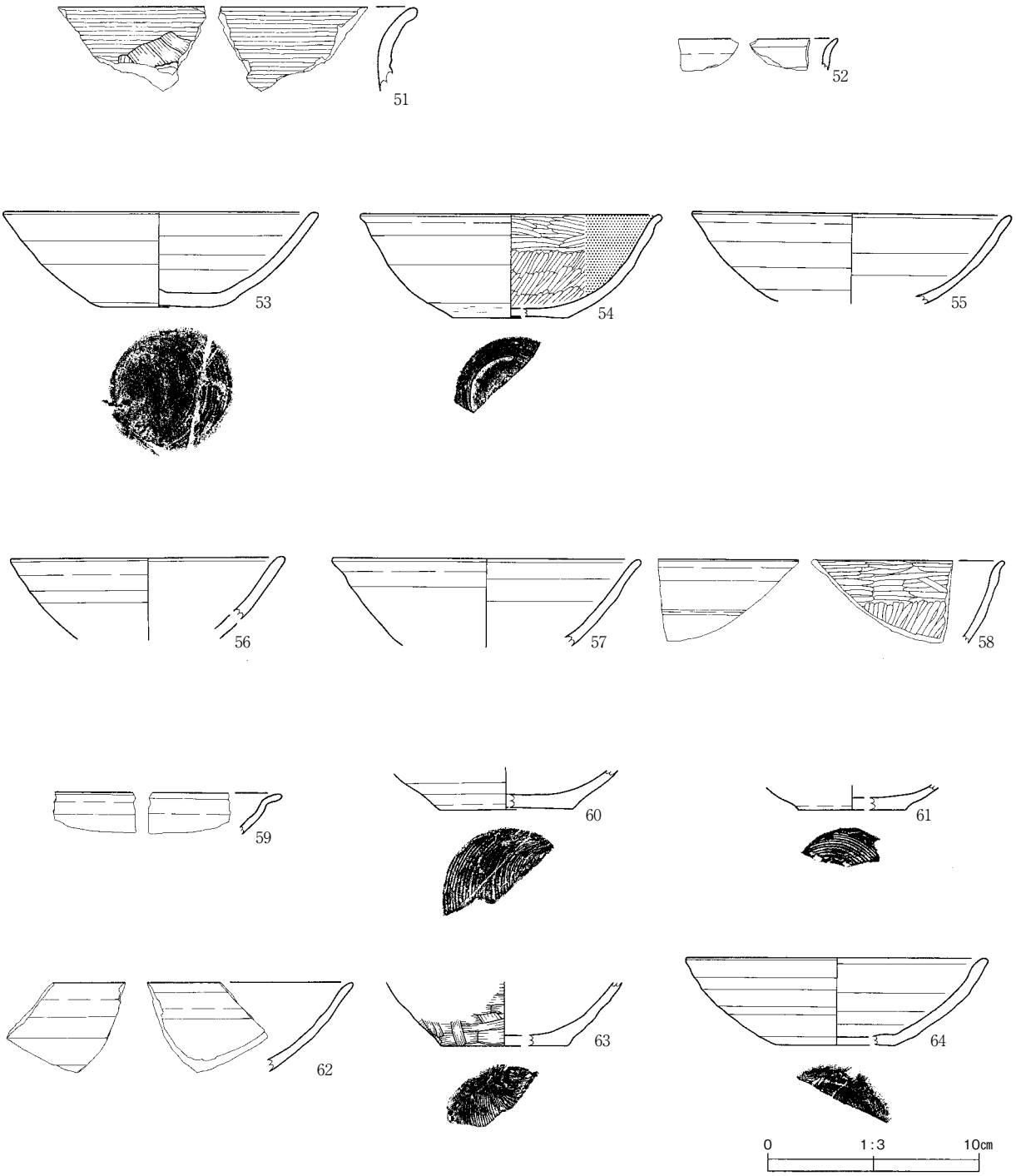
第50図　土師器（4）



土師器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
39	RA055住居跡 4層?（8/9）、③	坏	1/4周以上	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ（内面黒色処理）	外底赤く、その上スス付着	p.88
40	RA055住居跡 ③	坏	一部欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	金雲母・外底調整粘土まくれ	
41	RA055住居跡 ②	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	やや摩耗（内面灰色）	
42	RA055住居跡 ②	台付坏・台	1/4周以上	摩耗（ロクロナデ?）	摩耗（ロクロナデ?）	上の割口粘土接合面から剥離	
43	RA055住居跡	坏・口～胴部	1/5周未満	ロクロナデ	ロクロナデ		
44	RA055住居跡　柱穴7、②	坏	1/3周未満	ロクロナデ／底：回転糸切?	ヘラミガキ（内面黒色処理）光沢	出土割合不明・外底黒斑	
45	RB02掘立柱建物跡 柱穴2	坏・底部	1/4周以下	底：回転糸切	ロクロナデ		
46	RC006柱列 柱穴2	坏	極小片	ロクロナデ?	ロクロナデ?		
47	RE014竪穴状遺構 p.2、p.3、②、③、④	長胴甕	胴下～底欠	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ／砂底?	ハケメ→口縁ヨコナデ	内面底指なで?	p.88
48	RE014竪穴状遺構 ①	坏・口～胴部	小片	やや摩耗（ロクロナデ?）	ロクロナデ		
49	RE014竪穴状遺構 ②	坏・口～胴部	小片	ロクロナデ?（やや摩耗）滑らか	ヘラミガキ（内面黒色処理）		
50	RE014竪穴状遺構 ②	甕・底部	1/5周未満	ヘラケズリ?（ナデ?）／砂底	ハケメ		

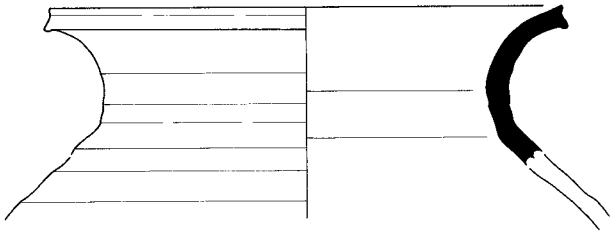
第51図　土師器（5）



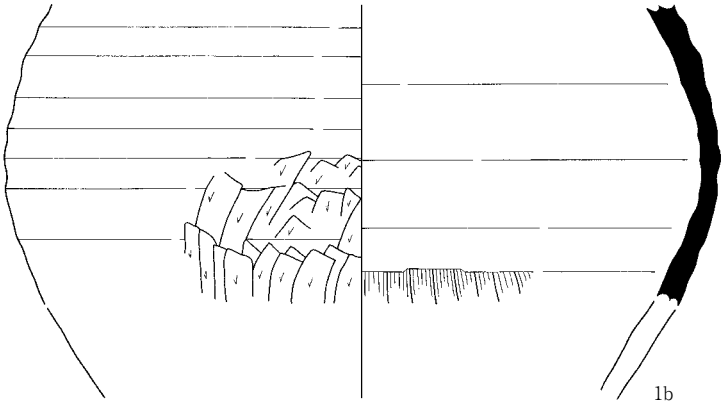
土師器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
51	RE014竪穴状遺構 撹乱	甕・口縁部	小片	口縁ヨコナデ→ヘラナデ・頸沈線	口縁ヨコナデ→ヘラナデ		
52	RE015竪穴状遺構・1層	坏・口縁部	極小片	摩耗（ロクロナデ?）	摩耗（ロクロナデ?）		
53	RE016竪穴状・6層、RD210土坑 p.3	坏	1/5周以上	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	出土割合不明・内外摩耗	
54	RD210土坑 p.4	坏	1/4周以下	ロクロナデ／底～面：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（内面黒色処理）	丁寧製作	
55	RE016竪穴状 6層、①、RD210土坑	坏・口～胴部	1/3周以下	ロクロナデ	ロクロナデ（摩耗）	胎土小石	p.88
56	RE016竪穴状・6層、RD210土坑・5層	坏・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	出土割合略1：1・内面摩耗	
57	RE016竪穴状・6層、RD210土坑	坏・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	出土割合不明・内面やや摩耗	
58	RD210土坑・5層	坏・口～胴部	1/5周未満	ロクロナデ	ヘラミガキ（内面黒色処理）		
59	RD210土坑・5層	坏・口～胴部	小片	摩耗（ロクロナデ?）	摩耗（ロクロナデ?）	器壁薄い	
60	RD211土坑 p.1(2層)	坏・胴～底部	1/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ?（滑らか）		
61	RG039溝跡 ベルト	坏・胴～底部	1/5周未満	ロクロナデ?／底：回転糸切	ロクロナデ?（滑らか）		
62	RG063溝跡 BとCベルトの間	坏・口～胴部	小片	ロクロナデ	ロクロナデ		
63	RG063溝跡 CとDベルトの間	坏・胴～底部	1/5周未満	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ		
64	RE016竪穴状北・撹乱	坏	1/4周未満	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ滑らか		

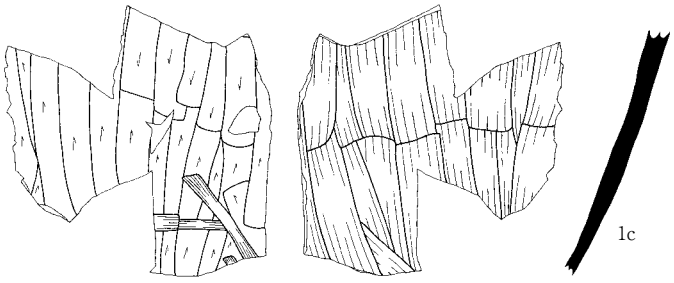
第52図　土師器（6）



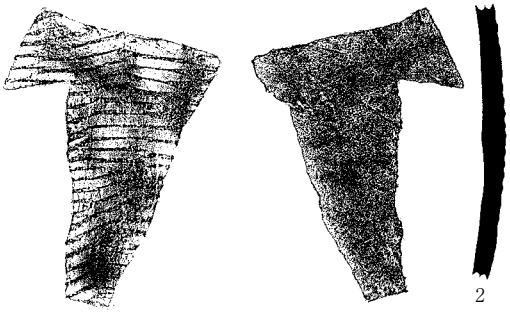
1a



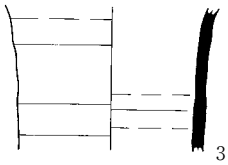
1b



1c



2



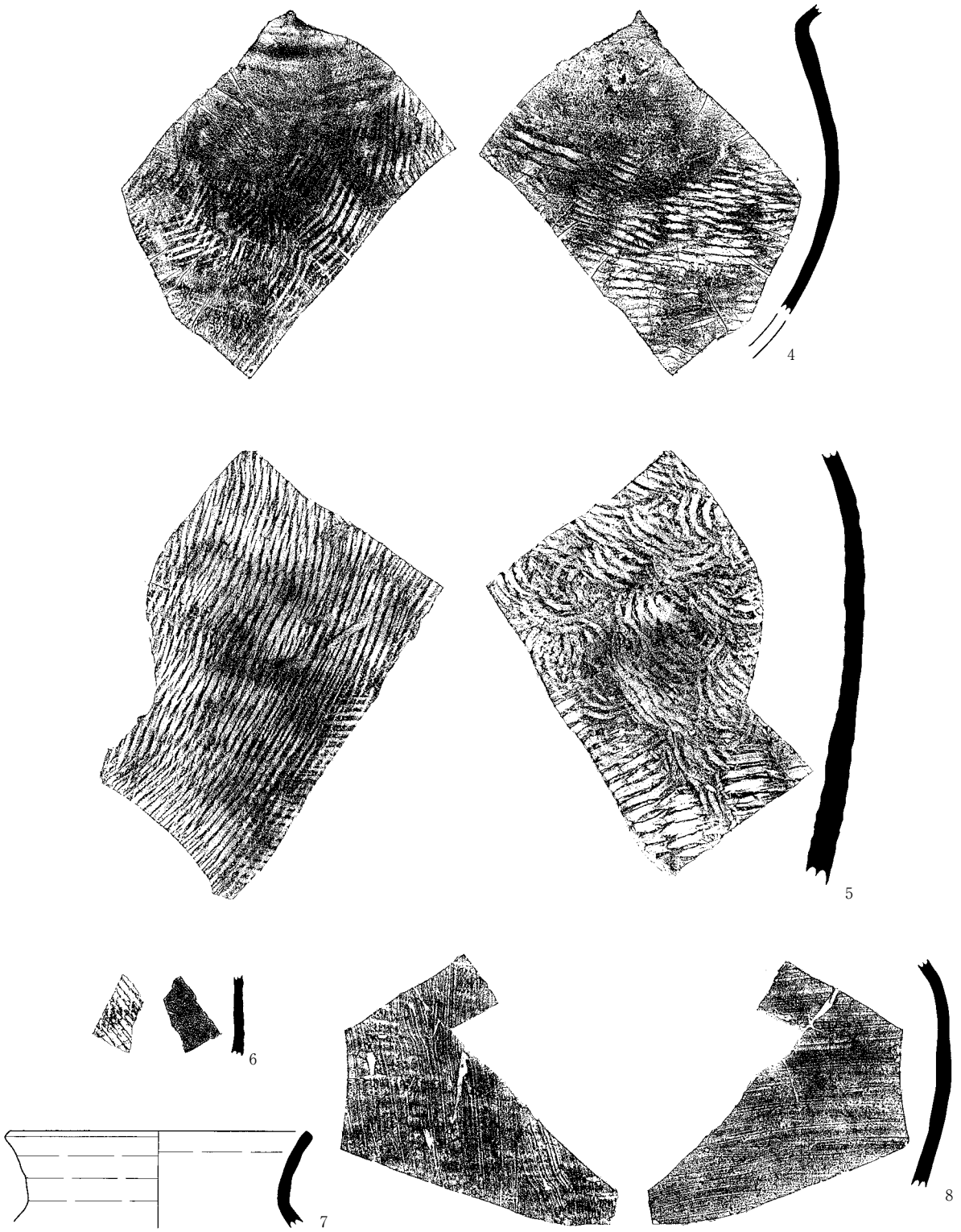
3

0　1:3　10cm

須恵器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
1a	RA052住居跡 p.40	壺・口～頸部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ		p.88
1b	RA052住居跡 p.27、p.39	壺・胴部	1/4周以下	ロクロナデ→下部ヘラケズリ	下部ヘラナデ→上ロクロナデ	出土割合、p.39が4/7	p.88
1c	RA052住居跡 p.34、カマド1、①	壺・胴下部	1/5周未満	ヘラケズリ	ヘラナデ	割合、p.34と①5/12、カマド1が2/12	p.88
2	RA052住居跡 p.20（3/4）、p.22	甕・胴部	破片	平行タタキ目	僅か凹凸（当て具痕不明瞭）	外面、自然釉痕跡的付着	
3	RA055住居跡 ④	壺・頸部	1/5周以下	ロクロナデ	ロクロナデ		

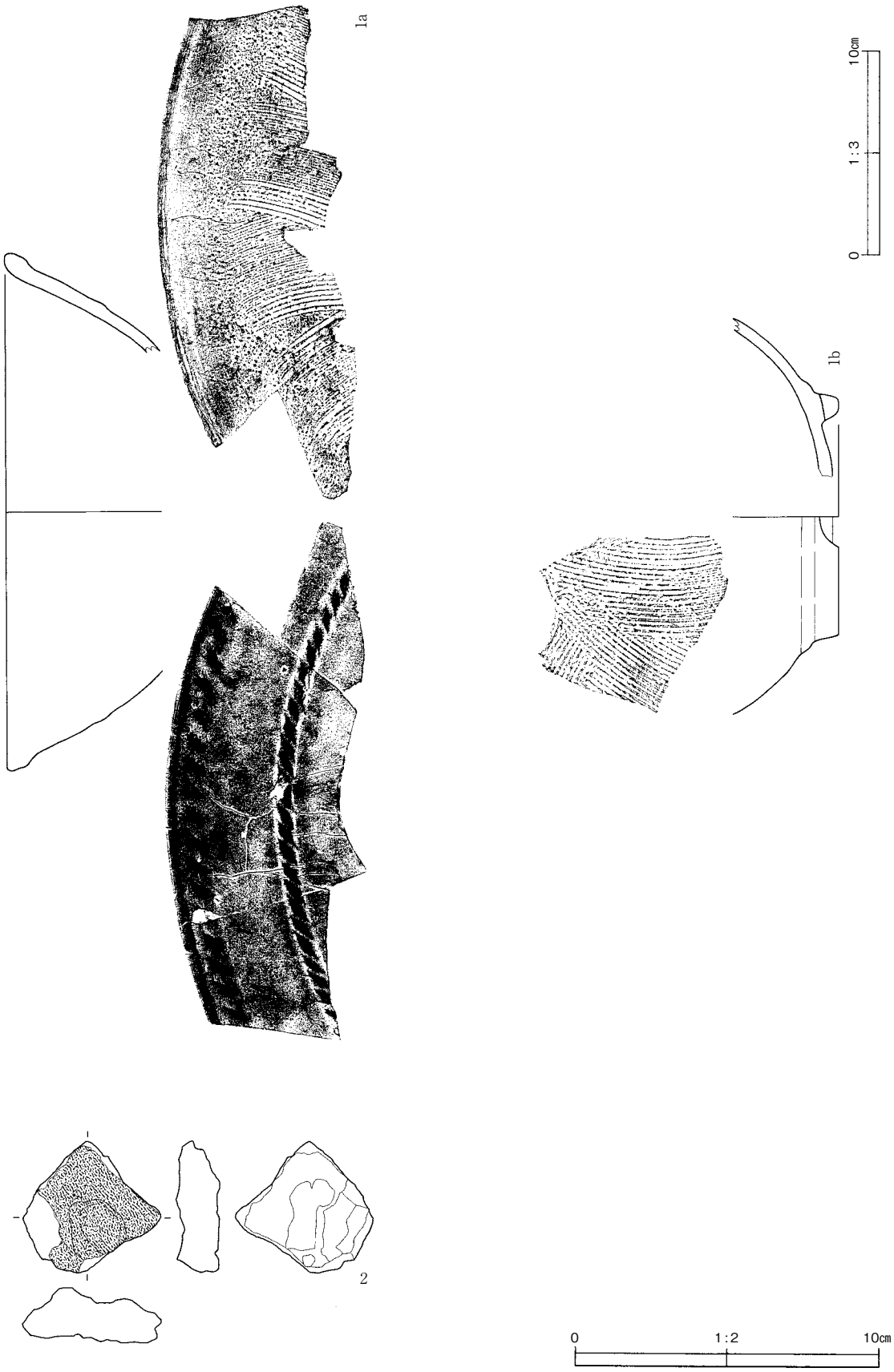
第53図　須恵器（1）



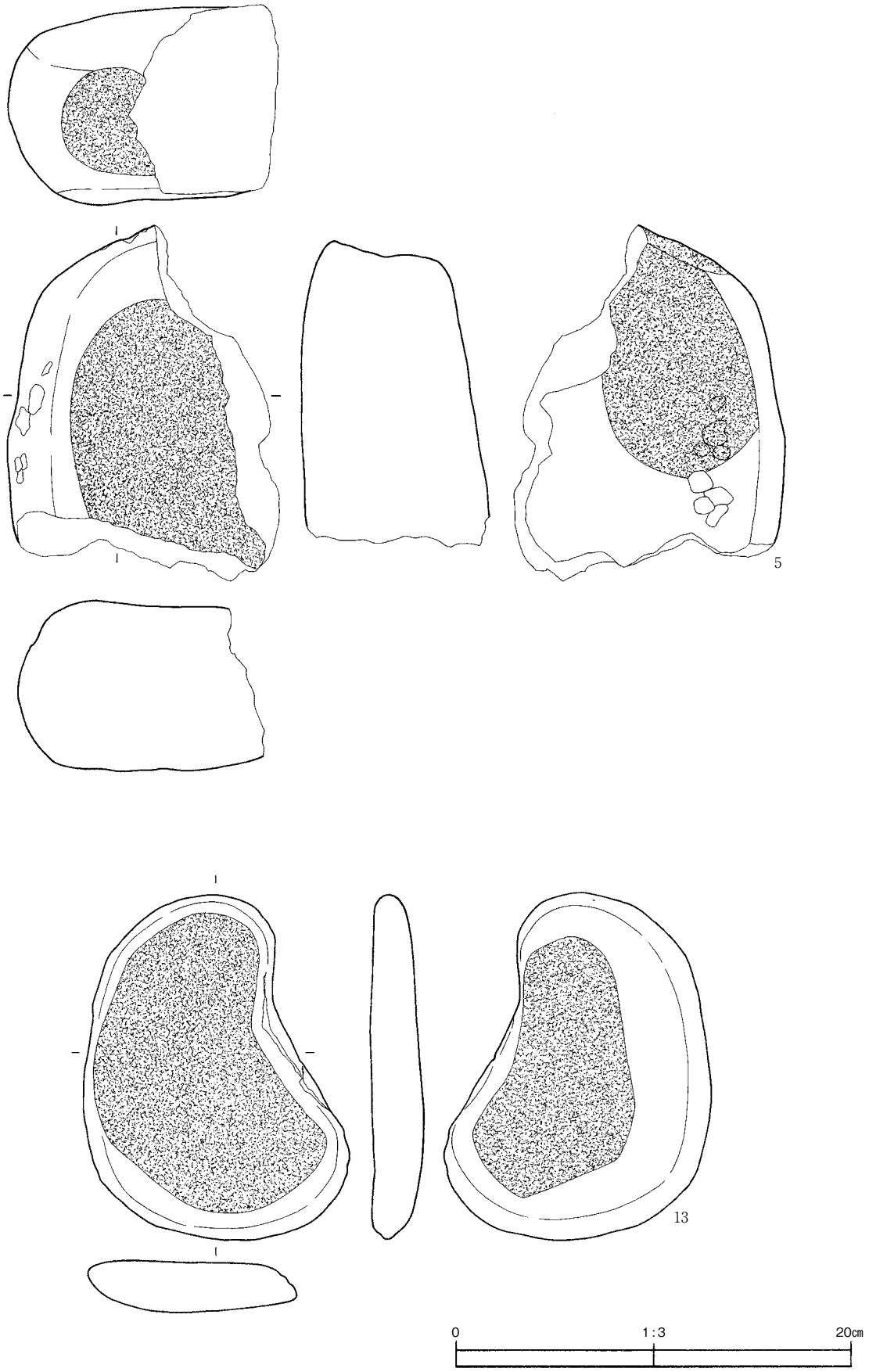
須恵器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
4	RE014竪穴状遺構 p.1	甕・頸～胴部	1/5周未満	ロクロナデ→平行タタキ目→肩指なで?	ロクロナデ→下部平行タタキ目		
5	RD210土坑 p.1	甕・胴部	破片	平行タタキ目	青海波→平行タタキ目状当て具痕		
6	RG039溝跡　ベルト	甕・胴部	小片	平行タタキ目?	僅か凹凸（当て具痕不明瞭）		
7	北区東端・Ⅱ層上面（旧河道）	壺?・口頸部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	甕?・外面、自然釉付着	
8	北区東端・Ⅱ層上面（旧河道）	壺・胴下部	1/5周以下	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	外面、自然釉付着?	

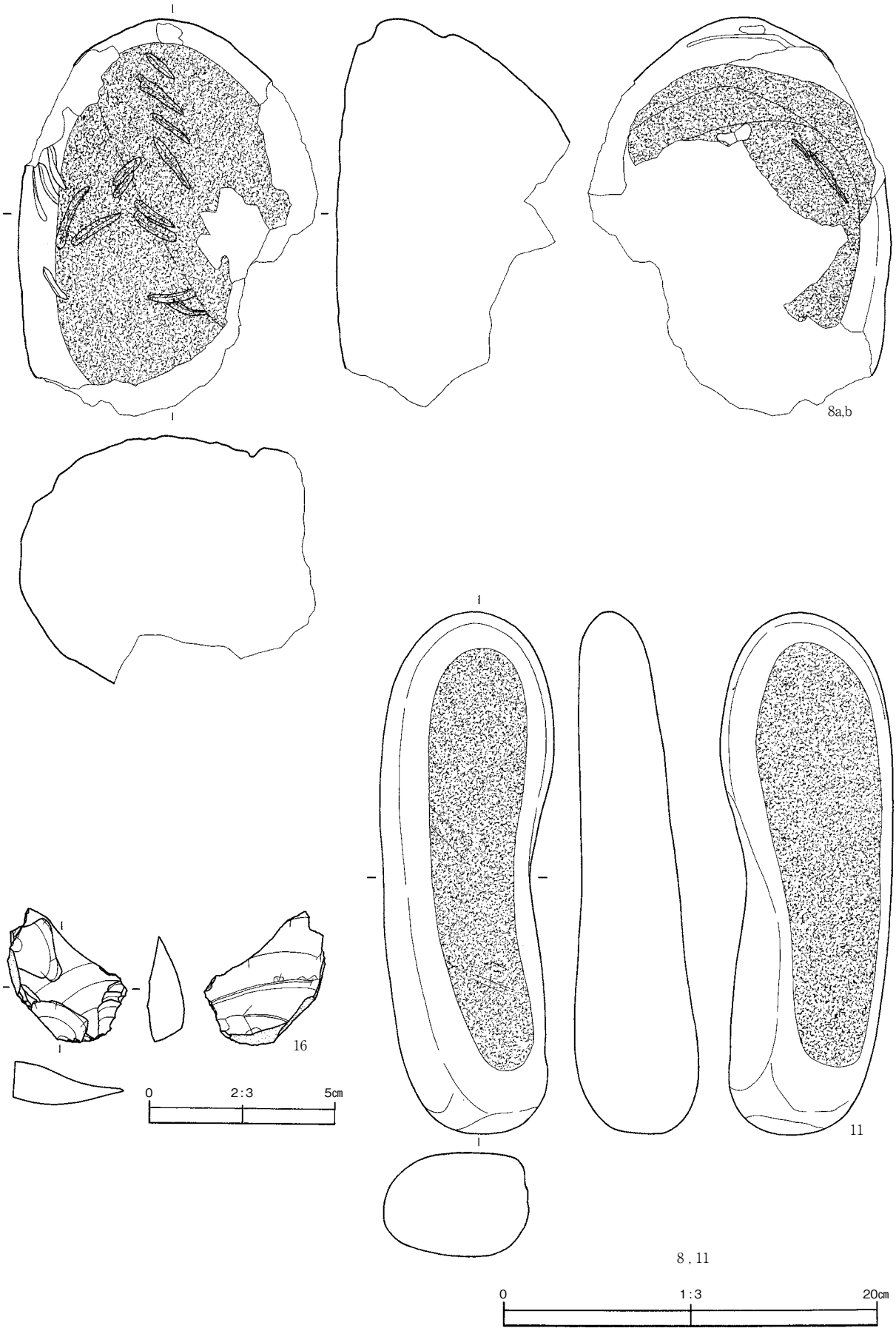
第54図　須恵器（2）



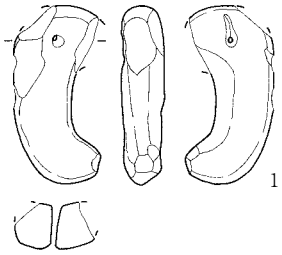
第55図　陶磁器、土製品

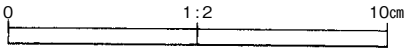


第56図　石器（1）



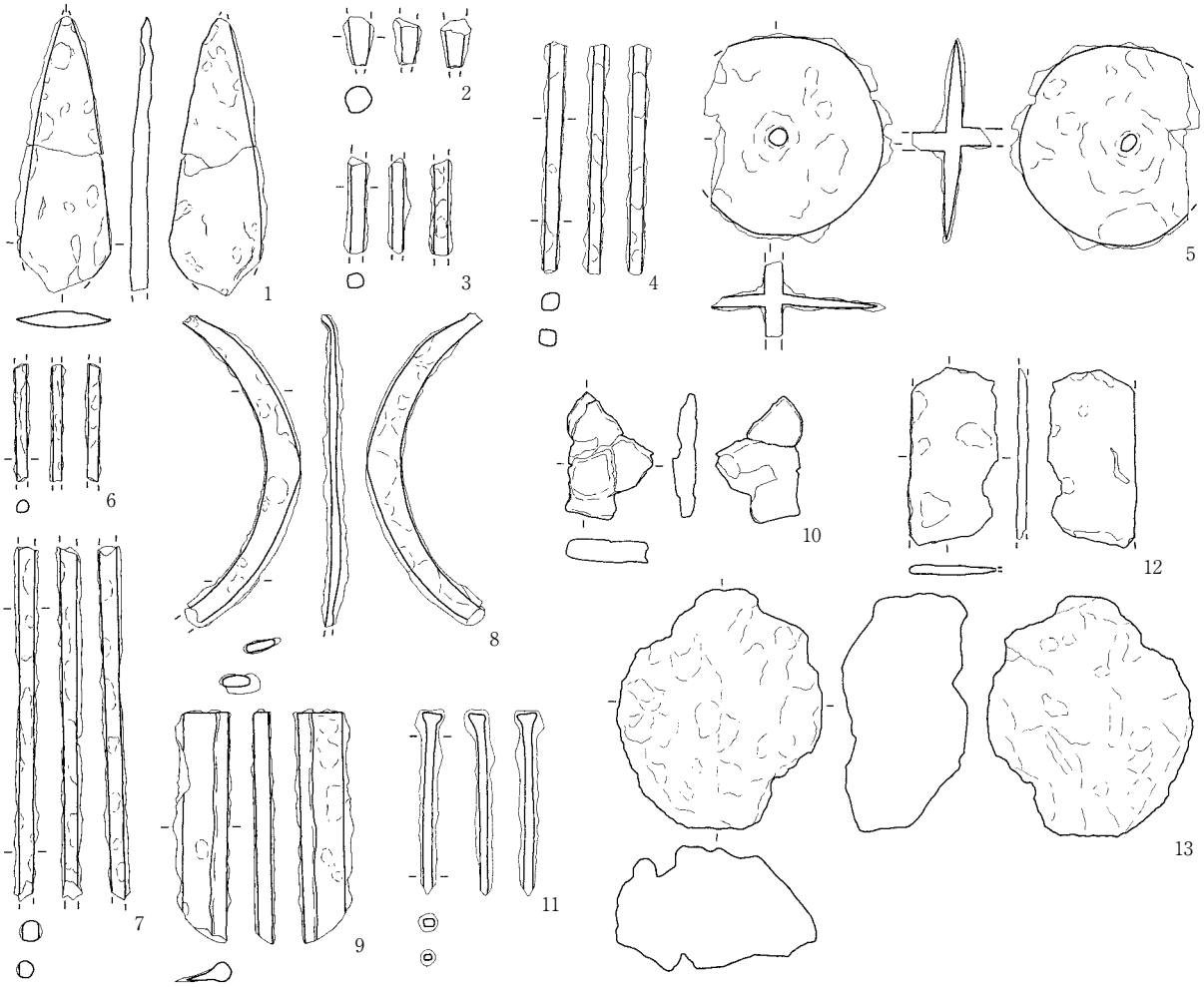
第57図　石器（2）





石製品　観察表

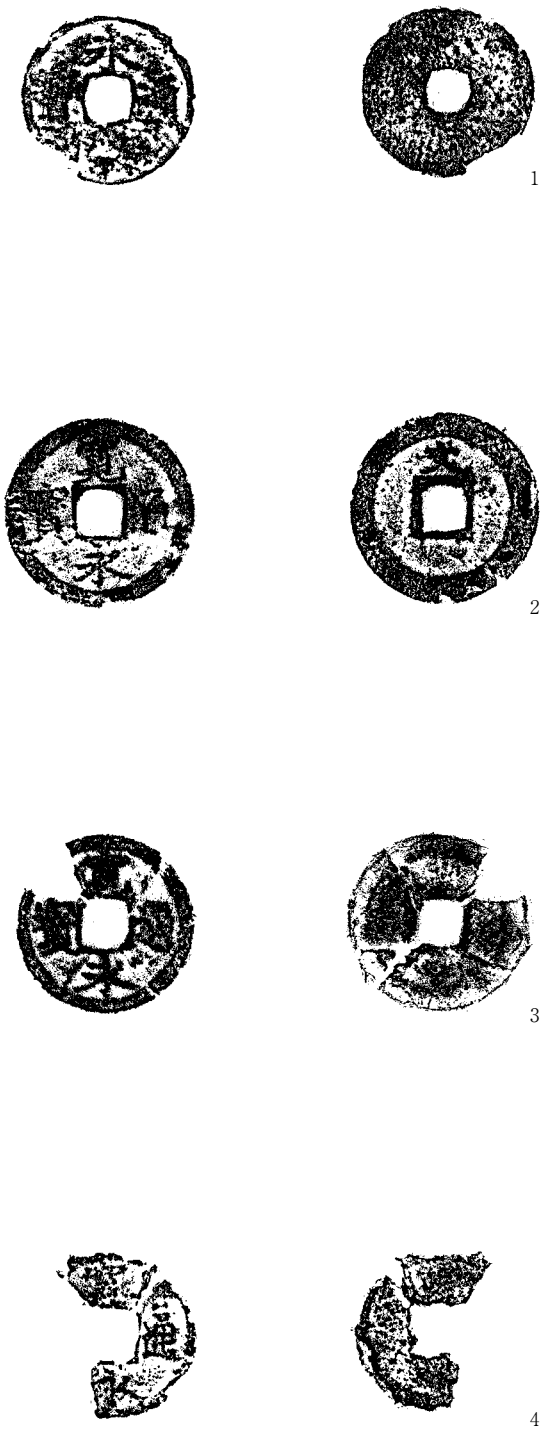
No.	出土地点･層位	器　種	最大計測値(cm)			重量	石　質 (産地)	残　存 状　況	備　　考	本文 記載
			長さ	幅	厚さ	(g)				
1	東区 撹乱	勾玉	4.7	2.2	1.1	14.6	玉髄(－)	一部欠損	欠損は調査時?･片側穿孔?	p.89



鉄製品　観察表

No.	出土地点･層位	種　類	残存状況	最大計測値mm			重量	備　　考	本文 記載
				長さ	幅	厚さ	(g)		
1	RA055住居跡 f.2	鉄鏃	基部欠損	72.24	24.55	4.31	10.7		
2	RA055住居跡 f.2	不明	破片	12.83	7.78	7.37	1.3	円錐状	
3	RA055住居跡･2層	釘?	破片	25.46	6.31	5.54	1.2	断面四角形･紡錘車の軸?	
4	RA055住居跡･2層	不明	両端欠損	60.72	5.89	5.33	3.7	断面四角形･紡錘車の軸?	
5	RA055住居跡 ④	紡錘車	欠損	56.62	50.35	21.1	25.2	円盤部分主･軸断面形不整形	
6	RA055住居跡 ④(f.3?)	不明	両端破片	30.69	4.61	3.93	1	断面形環状?	
7	RA055住居跡 ④(f.3?)	不明	両端欠損	91.95	6.18	6.51	6.5	断面形方形基調?･紡錘車の軸?	
8	RA055住居跡 ④	不明	両端欠損	82.05	9.66	4.83	9.6	弧状で片端急に細く･断面形板状	
9	RB022掘立柱建物跡 柱穴6周辺	不明	長軸片側以外欠損	61.47	14.41	5.44	5.4	蝶番状･新しい?	
10	RG063溝跡　DとEベルトの間	不明	破片	34.07	21.91	6.47	5.8	鉄破片集合体状	
11	RG063溝跡　EとFベルトの間	釘?	先端欠損	48.88	8.16	7.07	2.1	断面形錆で不明瞭･基部は方形に膨らむ	
12	東区	不明	両端欠損	45.03	22.69	2.75	6.1	刀?･断面薄い板状(紡錘形気味?)	
13	RA055住居跡 f.1	鉄滓	片側欠損	6.4	5.4	3.3	146.8	塊状･気泡状空洞あり	

第58図　石製品、鉄製品



銭貨　観察表

No.	出土地点・層位	種　類	金属の種　類	残存状態	直径(cm)	重さ(g)	鋳造年代	備　　考	本文記載
1	RC006柱列　柱穴6底	永楽通宝	銅	一部欠損・非常に薄い	2.23	1	1408年以降	模鋳銭であろう	
2	RZ035 柱穴群	寛永通宝	銅	完形	2.5	3	1668年以降	新寛永(文銭)=1668～1683年	p.89
3	西区 北西谷	寛永通宝	銅	一部欠損・非常に薄い	2.35	1.3	〃?	新寛永?・残り悪く不明瞭	
4	西区 北西谷	寛永通宝?	銅	2/3周・非常に薄い	2.2	0.8	〃?	新寛永?・残り悪く不明瞭	

第59図　銭貨

Ⅶ　総　　括

１　特　　論

今回検出された陥し穴状遺構と掘立柱建物跡について若干の考察を加えたい。

(a)陥し穴状遺構

総括というわけではないが、終了確認の際に盛岡市教育委員会から指摘を受けたので、遺物や火山灰など年代の決め手になるものがない陥し穴状遺構を縄文時代に特定した理由を述べておきたい。第Ⅴ章で長々と述べるのは章の性格上不適切と考え理由については簡単に済ませ、最大の根拠を「類例から」とした。しかし、判断を類例、すなわち他人に任せていると、前期旧石器ねつ造事件を例に出すまでもなく突然足下をすくわれる恐れがあるが、本書では一応次のように考えて陥し穴状遺構を縄文時代の遺構と認定した。なお、陥し穴状遺構の中でも、本遺跡で検出された溝状あるいは楕円形のもののみを対象とすることをお断りしておく。

まず、東区でのＲＤ204陥し穴状遺構とＲＡ052住居跡の重複関係では明らかに陥し穴状遺構の方が新しかった。今回の調査では一例のみであったが、竪穴住居跡との重複はしばしば認められ、例えば第16次調査でも二例ある（第Ⅱ章文献70）。新旧関係に悩むことはほとんどなく、明らかに陥し穴状遺構の方が古く、竪穴住居跡と完全に重複する場合には床掘り方埋土下から検出される場合がほとんどである。「盛南開発」地域（第Ⅱ章第３節参照）では、竪穴住居跡以外の遺構と重複する場合でも、ほとんどが陥し穴状遺構の方が古い。以上から、陥し穴状遺構は、古代の遺構とは比較的大きく時期を隔てて古い可能性が高いと言える。このことは、検出状況からも裏づけられる。Ⅳ層上面で検出する際、古代の遺構は比較的シャープな輪郭を示すのに対し、陥し穴状遺構の方は周囲の土と混じってぼんやりしている場合がほとんどである。

それでは、どのくらい遡るのか。溝状陥し穴状遺構の覆土にはクロボク土が入っている場合がほとんどである。このことから、縄文時代後半以降と推測される。坂本・杉野森（1997）でも、溝状の陥し穴状遺構は、縄文時代中期以降に東北地方北半部で主流になることが指摘されている。

第Ⅴ章では、盛岡市教育委員会から指摘された中近世の陥し穴との違いにしかふれなかったが（桜井　2000）、古代の陥し穴も、少しずつではあるが確実に増えてきている（濱田　2010）。岩手県旧胆沢町宮沢原下遺跡などでは、覆土に十和田ａ降下火山灰が認められている。注目されるのは、胴が張るズングリとした平面形と底面の逆茂木痕である。この二つの属性において、古代と中近世の陥し穴は、時空を超えて共通するようなのである。逆茂木の埋設方法について検討した桜井秀雄氏は、金属製工具と「かけや」に類する道具が不可欠と想定されることから、縄文時代の所産とは考えられないとしている（桜井　2000：p.62）。このことから、“胴が張るズングリとした平面形”も、道具が関与している可能性が出てくる。というよりも、縄文時代と推測される溝状の陥し穴状遺構の“異常な形”である。極めて細長く、長軸方向の下端が突出してオーバーハングしたり、膨らんで底面平面形がＩ字状を呈するものもある。それに対し、古代・中近世の底面は、長方形基調である（濱田　2010）。縄文時代の異常な形は、私たちが想定しない道具を使っていることによる可能性が高い。濱田宏氏は、「とても人間が入って作れるような代物ではない。開口部の幅や陥し穴自体の深さからみて、柄が付いた刃幅が狭い石製の鍬などで地表面から掘り込んだと考えたい」としている（濱田　2010：p.91）。基本的な掘り方は、このとおりであろう。基本動作としては“掘る”というより“突

き刺す”といった状態に近いものと想像され、同様に考える研究者は多い（大泰司　2007：p.175ほか）。広げるのが大変なため細長くなり、突き刺すため長軸方向両端がオーバーハングしたり膨らむ形になるのではなかろうか。縄文時代溝状陥し穴状遺構の“異常な形”は、掘削方法による必然の可能性が高い。つまり、形の上からも“鉄以前”に比定できると言える。

さらに、立地と並び方からも、両者を区別できる可能性がある。前述の宮沢原下遺跡では、縄文時代の溝状のものも検出されているが古代の陥し穴と全く重複せず、「『こんなに数があるのに、なぜ縄文時代の陥し穴と重複することがないのか』」との疑問が呈されていた（濱田　2010：p.91）。古代の陥し穴が主として丘陵尾根に沿って「３基以上の複数個配列」といった状態に並ぶのに対し、溝状のそれは、より低くて、水縁（旧河道近く）のものが多く「配列の解釈がいかにでも可能な２基一対、３基一対のものが目立つ」（濱田　2010：p.91）。後者の在り方は、飯岡才川遺跡あるいは周囲の「盛南開発」地域のそれと全く共通する。前者については、濱田氏が紹介している岩手県旧浄法寺町海上Ⅰ、Ⅱ遺跡でも同様の状況が見て取れる。こうした違いは、狩猟対象と方法の違いを反映していると推測できるが、本稿ではここまでとする。

飯岡才川遺跡で検出された溝状の陥し穴状遺構が、縄文時代中期以降で古代より古いのはわかるとして、弥生時代の可能性はないのかと問われれば、その可能性は否定できないとしか答えられない。しかし、以下のように考えると、その可能性は低いと言わざるを得ないのも事実である。この地域は、雫石川の氾濫原にあり、出土遺物から判断すると、縄文時代後期に至るまで容易に近づける場所ではなかった可能性がある（第Ⅱ章文献63：p.５）。それでも、後期には土器が点々と出土するようになり、後期末には新堰端遺跡（第６図22）で貯蔵穴様の土坑が10基も検出され（第Ⅱ章文献80）、晩期前葉になると、本遺跡の南東側に隣接する細谷地遺跡で竪穴住居や貯蔵穴様の土坑が掘られ（第Ⅱ章文献49）、晩期中～後葉になると、北東側に隣接する台太郎遺跡で明確な集落が出現する（第Ⅱ章文献40）。さらに、北西側にやや離れた本宮熊堂Ａ遺跡でも同時期の集落が見られる（第Ⅱ章文献８、35、43、51）。しかし、それ以後は再び痕跡が薄くなって土器以外ほとんど見られなくなる。弥生前期の土器は、細谷地遺跡第９、10次調査区で比較的多く見られる（第Ⅱ章文献49）。中期後半の土器は岩手県には少ないが、飯岡沢田遺跡で比較的まとまって出土し（第Ⅱ章文献46）、中期の土器は本宮熊堂Ａ遺跡でも出土している（第Ⅱ章文献８ほか）。後期は、細谷地遺跡で焼土が検出され（第Ⅱ章文献49・55）、土器は台太郎遺跡でも出土している（第Ⅱ章文献18など）。

溝状の陥し穴状遺構は掘削に多くの手間を要したことは想像に難くない。この地域の百基を超える陥し穴状遺構（本章第３節参照）のうちどの程度併存していたか不明だが、ほんの一部にとどまれば陥し穴の効果はほとんど期待できないであろう。また、陥し穴それ自体も、それほど効率的な狩猟方法とも思えない。“経営の主体者”は、それなりに“資本”を投下する必要があり、余裕のない者は陥し穴を掘ろうとは思わないのではないか。痕跡の濃淡がそのまま当時の人数を反映しているわけではないだろうが、弥生時代には、陥し穴を経営する余裕はなかったものと推測する。

「経営の主体者は、すぐ近くにいなかった」と考えることも可能だが、弥生時代の濃い痕跡は、少なくとも今のところ「盛南開発」地域の外側にも認められない。逆に、「盛南開発」地域に焦点を絞って見ると、興味深い事実が浮かび上がってくる。陥し穴状遺構が顕著に発見される野古Ａ、飯岡沢田、飯岡才川、矢盛遺跡には、土器や石器以外の縄文時代の顕著な痕跡が認められず、当時の濃い痕跡（集落跡）は、その隣接する本宮熊堂Ａ、台太郎遺跡に認められることである。細谷地遺跡には両方見られるが、竪穴住居跡があるのは北東端の段丘上、陥し穴状遺構は西側の低地で、むしろ同じ遺跡として括ることに問題があろう。遺跡と遺跡の間は旧河道か湿地に隔たれ、獲物の強い警戒心

を起こさない程度には離れている。そして、“収穫”に向かうにもそれほど遠くない。経営主体は、“狩猟場”の隣接地に住んでいた可能性がある。

推測に推測を重ねてきたが、以上から、溝状の陥し穴状遺構は、縄文時代後～晩期、中でも晩期、それも中～後葉に帰属する可能性が高いと考えている。

(b)掘立柱建物跡

今回検出された、平安時代のＲＢ021と古代～中世のＲＢ022について若干の検討を加えてみたい。

ＲＢ022の時期から検討する。本建物跡の特徴は、梁方向の中央の列の柱穴が他と比べて貧弱なことである。しかし、瞥見してみると、こうした建物跡は、時代・地域を超えて現れる、それほど珍しくないものであるようだ。報告者は、中央の柱は束柱で、本建物跡は梁間一間型なのではないかと考えていたのだが、掘立柱建物跡に詳しい同僚によれば、梁間二間の律令型でも、中央の柱が貧弱で確認できないこともしばしばあるらしい。構造で時期を推測するのは無理のようである。柱穴２がＲＤ206土坑と重複するが、検出面で一目瞭然に柱穴の方が新しいとわかった。こうした場合、両者の間に比較的大きな時期差が存在する可能性が高い。ＲＤ206にも出土遺物がなく不明瞭だが、覆土から古代の可能性があり、そうすると、ＲＢ022は中世以降の可能性が出てくる。ＲＢ022の軸方向をみると、ＲＢ021とは全く相容れなく、ＲＣ006柱穴列の方に近い。個々の柱穴も、ＲＢ022の掘り方は丸く深く、ＲＢ021も丸いが非常に浅い。ＲＣ006は、掘り方が不明瞭なものが多いが、深いのはＲＢ022と共通し、覆土もＲＢ022の方に近い。以上から、ＲＢ022の時期は、ＲＣ006に近いと推測される。ＲＣ006は調査時には近世かと考えたが、出土銭が永楽通宝であったので、中世末の可能性もある。

次にＲＢ021の意義。ＲＢ022は時期が異なる可能性が高いので、ＲＢ021は単独で存在していたことになる。ＲＢ021は庇を持ち、西澤氏の集成によれば（2011）、「盛南開発」地域でも、庇を持つ建物は、大宮北遺跡で２棟、小幅、細谷地遺跡で各１棟しか検出されていない。「盛南開発」地域で拠点的と言えるのは、住居数や特殊遺物などから、雫石川に面する、小幅、台太郎、細谷地（向中野館、飯岡才川遺跡の一部を含む）と思われる。台太郎遺跡で庇建物が確認されていないのは、中世の痕跡も多いので、後世の改変によるのではないか。どちらも、80m程度離れているので関係あるかどうか不明だが、細谷地遺跡の庇建物の周りから緑釉陶器（当センター報告書第595集：第81図165）、飯岡才川遺跡のそれの周りから石帯が出土している（第Ⅱ章文献54：第56図）172）。庇建物の希少性からも（西澤　2012：p.49）、一般に言われるように特別な建物と考えて良いと思う。注目されるのは、「盛南開発」のいずれの遺跡の場合も、竪穴住居がほとんどない空白域に庇建物があることである。特に、細谷地、飯岡才川遺跡では、近くに竪穴住居の密集地があるのに（第60図）、それとは一線を画すような場所に検出された。この地域の７～９世紀では、竪穴住居跡の規模に階層性が認められるが、９世紀後半になると北上盆地では大型が減少して小型均一化し、その理由として八木光則氏は大型の掘立柱建物の登場を挙げる（八木　2006：p.142）。細谷地、飯岡才川遺跡の掘立柱建物跡は、それほど大きいわけではないが、ほぼこれに準じた出来事と解釈でき、すなわち、有力者が隔絶した場所に掘立柱建物を建てるようになったのではないか。大宮北遺跡と小幅遺跡で３棟、細谷地遺跡と飯岡才川遺跡で２棟という検出数から、各拠点集落内のこのクラスの有力者の数が推測される。

ところで、飯岡才川遺跡の場合は、他とは違って掘立柱建物跡の近くに中規模の竪穴住居跡（ＲＡ055）が１棟見られる。これをどう解釈したら良いだろうか。ＲＢ021、ＲＡ055とも覆土に灰白色火山灰が認められ、時期が大きく異なるとは思われない。むしろ、火山灰の位置からは同時併存の可能性が高いと言える。これを受けて遺構配置図を見ると軸方向が一致していることに気づく。竪穴住居跡にはカマドの他、鍛冶関係施設の可能性がある焼土や穴が検出されている。これらと掘立柱建物の

規模が中程度のことから、竪穴住居はこれを補完する居住以外の施設で両者はセットの可能性もあるのではないかと考える。今回の調査ではＲＡ055も含めＲＢ021掘立柱建物跡の近くに鉄製品の出土の偏りを指摘でき、鉄製品が村落内の上層階層に偏る傾向が指摘されていることから（松村　1991）、本書の位置づけの妥当性を暗示しているようにも思える。

参考文献

大泰司統　2007　「北日本の陥し穴猟」『縄文時代の考古学５　なりわい―食料生産の技術―』(株)同成社
坂本真弓・杉野森淳子　1997　「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第２号　青森県埋蔵文化財調査センター
桜井秀雄　2000　「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』第52巻第10号　信濃史学会
田村壮一　1987　「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』Ⅶ　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
西澤正晴　2011　「北上盆地周辺における平安時代の集落について（上）」『紀要』ＸＸＸ　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
　　2012　「北上盆地周辺における平安時代の集落について（下）」『紀要』ＸＸＸⅠ　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
濱田　宏　2010　「古代に属する陥し穴について」『紀要』ＸＸⅨ　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
松村恵司　1991　「古代集落と鉄器所有」『日本村落史講座第４巻　政治①（原始・古代・中世）』雄山閣
八木光則　2006　「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『北の防御性集落と激動の時代』㈱同成社

２　遺物・遺構のまとめ

今回調査で発見された出土した遺構・遺物は、抄録に時代別に概要をまとめたので、紙幅の関係でそちらを参照いただきたい。土師器には、北奥系、出羽系、砂底土器が認められた。典型的な長胴甕は少なく、９世紀後半～10世紀初頭の中でも新しい方に位置づけられるのかもしれない。土師器底に認められた「×」の刻印は、土師器・須恵器に最も多く見られる記号のようで、工人記号の他に「悪霊を断ち切り自己の安全を守る呪符」との考えがあるようである（利部　2010ほか）。

参考文献

利部　修　2010「本州北端の刻書土器」『北方世界の考古学』すいれん舎

３　遺　　跡

(1) 飯岡才川遺跡の歴史（第３、４図）

(a)縄文時代

遺跡のほぼ全域に陥し穴状遺構が掘られ、特に南端の飯岡才川沿いに多数認められる。北側の旧河道を望む段丘崖や段丘中央部でも検出されているが、こちらは１基かせいぜい数基程度が周囲から離れて点として存在する（第４図）。

(b)奈良時代

北端の第12、７次調査区で、北西側に隣接する飯岡沢田遺跡から続く古墳が見られるが、本遺跡の場合は８世紀前半を中心とするらしい（第Ⅱ章文献57：p.134）（第３、４図）。第12次調査区北東段丘崖に沿って８世紀後半の集落跡が認められる（竪穴住居跡３棟）。

(c)平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）

遺跡の東半のほぼ全域に集落が認められる。遺跡南東隅に竪穴住居跡が密集し、旧河道や湿地を挟んで周囲の細谷地、向中野館遺跡に連続する。北端の第12、７次調査区でも、竪穴住居跡が比較的まとまっており、この間を繋ぐ箇所では疎らに点在する（今回調査区）（第３、４図）。

(d)中近世

今回初めて中世に遡る可能性のある痕跡が認められた（ＲＣ006柱穴列。ＲＢ022掘立柱建物跡も？）。遺跡東端の第３次調査区で17世紀代と推測された土坑墓が検出されているが（第３、４図）、遺物・遺構が顕著になるのは18世紀以後である。周囲の遺跡も同様で、現代の集落に続くのであろう。

(2) 地 域 の 中 で

今回の調査では、縄文時代と思われる（第１節参照）陥し穴状遺構と平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の集落跡が主に発見されたので、この二つの時代について周辺の遺跡と比較する。

(a)縄文時代（後～晩期）

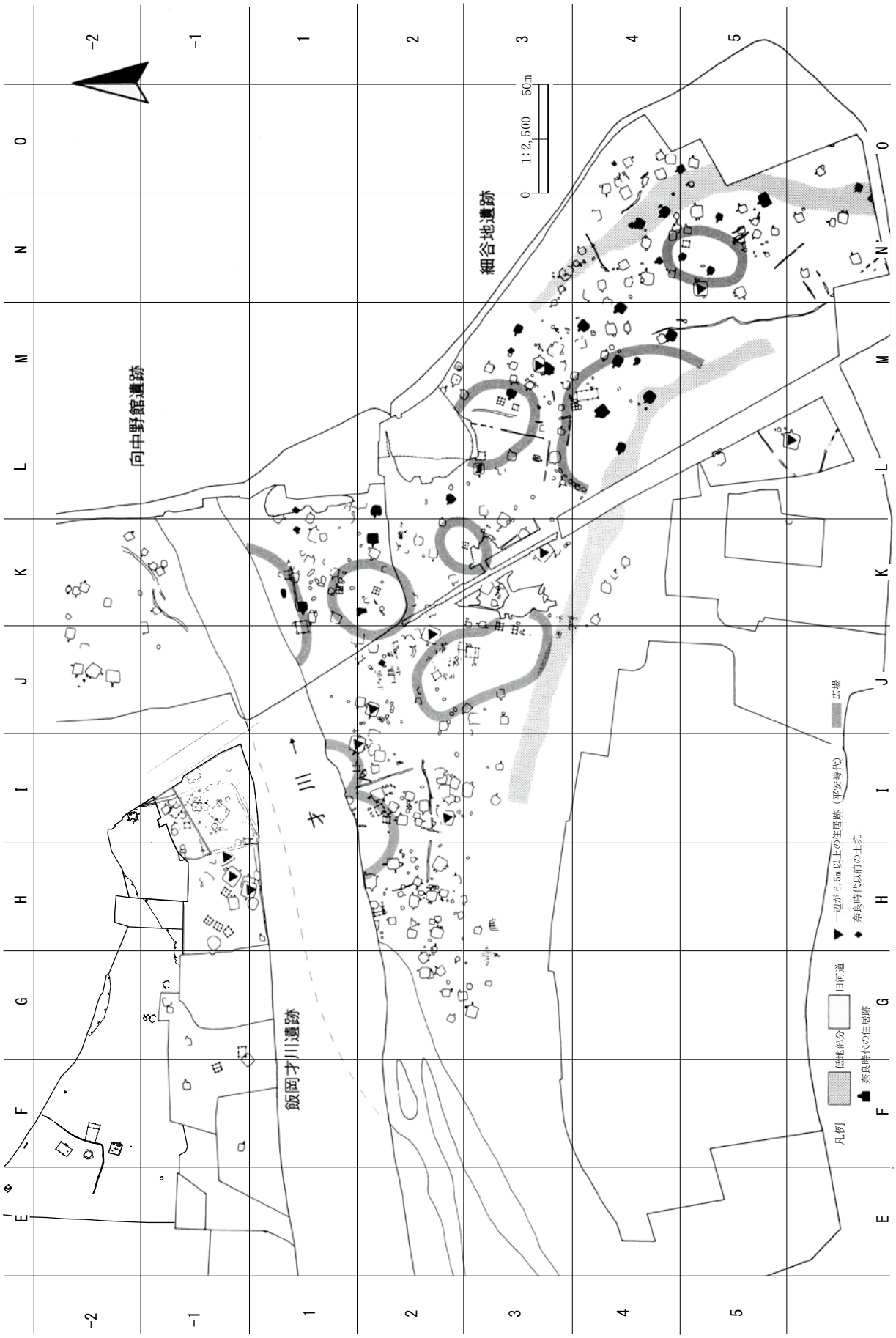
北村忠昭氏が細谷地遺跡第12次調査報告書で、隣接する飯岡才川、矢盛遺跡も含めた陥し穴状遺構の分布をまとめている（第Ⅱ章文献54：第134図）。本書でも、これ以後に検出された遺構を含めて分布図を作成しようと考えたのだが、そうすると1/3,000図でも一頁に収まらず、これ以上小さくすると何だかわからなくなってしまうので、あきらめざるを得なかった。ちなみに、これ以後検出され報告書が刊行されているものでは、飯岡才川遺跡第12次調査（第Ⅱ章文献57）、第16次調査（同70）、第17～19次調査（本報告書）、矢盛遺跡第12次調査（第Ⅱ章文献60）、第18次調査（同63）、第23・24次調査（同68）、第27次調査（当センター第594集→第Ⅱ章第３節参照）がある。これらを含めて、気の付いた点をまとめておく。なお、陥し穴状遺構は、北西側にある野古Ａ遺跡でも、19基以上検出され、第29次調査までに発見されたものについては八木勝枝氏がまとめており（八木2007）、その後、第30次調査でも陥し穴状遺構が検出されている（当センター報告書第594集→上記参照）。また、上記の八木氏の集成によると、「盛南開発」地域では、上記以外に、大宮北、小幅（12基以上）、鬼柳Ａ、本宮熊堂Ｂ遺跡でも検出されている（第Ⅱ章参照）。

この地域で最も多く陥し穴状遺構が検出されているのは、飯岡才川遺跡と細谷地遺跡を隔てる「飯岡才川」の両岸で、百基を超すが、規則的に並ぶと言うより「配列の解釈がいかにでも可能な２基一対、３基一対のものが目立つ」（濱田　2010：本章第１節に引用）。全体的にまとまりに欠け、こうした在り方が何を意味するか不明だが、矢盛や野古Ａ遺跡など、他のまとまって検出された遺跡でも、ほぼ同様である。低地に面する場所に立地することだけは共通するので、これまで「水場に集まる動物を対象とした罠猟」（八木　2007：p.124）と理解されてきている。

(b)平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）

第60図は、概ね平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の集落の様子である（飯岡才川遺跡の北端除く）。細谷地遺跡には奈良時代の集落を含み、飯岡才川遺跡のＲＢ022掘立柱建物跡が除外される可能性の高いのは上述のとおりである。水辺（飯岡才川）を中心に集落が営まれている様子が窺われ、それは、向中野館遺跡と飯岡才川遺跡の間の湿地から封緘木簡や「厨□」と墨書された９世紀前半の須恵器底が出土するなど、特別な地点であった可能性のある痕跡も関係するかもしれない。

参考文献　八木勝枝　2007　「野古Ａ遺跡第19・20・29次調査区検出の陥し穴状土坑について」『野古Ａ遺跡第23・24・29次発掘調査報告書』㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



第60図　才川周辺の古代集落遺構配置図

写　真　図　版

調査前風景（南西側から北東方向）

調査前風景（南側から北西方向）

遺跡遠景（南上空から）

調査区全景（南上空から）

写真図版１　調査区遠景、調査区全景

西区遺構検出範囲（南上空から）

西区調査前風景（東から）

写真図版２　西区遺構検出範囲、調査前風景

西～北区調査前風景（東から）

西～北区調査前風景（東から）

写真図版３　西～北区調査前風景

北区調査前風景（東から）

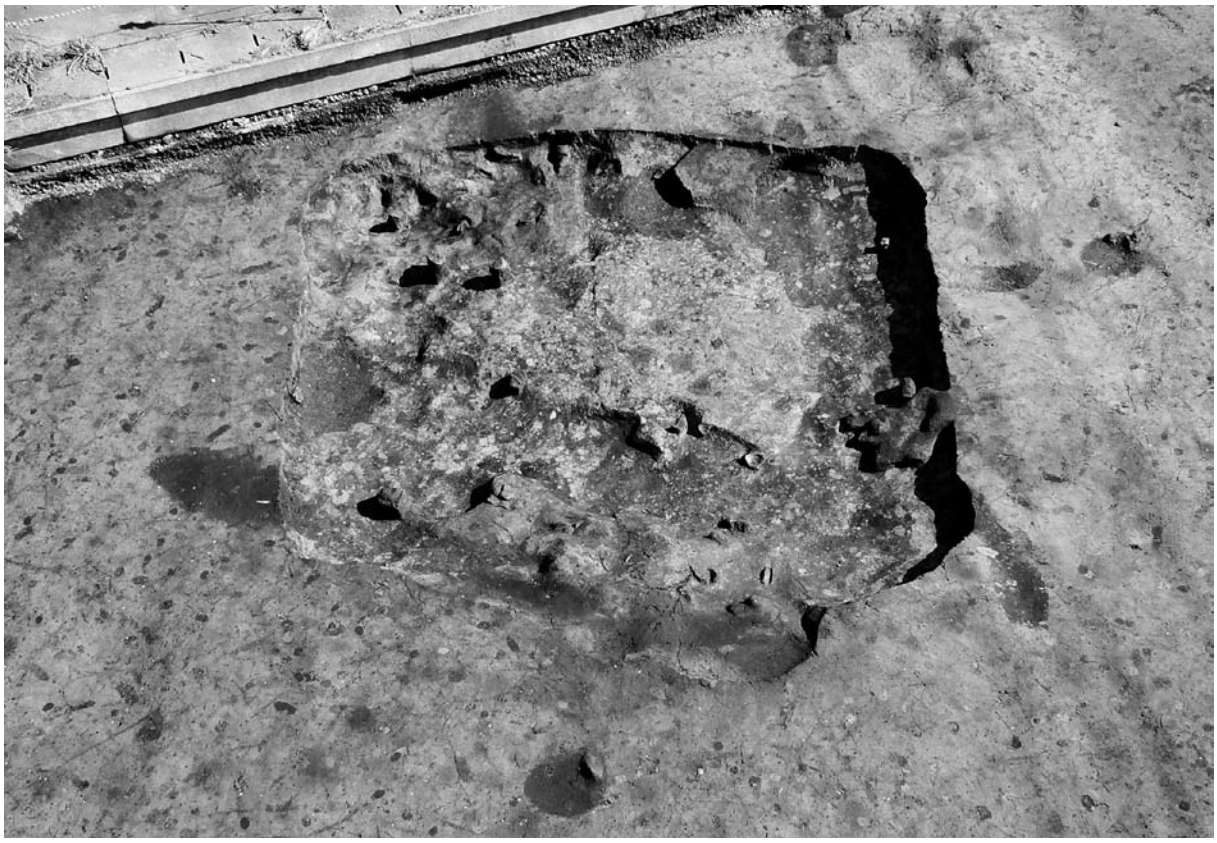
東区調査前風景（南西から）

写真図版４　北～東区調査前風景

東区調査前風景（西から）

東区調査前風景（東から）

写真図版５　東区調査前風景



RA052住居跡全景（西から）

覆土断面南北（西から）

覆土断面東西（南から）

写真図版６　RA052住居跡（１）

遺物出土状況

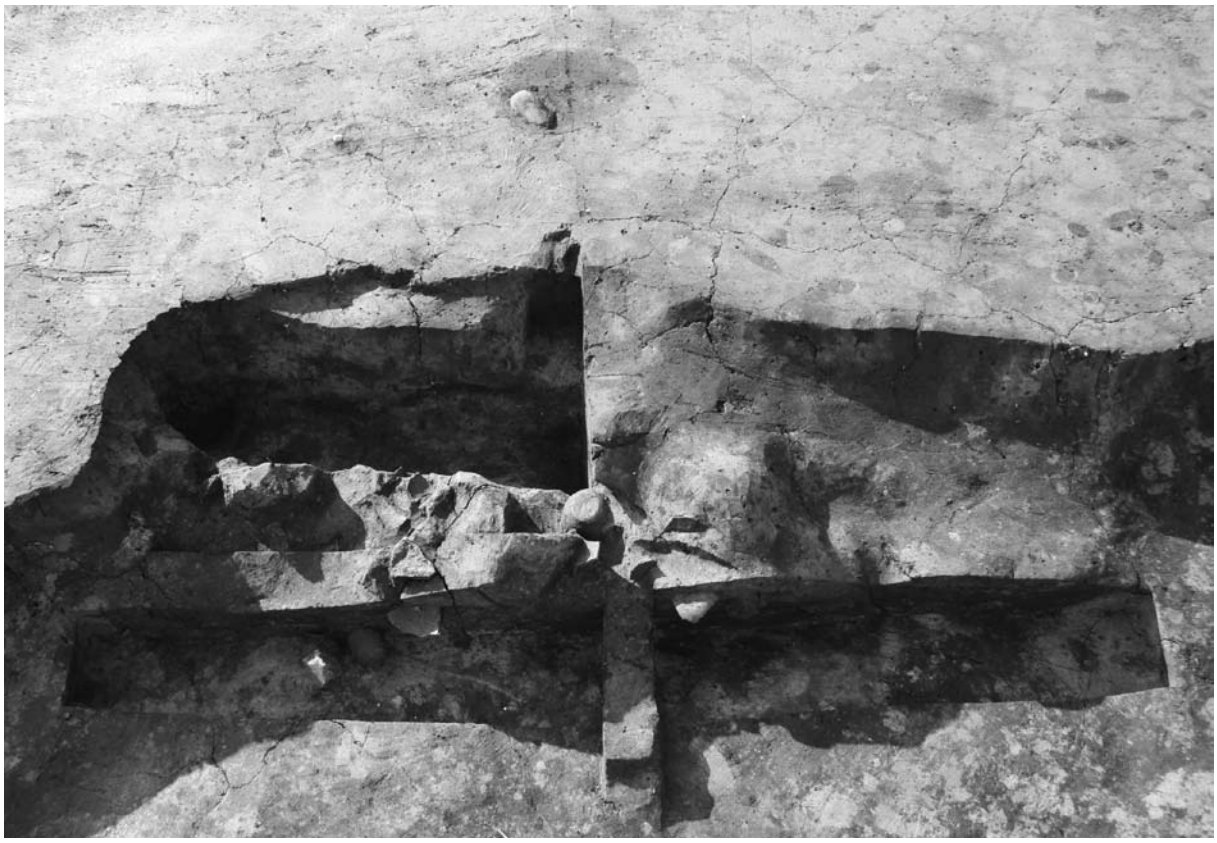
カマド遺物出土状況（右はp.9 ～ 11）

RA052カマド遺物出土状況

カマド遺物出土状況

掘り方遺物出土状況

写真図版７　RA052住居跡（２）



カマド１平面（東から）

カマド1南北（東から）

カマド1東西（南から）

写真図版８　RA052住居跡（３）

カマド１完掘（東から）

カマド１断ち割り（南から）

カマド1崩落土除去土器出土状況（東から）

掘り方出土遺物

写真図版９　RA052住居跡（４）

カマド２完掘（西から）

カマド５完掘（西から）

カマド２断ち割り東西（南から）

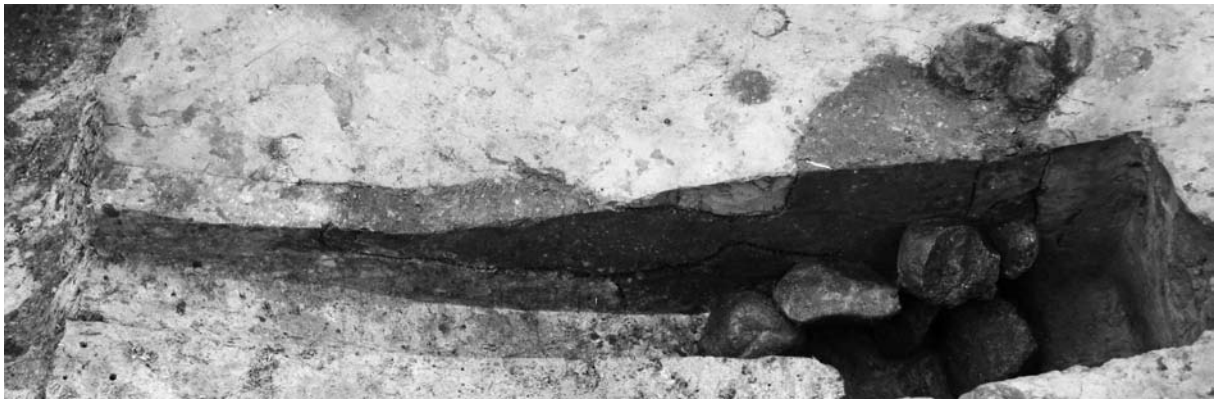
カマド５東西（南から）

写真図版10　RA052住居跡（５）

カマド３完掘（西から）

カマド４完掘（北から）

カマド３東西（南から）



カマド４東西（西から）

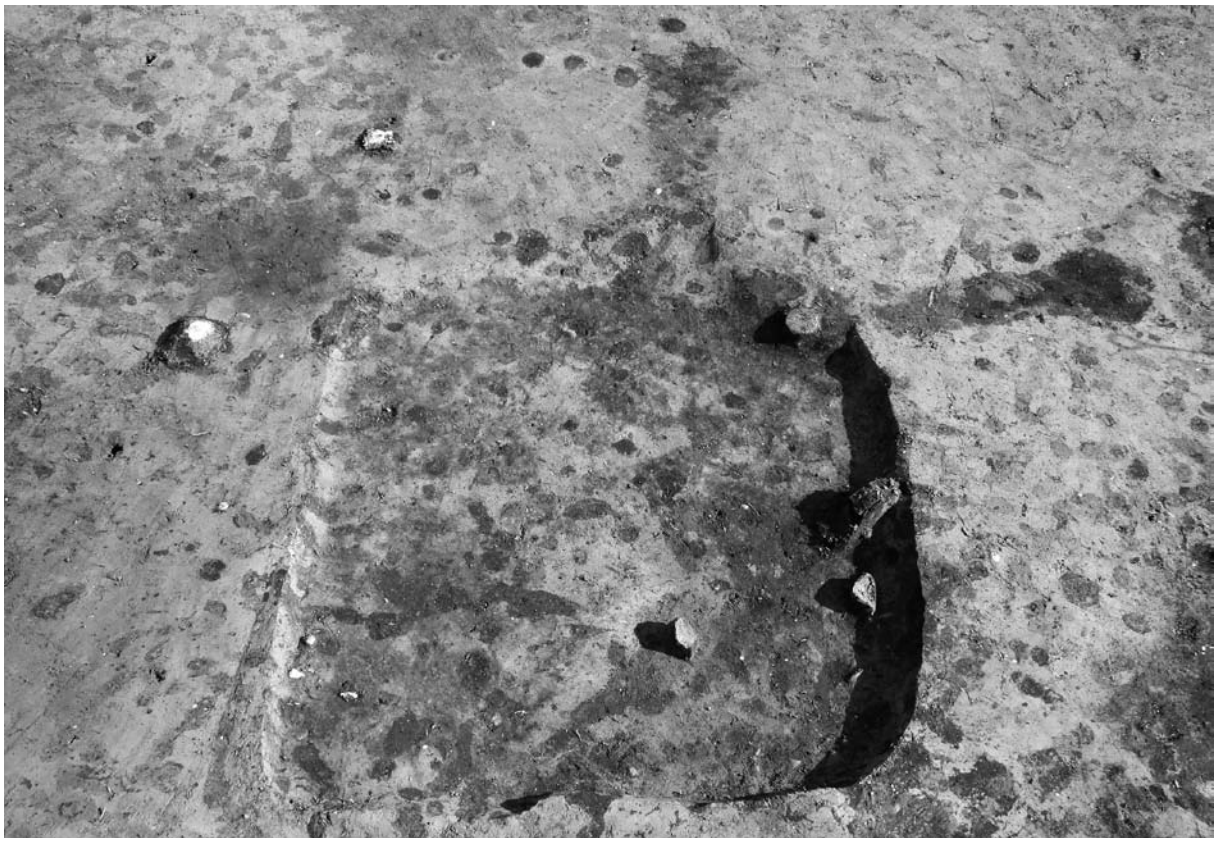
写真図版11　RA052住居跡（６）

住居跡　掘り方（南西から）

掘り方断面南北（西から）

住居跡　掘り方断面東西（南から）

写真図版12　RA052住居跡（７）



RA053住居跡全景（南から）

覆土断面南北（西から）

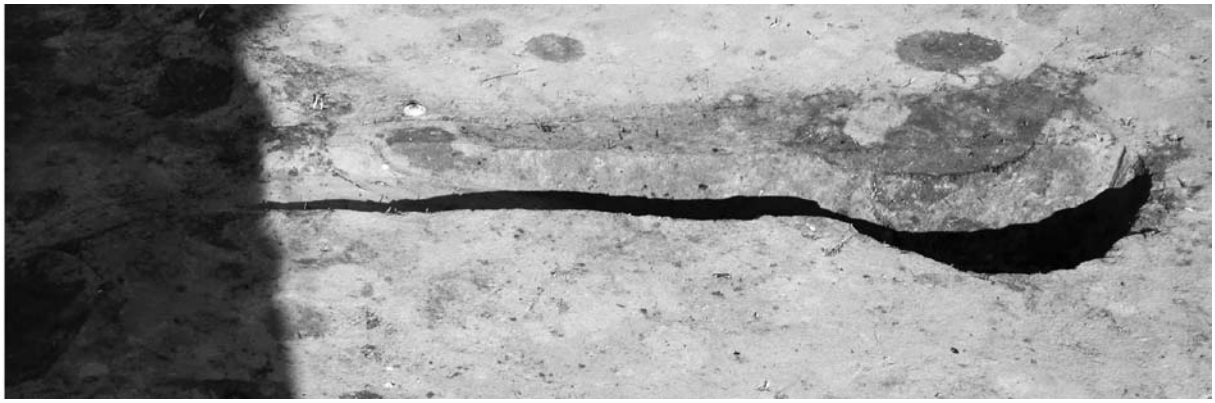
覆土断面東西（南から）

写真図版13　RA053住居跡（１）

カマド1（北から）

カマド２（東から）

カマド１南北（西から）

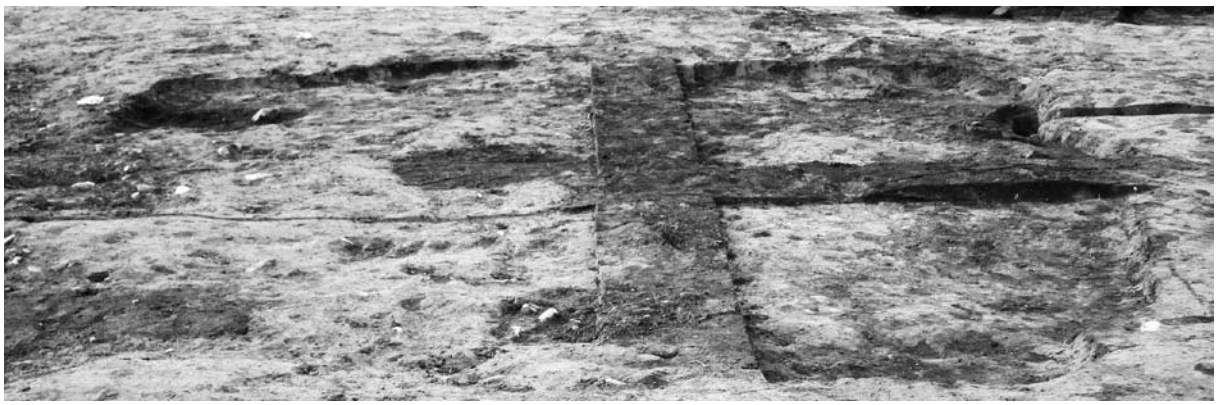


カマド２東西（南から）

写真図版14　RA053住居跡（２）

RA054住居跡全景（南から）

覆土断面南北（西から）



覆土断面東西（南から）

写真図版15　RA054住居跡（１）

RA054カマド煙道（西から）

RA054カマド覆土東西（南から）

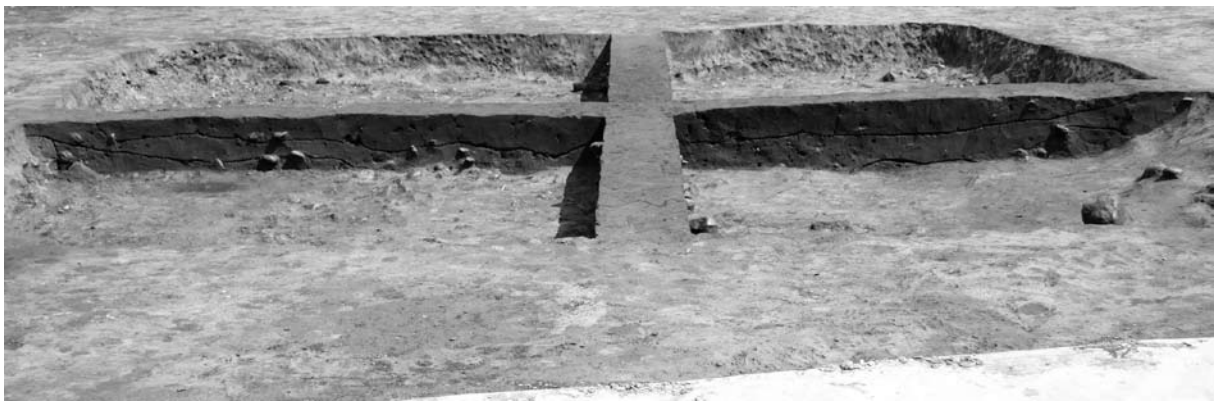
調査風景

RA054・055周辺（北西から）

写真図版16　RA054住居跡（２）

RA055住居跡全景（南から）

覆土断面南北（西から）



覆土断面東西（南から）

写真図版17　RA055住居跡（１）

カマド焚口（西から）

カマド覆土南北（西から）

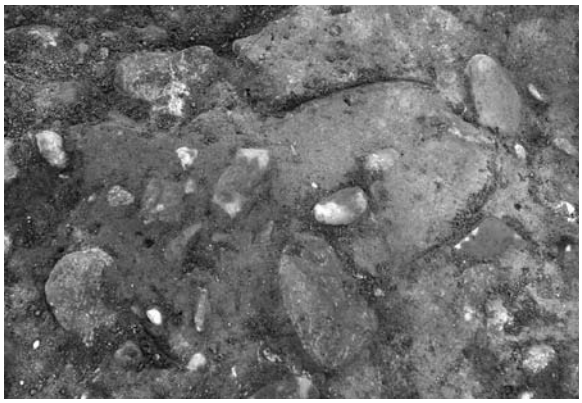
覆土断面東西（南から）

カマド煙出し東西（南から）

カマド断ち割り南北（西から）

カマド煙出し完掘（西から）

写真図版18　RA055住居跡（２）



中央焼土平面

中央焼土断ち割り（西から）

遺物出土状況

カマド遺物出土状況

カマド遺物出土状況

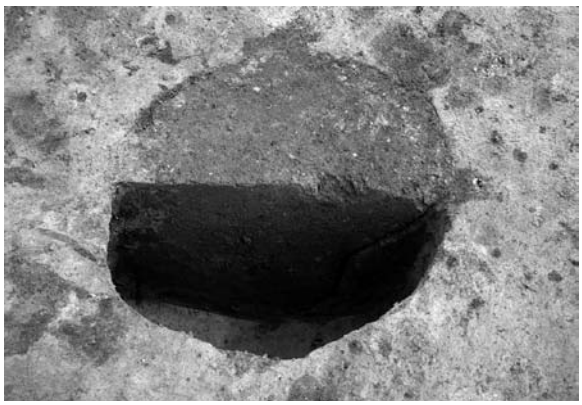
写真図版19　RA055住居跡（３）

RB021掘立柱建物跡全景（北から）

柱穴１

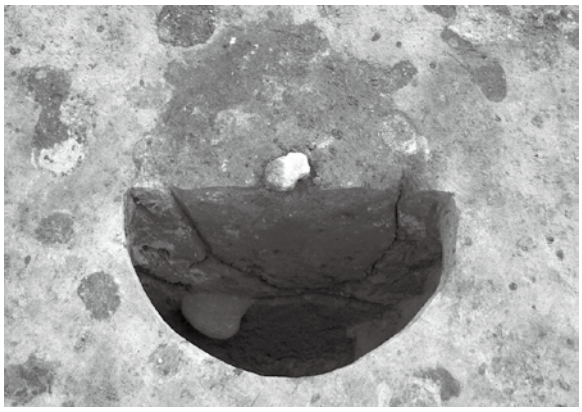
柱穴２

柱穴３

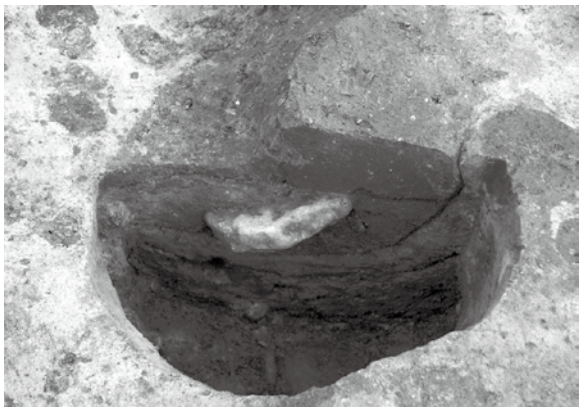


柱穴４

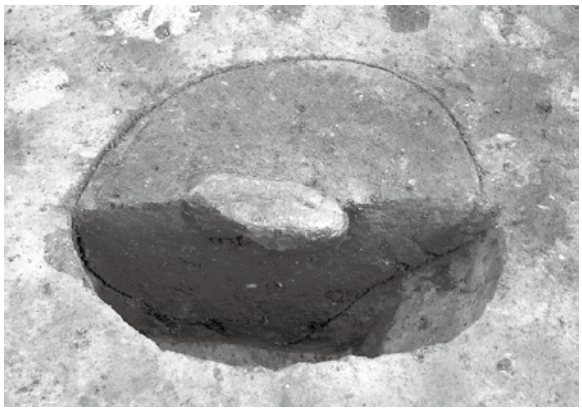
写真図版20　RB021掘立柱建物跡（１）



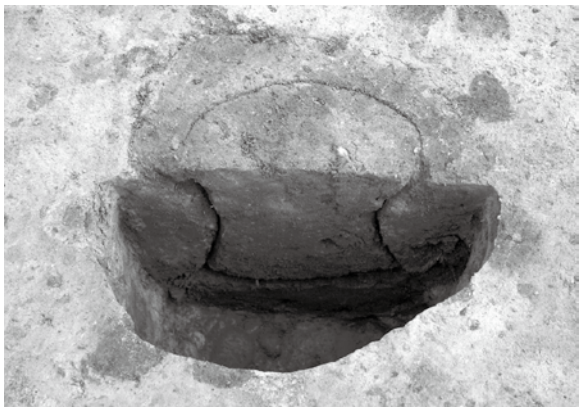
柱穴５



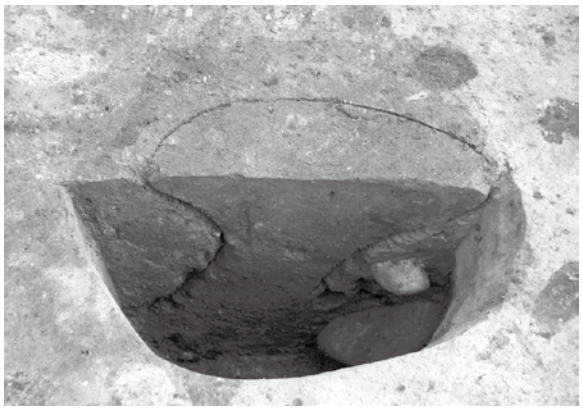
柱穴６



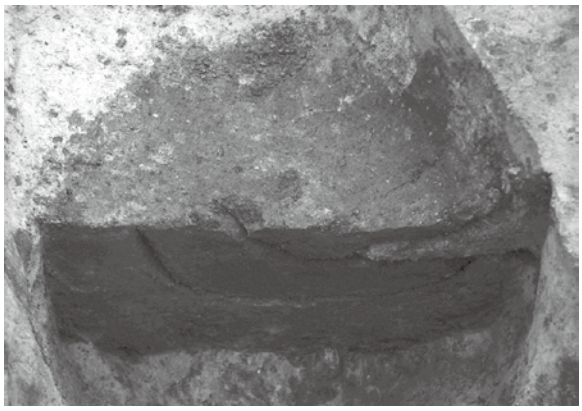
柱穴７



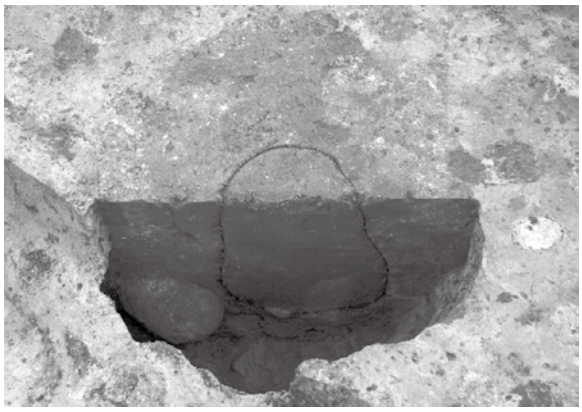
柱穴８



柱穴９



柱穴10



柱穴11

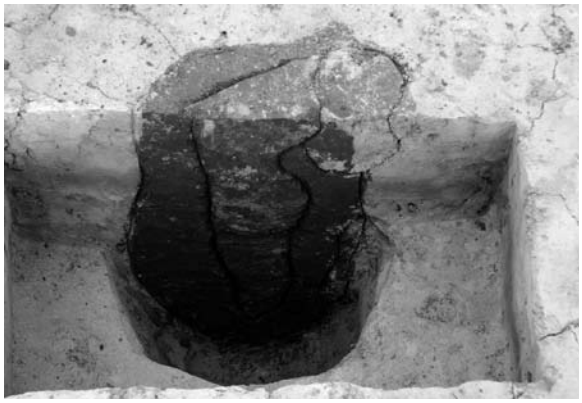
調査風景

写真図版21　RB021掘立柱建物跡（２）

RB022掘立柱建物跡全景（西から）

柱穴１

柱穴２



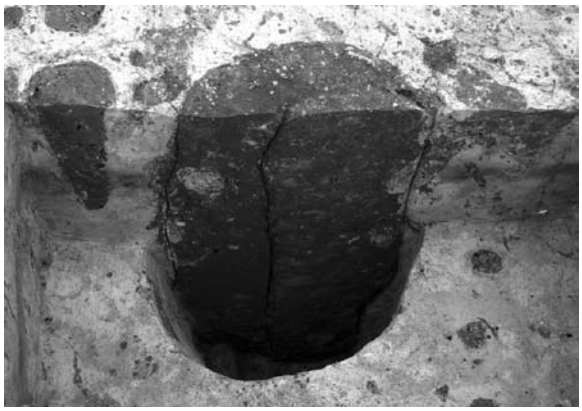
柱穴３

柱穴４

写真図版22　RB022掘立柱建物跡（１）

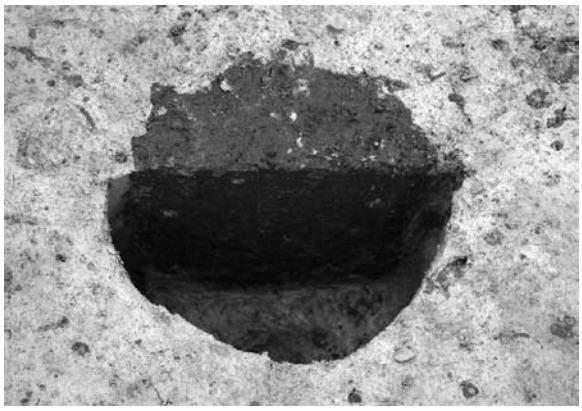
柱穴５

柱穴６

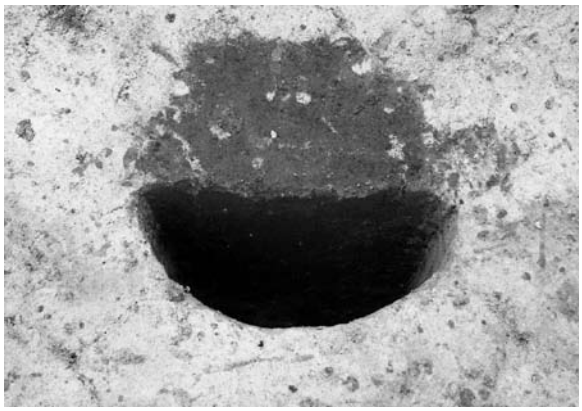


柱穴７

柱穴８



柱穴９



柱穴10

柱穴11

調査風景

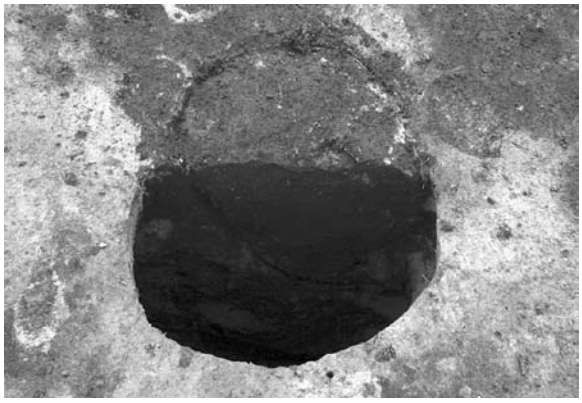
写真図版23　RB022掘立柱建物跡（２）

RB023掘立柱建物跡（東から）

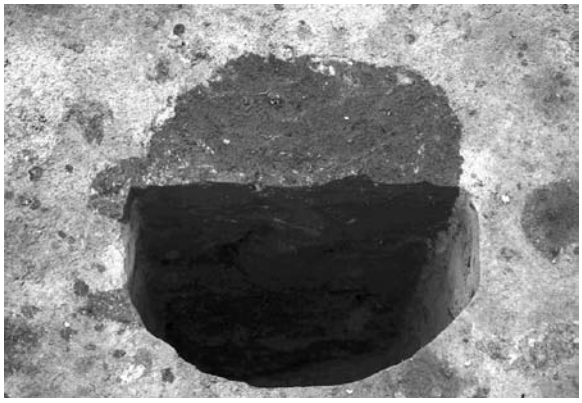
RB023掘立柱建物跡周辺（北東から）

写真図版24　RB023掘立柱建物跡

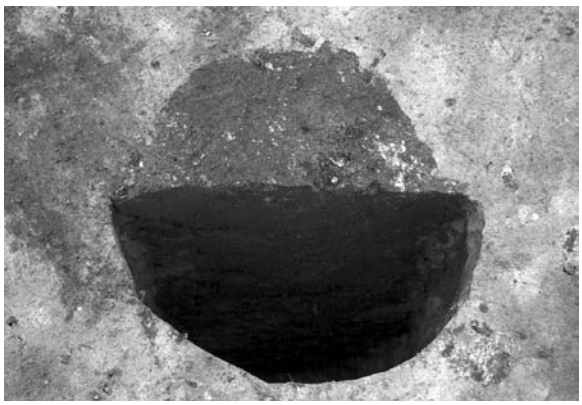
RC006柱列跡（北から）



柱穴１



柱穴２



柱穴３

柱穴４

写真図版25　RC006柱列跡（１）

柱穴５

調査風景

調査風景

調査風景

写真図版26　RC006柱列跡

RE006竪穴状遺構（南から）

RE006竪穴状遺構東西（南から）

調査風景

RE014竪穴状遺構遺物出土状況

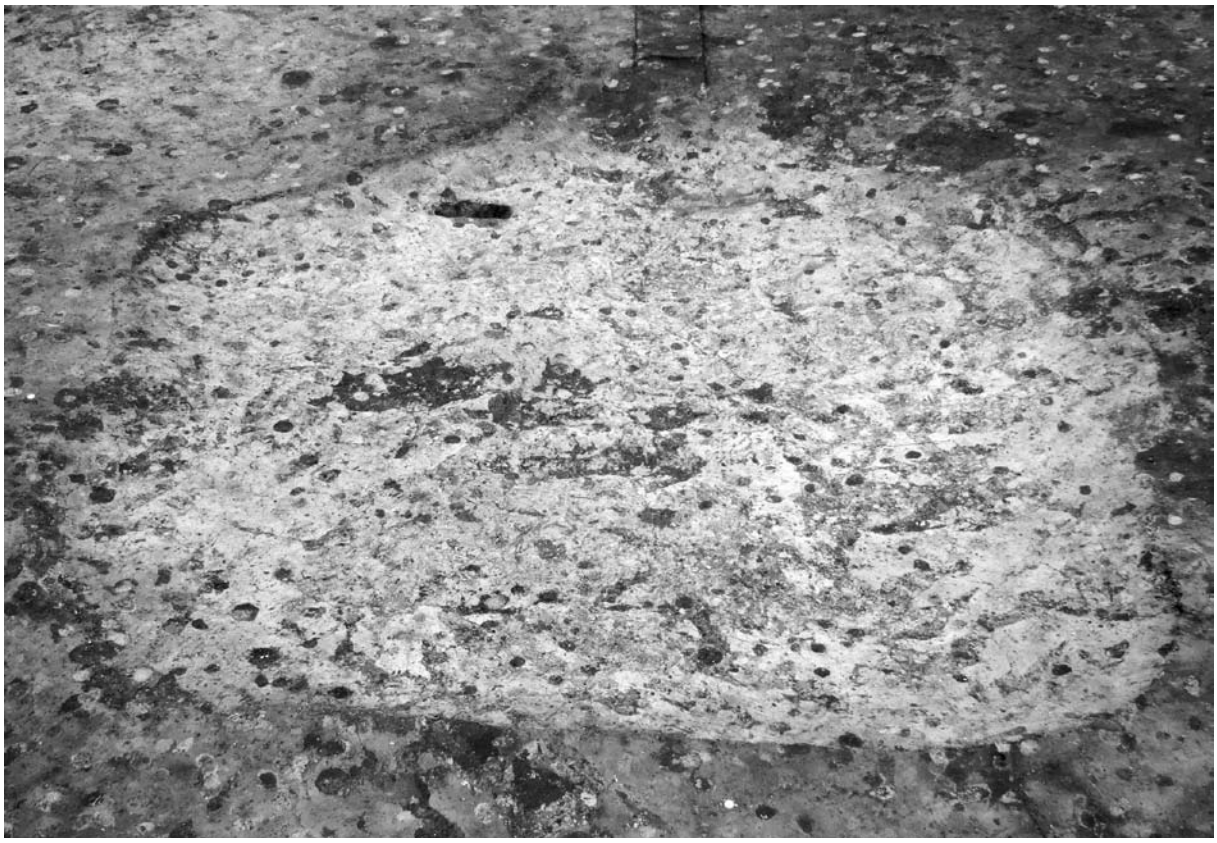
写真図版27　RE006・014住居状遺構（1）

RE014竪穴状遺構全景（東から）

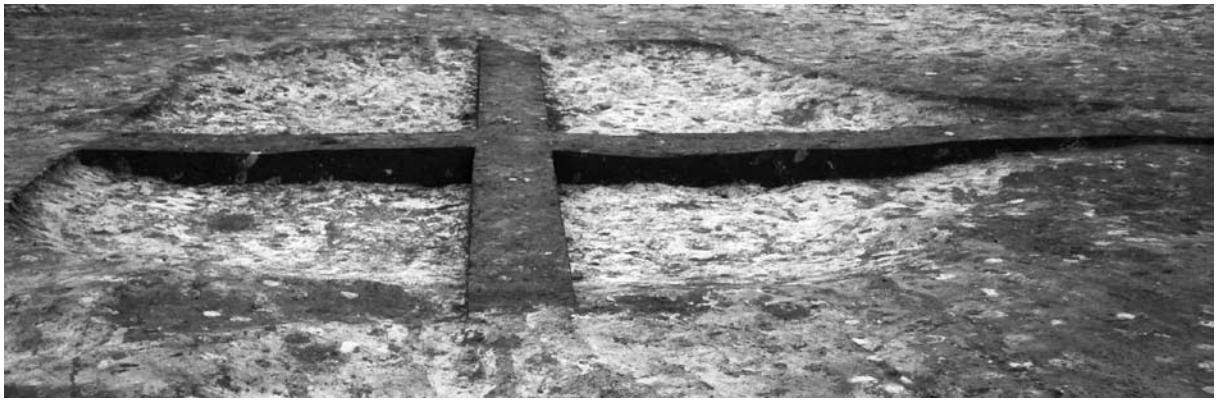
覆土断面南北（西から）

覆土断面東西（南から）

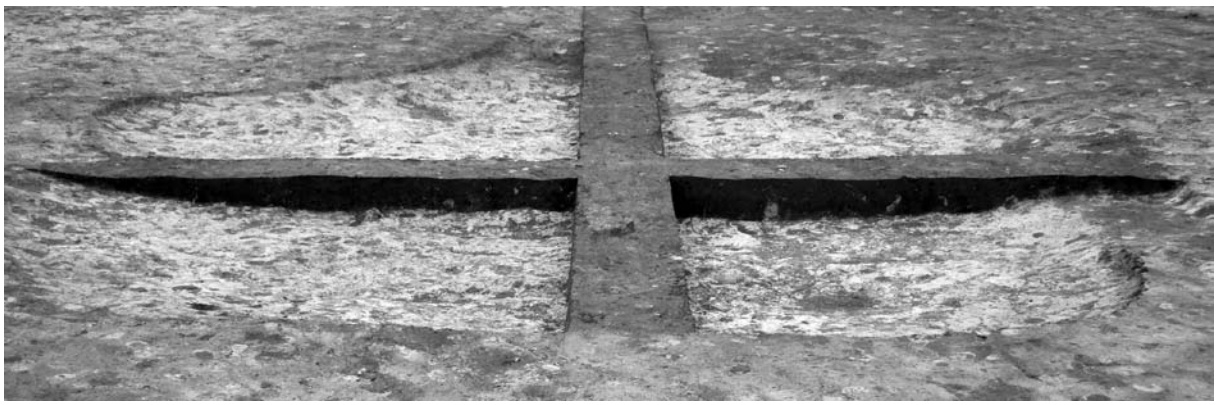
写真図版28　RE014住居状遺構（２）



RE015竪穴状遺構全景（北から）



覆土断面南北（南から）

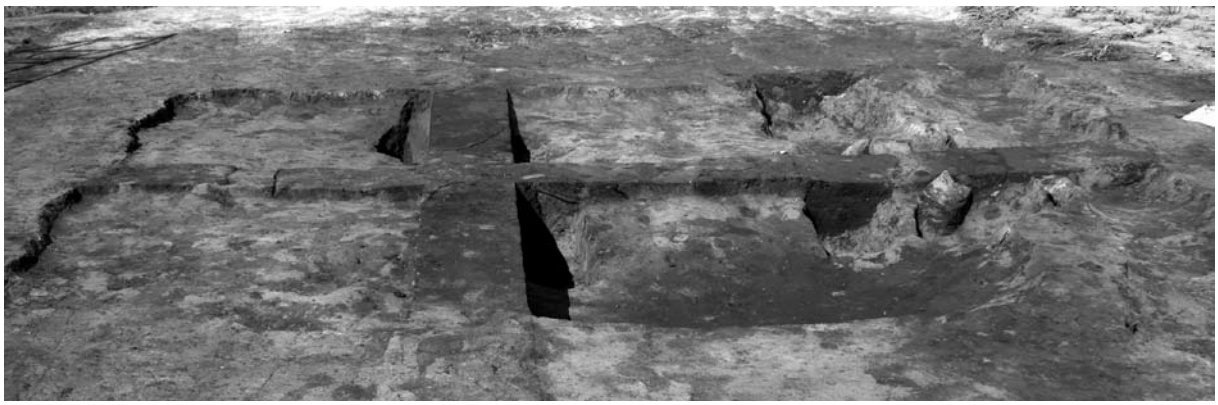


覆土断面東西（北から）

写真図版29　RE015住居状遺構

RE016竪穴状遺構全景（東から）

覆土断面南北（西から）



覆土断面東西（南から）

写真図版30　RE016住居状遺構

RG063溝跡遠景（南から）

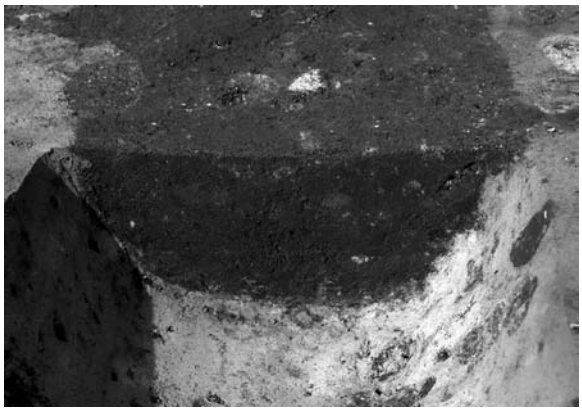
RG063溝跡（北から）

RG063溝跡（東から）

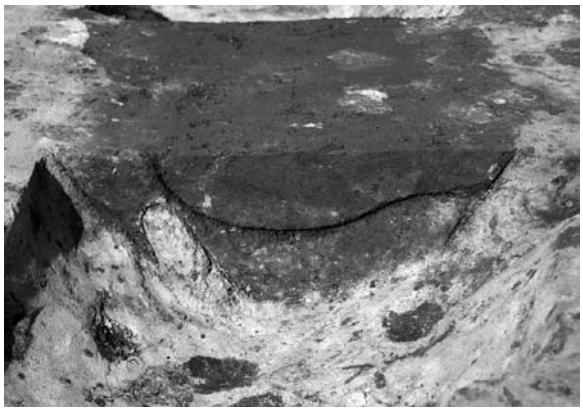
写真図版31　RG063溝跡（１）

覆土断面A-A'（南から）

覆土断面B-B'（南から）



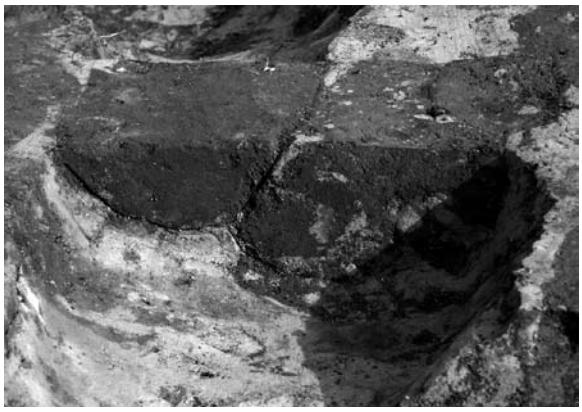
覆土断面C-C'（南から）



覆土断面D-D'（南から）

覆土断面E-E'（西から）

覆土断面F-F'（西から）



覆土断面G-G'（西から）

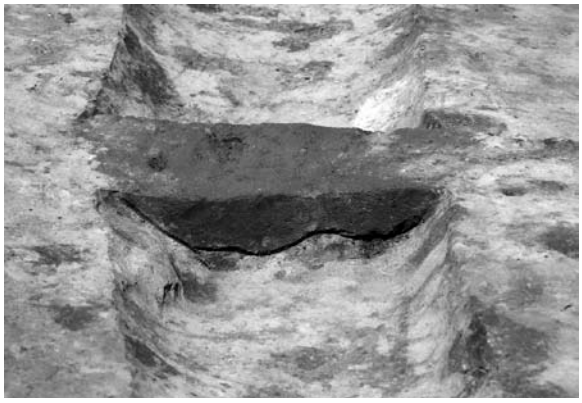
調査風景

写真図版32　RG063溝跡（2）

RG039溝跡（南から）

RG064溝跡（東から）

RG039断面東西（南から）



RG064覆土断面（東から）

調査風景

写真図版33　RG039・064溝跡

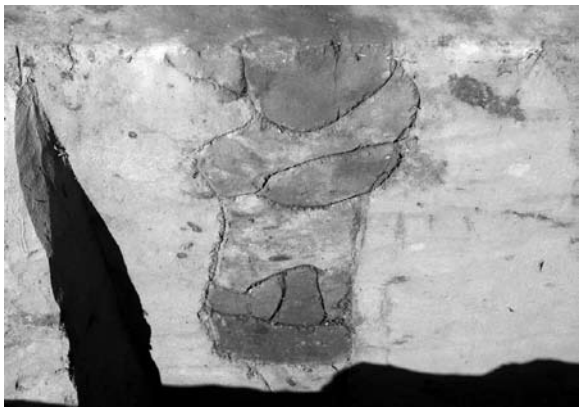
RD191土坑

RD192土坑

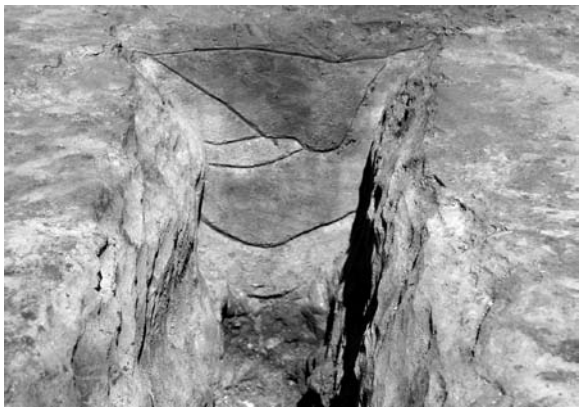
RD193土坑

RD194土坑

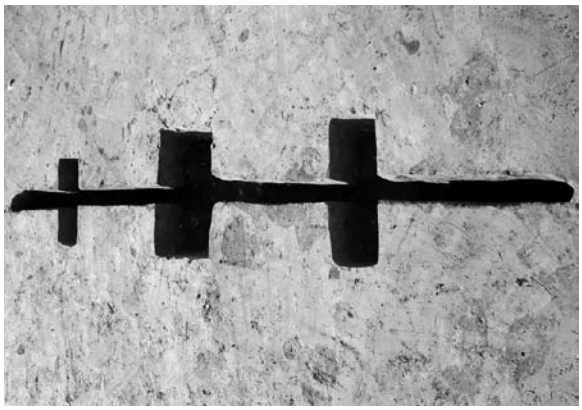
写真図版34　RD191 ～ 194土坑



RD195土坑



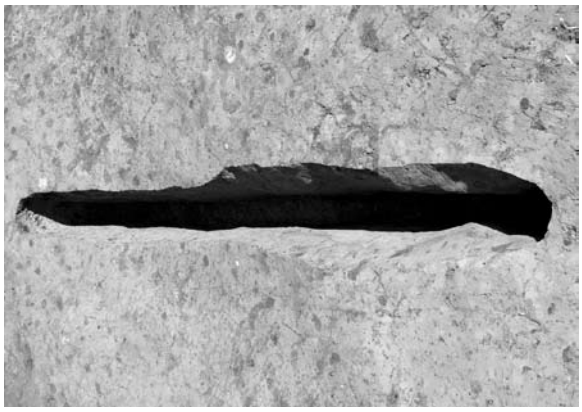
RD196土坑



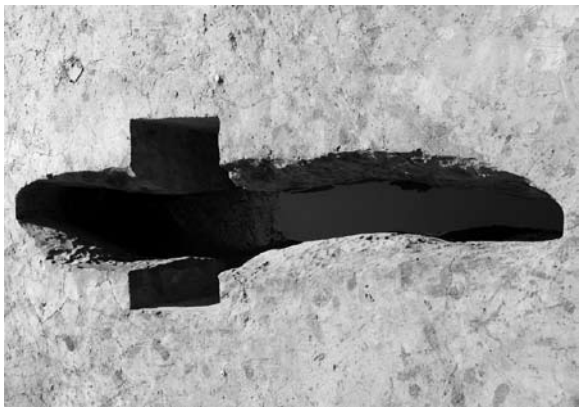
RD197土坑

RD198土坑

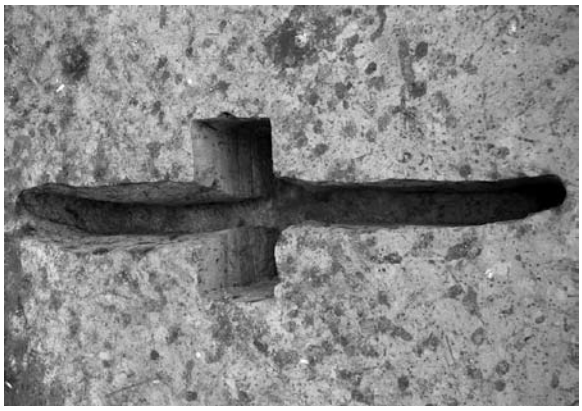
写真図版35　RD195 ～ 198土坑



RD199土坑



RD200土坑



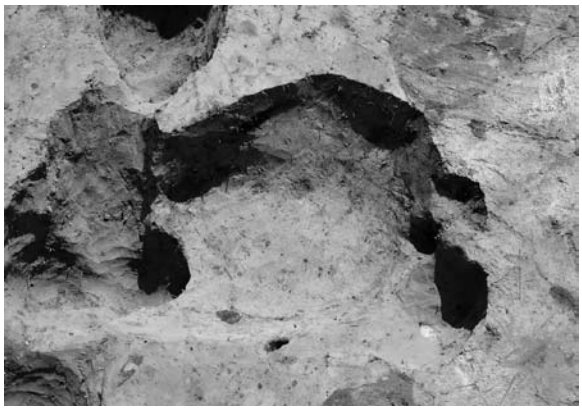
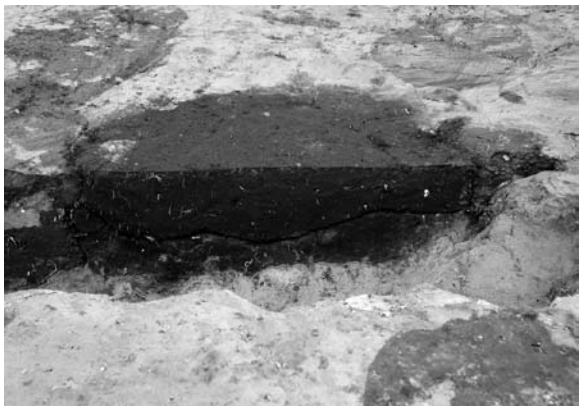
RD201土坑

RD202土坑

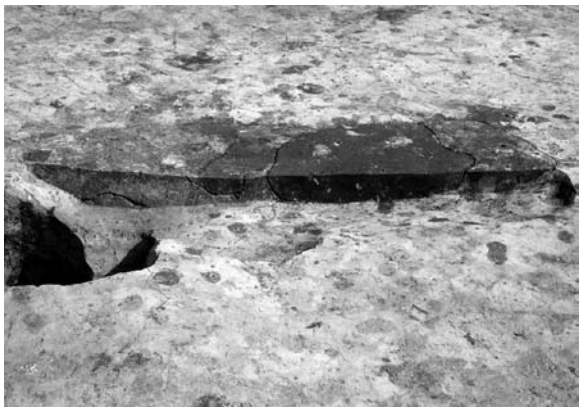
写真図版36　RD199 ～ 202土坑

RD203土坑

RD204土坑

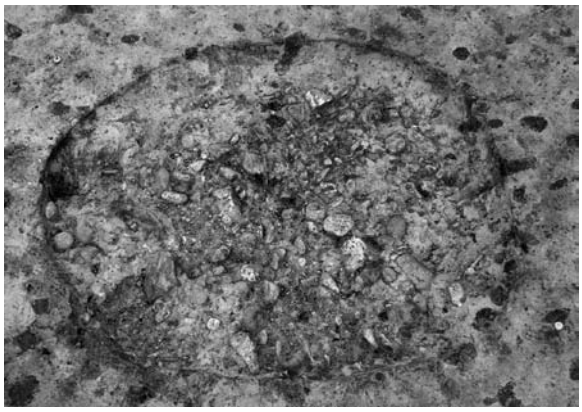



RD205土坑

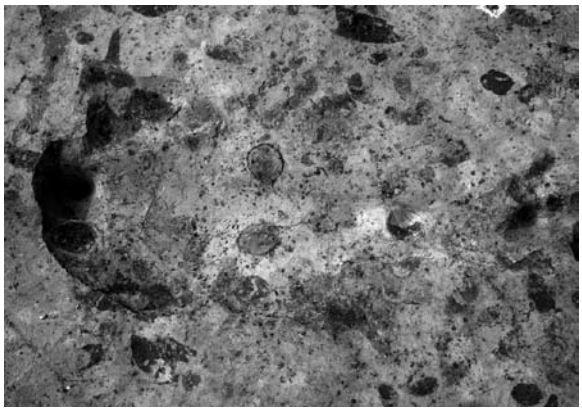


RD206土坑

写真図版37　RD203 ～ 206土坑



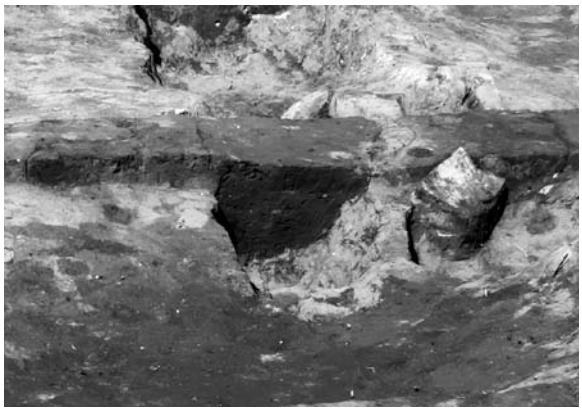
RD207土坑



RD208土坑

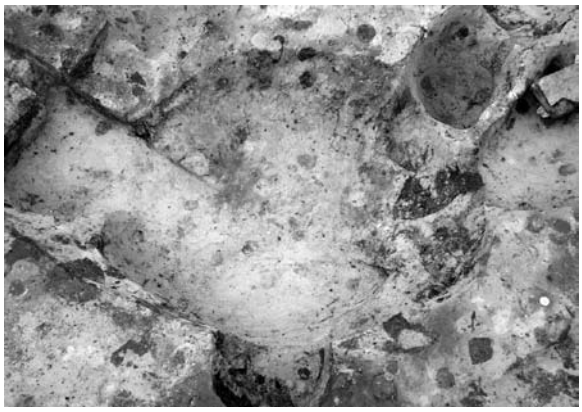
RD209土坑

RD210遺物出土状況（北東から）

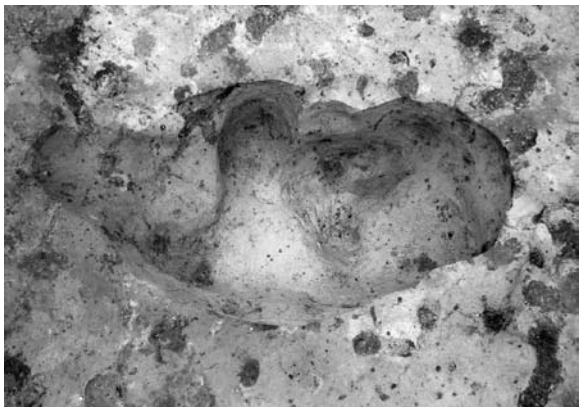
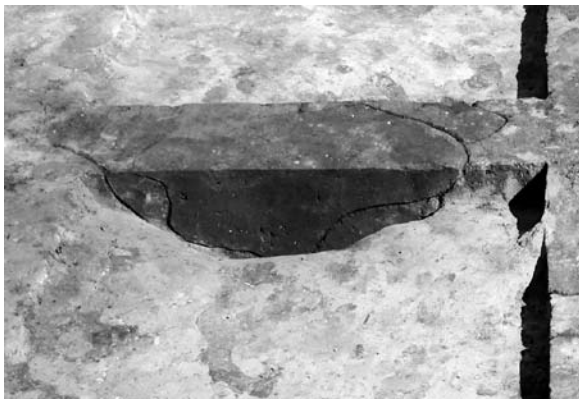


RD210土坑

写真図版38　RD207 ～ 210土坑

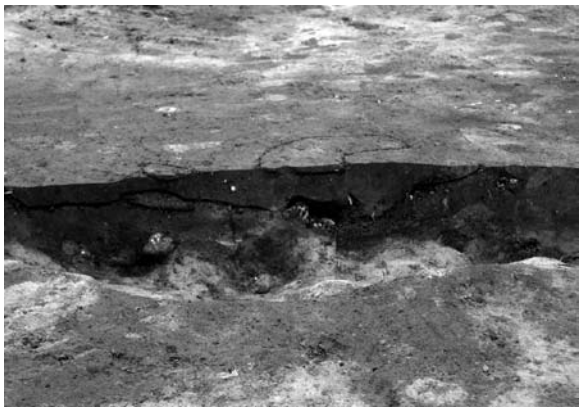


RD211土坑

RD212土坑

RF003焼土



RF004焼土

写真図版39　RD211・212土坑　RF003・004焼土

RI005井戸跡全景（東から）

覆土断面東西（南から）

写真図版40　RI005井戸跡

RZ035柱穴群近景（北から）

西区岩手山入り（南東から）

写真図版41　RZ035柱穴群、西区（１）

西区北西側（南東から）

西区西側中央（北東から）

写真図版42　調査西区（２）

西区南西側（北東から）

南区東側中央（西から）

写真図版43　調査西区（３）

東区岩手山（南から）

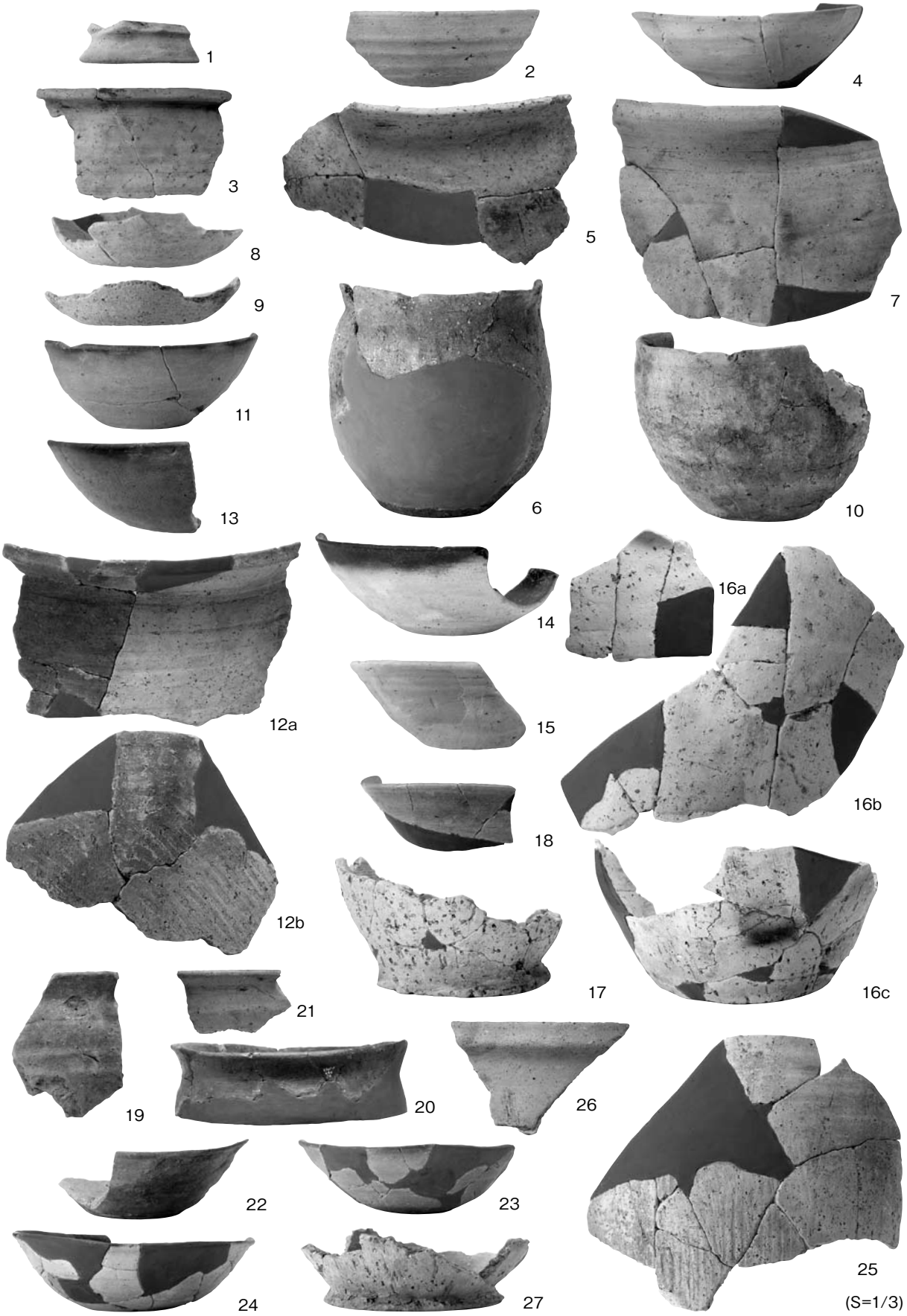
東区から南区を望む

写真図版44　調査区東区（1）

東区西側雨裂跡（北東から）

東区西側南西（北東から）

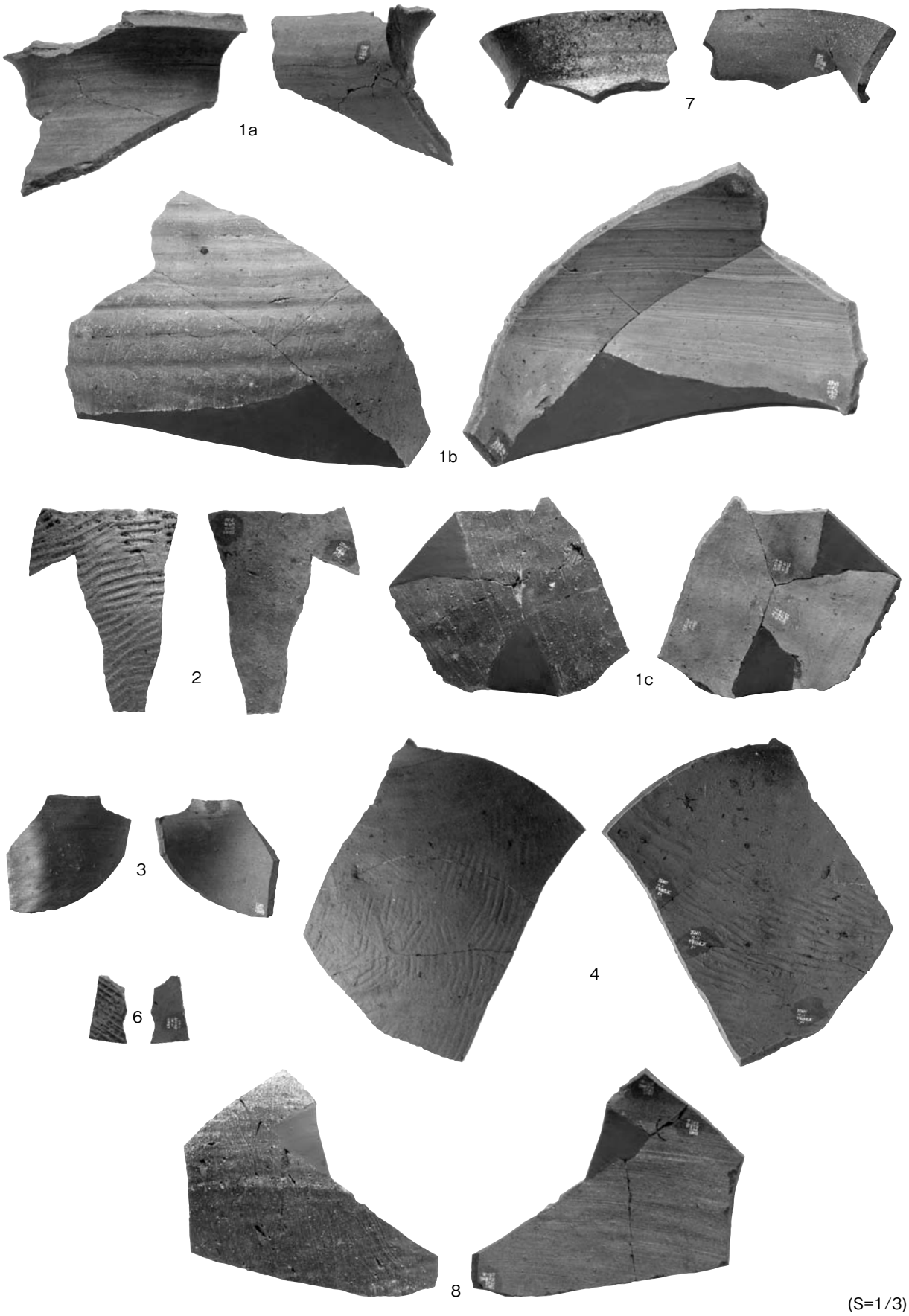
写真図版45　調査区東区（２）


1
2
4
3
5
7
8
9
11
6
10
13
12a
14
16a
15
16b
18
12b
17
16c
21
19
20
26
22
23
24
27
25
(S=1/3)

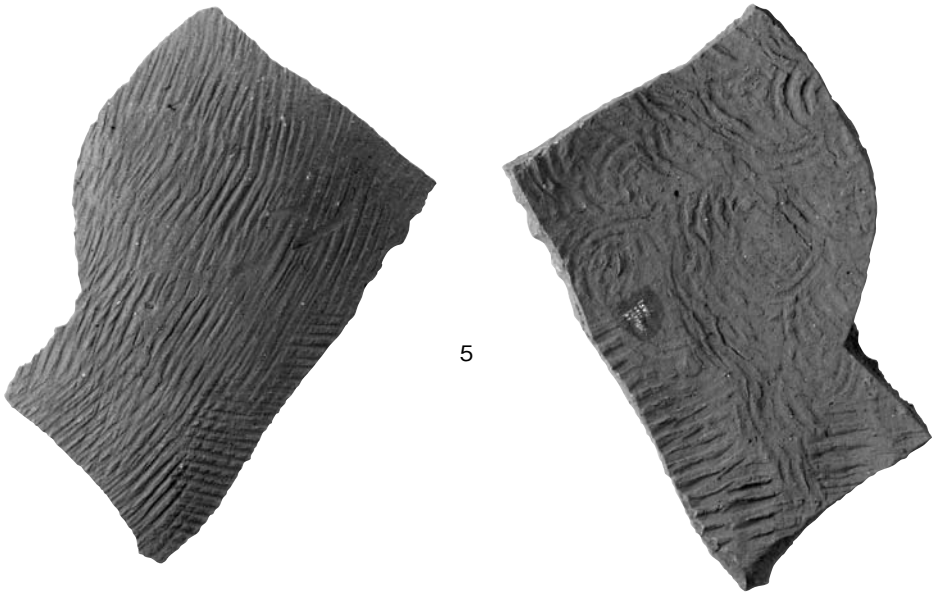
写真図版46　土師器（1）

28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
(S=1/3)

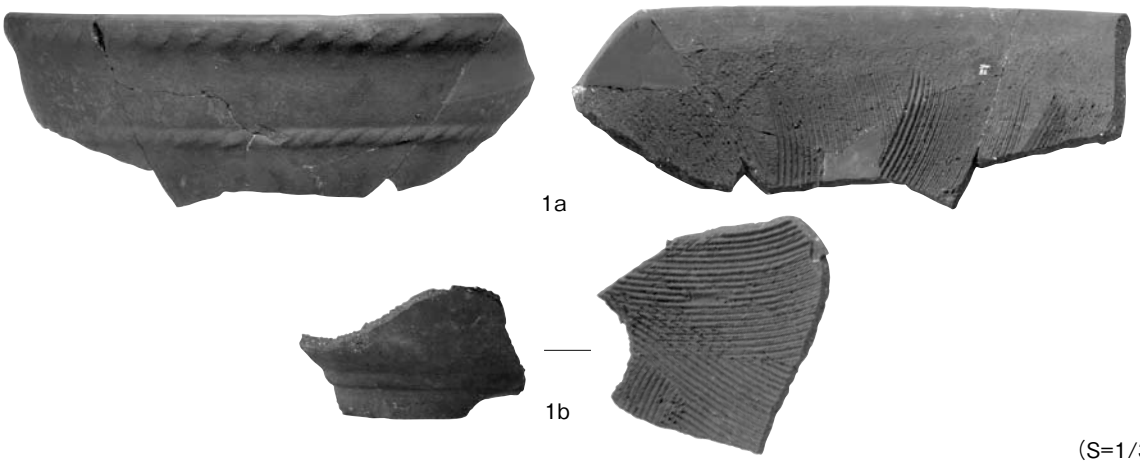
写真図版47　土師器（2）



写真図版48　須恵器（1）



5



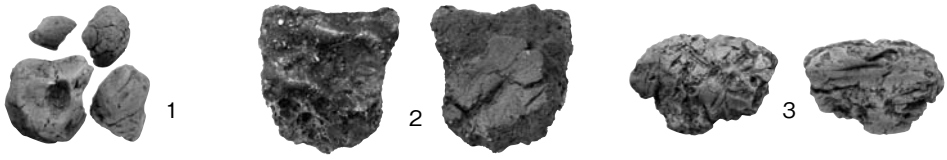
1a

1b

(S=1/3)

陶磁器　観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	胎土・釉薬、絵付など	製作地・年代	備考	本文記載
1a	東区	擂鉢・口～胴部	1/3周以下		産地不明・近現代		
1b	東区	擂鉢・胴～底部	1/5周以下		産地不明・近現代		



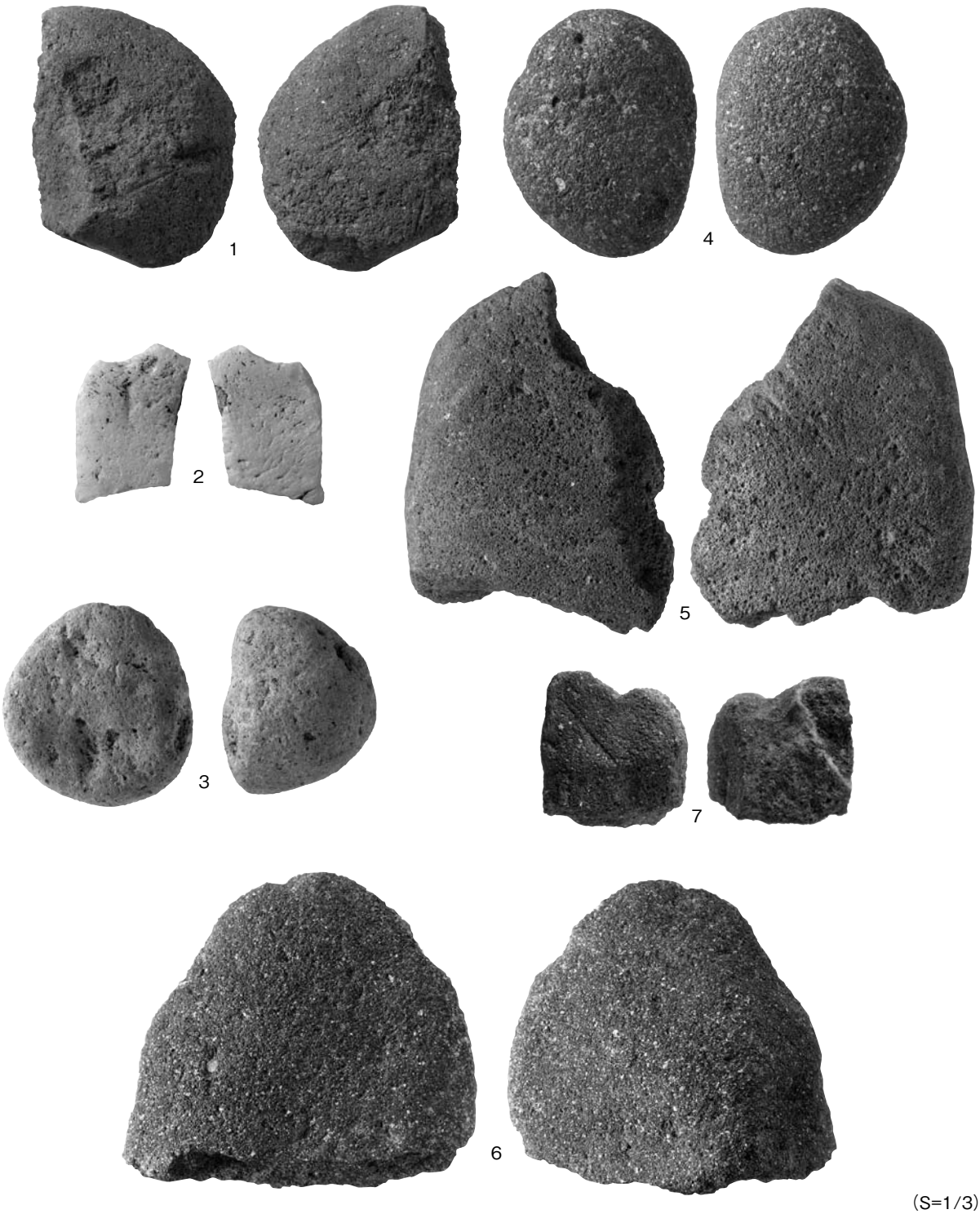
1　2　3

土製品　観察表

(S=1/2)

No.	出土地点・層位	種類	残存状況	重量(g)	特徴	図の有無	本文記載
1	RA053住居跡 ③	焼粘土塊	最小塊欠損	13.1	四塊・手びねり・2.7×2.2×1.6、1.8×1.5×1.2、1.7×1.1×1、1.3×0.8×0.9cm	－	p.88
2	RG063 EとFベルトの間	フイゴ羽口	小片	11.3	溶着滓・内面一部未欠損・断面気泡	55図	
3	北西谷	焼粘土塊	未欠損?	10.7	ブロック変形、表面に細い調整痕状多数・3.2×2.1×1.7cm・朱色がかった肌色	－	

写真図版49　須恵器（2）、陶器、土製品

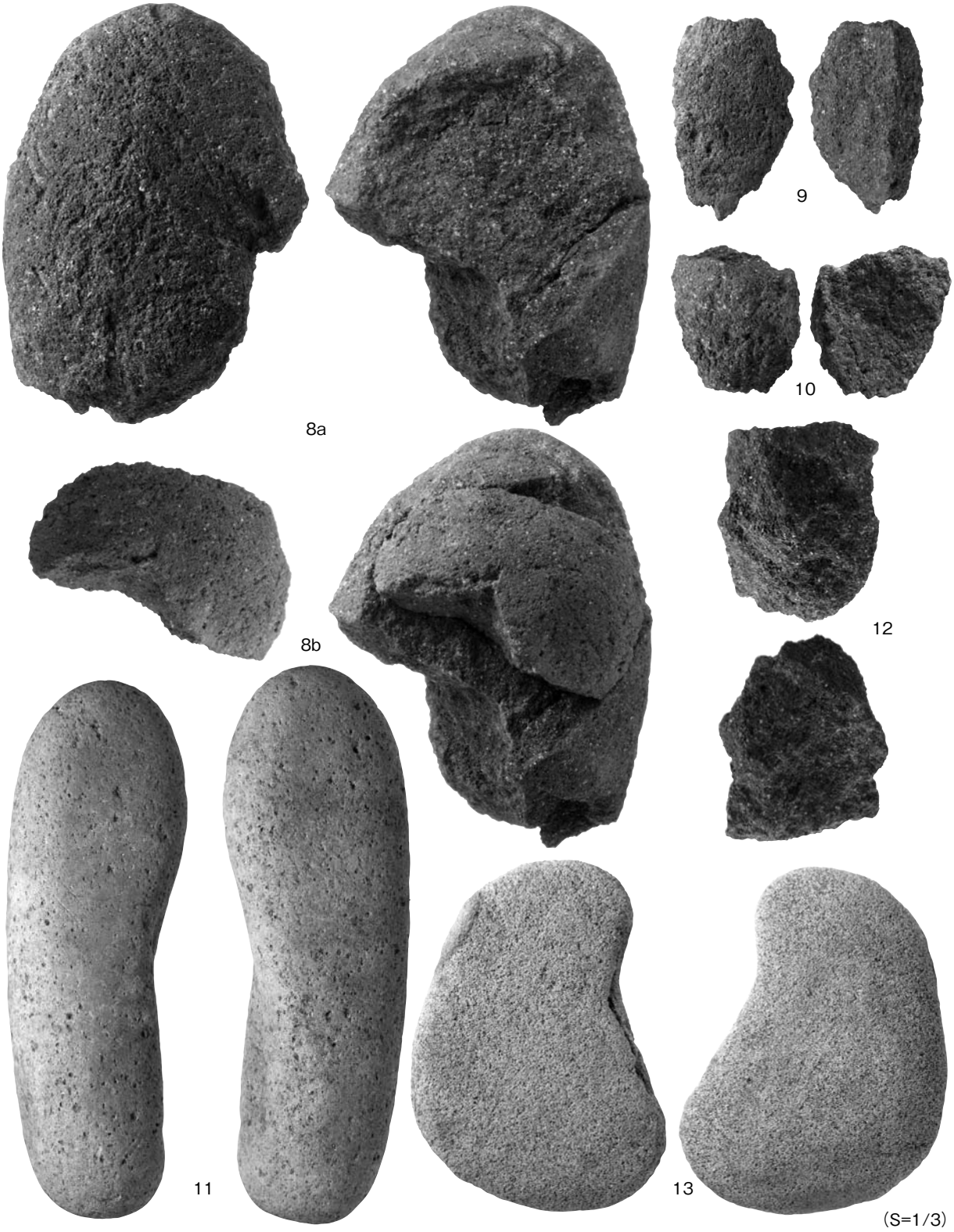


(S=1/3)

石器観察表

No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量（g）	石　質（産地）	残存状況	備考	図の有無	本文記載
			長さ	幅	厚さ						
1	RA052住居跡 s.1	砥石？	10.7	12.4	7.4	636.7	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	欠損	平坦面の他に凹石状痕跡	－	
2	RA052住居跡 s.2	勾玉石材？	7.6	4.5	1.7	106	玉髄（－）	－	板状	－	p.89
3	RA052住居跡 s.3	敲石？	9	8	7.6	653	デイサイト（奥羽山脈・新生代第三紀）	完形？	片手で握りやすいがずしりと重い	－	
4	RA052住居跡 s.4	敲石？	11.4	8.9	6.3	767	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	完形？	〃	－	
5	RA052住居跡 カマド４煙出礫	砥石	17.9	13.6	10.1	1668.7	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	欠損	平坦面４（欠損面以外）	56図	
6	RA052住居跡 カマド４煙出礫	砥石	16.2	16.6	11.7	2609.7	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	欠損	断面△・平坦面２	－	
7	RA052住居跡 掘り方	砥石	7	7.1	4.8	126.9	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	破片	平坦面２と溝２	－	

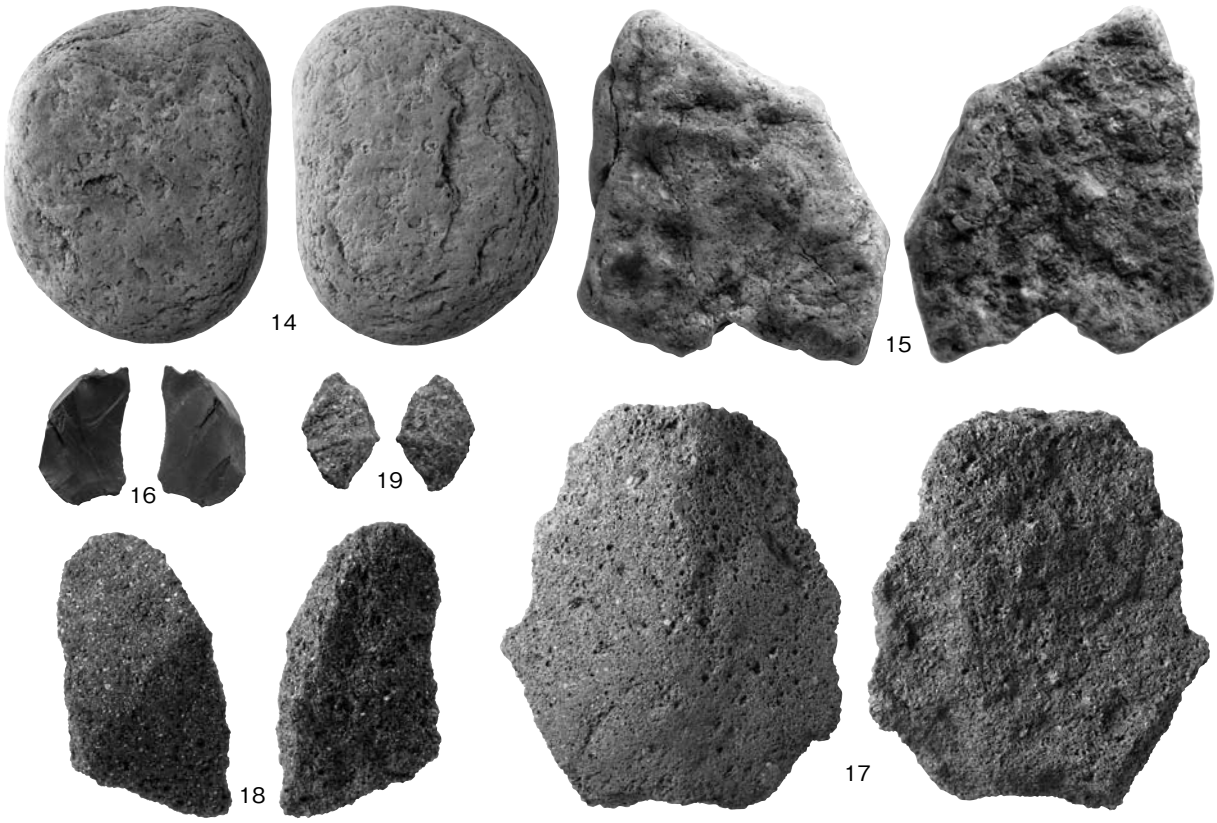
写真図版50　石器（１）



石器観察表

No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量（g）	石　質（産地）	残存状況	備考	図の有無	本文記載
			長さ	幅	厚さ						
8a	RA055住居跡 s.1	砥石	21.4	16.2	13.4	2225.9	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	欠損	8bと接合・平坦面と短溝多数	57図	p.89
8b	RA055住居跡・2層	〃	13.3	8.8	4.3	239.7	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	破片	8aと接合・平坦面と短溝	57図	p.89
9	RA055住居跡・4層	砥石？	9.7	5.7	7.2	167.2	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	小片	平滑面１（反対側は欠損）	－	
10	RA055住居跡・4層	砥石？？	7.8	6.4	2.9	74.2	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	小片	平滑面１（反対側は欠損）	－	
11	RA055住居跡 柱穴1	砥石	27.9	9.4	6.7	2113.5	デイサイト（奥羽山脈・新生代第三紀）	完形	平坦面２・細い傷状擦痕	57図	p.89
12	RA055住居跡 柱穴4	砥石？？	10.5	8.4	7	376.9	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	破片	一つの面に線状傷	－	
13	RB021掘立柱建物跡 柱穴5	砥石？	17.6	13.6	2.6	824.8	砂岩（北上山地・古生代～中生代）	完形	平坦面２だが、片側浅い凹凸	56図	

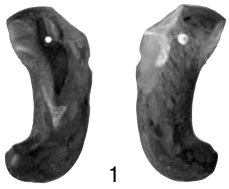
写真図版51　石器（２）



石器観察表

（16 S=1/2）（他 S=1/3）

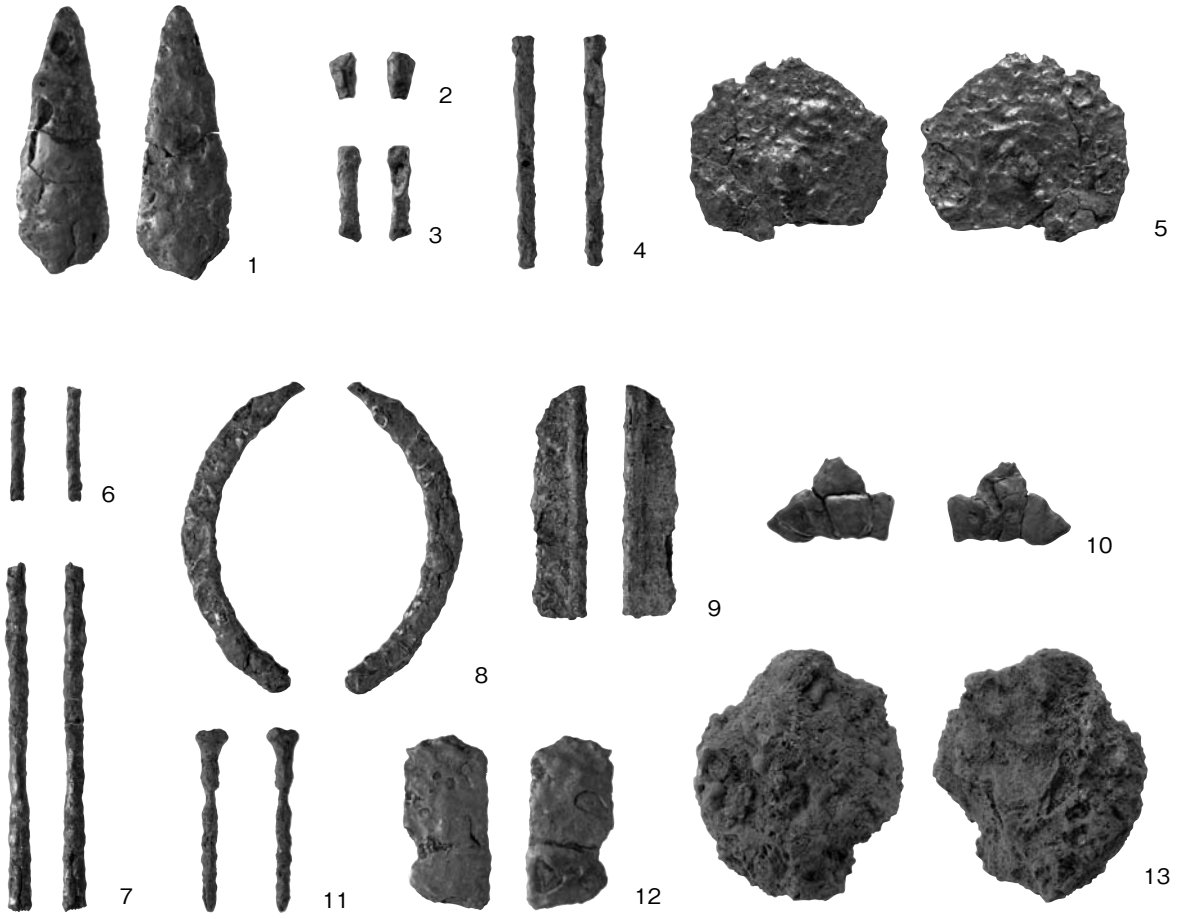
No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量（g）	石　質（産地）	残存状況	備考	図の有無	本文記載
			長さ	幅	厚さ						
14	RB021掘立柱建物跡 柱穴6	砥石？？	13	10	3.5	655.6	デイサイト（奥羽山脈・新生代第三紀）	完形	平坦面？２	－	
15	RB021掘立柱建物跡 柱穴6	砥石？？	16.1	12.3	4.3	774.7	デイサイト（奥羽山脈・新生代第三紀）	片面欠？	片面細かい凹凸	－	
16	RB021掘立柱建物跡 柱穴6の東	剥片	3.6	3.1	1	8.7	頁岩（北上山地・古生代～中生代）	－		57図	
17	RE014竪穴状遺構 s.1	砥石	15.4	13	3.6	442.1	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	破片	平坦面２・裏は欠損	－	
18	RG063溝跡 EとFベルトの間	砥石	12	6.1	3.9	256	安山岩（岩手火山・新生代第四紀）	破片	平坦面２・裏は欠損	－	
19	RG063 溝跡 EとFベルトの間	砥石？？	4.6	3	1.3	16.7	安山岩（奥羽山脈・新生代第三紀	極小片	裏は欠損	－	



（S=1/2）

（S=1/1）

写真図版52　石器（３）、石製品、銭貨



(S=1/2)

写真図版53　鉄製品

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第618集

飯岡才川遺跡第17 ～ 19次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成25年２月26日
発　行　平成25年３月１日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話　（019）638－9001

発　行　盛岡市都市整備部盛岡南整備課
〒020-8531　岩手県盛岡市津志田14地割37番地２号
電 話　（019）651－4111

（公財）岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番地１号
電 話　（019）654－2235

印　刷　株式会社　光文社
〒020-0106　岩手県盛岡市東松園３－12－１
電 話　（019）661－3441（代）

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2013